

---

# 銀魂幻想

GORO

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂幻想

### 【Nコード】

N8577G

### 【作者名】

GORO

### 【あらすじ】

とある日、万事屋は依頼人として上条当麻、インデックスに出会う、これがきっかけとなり万事屋の坂田銀時、志村新八、神楽は魔術という幻想にまきこまれていく

## 依頼人

すべての幻想はこの日から始まった

## 第一幻想 依頼人

この日、万事屋では神楽は定春と一緒に外出していて新八と銀時が万事屋にいた

「万事屋」

新八

「銀さん、起きて下さい」

銀時

「がー、がー」

新八

「は〜」

ピンポン！と玄関から音が鳴った

新八

「はいー！」

お登勢

「やあ、新八かい、銀時はいるかい？」

新八

「はい、銀さんならいますよ、でもいま寝てるんですよ」  
お登勢

「まったくあいつは、まあいいか、新八、ちょっとこの子らの依頼を受けてやってくれないかい？」

お登勢の顔で合図するとお登勢のうしろから二人出てきた

上条

「上条当麻です…」

インデックス

「私はインデックスって言うんだよ!」

この日…

この二人との出会いが江戸の危機につながるとは、夢の中にいる銀時は思ってもいなかった

依頼人（後書き）

なんとか頑張るのでよろしくお願いいたします。

## 依頼内容（前書き）

上条当麻の服装は冬の学生服でインデックスは修道服です

## 依頼内容

### 第二幻想 依頼内容

新八

「上条当麻さんに、……イン…デックスさんですか…」  
インデックス

「なんで私の名前だけ言いにくそうに言うの！」

当麻

「そりゃあ、誰だって言いにくくもなるだろ」

インデックス

「と~~~~ま~~~~！」

上条

「ぎゃあああああッ！」

頭を噛み付かれている上条を無視して話を戻した

新八

「でも、銀さんがただで依頼を受けるとは思いませんよ？」  
お登勢

「ああ、それなら先月と今月の家賃をチャラにするのでいいだろ？」

新八

「えっ、ほんとにいいんでー」

するとダダダッという音が玄関によつてきた

銀時

「マジでいいのか、ババア!!」

新八

「銀さん!?起きてたんですか!?!」

銀時

「うなことはどうでもいいんだよ!で、マジでか?ババア」

お登勢

「ああ、ほんとだよ」

銀時

「キャホー!!!よし、お前ら…えー上条にインデンマメか、中に入りな」

インデックス

「インデンマメじゃなくてインデックスだよ!」

お登勢は依頼を受けたと見て

「頼んだよ」といいのこし、下のスナックに帰っていった

〓万事屋・室内〓

銀時

「それで、依頼内容は?」

上条

「えーつと、人を探してほしいんですけど?」

と言いながら上条が服のポケットから何かを探している横ではインデックスが回りをキョロキョロとしていた

その反対では銀時の横で座っている新八が何かを考え込んでいた



新八

「銀さん、やっぱりおかしいですよ」

銀時

「何がだよ、ぱつつあん？」

新八

「お登勢さんですよ、いくら何でもおかしくないですか、先月と今月の家賃をチャラにするなんて？」

銀時

「なーに、ただまるくなったんじゃねえか、だってほら、泥棒ネコだって雇っんだから」新八

「そうですかね……」

そうこうしていると上条がやっと何かを見つけた

上条

「こいつなんですか？」

そう言い銀時たちが見たことのないカラクリを銀時たちに見せた

そこには短髪の女の子と上条とのツーショット写真が写ってあった

銀時

「へえ、何、探してんのって彼女？」

上条

「ちがいますよ、ちょっとわけありなだけです」

銀時はそう言う上条の顔を見てもう一度写真を見た、上条は普通に写っていたが女の子はと言うと顔が少し赤かった

(こりゃあ、こいつが鈍感なんだな)

上条

「それでどうですか？見つかりますか？」

銀時

「まあ、一応あてがあるから大丈夫だ」

上条

「あ、ありがとうございます！」

新八

「銀さん、ほんとにあてなんてあるんですか？」

銀時

「まあな、情報収集のあてがな」

新八

「それってひのー」

キュルルー

新八たちの会話がやみ音のした方を見るとさっきまでキョロキョロ  
していたインデックスがテーブルに倒れかかっていた

依頼内容（後書き）

次に御坂を出したいと思っています

## 万事屋の悲劇（前書き）

御坂を出せませんでした、後、次の話は後書きに書きます（御坂についても）

## 万事屋の悲劇

### 第三幻想 万事屋の悲劇

インデックス

「とーまー、おなかすいたよー」

上条

「お前さっきお登勢さんの所で食べさせてもらった所だろ！」

大体なあと言はれて泣きそうな顔になるインデックスを見て銀時がインデックスに言った

銀時

「そんなに腹減ってんだったら家の残り物でも食つか？」

インデックス

「えっ！いいの！」

上条

「あつ、ちよつとまー」

上条の言葉もむなしく銀時は新八に言いインデックスを残り物のある所へ行かしてしまった

上条

「やばい、早く止めねえと！」

銀時

「大丈夫だよ上条くん、うちにはなあ大食いのチャイナがいるから

飯をおおめに作ってんだ、だからそいつが食わねえ限りは」

と言いかけた時、部屋の奥から悲鳴が聞こえた

新八

「銀さああああああん!!」

銀時

「うるせえな、どうした？」

銀時が悲鳴が聞こえた部屋に行くとインデックスが顔に米をつけていた

インデックス

「おかわりある」

銀時

「おかわりつてあそこに」

新八

「銀さん、これ」

銀時

「こんどはなんだ……………」

そう言いながら新八が指をさす先を見た

そこには…

夜食に炊いておいたご飯がきれいになくなっていた

銀時

「ぱっつあん、確かここに夕食のご飯炊いてたよな」

新八

「……………」

銀時

「誰が食べたの？」

そう言うと新八は口をとじながら指をさした

その先にはインデックスがいた

銀時はさっきインデックスの顔についていた米を思い出した

銀時

「うっ~~~~~~~~そ~~~~~~~~!!!!うそだって言ってくれ  
~~~~~」

そう言うと銀時は上条の元にもうスピードで向かって上条の両肩を  
つかんだ

銀時

「何なんだよ、あの子、どんな胃袋してんだよ!!」

上条

「ほんとにすいません!」

と言いながら土下座した

すると新八がインデックスを残してこちらにきた

新八

「上条さん、そういえばさっきお登勢さんがどうとか言っていました  
よね?それってもしかして…」

上条

「はい、お登勢さんの所でもありました…」新八

「だから言ったじゃないですか、お登勢さんがこんなことするなん  
ておか…し……銀さん?」



新八が銀時を見ると銀時は体をふるつかせていた

そして銀時の目がらんと赤く光りだした

銀時

「あ~~~~の~~~~ク~~~~ソババアあああああ!!!」

銀時はそう言つと下に居るスナックに乗り込みに行った

その後、上条とインデックスは新八の道場に泊まることになった

万事屋の悲劇（後書き）

次回は新撰組で御坂を出そうと思います

## 超電磁砲（前書き）

何とか御坂を出せました

## 超電磁砲

### 第四幻想 超電磁砲

万事屋が上条当麻とインデックスにあっていた頃、真選組の前に一人の女の子が現れる

「真選組屯所前」

真選組屯所前に一人の女の子が立っていた

御坂

「ここかな、ごめんくださいーい」

そう言いながら屯所の中に入ったとき、御坂の顔に水が飛んできた

バシヤツ！

その水はもの見事に御坂の顔に当たった

御坂

「……………」

そして御坂は水が飛んできた方向を見た

総悟

「土方さん、よけねえでくだせえ」

土方

「避けるに決まってるだろ！！だいたいなんで打たれねえといけねーんだよ！！」

総悟

「新しい水鉄砲買ったんで土方さんを的にして試し打ちしようかなあと」

土方

「違つ的にしろ！」

総悟

「あつ土方さんあれ」

土方

「ふん、そんな手のるかよ」

総悟

「いや、土方さんあれ」

土方

「しつげえぞ、だからそんな手には……………あつ」

土方はやっとずぶ濡れの御坂に気づいた

「屯所の一室」

近藤

「いや、これは面目ない！総悟とトシが迷惑をかけてしまって」

御坂はタオルをもらい濡れた髪を拭きながら聞いていた

総悟

「すいませんでした、ほら、土方さんも誤ってくだせえ」

土方

「なんでおめえ指図されなきゃあならねえんだよ、だいたいおめえがー」

土方と総悟は言いやいをし始めた

御坂は内心では怒っていた

(こいつらいい加減にしなさいよ!!)

近藤

「で、私達に話とは？」

あまりにもうるさいので二人にげんこつを入れた後、御坂に聞いてきた

御坂

「あつ、はい、実は人探しを頼みたいんですけど？」

その言葉に土方が横から入ってきた

土方

「ここは依頼場所じゃねえんだよ、近藤さん、さっさとこのガキ放り出してー」

御坂

「ガキ……」

近藤

「おい、いくらトシが言うようにガキだとしても一応レディだぞ、

言葉に気をつける」

土方と近藤のデリカシーのない言葉に御坂が震えているのを見た総悟はいち早く室内から逃げた

パキッ！バチ！バチ！

そうとも知らない二人はある音で会話を止めた

そして音のする方向を向くと

御坂が頭から電気を走らせていた

近藤

「おい…トシ…なんかヤバくないか…」  
土方

「ああ…おい総悟って居ねーし!？」

そうこうしていると御坂の目が光った

御坂

「あんたたち…………、いい加減にしろやああああああああ！！」

ドカーン！！！！！！！！

この日、真選組屯所から超電磁砲が上がった



超電磁砲（後書き）

次回は万事屋の話です

銀時の不幸1（前書き）

ちよつとグダグダです

## 銀時の不幸 1

### 第五幻想 銀時の不幸 1

銀時は新八と上条、インデックスを帰らした後、一人、頭を抱えて悩んでいた

その理由は、もうすぐ定春を連れて帰ってくる神楽のことだ

銀時

「おいおい、どーすんだよ……………銀さん確実に死刑だよ……」

ガラガラ！

銀時が一人で喋るなか玄関から地獄のささやきが聞こえてきた

銀時の顔は真っ青になった

神楽

「銀ちゃん、ただいまよ」

定春

「ワン！」

銀時

「お、おう…おかえり、神楽」

神楽

「銀ちゃん、どうしたアルか、顔が真っ青アル」

銀時

「な、なに言ってるの？真っ青、なぐにそれ、ワットウ？」

そんな銀時をほっというて神楽は言った

神楽

「銀ちゃん、今日のご飯なにアルか？」

それは今、一番聞かれない言葉だった

銀時

「あ…ああ…今、用意するから待ってる」

そう言っつて銀時は部屋の奥から何かを取り出しテーブルの上に置いた

神楽

「銀ちゃん…何アルか…これ？」

銀時

「……………コッペパン……………」

神楽

「……………定春」

そう言っつと定春は銀時に大きい巨体でのしかかりをした

その間、神楽はご飯が入っているはずの炊飯器を取りに行った

ものの数秒で神楽は定春にのしかかりされている銀時の元に行った

神楽

「銀ちゃん……………なんでご飯ないアルか？」

銀時

「いや、実はな！白い服の女の子がな、全部！」

神楽

「つまり白い服の女の子が全部、食べたって言うことアルか？」

銀時

「うん、そう、そう！！」

銀時がそう言うと神楽から赤いオーラがあふれでた

銀時の顔は真っ青になった

神楽

「ふざけんなああああああ！！こんの天パあああああああ！！

！……！」

その後、神楽は定春と一緒に家を飛び出し、新八の家に行った、そこで神楽はインデックスの存在を知った、神楽は万事屋の出来事を新八たちに話すと、新八と上条は急いで万事屋に行った

そこには銀時が倒れており、まさにそれは地獄絵図だった

## 銀時の不幸1（後書き）

出したいキャラを感想と一緒にお願いします

接触（前書き）

ちよつとへタです、あと土御門と青髪をだしました、青髪がちよつとダメかも



## 接触

### 第六幻想 接触

昨夜の出来事により新八、上条は万事屋に泊まることとなった

そして朝日がのぼる朝

銀時

「あゝ、いつて〜な〜」

そう言いながら銀時は新八、上条とともに新八の道場に向かっていた

新八

「それにしても、大変でしたね銀さん」

銀時

「まったくだよ、誰かさんが連れてきた大食い娘のおかげでな〜」

上条

「ほんとにすいません……」

そう言いながらファミレスの前を通りかかった時

「にゃああああああー!!!!!!」

上条の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた

上条

「……………今の声は」

そう言う上条はファミレスの自動ドアに手をかけようとした時、自動ドアが開き、金髪の男が飛び出してきた

その人物は上条のよく知る男だった

上条

「っ…土御門!？」

土御門

「にゃー!!この声はカミちゃん!?たのむ!!たすけー」

ガシャン!!

涙を流しながらすぎる上条のクラスメートの土御門元春の頭にガラスのコップが投げつけられた

それはもの見事に土御門の頭に命中した

上条

「土御門!!しっかりしろ!!」

上条が土御門に話かける中銀時と新八は冷や汗をかいていた

新八

「銀さん……………これって」

銀時

「早くいくぞ、面倒なことになる前」

「あら？銀さんじゃないですか？」

その声に銀時と新八は体を振るわせながら振り返った  
お妙

「どうしたんですか？こんな朝、早く？」

銀時

「い……………いや、ちょっと」

銀時がうるたえる中、上条がお妙の前にたった

上条

「てつめえー、よくも土御門に！！」

そう言い、上条はお妙に殴りかかって行った

「ファミレス」

上条

「本当にすみません」

上条は顔に殴られた後があった、あの後、上条はお妙に殴りかかったものの見事にお妙にボコボコにされた

そして今、テーブルにはお妙、銀時、新八、上条、土御門の他に上条のクラスメートの青髪ピアスが座っていた、なぜ土御門しか出て来なかったかと言うと青髪はあの時、テーブルで倒れていた

そして今はなぜこのような状況になったのかを話していた

お妙

「いきなり声をかけられるものだから、びっくりしたわ」

〓 一時間前〓

土御門と青髪はまったく道の知らない道を歩いていた

青髪

「なあ…カミヤんどこにいんのやる?」

土御門

「まあ…カミヤんのことやから、お得意のカミジョー属性でかわいい女の子と一緒にいるぜよ」

そう言うと青髪が何かをひらめいたのか土御門に言った

青髪

「今、思えばカミヤんがいると女がカミヤんにとられるやる、だったらその反対をついたらええんとちゃう」

それを聞いた土御門は口をニヤリとした

土御門

「にゃー、つまりナンパだにゃー」

そう言つと青髪もニヤリと笑いターゲットを探し始めた

すると道端に一人の着物姿の女の人が歩いていた、二人はその歩く女性に話しかけた

その後、ボコボコにされてファミレスでおごらされるともしらずに

そつ話を聞くと土御門と青髪を見て上条の初めの一言は

上条

「お前ら馬鹿だろ」

その言葉に青髪が怒り上条に言いつけた

青髪

「お前に俺たちの気持ちがわかるかあああ!!」

上条

「いや、この話、聞いてたら明らかお前らの自業自得だろーが！」

青髪

「なんやとー？第一、悪いのはこのぼづりー」

お妙

「あら？どの口がこんなに喋るのかしら」

青髪

「あつ、……………いや……………その……………」

いいわけを言おうとした青髪だがいいわけを思いつかずお妙の拳の連打を食らった

「やー……あわわだ」「やー……あわわだ」「やー……あわわだ」  
土御門

その後、銀時たち（ボコボコの青髪）はファミレスを出た

銀時

「さて、俺たちはいくか」

上条

「え？行くなって新八さー」

続きを言おうとしたが銀時はすぐさま上条の口をふさいだ

上条

「うー！ーうー！ー！」

銀時

「いいからだまつてる……………」

その言葉を聞くと上条はうなずいた

土御門

「にゃー、それじゃあカミヤンについていくぜいー」

青髪

「ああ、せやな！」

そう言っつて上条に近づこうとした土御門と青髪だったが

ガシッ

二人には襟首をつかまれた

お妙

「あら？二人ともどこに行くのかしら？あなたたちは私と一緒に行くのよ」

青髪

「あ……………いや……………」

土御門

「にゃー…カミヤンについていっー」

お妙

「あ……………、いいから来いや」ラッ？

上条は泣きながらついて行く土御門と青髪をお大事にと見送った



## 接触（後書き）

この前のキャラについてまたありましたら感想と一緒にください、  
できるだけそれに答えたいと思います

銀時の不幸2（前書き）

今回も微妙かもしれませんが、後、日輪、月詠、晴太を出しました

## 銀時の不幸 2

### 第七幻想 銀時の不幸 2

銀時たちはお妙と別れてにぎやかな地下街にきている

「吉原桃源郷」

上条

「あのつかぬことを聞きますが…」

銀時

「なに？」

上条

「ここはどついつとどこですか？」

そう、上条が吉原桃源郷に来て始めに見たのは子供にはとつてい見せれない店が並ぶ街並みだった

銀時

「選択の自由のある街」

上条

「うそつけ！！それあんたが自由なだけじゃねーか！」

上条は銀時たちに敬語を使うのを忘れてツッコミを入れた

すると銀時たちの前に車椅子の女性と口にキセルを加えた女性が近寄ってきた

日輪

「あら、銀さん？」

月詠

「久し振りじゃな」

上条は銀時に話しあっている二人を見て新八に聞いた

上条

「誰なんだ？あいつら？」

新八

「あの人たちは、吉原桃源郷を率いる日輪さんに吉原の自警団の月詠さんです」

上条

「へえー……」

銀時

「おーい、新八、上条！」

上条たちが話し合っている間に銀時は話をつけ日輪の店へと向かった

そして今、銀時たちは月詠が率いている百華の情報を待っていた

銀時

「どーよ？何かあったか？」

そう聞く銀時に月詠が答えた

月詠

「情報によると、ぬしたちが探している女は昨日ここに来たものの、すぐにここを出たそうじゃ」

上条

「くそっ！！一足遅かったか！」

日輪

「せっかく、吉原の救世主様が来てくれたのに……」

それを聞いた上条は救世主様と言う言葉に気になったが今はそんなことを言ってもらえないと頭を切り替えた

銀時

「まあ、気にすんな、今の現状だったら蜘蛛の糸でもほしいからな」  
そう言い店を出ようとした時、前からひとりの男の子が駆けよってきた

ローションを入れたバケツを持って

晴太

「銀さん、久し振り!!!」

銀時

「おお、晴太じゃねえーか？母ちゃんとはどーだ？」

そう言い話し合う銀時を見て上条は

（なんで、バケツにローション入れてんだ！？っーか銀さんなんで  
っっこまないんだ！？）

そう思った後、上条は辺りを見渡すと、新八は日輪と話し合っていて、銀時は晴太と月詠と話し込んでいた

上条は自分だけハブじゃねえと思いきや銀時の横を通って店出ようとした

すると上条の足がさつき晴太が駆けよった時に溢したローションに  
よってツルンと滑った

そして、

銀時の背中にあたりそのまま後頭部から地面に落下した

上条

「~~~~~つてエ、不幸だ~~~~」

そう言う上条はふと周りが静かなことに気がついた、そして新八たちを見ると何かを見て固まっていた

上条は新八の目のいく所を見た

そこでは…

銀時が月詠を突き倒しまたがった状態になっていた

月詠

「……………」

銀時

「……………あっ……………いせっ……………いねは」

日輪

「まあ…銀さんたら」

そう言う日輪に月詠の顔は真っ赤になった

月詠

「早くどけやああああああ!!」

月詠はそう言いながら銀時の肛門に蹴りを入れた

銀時

「ぎゃああああああ!!」

その後、銀時は失神し、上条と新八は銀時を万事屋につれて帰るところとなった



## 銀時の不幸2（後書き）

銀時と上条の言葉使いで迷っています、アドバイスを感想と一緒に  
入れてもらえたら嬉しいです

争いの予兆（前書き）

高杉を出して見ました

## 争いの予兆

### 第八幻想 争いの予兆

「港」

港にある倉庫の中、二人の男がいた

高杉

「まさかと思つたがほんとに実現するとはな」

そう言う男は顔に包帯を巻き、口にはキセルを加えてもう一人の男を見ていた

？

「まあ、信じられないのも当然だ、……………そんなことより例の居所はわかつたのか？」

高杉

「ああ、しかしまた厄介な所に居てなー」

？

「かまわん、我々にとっては問題ではない」

そう断言すると高杉はクツクツクツと笑いだした

？

「なにがおかしい？」

高杉

「いや……………こっちは情報やつたんだ、今度は俺の頼みも頼むぜ…

……次元操作リアルワールド」

高杉がそう言っていると倉庫から月明かりのいい場所にでた、そして月を見ながら言った

高杉

「銀時…祭りのはじまりだ…」

その一方で次元操作は笑いながら一枚の写真を見ていた

次元操作

「禁書目録は我々がもらい受けるぞ………上条当麻！」

その頃、万事屋では…

〓万事屋〓

銀時は何とか意識を取り戻し万事屋に戻ってきた

銀時

「おい…神楽…」

神楽

「何アルか？銀ちゃん？」

銀時

「なんでインデンマメがいんだよ」

そう、そこには昨日、炊飯器の10で炊いたご飯を五秒で食べたインデックスがいた

インデックス

「だからインデンマメじゃなくてインデックスだよ」

上条

「おい、インデックス！なんで勝手に外でたんだ、あっちでおとなしくする約束だったろうが？」

上条は軽く怒った状態でインデックスにきいた

インデックス

「うっ………だって………とーまが心配………だったんだもん……」

そう言うと泣き出してしまった、それを見た銀時は意地悪そうに笑い

銀時

「上条くんどうすんの、彼女泣かして？」

上条

「だから彼女じゃないですって、ただの居候の暴飲暴食なガジガジ女ですって!？」

上条は銀時にそう言うのとインデックスの方を向いた、そこには

インデックスが歯を出して頭に噛み付く体勢だった

インデックス

「とーまのバカああああああ!……」

上条

「ぎゃあああああああ！！不幸だあああああああ！！」

そのやりとりを見ていた銀時は新八に言った

銀時

「新八……ここで言つと定春だな？あの子」

新八

「そうですね、銀さん」

神楽

「定春に失礼アル、定春、食べるよろし」

そう言つと銀時と新八は定春に頭をまるごと食べられた

そしてこの時から、江戸に危機が迫っているとは今の銀時たちはしるよしもなかった

争いの予兆（後書き）

次は御坂をだします

提供者（前書き）

ちよつと長いです



## 提供者

### 第九幻想 提供者

昨日、万事屋ではインデックス、上条は万事屋に泊まり新八は昨日の二人が気になり道場に帰った

そして朝

「万事屋」

ソファで寝ていた上条は鳥鳴き声で目を覚ました

上条

「ふあゝ、朝か……………」

そう言って辺りをを見渡すが誰も起きていないのを確認すると上条はもう一度寝ようとした

すると

「万事屋、いるか?!」その声に目を開けソファから立ち玄

関の扉を開けた

上条

「はい、今、銀さんなら寝て……………」

そこには三人の男一人の女がいた、そしてその女は上条が探していた御坂美琴だった

御坂

「アンタ、こんな所に……」

上条

「ビリビリ!!お前どこにー」

上条がそう言うと御坂は頭から電気を走らせた

御坂

「だから、ちゃんと名前で呼べやああああああ!!」

そう言うと御坂は電撃を上条に向かって放った

上条はそれを右手で防いだ

上条

「お前な!場所考えろよな!」

御坂

「あー、むかつく!?!一回ぐらい当たりなさいよ!?!」

上条

「いや、それに答えたら俺、死ぬから!?!」

銀時

「ぎゃーぎゃーうるせーんだよ！おめーら、夫婦喧嘩ですかコノヤロー」

さっきの電撃を防いだ時の音で銀時は目を覚ました

そして銀時がそう言うのと御坂は顔を赤くして抗議した

御坂

「なんでこのボンクラと私が夫婦なのよ!？」

そう言う御坂を銀時は無視して銀時は御坂のうしろにいる男三人に話しかけた

銀時

「で、何のようですか、ゴリラ?」

近藤

「相変わらずだな、万事屋」

総悟

「旦那、おはようございます」

土方

「ゴリラじゃねえ、近藤さんだ」

「万事屋室内」

銀時たちは御坂、近藤、総悟、土方をソファーにすわらした、神楽は総悟とメンチをきっていて、インデックスは御坂と何かを話している

銀時

「それにしても良かったじゃねえーか、探してたのが見つかった」

上条

「はあ……………」

銀時

「それで、お前らは親切に連れてきた……………ってわけじゃねーよな……………」

近藤

「ああ……………一応、万事屋の耳にもいれようと思ってな」

そう言う近藤の空気に神楽やインデックスたちは黙った

近藤

「ここ最近、幕府の役人が変死体で発見されてな」

銀時

「変死体？」

近藤

「ああ」

総悟

「何でも、目撃者によれば見たことのない服装で杖みたいな物を持つていたそうですよ」

上条

「杖！？」

銀時はそれを聞いて驚く上条を見たがすぐさま近藤に目をやった

銀時

「それはわかった、それでなんで俺たちに言うんだ？それがわからねえーな」

銀時がそう言うと土方は銀時の顔を見ながら言った

土方

「今回の事件には高杉が絡んでる」

それを聞くと銀時の表情が変わった

土方

「やっぱりな……………てめえが桂と関わりを持つてるからまさかと思  
つたがな」

銀時

「……………」

近藤

「万事屋…これだけは聞かせてくれ、おまえは」

その時、神楽が立ち上がった

神楽

「銀ちゃんは敵じゃないね!」

銀時

「神楽……………」

神楽の言葉を聞くと近藤は笑いだした

神楽

「なにがおかしいね、ゴリラ」

近藤

「俺たちも万事屋が敵とは思っちゃーいない、ただ確認したかった  
だけだ」

銀時

「……………」

土方

「しかしてめえがもし俺たちの敵になるなら、てめえをぶったぎる、それだけは覚えときな」

総悟

「一回、負けたのにですかイ？」

土方

「うるせえー!!！」

すると上条が手を上げた

上条

「あの…わたくし、上条当麻はわけがわからないのですが？」

近藤

「ああ、すまない、気にしないでくれ」

そう言うと近藤は土方、総悟をつれて帰って行った

上条

「……………そういえば、お前どーすんだ？あの人ら帰ったぞ？」

御坂

「あ……………どづしよじ…」

提供者（後書き）

なんとか次は戦いにもっていきたいです

## 遭遇（前書き）

何とか戦いに持っていきました、あとオリジナルキャラを出しました、パクってたらすいません



## 遭遇

### 第十幻想 遭遇

銀時は今、一人、公園のベンチに寝そべっていた

銀時

「……………」

銀時は寝ることもなく昔のことを思い出していた

「昔」

「銀時……………」

そこにはたくさんさんの死体があたり一面に転がっていた

銀時

「おい！？しつかりしろ！！赤夜あかや！！！」

銀時はそう言い赤夜に近寄った

赤夜

「銀時……………天人から……………江戸を……………」

赤夜はそう言うと息を引き取った

「現在」

銀時はその昔のことを思い空を見上げていた

「万事屋」

そこでは御坂が万事屋で神楽、上条、インデックスとついさっき来た新八にグチを言い続けていた

御坂

「ほんと、最低と思わない？」

神楽

「その気持ちわかるアル！」

神楽がそう言うと御坂は嬉しそうに話続けた

その一方、上条は新八にさっき起きたことを話していた

新八

「そうですか……………それで、銀さんは？」

上条

「銀さんはその後、すぐ出ていった」

新八

「……………」

上条は新八の様子を見ていると

インデックス

「とーま、つまんないよー」

上条

「お前なあ、今言つか普通!？」

それを見ていた神楽がインデックスに言った

神楽

「テレビでも見るアルか？」

インデックス

「いいの!？」

新八

「神楽ちゃん、銀さんに怒られるよ?」

神楽

「大丈夫アル」

神楽はそう言うのとテレビの電源をつけた、すると、緊急ニュースが映り出されていた

テレビ

「ただ今、ニュースが入りました、現場の美々野アナ（みみのアナ）?」

美々野

「はい、ただいま私はターミナルの近辺にきています、ターミナルの周りに何かの落書きが一時間ごとにターミナルをに円を書くように動いています」

新八たちがそれを見ているとインデックスが喋りだした

インデックス

「これ魔術かも」

新八

「魔術？」

上条

「魔術ってなんだよ、どんな魔術なんだ？」

インデックス

「まだ、あれだけじゃわからないかも……」

上条

「……………新八さん、土御門は？」

新八

「昨日の二人なら道場にいますけど？」

上条はそれを聞くと玄関を開けとびだして言った

〓公園〓

銀時はそろそろ帰るかと思いきやベンチから立ち上がった時、周りから一人のマントを来た男が立っていた

銀時

「うん？なんだ、てめえ」

男？

「貴様が万事屋だな……」

銀時

「なに、なんかよう？依頼ならー」

男？

「禁書目録はどこだ？」

銀時

「禁書なに、聞こえないんだけど？」

銀時がそう言うと男は首から丸いアクセサリーを取り出し銀時に向けた

男？

「知らないなら、きさまの仲間に聞くだけだ、死ね！！」

男がそう言うと手に持っていたアクセサリーが赤く光、地面が割れ巨大な岩が宙に浮き銀時に向かって放たれた

ドオン！！

男はその音を聞くと笑いながらその場を去ろうとした

銀時

「いきなりですか、コノヤロー」

男は驚いて振り返ると岩が粉々にくだけちり銀時が木刀を右手に持ち立っていた

男？

「きさま…」

銀時

「その禁書なんやらが何かは知らねえが」

銀時はそう言いながら木刀男に向けた

銀時

「俺のもんに出す奴は…」

銀時はそう言いながら男に向かっていき、男はさっきと同じように岩を作り銀時に向かって放った

銀時は大きく跳び岩に足をつけると岩を蹴飛ばし男に急接近し

「ぶった斬る!!」

銀時はその勢いで男の手に持つアクセサリーともども男を斬り倒した

その後、銀時は役人を呼び万事屋に帰る所だった

銀時

「……………禁書目録……………あいつが知ってるかもな」

銀時はそう言いながら歩いていると耳元から男の声がした

「銀時、さすがだな…」

銀時はその声振り返ったがそこには誰もいなかった



遭遇（後書き）

感想まっています



時渡りの魔術（前書き）

今回は長すぎてグダグダかもしれません

## 時渡りの魔術

### 第十一幻想 時渡りの魔術

上条は今、土御門を連れてターミナルに向かっていた、青髪はついて行くと言ったがお妙に捕まり二人分の家事をするはめになった

土御門

「カミヤん、ほんとにそれ魔術なんだな？」

上条

「ああ、インデックスがそう言ったから間違いないねえだろ……」

そしてターミナルのすぐ目の前に差し掛かった時、そこでは真選組が立っていた

真選組

「こら、ここは行き止まりだ、帰りなさい」上条

「頼む、そこをどいてくれ」

真選組

「ダメだ」

上条が無理に行こうとしている時

近藤

「おお、お前は万事屋にいた奴じゃないか？」

近藤が偶然通りかかってきた

上条

「ゴリラさん!？」

近藤

「いや、それ違うからね、近藤だから、でどうした？」

真選組

「いや、彼らがここを通りたいと言って聞かないんです」

上条

「頼む、ここを通らせてくれ!!」

真選組

「だからダメだつてー」

近藤

「いいだろう、通してやれ」

真選組

「局長!？」

上条はそれを聞くと土御門を連れて行ってしまった

「ターミナルの真下」

上条たちはそこに記されているものを見ていた

上条

「土御門、わかるか？」

土御門

「ああ、これは時渡りの魔術だな」

上条

「時渡り？」

土御門

「しいて言えば死んだ者を生きた者の魂と引き換えに生き返らす魔術だ」

上条

「そんなことができるのか？」

土御門

「普通なら無理だな」

上条

「普通ならってどう言う事だよ？」

土御門

「この魔術を完成するにはしいて千人の魂がいる、しかしそんなに死んだってニュースは聞いてないぜい？」

上条

「たしかに……」

土御門

「だから普通は完成しない魔術なんや、しかしこの魔術は明らかに完成に近づいている……」

上条

「じゃあ一体……」

土御門

「それも謎だ、しかしこの魔術をする意味がわからない……」

上条と土御門がそう話していると

銀時

「たしかにそうだなあ……」

銀時が後ろから喋りかけてきた

上条

「銀さん！？なんでここに？」

銀時

「別にいいだろ、お前は母ちゃんですか、コノヤロー？」

上条

「いや……そこまで……」

銀時と上条が話し込んでいると土御門が何かを見て驚いていた

土御門

「なんだ……………これは？」

上条

「どうしたんだ土御門？」

土御門

「これは時渡りの魔術じゃない」上条

「なっ…お前さっき時渡りの魔術って」

土御門

「いや、たしかに時渡りの魔術なのはたしかだが、今、刻まれているルーンは普通の時渡りとはかけ離れている」

上条

「かけ離れてるとどうなるんだ……………」

土御門

「生きた者の魂って言ったがその法則が変わり、死んだ者の魂を加えることができると言うことだ」

上条

「死んだ者の魂……」

ドオン！！

それを聞いていた上条だったが後ろから響いた音に振り返った

そこには銀時が近くにあった電柱柱に拳を殴りつけていた

上条

「銀さん……？」

銀時

「……魂の出所はここだ……」

土御門

「どういうことだ、それは!?!」

銀時

「昔、ここで沢山の侍が死んだ……」

上条

「侍?」

土御門

「いつたい何人死んだ?」

銀時

「千人なんてもんじゃねえよ……」土御門

「それがほんとならいつたい何がしたいんだ、この魔術をかけたやつは?」

銀時

「……幕府の復讐だ」

上条

「幕府の……復讐？」

土御門

「なぜそんなことがわかる？」

銀時

「今日、俺を襲ってきた奴がいてな、そいつが禁書目録はどこだつて聞いてきた」

上条

「インデックスを!？」

上条の言葉に気にしたが銀時はふれなかった

銀時

「それから朝の情報がたしかなら、この魔術だかなんだかしられーが、こいつをしようとしてるやつは禁書目録が目的で今回ののはただ頼まれただけでしたにちがいねえ」

銀時がそう言うとな上条と土御門は信じられない顔で話を聞いていた

すると銀時が上条に喋りかけた

銀時

「なあ、上条…そろそろ話してくれねえか？」

そう言う銀時は上条たちが何かを隠していることに気づいていた

上条

「……………」

土御門

「カミヤん、俺もそれに賛成だ、今回のことはもう俺達だけの問題をこえているぜい」

上条

「……………わかった」

上条はそう言つと銀時にこの幻想の始まりをなし始めた



時渡りの魔術（後書き）

感想をまっています

## 学園都市（前書き）

今回は上条たちのなぜ銀時たちの所にきたのかを書きました

## 学園都市

### 第十二幻想 学園都市

「学園都市」

この日、上条はインデックスを連れてコンビニにきていた

インデックス

「とーま！これ買ってよ！！」

そう言いその本を見てみると何かのマンガだったが裏を見ると千円と書いてあった

上条

「いや…無理だって、俺のお財布の事情で」

インデックス

「えー、買ってほしいかも」

上条

「かわいこぶつてもダメだ、それに今日は夕食の飯買いにきたんだよ、お前もこれ食いたいだろ？」

そう言っって見せたのは冷凍のピザだった、インデックスは迷ったが

インデックス

「わかったかも……………」

そう言つてインデックスはしぶしぶ本をもとにあつた所に戻しにいった、上条はインデックスが行くのを見ると飲み物が置いてあるほうに目を向けた

するとインデックスの声が聞こえた

インデックス

「あつ…短髪？何してるの？」

上条は以前短髪に世話になつたと言つことインデックスが言つていたことを思いだしインデックスに目を向けた

そこには上条のよく知るレベル5の御坂美琴が立っていた

上条

「まさか短髪がお前だとはな？」

御坂

「……………」

今、上条はインデックス、御坂と一緒に路地裏を歩いていた、理由

はインデックスをあまり目立った所にださないためだ

上条

「で、何してたんだ、御坂？」

御坂

「べ……別にいいでしょ、私が何してたってー」

インデックス

「マンガを立ち読みしてた」

御坂

「ちょ……ちょっと!!なに言ってる!？」

上条

「おいおい、常盤台のお譲さまが立ち読みって……」

上条がそう言と御坂は上条に電撃をあてようとした時

インデックス

「とつま、よけて!」

インデックスの言葉に戸惑う上条のすぐ横に何かの光が放たれた

そして上条の横にあった電柱がきれいになくなっていった

上条

「なっ!？」

御坂

「な、なに?」

するとインデックスが叫んだ

インデックス

「とうま！前！！」

上条はインデックスに言われて前を見るが遅かった、上条たちは目の前からくる光に飲み込まれた、そしてその光の先には杖を持った男が立っているのを見たのが上条が学園都市で最後に見たものだった

## 学園都市（後書き）

最近、上条などのセリフがらしくない感じがします

## 次の行動

### 第十三幻想 次の行動

銀時は上条の話を聞いていて上条に言った

銀時

「つまり、お前らはこのえーと……時代の人間じゃあねえーってことだな？」

上条

「ああ……」

すると銀時はある疑問が浮かび上条に聞いた

銀時

「それにしても、今の話じゃあ、お前とインデンマメとあの何だっけ？え〜……あ、そうそう、御坂ってやつだけのはずだろ、なんでこいつらがいんだ？」

銀時はそう言い土御門に指をさした

上条

「そついや〜…なんでだ？」

土御門

「にゃ〜………実はにゃ〜………」



「土御門・青髪、視点」

二人は街中を歩いていた

土御門

「それにしてもカミヤんはなにしてるかにゃー……」

青髪

「カミヤんのことやからまた女の子連れて歩いて……」

そう言っただけ歩いていた青髪が足を止めた、そして土御門は青髪の見  
る方向を見ると上条が二人の女の子を連れて路地裏に入るのを見た

土御門・青髪

「カミヤんー!!」

二人はそう言っただけ上条が入っていった路地裏に走った

そこで上条たちがくらった光の巻きぞえをくらってしまった

「ターミナルの真下」

銀時と上条は土御門の話の聞くと、我慢出来ずに笑ってしまった

銀時

「ギャハハハハハハ！ーつまりお前ら、勘違いしてこっちに来たっ

てかブクククっ!!」

上条

「お前ら、バカだろ、ハハハハ!!」

上条がそう言うと土御門は上条に殴りにいった

〓 30分後〓

〓 帰り道〓

銀時

「まあいいじゃねえか、どっちもどっちってことで?」

上条

「いや、明らかに悪いのはこいつだろ?」

土御門

「にゃー………って言うかなんで殴られたにゃー?」

上条と土御門は顔に青アザが出来ていた、殴りあったのもあるが喧嘩最中、誤って銀時を殴ってしまいボコボコにされたことでできたのが多かった

上条

「で、土御門、どうしたらあの魔術をとめれんだ?」

土御門

「にゃー、あれはカミヤんの幻想殺し（イメージブレイカー）でも本体をたたかなきゃあだめぜい」

上条

「くっそ！！本体さえ見つければなんとかなるって言うのに」

銀時

「本体を探すあてならあるちゃーある」

上条

「えっ!？」

銀時があると言ったことに上条と土御門は銀時を見た

銀時

「あいつに借りつくるのはいやだが今はそうと言ってらんねーしな、  
ついてこいや?」

上条

「銀さん…まさか、またあそこにー」

上条は以前の吉原のことを思い出していた

銀時

「ちげーよ、今回はバカに会いに行くんだよ」

銀時がそう言つと上条たちは頭を?にさせながらも銀時について行  
った

## 次の行動（後書き）

今回のタイトルがわかりずらかったかもしれませんが、次回は悩んでいます、インデックスたちを出すか銀時を出すかで、良ければ感想と一緒にどっちがいいか書いてもらおうとありがたいです

## 再会（前書き）

今回、短いですが、あと桂をだしました

## 再会

### 第十四幻想 再会

銀時たちはある店の前に来ていた

「大人の誘惑」

上条たちは銀時につれてこられた店の看板を見た

上条

「……………」

土御門

「にゃー、大人の誘惑だにゃー……………」

銀時

「お前ら、ちょっと待ってる」

銀時はそう言っただけで店の中に入っていった

上条

「……………そう言えば土御門、お前ら俺と別れた後、なにさせられてなんだよ?」

土御門

「聞くなカミヤん……………」

そう言いながら土御門は涙を流していた

すると銀時が店から急いで出てきた

上条

「銀さん、いましたー」

銀時

「てめえらは先に新八の所に帰ってる!!」

銀時はそう言うのと走ってどこかに行ってしまった、上条と土御門は店の前で立ち止まったまま銀時が行く方向を眺めていた

「港倉庫」

銀時は今、港の倉庫に来ていた

銀時

「はあ…はあ…はあ…ヅラああ!!どこだ!!」

ドオン!!

銀時がそう言った直後、銀時の後ろから何かがぶつかる音がした

銀時がそこに行くくと銀時の戦友の桂 小太郎が倒れていた

銀時

「ツラー！しっかりしろ！」

桂

「ツラ……じゃ……ない……桂だ……」

銀時と桂がそう言っていると倉庫の奥から足音が聞こえてきた

??

「久しぶりだなあ……銀時……」

銀時は足音の方向からくる男を見た瞬間、銀時の顔が驚きが変わった

銀時

「赤夜……」

銀時がそう言うと赤夜は悪魔のような笑みを向けていた



## 再会（後書き）

次は闘いで書きたいと思います

思い（前書き）

グダグダだったらすいません

## 思い

### 第十五幻想 思い

銀時

「赤夜……………」

銀時が言った先にはマントを体にまき、髪の毛は黒く、目は獣をかけるような目をした男が刀を持ち立っていた

赤夜

「銀時、桂…懐かしい面々じゃねえか？」

銀時

「……………なんでお前が、……………」

赤夜

「俺はな、次元操作リラルワールドって言う男に生き返らしてもらったのさ」

桂

「リラル……………ワールド……………なんだそいつは？」

銀時

「……………上条が言ってた杖を持っていたやつか……………」

赤夜

「ほお……………さすがだなあ、銀時」

赤夜はそう言いにとわらった

銀時

「……………だがあの魔術はまだなんじゃねーか、なんでてめえが」

赤夜

「あの魔術はな、たしかに死んだやつを生き返らす魔術だが、俺の場合は違う所である魔術を使い、生き返らしてもらったんだよ」

銀時

「!？」

赤夜

「そう言えば銀時、知ってるか？俺のはな、あのターミナルにある魔術とはちがって普通の魔術ってことと、その魔術の生け贄に使った魂のことを？」

銀時

「……………」

赤夜

「それはな……………幕府で生き残ったカスどもだよ!! 旨かつたぜ、俺たちを裏切ったやつ魂は？」

赤夜がそう言う姿に銀時と桂は恐怖をおぼえた

銀時

「赤夜……………」

赤夜

「銀時……………今、お前が言った質問に答えたんだ…こんどは俺からの質問だ」

赤夜は銀時にそう言いながら刀を銀時に向かって振り落とした、銀時はそれを木刀で防いだ

赤夜

「なんでてめえは天人と暮らしてんだ!! なぜ、あの時の約束を守らなかった!!」

赤夜がそう言うことに刀が重くなるのを銀時は感じた

赤夜

「銀時…俺はなあ、高杉に賛成だぜ」

銀時

「なあ!？」

銀時はそれを聞くと後ろに飛び間合いをとりながら構えた

赤夜

「あの魔術はもうそろそろ完成する……高杉は幕府を潰すと言っているが、その前に……銀時、お前をふぬけにした、奴らを潰す」

銀時

「……………!？」

赤夜

「さあ、お前の仲間は生き残れるかな？」

赤夜が言ったとき、桂は赤夜に向かって行った

桂

「銀時!！」

銀時

「ツラ!？」

桂

「お前は早く行け!!赤夜は俺に任せろ!!」

桂はそう言って赤夜と刀をぶつけあわせていた

銀時

「……………頼んだぜ、ツラ」

桂

「ツラじゃない…桂だ」

銀時はそう言いのこし新八らの所に向かった

桂は銀時が行くの見ながら赤夜と距離をとった

赤夜

「クツクツクツクツクツ……………」

桂

「赤夜…きさま何がおかしい？」

赤夜

「ふっ……………まさかここまで作戦が行くとはなと思ってな？」

桂

「作戦！？なんのことだ……………」

桂がそう言うと赤夜は笑みを浮かべた

赤夜

「白夜叉の復活だ……………」

思い（後書き）

次回、白夜叉をだせたら出したいです

## 白夜叉(前書き)

ん  
前回の後書きで白夜叉と書きましたが、  
がっかりだったらすいませ



## 白夜叉

### 第十六幻想 白夜叉

銀時が万事屋に向かう中、上条と土御門が万事屋とは違う場所を歩いていた

銀時

「おい！！てめえら、なんでここに？」

上条

「いや、インデックスたちが新八さんの道場に行ったってー」

銀時

「くっそ！！」

銀時はそう言つと万事屋から新八がいる道場に走りだした

上条

「どうしたんですか？銀さん？」

上条は銀時の様子がおかしいのに気づき銀時を追いかけたながら聞いた

銀時

「あいつらがあぶねえ！！」

上条

「！？」

「道場」

新八たちは、200人の天人によって囲まれていた

新八

「いったいなんなんですか!？」

お妙

「新ちゃん……………」

神楽

「銀ちゃんはまだアルか？」

インデックス

「うつつ……………」

御坂

「なんなの!?!こいつら!?!」

青髪はと言うと新八らがくる前にお妙の暗黒物質のえじきにあい新八らの後ろで倒れていた

新八

「はあ…はあ……………」

神楽

「新八、大丈夫アルか？」

神楽はそう言いこちらに向かってくる天人の足元に傘の先からでる鉄砲で応戦した

御坂

「あー、邪魔くさい!!」

御坂は電撃を天人に向けて放っている

しかし神楽、新八、御坂はもう体力の限界だった

そして

天人

「しゃあらああああ!!」

天人がすきを見てお妙に刀を振り落とした

新八

「姉上!!」

神楽

「あねご!!」

ガキイン

お妙はとっさに目を閉じたが刀がこないことを感じ目を開けると近藤が刀で天人の刀を防いでいた

近藤

「大丈夫ですか、お妙さん」

お妙

「近藤さん!？」

近藤はお妙にそう言うと刀を天人の刀からはがし天人を切り捨てた  
近藤が切り捨てたと同時に道場の入り口から真選組が突入してきた

その一方では

屋根から真選組が入ってくるのを見ている次元操作がいた

次元操作

「ふん、雑魚が何人集まるうと一緒だ……」

次元操作が見ている中、天人との闘いは数が大い天人により真選組も新八らと一緒にで囲まれてしまった

土方

「くっそ、こんなに数が大いとはな……」

総悟

「たしかにやっかいですぜ、土方さん」

近藤

「トシ、総悟、話ならこいつらを倒した後だ……」

天人

「ぎゃあ!!」

近藤たちが話していると天人の奥から天人の悲鳴が聞こえた

そこには銀時、上条、土御門が立っていた

銀時

「てめえら、そこをどきやがれえー!!」

銀時はそう言いながら天人を木刀で切り倒していく、その間、銀時が天人を引き付けているのをみこして上条たちは新八たちがいる所に向かった

インデックス

「とつま!!」

上条

「インデックス、大丈夫か、御坂も」

御坂

「べ……別に……大丈夫にきまつてんでしょ!!」

上条がインデックスらに話していると土御門が声をかけてきた

土御門

「カミヤん、あれだ」

上条

「え？」

上条はそう言ってみると次元操作が銀時が闘っている場所の屋根に立っていた

上条

「なっ………土御門、俺が行くからお前はそこにいてくれ!!」

土御門

「カミヤん!!」

土御門は言つが上条は行ってしまった

銀時

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

銀時は今、天人に囲まれていた、しかし天人はなぜかいつこうに攻撃してこない

すると一人の天人が屋根に向かってしゃべりだした

天人

「これでいいのか?…」

天人が言う方向に銀時は顔を上げた、そこには杖を持った男がたっていた

次元操作

「ああ、よくやった」

銀時

「てめえは……………」

次元操作

「ふっ…高杉から聞いていた通りだな」

次元操作はそう言い銀時に杖を向けた

銀時

「はあ…はあ…高杉だと…」

次元操作

「ああ……………」

銀時

「で…はあ……………何のようなんだ、…はあ…はあ…「コノヤロー……………」

次元操作

「高杉に頼まれてな…」

銀時

「……………」

銀時が構える中、次元操作の杖が光った

次元操作

「きさまを昔の姿にしろとな…」

銀時

「!?!」

次元操作は銀時にそう言う杖の光が銀時を包みこんだ

そして光が銀時を包みこむなか天人の一人が次元操作に言った

天人

「おい、これで大丈夫なんだな？」

次元操作

「ああ、高杉が言っていた、そいつが昔の姿に戻ればお前たちは心配する必要はないとな」

天人

「ぎゃははは…これで俺たちはこいつに殺される心配はねー」

ブシュ!!!

天人がそう言いきる前に天人の体から血が吹き出した



そして、そこには白き羽織をはばたかせ、木刀ではなく真剣を持ち、その瞳はまるで赤く染まったような瞳をした銀髪の男が光が徐々に消えるなか立っていた

白夜叉(後書き)

次回は桂と赤夜の話です

## 怒り（前書き）

戦いを書いて見ましたがいまいちだったらすいません

## 怒り

### 第十七幻想 怒り

銀時たちとは離れた場所では、桂は赤夜といまだに交戦中だった

桂

「赤夜！！白夜叉が復活するとはどう言うことだ！！」

赤夜

「ふっ、そのままの意味だよ、たしかに銀時は白夜叉だが今のあいつは白夜叉になりきれないでいる、だから俺たちが銀時を白夜叉に戻してやるうと思ってな」

赤夜はそう言うのと桂に刀を振り落とした、そして、桂の刀にぶつかると赤夜は言った

赤夜

「天人を生け贄にしてな！！」

桂

「どう言うことだ！！お前は死んでいった仲間をよみがえらすのではないのか！！」

赤夜

「はっ！！なぜあんな仲間とも思わねえ、弱い連中を生き返らせないといけねえーんだ？」

桂

「なっ！！」

赤夜はそう言いながら桂に右、左と刀を振り落としていく

桂

「赤夜……………それがきさまの本心なのか？」

赤夜

「ああ、そつだよ!!」

赤夜は桂にそう言いながら刀を振り落とした

桂はそれをよけた、赤夜は桂がよけるのを見た後、赤夜は服が少し切れていたことに気づいた

赤夜

「なっ?……………」

桂

「……………赤夜、俺を許す許さないはかまわないが、しかし……………」

桂がそう言いながら出す殺気に赤夜は後ろにひいた

桂

「死んでいった者たちを侮辱するのだけはゆるさんぞ!!」

赤夜

「……………はっ！！……………死ねえええ！！桂ああ！！」

赤夜は桂の殺気におびえながら桂に切りにかかった

桂は刀を居合いのように構えた

桂

「赤夜、貴様はもう我々、攘夷志士と心をともしにする者ではない……」

桂はそう言い赤夜に体当りする形で走った

勝負は一緒に決まった

赤夜は血を流しながら倒れており、桂は刀を鞘におさめた

桂

「ただの外道だ……」

桂はそう言い残し銀時のいる場所へと向かった

怒り（後書き）

次に白夜又になった銀さんの続きから始めます



## 暴走

### 第十八幻想 暴走

桂が赤夜と決着がついたころ、白夜叉に戻った銀時は天人を見つめていた

天人

「お……………おい…話が違っじゃねえか!!」

そう言っつて何人かの天人は白夜叉に背を向け逃げようとした時

ブシュー!! シャ!! ブシャアアア!!

さっきまで後ろにいた白夜叉が消え、肉をきる音が聞こえさっきまで固まっていた天人たちはその音がした方向を見た

そこには天人のかえり血を浴びた白夜叉が立っていた

天人

「うわああああ!!」

天人は叫びながら逃げようとするが、また白夜又は目でとらえられない速さで逃げようとする天人に追いつき次々と天人を斬り倒していく

そしてその姿はまさに白き鬼神そのものだった

上条

「……………銀さん…」

上条はたどり着いた時には全ての天人は死んで倒れておりその真ん中に銀時は空を見上げていた

上条

「銀さん!!」

銀時

「……………」

銀時は上条の声に反応し上条を見ると上条の目線から銀時が消えた

上条

「えっ……………」

上条は銀時が消えたことにきづいた時には銀時は上条の横に立っていた、上条は銀時が横にいることに気がつき横に振り向いたが銀時は居なくなっていた

すると新八たちの声が聞こえ上条は新八たちのほうを振り向くと銀時はすでに新八のほうに向かって歩いていく

新八

「銀さん……………」

神楽

「銀ちゃん!!」

神楽は銀時に向かって走ろうとした時

ガキン！！

銀時は神楽に刀を振り落としていたが総悟がそれを何とか刀で防いでいた

神楽

「銀……ちゃん……」

銀時

「……………」

総悟

「旦那…どう言つつもりでい？」

総悟が銀時に言つが銀時は何も答えず鬼神のような目で神楽を見ていた

## 暴走（後書き）

次回は白夜叉と真選組との戦いです

## 幻想殺し（前書き）

幻想殺しと書きましたが…上条はちょっとしか出ません、後ちよつとキャラの言葉がへタかもしれません

## 幻想殺し

### 第十九幻想 幻想殺し

総悟は銀時の刀を何とか刀で防いでいた

総悟

「くっ、……………（これが旦那の本気…）」

総悟はそう思っていると銀時は総悟の視線から居なくなり、そしていち早く総悟は銀時に気づいたがすでに銀時が刀を総悟に振り落とす所だった

総悟

「なっ!?!」

総悟がまさに切られると言う時、土方が銀時の刀を防いだ

総悟

「土方!?!」

土方

「総悟、ためらうなよ」

土方はそう言って銀時を切るつもりとしたが銀時はそれを受け流し距離をとった



それを見ていた新八とインデックスは銀時が離れたのを見て神楽に近寄った

新八

「神楽ちゃん!!大丈夫?」

神楽

「……………銀ちゃん…」

神楽はまさに放心状態だった

インデックス

「……………」

新八

「神楽ちゃん……………」

新八とインデックスが神楽を心配するのと同じでお妙も神楽を見た後、銀時を見た

お妙

「銀さん……………」

お妙が銀時を見ている時、御坂は近藤に近づいた

御坂

「ちょっとどう言う事よ!!あいつ、あんたたちの味方じゃなかったの!!」

近藤

「いや…そうは言われても……………」

御坂と近藤が言い合っているのを見ていた上条に土御門が叫んだ

土御門

「カミヤんー!!」

上条

「つ…土御門!？」

土御門

「カミヤん、早く杖を壊せ!!それを壊せばすべて戻るはずだ!!」

上条はそう言われ、屋根にいる次元操作の持つ杖を見た

上条

「ああ!!」

上条はそう言い走っていった

土御門はそれを見た後、銀時を見ながら冷や汗をかいていた（カミヤん、急げ………こいつは神裂より強い）

ガキン!!ガキン!!ガキン!!

そのころ土方、総悟は白夜叉とかした銀時と交戦中だった

総悟

「はあ…はあ…二人がかりなのに、全然勝てる気がしませんぜ…はあ…はあ…土方さん…」

土方

「…はあ…無駄なこと喋ってる暇があんなら、とっとと行くぞ…総悟…」

土方と総悟はそう言い銀時に向かって行った

〓屋根〓

次元操作は銀時を見ながら戸惑っていた

次元操作

「どつ言つことだ…何故…」

次元操作が混乱していると後ろから足音が聞こえた、次元操作は振り向くとそこには上条が立っていた

上条

「見つけたぜ、杖ヤロー…」

次元操作

「上条当麻!?!」

次元操作は驚いた顔で上条を見た

上条

「……………一つ聞かせてくれよ、なんで銀さんをあんな姿に変えたんだ？あんたには何のメリッー」

桂

「高杉に騙されたのであろう」

後ろからの声に上条は振り返ると桂が立っていた、上条の顔を見て桂は言った

桂

「心配しなくてもよい、俺は銀時の知り合いだ」

上条は最初は疑ったが桂の顔を見て疑うことをやめ次元操作に振り向いた、次元操作は桂の言葉を聞き何かを喋っていた

次元操作

「そんな……………高杉……………」

上条が何かを言おうとした時、桂が上条の前にでた

桂

「……………たしかに高杉に言いように使われたことには同情はする、がしかし、死んでいった攘夷志士の魂をもて遊んだことは許しまじきこと、ここで叩ききる」

桂がそう言い次元操作に近寄ろうとした時、次元操作の杖の先が光った、そして光は桂に向かって放たれた

桂

「なにっ!?!?…」

桂は避けようとしたが間に合わないときとり目をつぶった

バギン!?!?!

まるでガラスが割れたような音を聞き桂は目を開けた

そこには、一人の少年が右手を前に出しながら桂の目の前に立っていた

上条

「お前の狙いがインデックスか俺かは知らねえが……」

上条はそう言つと右手を次元操作に向けた

上条

「お前が起こした幻想をぶち殺す!!!」

## 幻想殺し（後書き）

この話の次に上条と銀さんたちの日常編を書きたいんですがその日常でまだそんなに考えていないのでなにか希望があったら感想と一緒に送ってください！

## 決着

### 第二十幻想 決着

上条が自分の魔術を打ち消したことに次元操作は驚いていた

次元操作

「そ……………そんな……………」

上条は次元操作に近づこうとした時、次元操作は叫んだ

次元操作

「待て！！俺に一度でも攻撃をしてみる？そしたら今したで待機している俺の仲間がどうするかわかってんだろっな？」

上条

「くっ！？……………」

上条が立ち止まろうとした時

土御門

「その仲間はこいつらかにゃー？」



後ろからの声に振り返り見た先には土御門が四人の男を縄でぐるぐる巻きにして屋根の上に座らしてした

次元操作

「ばっ…バカな!？」

土御門

「カミヤん、もう大丈夫だ、早くその右手で壊すだにゃー!!！」

土御門がそう言うのが聞こえ上条に視線を向けるとそこには

すでに上条が右手に宿る幻想殺しを次元操作の杖に向かって殴ろうとしている所だった

上条

「うおおおおおおおー!!!!！」

バギン！！

上条の拳は杖を破壊して次元操作の顔面に直撃した

その頃、下では土方と総悟が銀時に向かって斬りかかっていた、そして土方、総悟が切ったと思ったが

そこには銀時は居なくなっていた

土方、総悟が銀時はどこだと周りを見渡した時、土方は総悟の影が段々大きくなるのを見つけ叫んだ

土方

「総悟！！上だー！！！！」

土方に言われ総悟は上を見ると銀時が落下しながらすでに総悟に斬りかかる状態だった、（殺られる！！）総悟がそう思った時、銀時

の体から光が放たれ銀時は光に包まれた

そして光が徐々に消える銀時は白夜叉ではなく普段の木刀を腰にさした銀時が落下してきた、総悟と土方は何とか落ちてくる銀時をキヤツチすると地面に下ろし二人は大の字で地面に倒れた

総悟

「はあ…はあ…危なかつたですね、土方さん…」

土方

「そりゃあてめえだけだろ…はあ…」

二人はいつものように言い合っていた

〓屋根〓

上条たちは屋根から銀時が戻っているのを見ると息をつきわらった、すると土御門が上条にきいた

土御門

「カミヤん、あいつはどこだ!？」

上条はそう言われ次元操作を殴り飛ばした場所を見るとそこには次

元操作は居なくなっており、さらにさっきまでいた桂もなくなっていた

「港の倉庫」

桂は次元操作を後ろから追っていた

次元操作

「はあ…はあ…はあ…」

桂

「待つてー!!!」

次元操作は桂をまくために倉庫のかどを曲がった

次元操作

「ぐはあ！！」

次元操作の声を聞き桂は刀を鞘からだしすぐさま倉庫のかどを曲がった

そこには次元操作が血を流しながら倒れておりそして次元操作が倒れている前には刀を鞘からに納める高杉がいた

桂

「高杉！？」

高杉

「ツラか……」

桂

「高杉、どう言っつもりだ、死んでいった仲間を利用して天人を行きかえらすなど」

高杉

「銀時はどうだった？」

高杉は桂の問いを無視して聞いてきた

高杉

「強かっただろ？」

桂

「……………」

桂が黙るのを見ると高杉は笑いながら暗闇の中に去っていった

桂はそれをただ見ているしかなかった

## 決着（後書き）

完結はまだまだなのでぜひよろしく願います、後前回かいた感想を待ってまーす

不幸と安心（前書き）

グダグダです



## 不幸と安心

### 第二十一幻想 不幸と安心

次元操作との闘いが終わってから3日がたった

銀時は今、新八の道場で今だに眠り続けていた、そしてその横の部屋では新八、神楽、お妙、土方、近藤、総悟、上条、インデックス、御坂が集まっていた（青髪、土御門はいまだに働かされていた）

近藤

「そつか…万事屋はまだ意識を取り戻さないのか…」

新八

「はい……医者が言うにはわからないと…」

神楽

「……………」

総悟

「旦那……………」

土方

「……………」

みんなが黙りこくる中、インデックスが上条に言った

インデックス

「とうま、とうまが前にダメージを消したようにあの人にもできないの?」

インデックスの言葉に新八たちはいつせいに上条を見た

上条

「え……………いや……………第一、銀さんのが魔術かどうかわからないしー」

新八

「でも、前にダメージを消したんでしょ、もしかしたらってこともあるじゃないですか!」

新八にそう言われた上条だがしかし実はダメージを消したと言つのが嘘だとは言えず仕方なく試す事となった

「寝室」

今、上条たちは銀時の横に座っている

上条

「……………」

上条は周りからの視線に戸惑いつつも銀時の頭に右手をのせた

しかし、何の反応もなかった

上条

「……………」

上条はどうしようと考えていると肩に手がおかれた

新八

「上条さん、ちょっとこっちに来てください」

そう言う新八の顔は怒っているのではなく笑っていた

上条

「あ……………いや…」

上条が何かを言おうとした時、体を羽交い締めにされた、そして上条が自分の体を羽交い締めにする人物を見ると近藤だった

近藤

「さあ、いっこうか？」

近藤の言葉に上条は何かをさとった

上条

「ぎゃあああああ、助けて!!」

上条はそう言うも近藤に羽交い締めされたまま違う部屋に連れて行かれた

するとお妙が御坂とインデックスに言った

お妙

「神楽ちゃんと御坂ちゃんとインデックスちゃんはここで待ってて？」

お妙はそう言い残し上条が連れて行かれた部屋に入って行った

なぎ刀を持って…

後に残った土方はタバコを吸いに行くといい部屋から出ていき総悟はなにかに目覚めたのか上条が連れて行かれた部屋に歩いて行った

そして寝室には神楽、御坂、インデックスしかいなくなってしまった、普段なら神楽が場を盛り上げるのだが神楽は銀時に殺されそう

になってから今日までこのテーションが続いていた

インデックス

「……………（空気が重いかも…）」

御坂

「……………（うつうつ…重い…）」

インデックスと御坂は二人とも同じことを思っていた

その頃、上条は新八たちに連れられた部屋で近藤の手からなんとか脱出したが部屋のすみに追いやられた

上条

「ちよつと待ってー」

新八

「ああー！！お前人をもて遊んで楽しいか？」

上条

「いや、あれはインデックスがー」

近藤

「覚悟するんだな」

上条

「ななにがでしょうか！？わたくし上条当麻には」

ドンー！！

上条がそう言った時、新八たちの後ろからなぎ刀が上条の顔の横に刺さった

そして上条はなぎ刀が飛んできた方向に目を向けた、そこにはお妙と総悟が立っていた

お妙

「あら、おしかったわね」

上条

「いや！？おしかったわねってあぶねえじゃー」

総悟

「近藤さん、気がすんだら最後は俺にやらしてください？」

総悟がそう言つと近藤たちはニコツとわらい上条に近づいていった

上条

「ぎゃあああああああああ！！」

部屋の奥からの上条の悲鳴にインデックスと御坂は体をビクク！！とさせた

御坂

「……………（大丈夫かな…アイツ…）」

インデックス

「とうま、なに叫んでるの？」

インデックスが首をかしげながら言った

二人が上条の悲鳴に気にしている時、神楽がしゃべった

神楽

「銀ちゃん……」

インデックス

「神楽……」

神楽が気になる御坂は神楽に言った

御坂

「アイツがいったんだけど、今回のことは魔術が原因らしいわよ」

神楽

「えっ？……」

インデックス

「それと、とうまが言ったよ、この人が血相かえて来たって？」

御坂とインデックスの言葉を聞き神楽は銀時を見た

神楽

「……………」

神楽たちが銀時を見てるなか上条の悲鳴がいまだに続いていた

銀時

「うるせーな、お化け屋敷で叫ぶ女ですか、コノヤロー？」

その声を聞き神楽、御坂、インデックスは銀時を見た

そこには死んだ魚の目をした銀時が布団から起き上がる所だった

神楽

「銀ちゃん……銀ちゃあああああん！！」

神楽はそう言いながら銀時に抱きついた



銀時

「うおおおお、何すんだ神楽!!」

神楽

「銀ちやああああん!!」

神楽は銀時に抱きつきながら泣いていた

そして神楽の声を聞き新八たちも寝室に集まった

新八

「銀さああああん!!」

新八も銀時に体当たりするよいに泣きながら銀時に抱きついた

銀時

「重……………い……………」

銀時が神楽と新八に押し倒されるのをインデックスたちは笑いながら見ていた

そして上条はなんとか新八たちの手から助かった

上条

「ふ…不幸だあああああああああああああああ—!!!!」

不幸と安心（後書き）

まだまだ続けたいとおもいます

## 新たな幻想（前書き）

今回はちょっとながいかもしれませんがまだまだ終わりませんので  
よろしく願います、後、後書きもよかったですら見てください！！

## 新たな幻想

### 第二十二幻想 新たな幻想

新八、神楽、インデックス、お妙、御坂、総悟は近藤のはからいで昼食を食べに行き、新八の道場には銀時、近藤、土方、上条が次元操作との闘いについて話していた

近藤

「あ後は大体こんな感じだ」

銀時

「……………」

銀時は近藤の話聞いて黙っていた、すると土方が銀時に話をかけた

土方

「次は俺たちの質問だ、あれがお前の昔の姿ってことはてめえが昔攘夷戦争に関わっていたってことでもいいよな？」

土方は銀時をにらみながら言った

銀時

「ああ……」

土方

「じゃあー」

土方が何かを言おうとした時、近藤が土方の顔の前に手をだしてそれをおさえた

近藤

「トシ、今日はここまでだ」

土方

「近藤さん！？まだー」

近藤

「トシ、今日やっと万事屋が目を覚ましたんだ、話は後日ってことでいいだろう」

土方はしぶしぶ近藤の言うことをきいた

近藤

「それでいいな、万事屋？」

近藤はそう言いにとんと歯をだして笑った

銀時

「すまねえな、ゴリラ」

近藤

「え、そこでゴリラ？ゴリラはないよね、普通！ー！」

近藤が叫んでいたが銀時は無視して上条に顔を向けた

銀時

「上条、今気になったんだけどなんでおめえらがここにいるんだ？」

上条

「うっ！ー！そ……………それは……………」

上条が顔をそむけると部屋のふすまから土御門が出てきた

土御門

「それは俺が説明するぜい」

上条

「土御門!？」

銀時

「お前、あいつらと一緒に行かなかったのか？」

銀時がそう聞くと土御門は涙を目に浮かべていった

土御門

「にゃー……………掃除してろって言われたぜい」

上条

「……………」

土御門

「まあ、それは置いてにゃー、実はー」

土御門はなぜ自分たちがいるのかについて語りだした

〓次元操作の逃亡後〓

上条たちは壊れた杖を回収して屋根から降りていた

上条

「土御門、一応、杖壊したんだけどよ?なんで帰れないんだ？」

土御門

「にゃー……………わからないぜい」

土御門がそう言つと上条は土御門に飛び蹴りをくらわした

そして二人で争つてしているとインデックスと御坂が近寄つてきた

御坂

「ちょっと、アンタたち、何してるの？」

上条

「今、バカを倒そうとしてるとこだよ！！」

御坂が上条に話しかけている時、インデックスが上条の持っている杖を見た

インデックス

「とうま……………それってー」

上条

「ああ、これが？…あいつが持ってたー」

インデックス

「とうまのバカ！！」

上条

「はあ！？なんなんだよ、いきなり！！」

インデックス

「とうま、それはね、私たちを元の所に返すのに必要なものなんだ

よ

上条

「……………えっ？じゃあつまり…………」

インデックス

「私たち、帰れないんだよ、とうま」



上条はインデックスの言葉を聞いてすぐさま土御門に目を向けようとしたがそこには土御門は居なかった

上条は一人汗を流すなか後ろからの殺気に振り返るとそこには頭に電撃を出している御坂と歯を出しているインデックスがいた

上条

「不幸だあああああ!!」

「寝室」

銀時は土御門の話聞いた後、上条に聞いた

銀時

「じゃあ、お前らどーすんだ？帰れねえじゃねーか？」

銀時がそう言うと土御門がまってましたという感じで銀時に言った

土御門

「それについては心配はいらないぜい!!」

銀時

「どづいつ事だ？」

土御門

「次元操作に手下がいたから、俺が聞き出した所、カミヤんの右手

については向こうもわかってたらしく1ヶ月には自動的に戻る計画を練ってたらしいぜい」

土御門が笑ってそう言うのを聞き銀時はへえーとする中、上条はどうやって聞き出したんだと考えていた

銀時

「じゃあ、お前らこれからどーすんだ？」

上条

「それなんですけど…インデックスが…」

上条がその先を言おうとした時インデックスたちが帰ってきた

インデックス

「ただいまー！とーま、どうなの？泊まらしてもらえるの？」

銀時

「……………は？」

銀時はインデックスの言葉を聞き上条を見た、上条は笑いながら銀時を見た



## 新たな幻想（後書き）

次回から日常偏が始まります、あと感想がこなかったなので自分で考えますが、日常偏でなんかのキャラを出してほしいと言う人は感想と一緒にお願いします！！

## 夜（前書き）

一応、日常偏でいきたいと思っておりますのでよろしくお願いします

## 夜

### 第二十三幻想 夜

銀時は新八の道場から万事屋に帰り、そして今、夕食を食べた後

銀時

「やっぱり我が家が一番だな……………」

上条

「そうですね…」

銀時と上条はソファーに座りテレビを見ていた、そして神楽、御坂、インデックスはお風呂に入ってこいと銀時に言われ入っていた

上条

「それにしても、ほんとはよかったですか？」

銀時

「あー、何が？」

上条

「いや、俺たちを泊めさせてもらってですよ」

銀時

「仕方ねえだろ、新八と神楽がうるせーし、かといってなんかお前が助けてくれたって話だしな」

上条

「……………（実は俺、なんもしてないんだけど…）」

上条は心の中で一人冷や汗を書いていた

神楽

「銀ちゃんー、出たアルヨ！」

神楽の声を聞き上条が神楽たちの方に振り向いた

そこには

インデックスと御坂が神楽からもらったチャイナ服に似た服を借りていた

上条

「インデックス、ちゃんとありがとうって言ったのか？」

インデックス

「言ったよ！！とうまのバカ、バカ、バカ！」

上条

「いや、ただ聞いただけで……………って、ちょっと待て、そんなに噛みつかれたらしやれになんねーよ！！」

インデックスが噛みつきこうとするのを必死で逃げる上条たちを見ていた御坂はため息をついた

〓 一時間後 〓

お風呂に入った後の銀時たちはなにやら神妙な顔でソファーに座っていた（上条の腕には歯形の後が残っていた）

銀時

「まーあ、こうなったからには、やる気はねーが決めねえといけねえ……」

銀時はまず上条たちに言うと神楽とインデックスに順番に指をさした

銀時

「まず神楽、あとインデンマメ、お前らには食う飯の量を減らしてもらう」

銀時がそう言うと神楽とインデックスは立ち上がった

神楽

「なんでアルか、銀ちゃん!!」

インデックス

「そっだよ!!なんでとうまたちには言わないの!!あとインデンマメじゃないって言ってるかも!!」

わめく二人を無視して、次に銀時は御坂をさした

銀時

「次にお前だ、えー…何だっけな〜名前?」



御坂

「だから御坂って言ってんでしょ!!」

御坂は頭に電気をはしらせていた、御坂が怒る理由は銀時が万事屋に帰ってきた時、銀時は一度、御坂に名前を聞いたのに今になってもう一度、名前を聞こうとするからだ

御坂が電気を頭にはしらせる中、銀時は御坂の頭に指をさした

銀時

「はい、それ」

御坂

「な……何よ、いきなり……」

銀時

「それ禁止な、電化製品が壊れるから」

銀時の言葉で横で笑う上条に御坂は怒りつつも何とか我慢した

銀時

「まーあ、こんなとこだな、よし、それじゃあ寝るか」

銀時がそう言う中、上条は手を上げた

上条

「あの〜銀さん…俺の寝る所は……」

上条がそう言うと銀時は指である場所をさした、そこは今、自分たちが座っていたソファだった

上条

「……………」

銀時はそこを指すと自分の寝室に行ってしまった、上条はインデックスたちを見ると、神楽はすでに自分の寝室に入っておりインデックスはさっきのことで怒ってるのかフンと言って神楽の寝室に入った、御坂はフンと笑いインデックスと同じく神楽の寝室に入ってしまった

一人残った上条は床に手をつけていたその横では定春が上条の肩にポンと手をつき神楽たちの部屋に入っていた

## 騒動（前書き）

今回はグダグダで短いですが、後、御坂を出して見ました

## 騒動

### 第二十四幻想 騒動

朝、鳥の鳴き声を聞き御坂は目を覚ました、横を見るとインデックスが丸まって寝息をたてながら寝ていた、神楽も見ようとしたが押し入れの中に入っていてインデックスしか見れなかった、御坂はそれを確認すると近くで寝ている定春に気づかれないように、寝室から昨日、食事をした部屋に行った

そこでは上条当麻がソファで寝ていた

御坂は周りを見渡し誰も見ていないことを確認すると上条に忍び足で近寄った、そして上条を見下ろすと御坂の顔は真っ赤になった

そして、もう一度周りを確認したあと上条の顔に自分の顔を近づけ、後五センチという所まで顔が近づいた

銀時

「おいおい、最近のガキは大胆だな」

御坂はその声に驚き慌てて上条の顔から離れてその声の主に向  
けた

そこにはふすまにもたれかかった銀時が立っていた

御坂

「あああ……………アンタ……………」

銀時

「まあ、鈍感な奴にはそれぐらいしねえと気づかねえってか」

銀時はそう言ってニヤッと笑った

御坂

「……」

御坂は証拠を隠滅しようという目で頭に電気をはしらせるが

銀時

「いいのか？起きちまうぞ？」

銀時の言葉で御坂は上条を見て頭で何を想像したのかはわからないが顔を赤らめ電気を抑えた

御坂

「……言わない？……」

御坂は目に涙を浮かべ銀時に言う

銀時

「ふっ、心配しなくても言わねえよ、俺の大事なもんも守ってくれたらしいからな」

銀時はそう言うともう一度、寝室に入ろうとした時、後ろからふすまがいきよいよく開く音がした

神楽

「何、女いじめて楽しんでるアルか！！！！この天パアアアアアアアアアア……」

神楽が銀時に向かってドロップキックを食らわした

銀時

「ぐばあ!!」

蹴り飛ばされた銀時は壁に顔から突っ込んだ、神楽は銀時を蹴り飛ばした後、すぐさま御坂に近づいた

神楽

「大丈夫アルか、あの天パに何されたアルか？」

神楽が御坂にそう言うのと御坂は神楽がさっきの場面を見ていないと頭で理解した

御坂

「ち…ちよっと、目にゴミが入って涙でちゃっただけだから」

と神楽を何とか誤魔化した、すると上条が銀時が壁に衝突した音を聞き目を覚ました

上条

「う……………なんだよ…今の……………い!? 銀さん!? 大丈夫か!？」

上条は銀時に気づくとすぐさま銀時に駆け寄った

そして上条が騒ぐ中、インデックスはいまだにすやすやと寝息をたてて寝ていた



## 騒動（後書き）

ちよつと、日常偏で考えている話がつきそうなので、感想と一緒に何かこいつを出して欲しいと言つのを募集していますのでまっす  
す

朝の不幸(前書き)

今回はちょっと短いです

## 朝の不幸

### 第二十五幻想 朝の不幸

朝の出来事から目が覚めた上条は今、台所で料理を作っていた

上条

「……………何作ろうか…」

上条は万事屋の冷蔵庫を見て考えていた。上条が考えている間、銀時たちはというと銀時は鼻にティッシュユをつめていた

銀時

「いでで……………」

神楽

「ごめんヨ、銀ちゃん」

銀時

「ごめんですんだらポリスはいらねえーんだよ」

銀時が青筋を浮かべる中、神楽の横ではいまだに頭を抱えている御坂がいた

そうこうしていると上条が朝ご飯を持ってきた

上条

「朝食できましたよ！」

上条がそう言っただけで持ってきたのは、目玉焼きに醤油を垂らしたものと鳥の唐揚げ、美味しそうな匂いのしたスープだった。上条はそれをテーブルに置いた

銀時

「おっ、うまそうだな」

銀時がそう言う向かいでは神楽がよだれを垂らしていた

御坂

「へえ、アンタ料理作るの上手いんだあ」

上条

「まあーな、一人で生活してるし、それより……」

上条はそう言っただけで手で唐揚げを掴んだ。

ドン！！

それと同時に神楽の寝室のふすまが開いた、上条はその音を聞くと唐揚げを少し離れた空中に投げた

そしてふすまを開けた人物は上条が投げた唐揚げに飛びつき大きく口を開けて食べようとした、しかしその時

パク！

定春が先に唐揚げを食べてしまった、それを見た銀時たちはさつきまで飛びつこうとしていた人物に目を向けた

そこには定春に食べられ口をパクパクした後、泣き崩れたインデックスの姿だった

インデックス

「…うっ…ぐずっ…」

上条

「あー…インデックスさん？」

上条が心配になり声をかけるとインデックスが歯を見せながら上条を睨んだ

インデックス

「肉ー!!!!!!」

インデックスはそう言い上条に飛びかかった

銀時は頭を噛まれる上条をみながら言った

銀時

「何あれ？」

神楽

「食べ損ねた腹いせに襲われてる光景アルな」

御坂

「……………」

銀時たちはそう言いながらに不幸だあ！！と言つ上条を無視して朝食を食べた

## 上条と御坂（前書き）

打ち止め 「こんばんわってミサカはミサカは可愛く言ってみたり  
！」

一方通行 「おい、なんだこりゃあ？」

打ち止め 「今日からミサカが前書きを担当しろって作者に言われたってミサカはミサカは状況のわからない一方通行に言ってみたり」

一方通行 「おい…今、オマエだけって、なんで俺までよばれてんだよ」

打ち止め 「ミサカが作者に頼んだ、ってミサカはミサカは今にも殴ってきそうなあなたに言って、痛い！！」

## 上条と御坂

### 第二十六幻想 上条と御坂

インデックスから解放された上条は今、御坂と二人っきりでソファに座り万事屋にいた

上条

「……………（なんだよ！！この空気！！）」

御坂

「……………（私なに赤くなってるのよ！！！！！！！！！！）」

なぜこのような状況になったのかというとそれは一時間前のこと

〓 一時間前〓

銀時たちが朝食をすませた頃、（上条は神楽に朝食を取られ朝飯を食べれなかった）銀時は先日（の件）で真選組に会いに行かなければならなかった

銀時

「神楽、後はただぞー！」

神楽

「任せるネ、銀ちゃん！」

神楽が言うのを聞くと銀時は万事屋を後にした



それから三十分後…

インデックス

「つままないよ、とうま」

インデックスが上条に言い寄ってきた、しかし上条はすやすやと寝ていた、すると神樂が何かを思いついたのかインデックスに言った

神樂

「私がかぶき町を案内するネ」

インデックス

「え！？神樂、それほんと？」

神樂

「ウソは言わないネ、このかぶき町の女王の神樂に任せるネ！」

神樂はそう言うといンデックスと定春を連れて出ようとした

御坂

「ちょっと、待ちなさいよ！」

さっきまで神樂の横に座っていた御坂が立ち上がった

御坂

「こいつはどうするのよ、私と二人っきりにするつもり！！」

神樂

「心配しなくても、もうすぐ新八がくるネ」

インデックス

「そう言うことだから、とうまよろしく、短髪」

神楽とインデックスはそう言いのかし去って行った

そして三十分が過ぎて上条が目を覚ました

上条

「ふあ〜……………あれ、インデックスたちはどこ行ったんだよ？」

御坂

「あの白髪ならゴリラの所で後の二人は犬連れてどっか行ったわよ」

上条はその声を聞き声のする方向を見ると御坂が向かいに座っていた

上条

「そうか……………そっぴゃあ、何でお前だけここに居るんだよ？」

御坂

「べ……………別にいいでしょ！？私はそのメガネがきたらどっかいこう  
と思っただの！？まったく、遅いじゃないあのメガネ！！」

御坂が一人怒る中上条が何かを思い出したのか御坂に行った

上条

「あの人なら来ないぞ」

御坂

「えっ、どういふことよそれ！！」上条

「何だっけな〜……………え〜たしか親衛隊とかに出るから今日は休むっ  
て言っただんだよ」

御坂

「……………」

御坂はそれを聞くとソファーに座りこんでしまった

それから今の状況へ発展した

上条

「……………」

御坂

「……………」

上条は何かないかと考える中

ぐうーう

上条のお腹から音が部屋全体に響き渡った

上条は顔を赤くさせながら御坂を見た、御坂はクスクスと笑っていた

御坂

「何か作るけど食べる？」

御坂がそう言つと上条は涙を流しだした

御坂

「ちよつと、何泣いてんのよ!？」

上条

「いや…暴食シスターにいつも悩まされてるから………」

その他に何かを言っていたが御坂は無視して台所に向かった

〓十五分後〓

上条は固まったまま、御坂が出した料理を見ていた

上条

「つかぬことを聞きますが……これは？」

御坂

「焼き飯だけどなに？」

上条はそれを聞くともう一度、前にある料理を見た

少し焦げているならまだしも、全てまるこげであり、それはお妙の暗黒物質に勝るかも知れないという境界線まできていた

上条はそれをもう一度見た後、御坂を見た、御坂はこちらをじゅつと見ていた

上条は覚悟を決めて一口、食べた

上条

「……………」

御坂

「……………」

上条は一口した後、喋った

上条

「見た目はともかく、味はいいんじゃないか？」

上条がそう言うと御坂は無邪気な子供のように喜んだ

上条はそれを見た後、ちよつと咳き込んだ

御坂

「あ……………お茶いる？」

御坂はそう言いテーブルに置いてあるお茶に手を伸ばした

上条

「いや、俺が取るから」

上条も御坂と同じく言いながらお茶に手を伸ばした

そして二人の手がお茶の取手にさわる前に触れあった

上条

御坂

「……………」

二人がそのまま固まった時

土御門

「カミヤん、遊びにきたぜい！」

青髪

「やっと解放されたで……」

土御門と青髪が入ってきた、そして二人は上条を見て止まった

上条と御坂は土御門たちが見る方向を見て自分たちの手と知りすぐさま手を引っ込めた

土御門

「カミヤん、俺たちが散々こき使われてる間にここでもカミジョー属性とはにゃー……」

上条

「なにがー」

青髪

「カミヤん……覚悟はええやろな……」

二人はそう言うと上条に飛びかかっていった

御坂は殴り合っている上条たちを見た後、ため息をつくも、上条の手に触れた手を大事そうに握っていた



上条と御坂（後書き）

前書きはどつでしたか？へただったらすいません

稽古（前書き）

打ち止め 「今回はグダグタだって作者がいつてたってミサカはミサカは言ってみる」

一方通行 「

って前回の話といい前書きといいグダグタだったじゃねーか」

打

ち止め 「それじゃあ第二十七幻想が始まるってミサカはミサカは言ってみたり！」

稽古

第二十七幻想 稽古

上条たちが暴れている頃、銀時は真選組屯所のある一室で近藤、土方と一緒に座っていた

そして銀時は自分の過去について近藤たちに話していた

銀時

「と、まあーこんな感じだ？これでいいだろ？」

近藤

「ああ、しかし銀時、お前も苦労してるんだな？」

銀時

「三十路がもらして苦労してるのに比べたらマジだよ」

近藤

「やめて！！ほんと、マジで！！」

銀時は近藤にそう言うのと立ち上がり部屋を出ようとした

土方

「まちな…」

銀時

「何ですか、ハニー？もう用はすんだろ」

銀時が言う中、土方は席を立ち言った

土方

「ツラかしな…」

銀時

「なんでてめえー」

近藤

「銀時、今日だけは頼む、」

そう言いながら頭を下げる近藤を見て銀時はため息をつきながら土方の後について行った

〓 道場 〓

銀時は土方に連れられ道場に来た

銀時

「で、なにすんの？また決闘か？」

銀時が言う中、土方は壁に置かれた竹刀を銀時に投げつけた

銀時

「おっと！いきなり何すんだ、てめえー？」

土方

「それと木刀と交換だ」

土方がそう言うのを聞くと銀時は素直に腰にさす木刀を土方に投げた

近藤はそれを見ると銀時に言った

近藤

「銀時、お前に頼みがあつてな」

銀時

「頼み？なんでてめえらの頼みな」

近藤

「報酬は60万でどうだ」

銀時

「で、依頼内容は？」

銀時がそう聞くと道場の入り口から真選組の人間が竹刀を持ちぞろぞろと入ってきた

銀時

「……………おい、おい、……………どういふことですか、コノヤロー？」

銀時がそう言うと土方はタバコをくわえて言った

土方

「この前の事件で、てめえを見た、こいつらがてめえに稽古つけてくれってうるさくてな」

近藤

「で、俺とトシで今回の計画をたてたつてわけだ」

銀時

「おい……………計画つて……………」

銀時は土方と近藤に振り返るとすでに道場の入り口を閉める所だった

銀時

「おい！！ゴリラ！！てめえ、はめやがったなコラー！！」

銀時がそう言いながら入り口に向かったが間に合わず入り口は閉まった、そして入り口の外から声が聞こえた

近藤

「この鍵は山崎が持っているから全員を倒したら手に入るだろ」

土方

「後、てめえが負けたら報酬の件は無しだからな」

そう言って近藤たちの声は遠ざかっていった

銀時

「……………」

銀時が黙るなか徐々に真選組たちが銀時に近づいていた

山崎

「覚悟してくだせえ、旦那？」

ミントンを持つ山崎の言葉が言い終わり真選組たちは銀時に向かって行った

「 30分後」

近藤と土方は一室でお茶をすすっていた

近藤

「しかし、総悟に言わなくて良かったのか？トシ？」

土方

「あいつがヤローとやりゃあ、山崎はともかく他のやつらが中に入れねえーだろ、それにあいつらだけで十分、ヤローを倒せるだろ？」

土方はそう言いながらお茶をすすった、近藤はそうかと言いながら前においた報酬袋を見た後、土方と同じくお茶をすすった

銀時  
「報酬はもらったからな」

突然の声に近藤と土方はお茶をはき出し、そこにいるはずもないと思っていた銀時に目を向けた、銀時はしっかりと報酬袋を持っていた

土方  
「て……………てめえ！？なんでー」

銀時  
「じゃあな、後、今度、はめやがったら絞めるからな、ゴリラ」

銀時は土方の言葉を聞かず行ってしまった



その後、土方と近藤はすぐさま道場に向かうと、山崎以外は全員、  
気絶していた、土方は総悟を呼べば良かったと後悔した

稽古（後書き）

感想を待っています

## ペドロ（前書き）

本文に打ち止めと一方通行をだして見ました

## ペドロ

打ち止め

「前書きがいつも変だから本文の最初にやることになったってミサカはミサカは言ってみる！」

一方通行

「なあ、それなら俺たちが出なくてよかったんじゃないか？」

打ち止め

「能書きたれる一方通行を無視して第二十八幻想をスタートって今、このページを開いた人についてみる！」

一方通行

「このガキ、ぶっ殺す！」

## 第二十八幻想 ペドロ

神楽たちは今、かぶき町のある花屋に立ち寄っていた

インデックス

「きれいだね、神楽」

神楽

「そ、そうアルな…」

花を見て喜ぶインデックスにくらべて神楽は顔を青くして花屋を見ていた、そしていつでも逃げられる状態だった

神楽

「は、はは早く違う、う、所にいい行くネ…」  
インデックス

「どうしたの？神楽、顔が青いよ？」

インデックスが神楽に聞くが無理してインデックスに背を向けた

神楽

「なにもないアルー」

ペドロ

「あつ、神楽さんじゃないですか？」

神楽はその声を聞くとすぐさま逃げようとした

ドン…！

しかし神楽は立ち止まってしまった、なぜかと言つと神楽の足元の地面に包丁が刺さっていたからだ

ペドロ

「ダメじゃないですかあ」

ペドロはそう言って神楽に近づき足元に刺さっている包丁とその隣にいた虫を手にとった

ペドロ

「後、もう少しでテントムシを踏み潰す所だった、殺生はいけない」

ペドロが赤い目で神楽を睨んだ、神楽はさらに顔を蒼くした

ペドロ

「ところでそちらのかたはどちらさまですか？」

インデックス

「私の名前はインデックスって言うんだよ」

ペドロ

「そうですね、あ、よろしければ一緒にご飯でもいかがですか？」

ペドロがそう言うとインデックスは目を輝かせていたその横ではゲツとした顔の神楽がいた

神楽

「ダメね、今に新八がきてるアルね、早く帰るアル！！」

インデックス

「今日あのメガネの人来ないよ」

神楽

「なんでアルか！？」

インデックス

「昨日、とうまとしゃべってたよ、だから、一緒にぐちそうになる  
うよ」

神楽

「え、でー」

神楽がいいわけをしようとした時にペドロが神楽の顔を見た

ペドロ

「神楽さんも一緒にどうですか？」

と赤い目を光らせて神楽に言った

神楽はわなわな震えて自分だけでも逃げようと定春を見ると全速力で逃げていた、神楽はそれに啞然とした後、インデックスに服を掴まれ引きづられながら神楽は叫んだ

神楽

「定春ううううううー！！」

「万事屋」

銀時、上条、御坂は三人でテレビを見ていた、（その一時間前に飛び込んで来た定春にびっくりするも）

ガラガラガララー！！

銀時はその音を聞き玄関に向かった

銀時

「おーい、おせーぞ、か……………ぐ……………」

銀時は何かを言おうとしたが目の前の人物を見て喋るのをやめた

そこには真っ白になった神楽がにこにこしたインデックスと一緒に帰ってきたからだ

銀時

「……………神楽、お前どー」

神楽

「聞かないで銀ちゃん……………」

神楽はそう言いながら自分の寝室に入ってしまった、インデックスは



上条と御坂にペドロのことについて喋っていた

銀時はそれを聞いた後、顔を青くしながら神楽の寝室を見ていた

ペドロ（後書き）

次回は食事で銀時たちが争います

## 宴会（前書き）

この前と同じで前書きは本文の最初に書きました

## 宴会

打ち止め

「今回は評価してくれる人がたくさんいたので紹介するってミサカはミサカは言ってみたり！」

一方通行

「はあく、つかれンぞ、まじで…」

打ち止め

「何か前回の第二十八幻想でヘドロをペドロってまちがってるって  
いう評価がたくさんあったってバカ丸出しの作者に言ってみる！」

一方通行

「おい、あんま調子のとってると作者にやられンぞ」

打ち止め

「大丈夫だって、だってこの前書きにはミサカと一方通行しかでないんだよってミサカはミサカは心配してくれる一方通行に頬を染めながらいって、ぶっ！？な、なんで前から水がぶっ！！ってミサカはミサカは！！」

一方通行

「ほら、見る、だから言ってるだろうが、まったく…」

今、銀時たちは豪華な料亭に来ていた

銀時

「ほんじゃあ、たらふく食っとけよ、てめーら！」

銀時がそう言つと神楽、上条、インデックス、定春は喜び沢山、料理を頼んだ

なぜ、こんなに豪華な料亭に行けたかというつと、銀時がはめられた  
とはいえ、高額な報酬を手にいれたからである

上条

「こんなに頼んだいいのかよ……」

上条は横でやまほど注文するインデックスを見た

銀時

「心配すんな、金ならやまほどあるからな」

銀時はそう言いゲラゲラと笑っていた

とそこに

お妙

「あら、銀さんじゃないですか？」

その声に銀時は振り返るとそこには新八とお妙と柳生九兵衛がいた

新八

「銀さん!？」

銀時

「おめーら、なんでここにー」

お妙

「九ちゃんが誘ってくれたのよ?ねっ、九ちゃん」

お妙にそう言われ頬を赤める九兵衛をよそに上条がお妙に聞いた

上条

「あれ、あいつらは?」

お妙

「あの二人なら、お留守番してもらったわ」

上条はふぐんといった感じで食べはじめた

かくして新八たちも加わり食事をする事となった

お妙

「それにしても、やっぱり大勢はいいわね、はい、銀さん」

お妙はそう言って銀時にお酒を注いだ

近藤

「たしかにそうですな、お妙さん！」

近藤の声に全員がいるはずもない近藤を見た

お妙

「何となくと横に座ってんだ！！ゴリラ！！」

お妙は近藤の顔面に拳を叩きつけた

銀時

「おい、ゴリラ、てめえが」

銀時が近藤に聞こうとした時

総悟

「あれ、旦那じゃないですか？」

その声に銀時が振り返るとそこには総悟と土方が立っていた

土方

「なっ!？」

銀時

「どついうことだ、こりゃあ?」

総悟

「実は今日、俺だけハブられたんで近藤さんが夕食をこちそうしてくれるって言うんできたんでさア」

それを聞いた銀時はたしかに総悟がいないことを思い出した



かくしてまたギャラリーが増えてしまった

近藤

「いや、奇遇ですねー、お妙さん？」

お妙

「ほんとに奇遇ですねえ、あまりに奇遇過ぎてー」

お妙はそう言つと食べ終わった皿を近藤に投げつけ、見事に命中した

お妙

「皿を投げたくなるわ」

それを見ていた上条はいや、どういう意味ですか、それ！と心の中で言った

銀時と土方はなにやら言い合っていた

そして銀時が土方から視線を外しお酒を飲もうとした

銀時

「あれ？俺の酒がねえー？」

上条は銀時が自分がさっき酒を入れたコップを探しているのを見ていると

御坂

「ケップ…」

上条はその声に気づき振り向くと御坂が顔を赤くしてふらふらとしていた

上条

「お、おい、御坂………」

御坂

「……………」

上条が声をかけるが御坂は無言のまま、上条に近づいた

ドタッ!!

その音に銀時たちは喋るのをやめその音の方向に目を向けた

そこには御坂に馬乗りになされた上条がいた

上条

「あ……あの、御坂さん……」

御坂

「アンタ……」

上条

「へ？……」

上条はその声に反応し、御坂を見た、そして御坂の顔は赤く恥じらいがあるような顔だった

御坂

「いつも、いつも、ケガとかして、心配かけすぎなのよ！」

上条

「えっ……」

御坂はそう言つと顔を上条の顔に近づけた

そして上条は唇に柔らかな感触を感じた

御坂は唇を離すと笑みを浮かべそのまま上条に倒れかかるようにして寝てしまった

そしてハッピーエンドに終わるはずもなく

インデックス

「とつまあああああああ！……！」

上条

「ま、待て！？これはって噛みつくのは！？俺が何したっ、ぎゃあ  
あああああああああああああああ！……！」

近藤

「お妙さん！！俺たちもー」

お妙

「死ね！！ゴリラあああああああ！……！」

近藤

「ぐはあ！……！」

土方

「近藤さん……！」

神楽

「てめえ、よくも私のエビ様にわさびなんてのせやがったアルな！

！」

総悟

「見とれてるのがわりいでイ」

新八

「ちよつと、神楽ちゃん、落ち着いてー」

神楽

「うるさいネ……メガネ……！」

新八

「ぐはあ……！」

九兵衛

「新八くん……あつ……サンドイッチが……！」

そしてみんなが暴れまわる中

銀時

「おい……！……てめーら、頼むから暴れるなああああああああ……！」

その後、銀時は破損した料亭の直すための金を払うはめとなり60

万は跡形もなく消えた

宴会（後書き）

感想まっています

万事屋の危機（前書き）

今回は短くてへたくさも…



## 万事屋の危機

打ち止め

「つまんないってミサカはミサカはため息をつきながらいってみる  
…」

一方通行

「たしかそうだな…」

打ち止め

「あれ？なんだろう？この紙ってミサカはミサカは上から落ちてきた  
紙を拾ってみる」

一方通行

「なんだあ、それ？」

打ち止め

「えーと、感想と一緒にこんなキャラを出してほしいっていうのを  
まっってます、B Y作者ってミサカはミサカは紙に書かれているのを  
読んでみたり」

一方通行

「つまり、俺らに募集をしろってんのか、自分でやれよ？」

打ち止め

「まあ、まあ、暇だったしってミサカはミサカはあなたの白髪をさ

わりながらいつてみる」

一方通行

「……それ以上すと、ぶっ殺すぞ」

### 第三十幻想 万事屋の危機

銀時たちは酔いつぶれた御坂を背負い万事屋に帰ってきた

銀時

「はあ……」

神楽

「ごめんネ、銀ちゃん」

神楽は落ち込む銀時に声をかけていた

上条は御坂を背負いソファーに寝かした

インデックス

「……………」

インデックスは何も言わず神楽の寝室に入ってしまった

上条

「インデックスの奴、あんなに怒んなくてもー」

銀時

「やっぱダメだなこいつ…」

神楽

「そうアルな……」

上条

「ダメって何だよ！！ダメって！！」

三人で喋っていると

御坂

「うるさいわね…」

銀時たちはその声を聞き御坂を見た、御坂はまだ少し酔っているのか顔が赤く染まっていた

御坂

「イタタ……なんで頭がいたいなのよ……」

御坂はそう言いながら頭を押さえた、銀時と神楽が御坂を見るなか上条は御坂に顔を合わさない

御坂

「ちょっと、アンタなんでこっち向かないのよ……！」

御坂はいち早く気づき上条に言った

上条

「いや……それは……」

上条が言葉をつまらせるなか

神楽

「覚えてないアルか？」

空気を読めない神楽が言った

御坂

「何がよ……イタタツ……」

神楽

「こいつにキツぶう……」

神楽が言おうとした銀時が神楽の頭を叩いた

神楽

「何するネ！銀ちゃん……」

銀時

「お前はバカだろ、空気よめ！」

銀時が神楽にそう言いセーフと思ったがしかし

御坂は何かに気がついたのか自分の唇をさわり上条を見た

そして御坂は思い出したのか顔が真っ赤に染まった

バチバチバチバチバチバチッ！！

銀時・神楽・上条

「へ？」

銀時たちは音のする方向に目を向けると御坂の頭から電気が激しく放たれていた

銀時

「…なにアレ、なんか嫌な予感がするんですけど」

銀時の予感があたり御坂の頭に溜まっていた電気の一部がテレビに直撃した

テレビは一瞬にして壊れた

銀時

「テレビiiiiiiiiiii!」

銀時が叫ぶ中、上条はすぐさま御坂に走っていった

神楽

「あぶないアル!!!戻ってくるネ!!!」

神楽が言つが上条はただ真っ直ぐ右手を御坂の頭に向けて走った

ピタッ

そして上条の右手が御坂の頭にのせられると同時に御坂の頭に溜まっていた電気はおさまった

上条

「ふう〜、あぶなかった…」

その後、銀時は上条にまた第二があるかもしれないからと今日は一緒に寝るように進めた、インデックスはあの騒ぎにも起きず、すやすやと寝ていた

銀時はダメになったテレビをゴミ捨て場に持っていき一人、落ち込んでいた

万事屋の危機（後書き）

次回は源外をだします



## バイト

打ち止め

「この前の募集、全然こないってミサカはミサカはいつてみたり」

一方通行

「失敗ってことじゃねの…」

打ち止め

「そうだねってミサカはミサカは何故か眠そうなあなたに聞いてみる」

一方通行

「ふあゝ、後はたのんだぞ、クソガキ…」

打ち止め

「無責任すぎるってミサカはミィ」

一方通行

「ぐうゝゝ……」

打ち止め

「寝るの早ってミサカはミサカは一人で喋ってみたり」

上条

「……………」

上条は今、カラクリがたくさんある所にいた

そして、上条は今、手に何かの部品を持っている

上条

「なんで俺がやらなきゃあならねんだよ、だい、があ!？」

上条が愚痴っていると上条の頭にカナツチが直撃した、そしてカナツチが来た方向に平賀源外が立っていた

源外

「喋ってる暇があるなら働きな、ガキ」

そう言い源外はまた何かのカラクリの元に歩いて行った

上条

「不幸だあ……………」

上条は倒れながらそう呟いた

そして、何故このような状態になったかというと、それは朝の銀時の一言から始まった

「朝・万事屋」

上条は朝の光に目を覚ました

上条

「ふあゝ……………」

上条が体を伸ばす中、ふと横を見た、そこには御坂がすやすやと寝ていた

上条は昨日の出来事を思い出してふっと笑い御坂の頭に手をのせた…

銀時

「お前もですか、コノヤロー？」

銀時の声に驚きすぐさま振り返った

上条

「ぎぎ…銀さん!!」

銀時

「上条…女はともかく男が寝込みを襲うのはやべえーだろ？」

上条

「いや!!今のはそういう意味じゃなく、だから」

上条が必死に誤解をとこうとしていると後ろから殺気を感じ上条は振り返った

インデックス

「と~~~~ま~~~~」

上条

「いつインデックス!!」

インデックス

「があああああ!!」

上条

「いきなりで、ぎぎあああああ!!」

その後、上条の声に御坂は目を覚ました、しかし酔っていたせいなのか昨日の事はほぼ忘れており何故かテレビを壊した事だけは覚えていた

そして今、銀時たちは朝食を食べている最中であつた

上条

「あゝ痛つて………」

インデックス

「とうまが悪いんだよ」

上条

「だから誤解だつて言つてんだろ」

御坂

「？」

上条たちが言い合っているなか神楽が喋りだした

神楽

「そつだ、銀ちゃん！今日はみんながかぶき町を案内するネ」

インデックス

「いいかも、とうまにヘドロさんとかも紹介したいし」

インデックスがそう言つと神楽は固まつてしまった

銀時

「ああ、そうだな、じゃあ新八がきたら行くか？」

銀時がそう言うとインデックスは喜び、神楽はさっきまでの元気が  
少しなくなっていた

すると銀時が上条と御坂に言った

銀時

「あ、おめーらには今日は働いてもらっぞ」

上条・御坂

「は？」

銀時

「だから、おめーらが壊したテレビを買う金を働いて返して貰っ  
ていってんだよ」

銀時がそう言うと御坂は体を乗り上げた

御坂

「なんでー」

銀時

「昨日、テレビ壊した奴がなんではねえーだろ？」

御坂

「うっ！?.....」

上条

「あの.....なんで俺が.....」

銀時  
「連帯責任だ」

銀時の言葉を聞くと上条はガツクリと頭を下げた

そして、銀時に紹介された所で今日、一日バイトすることとなった

そして今に至る

上条

「ここに置いたらいいのか？」

源外

「ああ、そこに置いたら次はアレだ」

上条

「ああ」

上条はいやいやとはいえ、以外にせつせと働いた

「夕方・万事屋」

上条は源外から料金をもらい帰ってきた

上条

「ただいまあゝ」

上条が帰ってくると銀時はジャンプを読んでいる神楽とインデック  
スは定春と遊んでいた

上条

「銀さん、はい料金」

銀時

「お？結構あるじゃねーか」

銀時はそう言っていると椅子から立った

銀時

「よし、おめーら、行くぞ」

上条

「行くなって何処に行くんですか？」

上条がそう言っていると銀時はニヤニヤしながら言った

銀時

「まあ、いいからついてきな」



そして銀時たちが万事屋からでてたどり着いたのはすまいると書かれたスナックだった

「すまいる」

上条はさすがに、未成年にはダメじゃねーのかと思いつつも銀時につれられ中に入った

すると男性が銀時に話しかけた

男性

「今日は誰を氏名しますか？」

銀時

「新人、頼むは」

銀時はそう言うと男性につれられ銀時たちは席に腰をおとした

上条

「銀さん、なんでここにー」

銀時

「まあ、もうすぐしたらわかるから待ってな」

上条が？になっていると前から女の声でした

御坂

「御坂です……」

その声を聞き上条は前を見るとそこには着物を着た御坂が青筋を浮かべ立っていた

## バイト（後書き）

次回スナックでの騒動を書きます

## 笑顔（前書き）

前回、騒動と書きましたが、スナックの後に騒動を書こうと思いましたが、短いです、ごめんなさい

笑顔

打ち止め

「……………」

一方通行

「おい…いつまですねてんだよ」

打ち止め

「…………別にすねてないもんでミサカはミサカはいつってみる」

一方通行

「はあ………わかった、俺が作者にたのんで本文の奴らを前書きに出して貰うように言ってやるから機嫌なおせよ」

打ち止め

「第三十二幻想の始まりってミサカはミサカはいつってみる!!」

一方通行

「なっ、このガキ………ぶっ殺す!!」

第三十二幻想 笑顔

上条

「御坂…何しー」

御坂

「うるさい…」

上条は御坂の言葉から発せられる迫力に黙ってしまった

銀時

「おっ、似合ってんじゃねーか」

銀時が笑いながら言うのにたいし御坂は頭で我慢、我慢と言い聞かせていた

すると、御坂の隣に一人の女性が来た

お妙

「もう銀さんたら、からかって」

それは新人の姉のお妙だった

上条

「あれ、確か新人さんのー」

銀時

「ああ……そういえばいつてなかったな、こいつも働いてんだよ」

上条はへえーといいながらお妙を見た、お妙は神楽とインデックスと喋っていた、上条はそれを見ていた時

御坂

「でっ！注文は！」

御坂が銀時に聞いてきた、上条は銀時の横に座っているので御坂の迫力にかかるくびびっていた

銀時

「焼酎水割り」

しかし銀時はそれにびびらず答えた、御坂はそれを近くにいた男性にいった

〓 10分後〓

御坂、上条、銀時、神楽、インデックス、お妙の順に座っていた

御坂

「で？何しにきたの、茶化しにきたわけ？」

銀時

「うなわけねえーだろ、迎えに来てやったんだよ」

銀時の言葉に御坂はえっ?となった

銀時

「上条が結構貰ってきたからな」

御坂

「そ……………そう……………」

銀時

「上条に感謝しとけよ」

銀時の言葉を聞き御坂は上条を見た、上条は御坂をじ〜と見ていた

御坂

「何よ、さっきからじろじろ見て……………」

上条

「いや、結構似合ってたな〜って思ってな」

上条がそう言つと御坂は赤くなり上条とは反対方向に顔を向けた

御坂

「な……………何いってんのよ、バカ!」

上条はバカってなんだよと言っていたが御坂何も言わずただ真つ赤になりながらも、その顔は笑顔で埋め尽くされていた



そして、インデックスが寂しいそんな目で上条を見ているのを銀時はひそかに見ていた

笑顔（後書き）

次回は上条とインデックスでいきます

## 旅行

打ち止め

「誰来るのかなってミサカはミサカはあなたを見ながらいつてみる  
！」

一方通行

「知らねえよ、うん？来たな」

銀時

「こんにちはー！」

御坂

「来た来たってミサカはミサカはいつてみる！」

銀時

「作者に來いって言われたんだけど、なに、何すんの？」

御坂

「それじゃあゲストに質問ってミサカはミサカはいつてみる！」

銀時

「なにこのはしゃぎよう……」

御坂

「あなたの髪って何で真っ白なのってミサカはミサカはいつてみる  
！」

銀時

「知らねえよ、空知に聞いてこい」

御坂

「今日のゲストは坂田銀時でしたってミサカはミサカはいつてみる」

銀時

「はやっ！なに、さっき適当に答えたから怒ってんの!？」

一方通行

「……………はあく、うるせえンだよ、あ？なんだこれ、えーと、前回、新人を新人と間違えていました、すいません by 作者……………、ドジった…つい言っちゃまったクソ、作者のヤロー、ぶっ殺す!！」

銀時

「……………なに怒ってんだ、アイツ？」

ミサカ

「さあ？ってミサカはミサカはいつてみる」

### 第三十三幻想 旅行

銀時たちが昨日、御坂を連れて万事屋に帰ってから次の日

銀時

「おめーら、今日から三日間、旅行するから準備しとけよ」

上条・御坂

「……………はい？」

銀時が朝食の最中にいきなり言いだした

神楽

「ほんとアルか、銀ちゃん!!」

銀時

「ああ、だから準備しとけ、神楽」

神楽

「きゃほー!!インデックスも準備するネ!!」

神楽は喜びインデックスに言った、しかしインデックスはなぜかいつもより元気がなかった

インデックス

「う、うんそうだね、準備しよ」

そう言っつて神楽と一緒に行くのを銀時は一人静かに見ていた

上条と御坂は以前固まった状態だった

そして、時間がたち銀時たちは今、電車の中

「電車内」

今回、旅行に行けたのは銀時、神楽、新八、上条、御坂、インデックス、定春の動物を入れた七人だった

新八

「銀さん、旅行って何処に行くんですか？」

銀時

「武州の旅館だよ」

新八

「武州って結構、田舎でしたよね、銀さん？」

銀時

「ああ、まあな……」

銀時と新八がそう話しているころ、神楽と御坂は定春を触っていた、上条はと言う、上条は寝ており、インデックスは黙ったままちらりちらりと上条の顔を見ていた

銀時はそれを横目で見た後ため息をついた

そんなこんなで銀時たちは武州に向かうのであった

## 旅行（後書き）

ネタが危ういので何かアイディアをください



到着（前書き）

御坂の喋り方がちょっと忘れかけています

## 到着

銀時

「ちよこつと、銀八先生」

打ち止め

「ちよつと待て！？つてミサカはミサカはいつてみる！！」

銀時

「ああ？なに、何なの？」

打ち止め

「何であなたが前書きやろうとしてるのってミサカはミサカは危機感を感じながらもいつてみたり！！！」

銀時

「いやーな、なんか作者が今度から銀八でいつてみよつって言われ」

打ち止め

「ヒクッ……………ウ……………ヒグッ……………」

銀時

「おい！！なに泣いてんだよ！！何か銀さんが悪い事したみたいじゃーねえか！！！」

打ち止め

「だつて……………ヒクッ……………」

銀時

「わかったアア！！銀さんが作者、説得するから！！おい作者！！ヘルスウウ！！ヘルスウウミイイ！！！」

一方通行

「ヘルスじゃなくてヘルプな……」

### 第三十四幻想 到着

銀時たちは今、武州の松良旅館の前についた

上条

「でーけえー……」

新八

「ぎ、銀さん……ホントに大丈夫何ですか……すごい高そうな旅館なんですけど……」

銀時

「心配いらねえよ、金なら上条たちが稼いだのがあるからな」

銀時がそう話していると旅館から一人の女性が出てきた

真下

「よくきてくれました、旅館の女将をつとめている真下 桜です」

銀時

「あ、どーも」

真下

「それでは部屋に案内しますのでどうぞお入りください」

銀時たちはそう言われ旅館内に足を進めた

「寝室」

銀時たちは女将に連れて寝室についた

真下

「お部屋はこの3つの部屋をお使ください」

銀時

「3つって頼んだのって一室じゃなかったか？」

真下

「いえいえ、サービスですよ、この頃は誰も来ないものですから」

新八

「女将さん……………」

銀時

「じゃあ、お言葉に答えて使わせてもらいますが、ぼったくりとかはねえーよな？」

銀時がそう言うと女将は、はいと答えて行ってしまった

銀時と新八はそれを見た後、部屋に入ると上条はまた寝ていてイン

デックスは今だ元気がなく御坂と神楽は今だ定春を触っていた

銀時

「はい、注目!！」

銀時がパンと手でならし上条たちに言った、上条たちはそれを聞き銀時を見た

銀時

「おめーら、喜べ、女将の気遣いでこの両隣の部屋を使わせてもらえるようになった」

神楽

「マジでか!」

御坂

「へえー」

上条

「お金とか大丈夫なんかよ…」

銀時

「上条、銀さんがせっかくおめーらを楽しませてやるうと思ってんのに悲しい事、言っなよ」

上条

「いや、その金って俺たちが稼いだ金じー」

銀時

「おーし、てめーら、話を戻すぞー」

上条が逃げたと思っているのをよそに銀時が話を進めた

銀時

「せっかく部屋を貸してくれんだ、男女別れて寝るっーのは面倒だから」

銀時はそう言うところから一枚の紙を取り出した

銀時

「あみだクジできめるから、あと、抗議は却下だ」

銀時がそう言うと新八たちは、えっ！！と言う顔をした

しかし、そういう顔をしながらも神楽、銀時、上条、後、元気のな  
いインデックス以外の新八と御坂だけはなにやら必死に頑張っていた

そして結果は……

銀時

「えーと、まず一つ目の部屋には御坂と神楽な、次に新八と上条プ  
ラス定春な、後、お前は俺と一緒にできまりだな」

銀時がそう言う中、御坂は神楽と一緒にアルなと言われていた、新八は畳に手をつき落ち込んでいた、上条はそれを見ながら定春の頭を撫でていた

インデックスはというといまだに元気がなかった

御坂

「それにしても危なくない、アイツと二人つきりにして？」

神楽

「そうアルな……」

銀時

「おーい、聞こえてんぞー、後、銀さんガキに興味ないから」

まあ、そんなこんなで銀時たちの旅館生活は始まった

到着（後書き）

感想待ってまーす



## 入浴（前書き）

感想待ってますって前書きでいってすいません…

## 入浴

銀時

「今日から出るようになった銀時でーす」

打ち止め

「ミサカでーすってミサカはミサカはいつてみたり」

一方通行

「ちよつと待てエエエ!」

銀時

「ああ?なに、どうしたの?」

一方通行

「オマエなんでここ来てんだよ!この前」

銀時

「ああーそれが、いや、実はさあ、作者に言いにいった時に作者がこれにも出てくださって言うてきてさ、それで出たわけ」

一方通行

「作者のヤロー……………」

銀時

「そついやー、作者のやつビクビクしてたな」

一方通行  
「は？」

銀時

「後、御坂に似た奴と行き違いになってよー」

一方通行

「……………おい、クソガキ……………」

打ち止め

「な、なにしてミサカはミサカい、いつてみたり……………」

一方通行

「まさかあいつら使って脅したとかねえよな……………？」

打ち止め

「そ、そんなことしてないよってミサカはミサカは涙を浮かべながらいつてみる……………」

一方通行

「ほんと……………あ？なんだこのしゃ……………し……………おい、クソガキ？……………」

打ち止め

「な、なにして……………ミサカは……………」

一方通行

「これなんだかわかるか？……………」

打ち止め

「えっ……………！？な、なんで作者を脅した時の写真がってミサカはミ……………」

サカは逃げながらいつてみる！」

銀時

「ちょっと……待ちな」

打ち止め

「うっ……ってミサカはミサカは……」

一方通行

「覚悟はできてンだろうな……」

銀時

「さあ、いろいろ聞かしてもらおうか……」

打ち止め

「助けてってミサカはミサカは挟み撃ちをあいながらいつてみ……  
……ごめんなさい……!!」

### 第三十五幻想 入浴

銀時たちは部屋わりを決めたあと、風呂場に来ていた

「男湯」

銀時

「はぁー……」

新八

「気持ちいいですね、銀さん？」

銀時

「そつだな……」

銀時たちがお湯にくつろいでいると男湯の入り口から上条が出てきた

上条

「ひろいな……」

上条がそういって銀時たちの所に行くところとした時

ツルツ

上条は下に落ちていたせつけんに足を乗せてしまいこけた

上条

「いってー……」

銀時

「大丈夫かー？上条？」

銀時は上条にそう言った

「女湯」

女湯では神楽とインデックス、御坂が浸かっていた

神楽

「いい湯アルな……」

御坂

「そうね……」

神楽と御坂がそう言う中インデックスは一人口まで浸かりブクブク  
いつていた、すると男湯から銀時たちの声が聞こえてきた

銀時「大丈夫かー？上条？」

上条「な、なんとか……」

新八「ついてないですね、上条さん」

上条「もうなれてるから」

銀時「……」

新八「どーしたんですか？銀さん？」

銀時「いや、上条の○○○ちいせーなと思ってな……」

上条「なっ！？なにいつてんだよ！！」

新八「そうですよ！！銀さん、第一向こうに神楽ちゃんたちがいる  
のにー」

銀時「黙れ、童貞」

新八「なんだとー！！アンタに童貞とか言われたくねえんだよ！！」

その会話は女湯にまでも響きわたっていた、神楽は呆れたような顔をしており、御坂は顔を真っ赤にさせて湯に顔をつからしていた、インデックスにたいしては男どもの会話とのぼせたのがあわさったのか湯に浮かんでいた

神楽

「あいつら、ちょっと黙らせるアル」

神楽はそう言うのと湯を入れる入れ物に蛇口から出した水を入れた

神楽

「ほあああちゃああ!!」

神楽はそう言うのと男湯の上空に向かって入れ物をほうり投げた

銀時『痛っ!!』

新八『銀さん!!』

上条『なんだよ、うん?』

バシヤアア!!

神楽たちはその音を確認するとインデックスを背負い風呂場から出た

「男湯」

銀時

新八

銀時たちが呆然とする中、上条は一人不幸だぁーと叫んでいた



入浴（後書き）

次回は夕食から始まります

## 過去

銀時

「銀時でーす」

打ち止め

「ミサカでーすってミサカはミサカはいつてみる」

一方通行

「結局オマエ出るんだな…」

銀時

「うるせえーよ、銀さんだって仕方なくきてんだよ」

打ち止め

「まあまあ、気にするなってミサカはミサカは大人げないあなた達にいつてみる」

銀時・一方通行

「うるせえーよ…!!」

## 第三十六幻想 過去

銀時たち風呂からを出た後浴衣を来て、室内でのんびりしていた

銀時

「はあ……」

銀時は一人テレビを見てるなか新八はお茶を飲んでいて、神楽と御坂は旅館の中を見回っていた、ただ上条だけは何かを探しているようだった

上条

「銀さん？」

銀時

「ああ？どーした？」

上条

「インデックス知りませんか？」

銀時

「ああ、アイツなら部屋で寝てるぞ」

上条はそれを聞くとそうですかと言って銀時の横に座りテレビを見ることがした

「夕食」

女将が食事を持ってくる頃にはインデックスも目を覚ましていた

そしておぜんじに華やかな料理が乗せられた

銀時

「お、うめえじゃねえか！」

上条

「うめえー！！」

新八

「上条さん大きさですよ」

銀時たちがそう言う中、神楽たちはインデックスに気を使っていた

神楽

「大丈夫アルか？」

インデックス

「うん……………」

御坂

「ちよつと大丈夫なの？アンタ？」

上条

「インデックス、大丈夫か？」

上条がそう言うのとインデックスは無理して笑った

インデックス

「大丈夫だよ……………」

上条がそれを見ていると銀時が立ち上がった

銀時

「しゃーねえなー……」

銀時はそう言うのとインデックスを両手で持ち上げた

インデックス

「だ…大丈夫…」

銀時

「大丈夫じゃーねえだろ、しっかり寝てる、女将に言って飯は部屋に置いといてもらうから」

銀時はそう言っつてインデックスを部屋に寝かせにいった、上条はそれを心配そうに見ていた

その後、食事が終わった後銀時たちは自分の寝室で寝ることにした

〓 深夜 〓

インデックスは夢を見ていた

雨が降る路地裏にインデックスは体育座りで座っていた

インデックス

「……………」

インデックスは立ち上がり街中を歩く

インデックス（「コソド」……………誰かー）

インデックスがそれを言おうとした時、インデックスは目を覚ました

そして目の前には銀時が心配そうに見ていた

銀時

「大丈夫か？」

インデックス

「ハア、ハア、うん…大丈夫…」

銀時

「……………」

銀時はそう言うインデックスの頭に手をのせた

銀時

「どんな夢みたんだ？」

インデックス

「えっ…………それは……………」

銀時

「まあ話したくねえーならいいけどな」

銀時がそう言うて手を離そうとした時インデックスがその手を掴んだ

銀時

「……………」

インデックス

「あのね……………私が一人雨の中にいたの……………」

インデックスはそう話しはじめながら泣きは始めた

インデックス

「……………それで…ッ……………場所もわからなくて…グズッ……………誰も……………」

インデックスがそう喋る中、銀時はインデックスの頭にもう一度手をのせた

銀時

「心配しなくても誰もお前を一人になんかささせねえよ……」  
インデックス

「う……グズツ……」

銀時

「最近、落ち込んでたのも、一人になるかもしれねえって思ったんだろ……」

インデックス

「……………」

銀時

「上条はお前を一人にはさせねえよ……」

銀時はそう言いながらインデックスの頭をなげた、インデックスは泣くのを止め静かに眠った

銀時はインデックスが眠ったのを見ながら自分の過去を思い出していた

雨が降り

数々の死体が倒れる中



たった一人

曇天の空を見上げる自分

銀時は一人過去を思い出しながら静かな寝息をたてるインデックスをもう一度見た

銀時

「お前も色々、苦労してんだな……」

そう言うと銀時は立ち上がり窓に近寄り、夜空に浮かぶ星見上げていた



過去（後書き）

グダグダだったらすいません、一応、しんみりした部分を書きま  
したがどうでしたか？感想待ってまーす

銀時の不幸3（前書き）

ちよつとグダグダです



打ち止め

「えー！！ってミサカはミサカはパニックになりながらいつてみる！！」

銀時

「あいたたたたつー！！……頭が痛いから騒ぐなっていつてんだろクソガキ！！」

一方通行

「……………バカが二人そろっちまったな……」

### 第三十七幻想 銀時の不幸3

上条は小鳥の声に目を覚ました。本当なら昨日、インデックスの様子を見に行くつもりだったのだが、定春の下敷きにあい動けないまま眠ってしまった

上条はそんなことを思い出しながら銀時とインデックスが寝る部屋の前に来た。上条は何故か緊張した感じでふすまを開けた。

上条

「銀さん、インデックスはどう……で……」

上条は銀時にインデックスの様子を聞こうとしてふすまを開けたがある光景に固まってしまった。

新八

「あっ、上条さんおはようございます！」

そうこうしていると、新八が銀時達を起こそうとして上条の前までやって来た。しかし上条の状態に疑問を持った新八が上条に近づいた。(すでに神楽と御坂は起こされて新八の後ろについて来ている)

新八

「どうしたんですか？上条さん……」

神楽

「どうしたアルか？しんぱ……」

御坂

「何、どうしたの……」

三人は上条に近づいて上条の視線の先に目を向けると、上条と同じく三人とも固まってしまった。

そこには大の字で寝る銀時と甘えるようにして銀時に抱きついているインデックスがやすやすと寝ていた。そして新八達の声に銀時は目を覚ました。

銀時

「うるせーよ、おめえら、商店街で喋るおばさん連中で……ん？……」





御坂

「だから昨日言ったじゃない、危ないんじゃないって！」

上条

「インデックス、大丈夫か？何かされてないよな？」

と好き勝手に言う上条たちに銀時は軽く青筋をたてていた。インデックスは何が何やらわからずにいた

銀時

「おめーら、好き勝手にネチネチネチ言いやがって京都の女ですか、後…」

銀時は新八達を見ながら言った。

銀時

「何、この距離？」

新八

「銀さんが神楽ちゃん達を襲わないように離れてるんですよ」

銀時

「おめーら、いい加減にしろよ…いつとくがな、銀さんがキには興味ねえから、マジで」

神楽

「信じられないネ」

神楽がそう言うのとインデックス以外は全員頷いた。すると上条の言葉が無視してインデックスは銀時に近づいた。

上条

「あつ、おいインデックス!…」

銀時

「ああ、どーした?」

銀時はインデックスにそう聞くと、インデックスはにっこり笑って言った

インデックス

「昨日はありがとうね、銀時!」

そしてその瞬間、場は凍りついた。

新八

「銀さん……………どういうことですか？」

神楽

「きつちり説明するヨロシ」

銀時

「いや、待て待て待てー！！、違うから、おい、お前も何かいってやって、こいつらに、たのむー！」

インデックス

「あのね、銀時がね、私の頭とかなせてくれたんだよー！」

新八・神楽

「死ねエエエエエエエー！！」

銀時

「ぐはあ！！ちよ、違う…ぐほお！！」

上条

「……………俺も参加してくる…」

御坂

「私も……………」

銀時

「ちよ、待つ、うがああああああああああ！！！！！！」

その後、上条たちは銀時をしめた後。外で散歩をすることにした。銀時がボコボコにされ、倒れていたことはいうまでもない。

### 銀時の不幸3（後書き）

ちよつと書き方を変えて見ました

行方不明(前書き)

ちよつと長くてグダグダです

## 行方不明

銀時

「今回は、前に紹介出来なかった感想を紹介するから………  
おい、打ち止め」

打ち止め

「何ってミサカはミサカは聞いてみたり」

銀時

「なんで、俺から離れてんだ？」

打ち止め

「ちょっと危機感を感じてってミサカはミサカはロリコンな銀時に  
いってみる」

銀時

「だから誤解だっけって言うてんだろが！！後、作者！！てめエ、なに  
銀さんがロリコンですみたいな感じに書いてんだー！！殺すぞコラ  
ー！！」

打ち止め

「本当のことなのにつてミサカはミサカはいつてみたり」

一方通行

「はあく、アイツらに任せてたらキリねエぞ、俺がヤルしかねエか、  
クソツ……えーと、この前の感想に脱字や誤字が数々見らましたか

らそれを直せば印象も変わると思いますが、まあ確かに間違いが多いんだよな、うん？……………またかよ、上から紙とか落とすんなら、自分で言えよ、えー……………感想ありがとうございます、自分でも頑張つて直すように努力します……………何かこの頃こんなのはつかだな俺……………」

### 第三十八幻想 行方不明

上条は今、霧がかかった森の中にいる。

上条

「インデックス！どこだー！！」

上条は叫びながら森の中を走っていた。そしてなぜ上条がこんな状態になっているのかというとそれは数時間前にさかのぼる。

〓 一時間前〓

上条たちは道端を歩いていた。

インデックス

「それでね、銀時がいつも以上に優しくしてくれたんだよ」

神楽

「騙されたらだめアル！男はみんな獣ネ！！」

とってインデックスを説得する神楽をよそに新八は御坂と話していた

新八

「そういえば気になったんですけど、御坂さんって何かあだ名とかないんですか？」

バチッ！！

新八がそう言った瞬間。新八の横にあった木がまるで雷が落ちたように黒焦げになっていた。

新八

「ちょっと！！危ないじゃないですか！！」

御坂

「黙れ、クソめがね」

そう言う御坂に新八は何か後ろでごちゃごちゃ言っていた。そして上条はなぜか誰とも喋らず先々と進んでいた。

するとインデックスが歩くのをやめ立ち止まった。



神楽

「どうしたアルか？」

インデックス

「……………」

神楽はインデックスに問いかけるがインデックスは何も喋らずただ目の前にある森を見つめていた。

上条

「おい、インデックス？どうしたんだよ？」

上条も気になりインデックスに振り返って言うがインデックスはさつきと同じ状態で森を見つめていた。

するとさつきまで立ち止まっていたインデックスが森の中へ歩き出しました。

上条

「おい！！インデックス、どこ行くんだよ！！」

上条がインデックスに触れようとした時。

シュッ……

森の中に足を踏み入れると同時にインデックスはまるでテレポートのごとく上条が触れる前に消えてしまった。

その後、上条は新八たちの言葉を無視して一人、森の中に入っていた。

〓 一時間後・現在 〓

上条は汗だくで森の中を走りまわっていた。

上条

「はぁ、はぁ、インデックス……どこいったんだよ……はぁ、クソッ  
!」

上条はそう嘆きながらもインデックスを見つげるため走り出した。

その頃……

インデックスは一人、真つ暗な道を歩いていた。

インデックス

「ここどこなの……………」

インデックスはそう言い歩いていると突然、前から強風が吹きインデックスはあまりの風に目を閉じた。

そして風が止み目を開けるとさっきまでの真つ暗な空間ではなく、武州に似たような場所にインデックスは立ち止まっていた

そこに大の大人が数人倒れており一人の少年がおにぎりを食べながら倒れた大人の背中に座っていた。

その少年は白髪で服などには汚れが目立ち子供には似合わないような真剣を抱くようにして持っていた。

インデックスがそう観察しているとその少年はインデックスに気づき警戒した目でインデックスを見て言った。

銀時

「誰だ、お前？……」

## 行方不明（後書き）

中途半端で終わってスイマセン！出来るだけ今日でも更新しますの  
でぜひ宜しくお願いします！！後、感想もまっています

神隠し(前書き)

感想まっています

## 神隠し

銀時

「あのさー、今、思ったんだけど」

打ち止め

「何ってミサカはミサカはすねてる一方通行の髪の毛を触ってみたり」

一方通行

「すねてねエエエエエエエエエエ！」

銀時

「長くなエ？前書き」

打ち止め

「そうだねってミサカはミサカは一方通行の顔で遊びながらいってみぶにゅ！？ぎよめんってビザギヤは！！」

一方通行

「オマエいい加減にしるよ……」

銀時

「はあ……それじゃあ第三十九幻想、スタート！」

第三十九幻想 神隠し

上条とインデックスが行方不明になっている頃、新八たちは助けを呼ぶために旅館に帰っていた

そして新八たちは女将に事情を話した

新八

「〜ということなんです」

真下

「……………もしかしたらそれは神隠しかもしれませんわ」

神楽

「神隠し？神隠しって何アルか？」

御坂

「神隠しってというのは、人が消えた時に神が隠したんじゃないかっていう時に使う言葉よ」

新八

「そんなことがあるならなんで教えてくれなかったんですか!!」

真下

「…私も先代から聞いた話なので、それに今まで神隠しなんてなかったものですから…」

新八

「そんな…」

御坂

「話してても仕方がないわ、早く探しましょ！」

真下

「私も探します!!」

御坂



「いえ、あなたはここにいて、もしかしたらあのバカが帰ってくるかもしれないから」

神楽

「私、銀ちゃん呼んで来るね!」

真下

「あ!あの人ならさつき出ていきましたよ」

御坂

「……………、今は私たちだけで探しましょう」

そう言っつて御坂たちは旅館から飛び出した。

その頃、インデックスは一人の少年と向かい合っていた。

銀時

「誰だ、お前?……………」

インデックス

「え!?え……………い、インデックスって言うんだよ!……………」 銀時

「ふーん……………」

インデックス

「あ、あなたの名前は?」

銀時

「……………銀時……………」

インデックス

「えっ……………」

銀時

「……………坂田銀時だ」

銀時がそう言うとインデックスは頭で大人の銀時と今の銀時を思い浮かべ、共通点を確認した後、もう一度、銀時を見た

インデックス

「ええええええー！！！！！！」

銀時はその声に全身をビクツとさせた

銀時

「……………」

インデックス

「あり得ない！！だって、銀時はもっと大きかったでしょ！！」

銀時

「何言つて…！？」

銀時が言葉をつまらした時、後ろから声が聞こえインデックスは振り返った。そこにはさっきまで倒れていた男がインデックスの背後に立っていた

男

「死ねエエエエエエ！！」

男が素晴らしい手に持つ刀をインデックス目掛けて振り落とした。インデックスは驚き、目をつむった時。

ブシューー！

インデックスは何もこないのに疑問を持ち目を開けた。そこには白髪の少年が立っており、その足元にはさっきの男が血を流しながら倒れていた。

306

インデックス

「銀……時………」

インデックスが怯えながら銀時の名前を呼んだ時、強風が吹き荒れインデックスは目を閉じた、そしてインデックスが目を開けるとそこには真っ暗な空間だけが広がっていた

神隠し（後書き）

ちよつとグダグダでスイマセン！

## 幻想殺し再び（前書き）

すごくグダグダです。次回はしっかり書きたいです、多分これを読まないで次回の内容がさっぱりになるので読んでくれたらうれしいです

## 幻想殺し再び

銀時

「ぐう〜…………ぐう〜…………」

打ち止め

「ねえ〜、起きてよってミサカはミサカはかわいいこぶってみる」

銀時

「……………」

打ち止め

「ねえ、ねえってばあってミサカはミサカはー」

銀時

「うるせエエエエエエエエエエ！！」

## 第四十幻想 幻想殺し再び

インデックスが不思議な体験をしている中、上条は未だ霧がかかった道を走っていた。

上条

「クッソー！はあ…はあ…いつまで続くんだよ…はあ…」

上条はそう言い近くにあった木に右手を当てた。

バキン！！

上条はその音に顔を向けるとさっきまで触れていた木がガラスのよう  
うに割れていた。

上条

「なっ！？…幻想殺しが効いてるのか……」

上条はそれを見て確信し足元に目を向けた。そして右手を振り上げ、  
地面に向かって拳を振り落とした。

バキン！！バキン！！バキン！！

上条の拳が地面に触れたとたん辺り一面にヒビがはいった。そして上条が拳を地面から離す頃には幻想の風景は砕けちり、現実の風景へと変わっていた。

上条

「……………どうなってんだ？まさか魔術師…………、いや、今はそれどころじゃーねえか…………」

上条はそう言つと現実の道をただひたすら走つた。



その頃インデックスは真っ暗な道を未だに歩いていた。

インデックス

「……………」

インデックスは少し前にあった銀時について考えていた。そうして歩いていると一筋の光がインデックスの前に現れた。

インデックス

「……………もしかしたら出口かも……」

インデックスは光を見つめそう言うとその光に向かって走り出した。そしてインデックスは光の前にたどり着くと、インデックスはその光に触れた。すると光は周り一面に広がりあまりに眩しすぎて、インデックスが目を閉じた。

インデックス

「……………何、これ?……………」

インデックスは目を開けるとそこには数々の死体が荒野一面に倒れており、曇天の空からは冷たい雨が降っていた。インデックスはその死体が倒れている荒野の上に立っていた。

インデックスがその場面に遭遇している頃、上条は荒い息をしながら立ち止まっていた。そして上条の視線の先にはインデックスがただ真っ直ぐに歩いていた。

上条

「はぁ…はぁ……インデックス!!」

上条はそう言ってインデックスに近づこうとした時。

ボゴツ!!

上条は何か腹を叩きつけられた。

上条

「が……………ッ!」

上条は地面に転がった後、起き上がり、自分を叩きつけた物を見た。

そこには純白の龍が上条の前を立ちふせいでいた。

上条

「なっ!」

上条が戸惑うなか純白の龍は口を開いた。

龍

「我…この地を守護する者なり、早くこの地から立ち去れ…」

上条は龍が喋ることに驚いたが、すぐさま龍に向かって言い放った。

上条

「ふざけんじゃねえ！！インデックスを置いて帰れるかよ！！そこをどきやがれ！！」

上条がそう言い龍に向かって走り出すが、龍は上条の腹に尾を叩きつけ、上条を投げ飛ばした。

上条

「うっ……ッ……！」

そして上条はさっきと同じように地面に投げ飛ばされた。

上条がまた起き上がろうとした時、龍が喋りだした。

龍

「……諦めよ、そして去れ……」

上条

「はぁ……はぁ……」

龍

「この娘は危険だ……」

上条はその龍の言葉に起き上がる体を止めた。そしてインデックスの頭にある一〇万三〇〇〇冊の魔道書のことを思い出した。

龍

「我はこの地を守護する者、この地を危険にさらす者は排除しなくてはならない……」

上条

「……………」

龍

「それでもまだ諦めないようであれば、…貴様をー」

龍がそう言った時、上条は再び龍に向かって走り出した。しかしさつきと同じで上条は地面に投げ飛ばされた。

上条

「ぐっ！…ッ……………はぁ…はぁ…たしかに、てめえがこの地を守りたいって言う気持ちはわからなくもねえ……………けどなぁ……………はぁ……………そんな理由でインデックスを殺されてたまるかよー！…」

上条はそう言って立ち上がった。

龍

「……………何を言ってもダメなようだな……………この地を守る為、貴様を殺す……………」

上条

「はぁ……………上等だぁ……………はぁ……………反対に殺してやるよ……………」

上条はそう言う龍に向かって行った。

上条

「てめえのその歪んだ幻想を！」

## 幻想殺し再び（後書き）

読んでくれたかた、本当にありがとうございました！次回は上条に  
助っ人がきます



## 白髪の侍

一方通行

「ふあゝ、よく寝たな」

銀時

「ぐうゝ…ぐうゝ…」

一方通行

「ああ？あのガキどこ行きやがったんだ？」

打ち止め

「むー！！むー！！むー！！」

一方通行

「何巻かれてんだ、このクソガキ？…」

打ち止め

「むー！！ぶはあ！！ってミサカはミサカは銀時に縄でぐるぐる巻きにされて口にガムテープ貼られたって簡潔にのべてみる！！」

一方通行

「あつそ…」

打ち止め

「ふたりして酷いってミサカはミサカは涙目になりながら、ぶゆ！！」

一方通行

「うるせエから、一生つけてる」

打ち止め

「むー！ー！むー！ー！むー！ー！」

#### 第四十一幻想 白髪の侍

上条

「うおおおおおおおおお！ー！」

上条は叫びながら龍に向かって行った。龍は上条目掛けて長い尾を振った。そして尾はもの見事に上条に直撃した。

龍

「グアアアアアアアアアアア！ー！」

すると龍はあお向けに倒れた。そして上条に当てた尾にはまるでガラスにヒビが入ったように微かに割れていた。

上条

「やっぱりな……さっきの霧といい、てめえも異脳の力だったんだな」

龍

「キサマアアアアアア……」

龍は上条に怒りの目で睨み付けた。

上条

「うおおお!!」

上条がそう言ってもう一度龍に向かって行った。

シュッ!

上条はその音に足を止めた。そして自分の服の一部がまるでカッターナイフで切られたような切り傷が残っていた。

上条

「なっ!?!」

上条が驚いているとさっきまで倒れていた龍が宙に舞い上がった。

龍

「我が二度も同じ事をさせると思ったか…」

龍はそう言つと龍の周りから白い三日月の物体が現れた。

龍

「キサマなど跡形もなく切り刻んでやる！！！！」

その言葉とともに三日月は上条目掛けて放たれた。

上条が龍と戦っている頃、インデックスは死体が転がる荒野を歩いていた。

インデックス

「何なの……………」

インデックスは死体を見ないようにして前を歩いていた。するとちよつと先に行つた所に雨が降る空を見つめている男がいた。インデックスはやつと誰かを見つけたと思ひその男に近づいた。最初は笑いながらその男に話をしようとしたがその男の顔を見てインデックスの表情は驚きと恐怖に変わった。

その男は白い羽織を着た白髪の侍だった。

インデックス

「……………銀時」

インデックスが銀時と二度の再会を果たしている頃、上条は龍と交戦中だった。

しかし、上条の服はあちこち切り刻まれており、その中には肉を切られ血が服に染み付いていた。

上条

「はあ……はあ……………」

龍

「どうした、さっきまでの威勢はどうしたんだ？」

そう言う龍の言語は最初にくらべてかなり崩れていた。

クッン……あれをどっにかすれば……

上条

そう思う上条は龍の周りから現れる三日月を見ながら舌打ちをした。

そうこうしていると龍は上条に三日月を飛ばした。上条はその三日月を右手で殴り飛ばすがさすがに右手一本では全てに対象できなく、三日月は上条の服や肉を切り刻んだ。

上条

「ぐっ!?!」

そして三日月の一つが上条の足をかすめた。上条はその痛みで隙を見せてしまった。

龍はそれを見落とさず上条に三日月を放った。

上条（やられるー！）

上条はそう思うと目をつむってしまった。

バリン！！

上条はその音に目を開けた。そこには真っ二つになった三日月が地面に落ちていた。そしてその三日月の残骸のすぐそばには一人の男

が木刀を片手に持ち立っていた。

龍

「よくも…キサマ、一体………」

龍は自分の技を叩き落とされたことに怒りを表していた。

男は木刀を前に向けながら言った。

銀時

「宇宙一バカな侍だ、コノヤロー!!」



## 白髪の侍（後書き）

ちよつと文章がいまいちだと思つてます。後、また感想をまっ  
るのでよろしくお願いします。

## 強き魂（前書き）

やっと書けました。今回は長いので前書きは書きませんでした。

## 強き魂

### 第四十二幻想 強き魂

上条

「ぎ……銀さん……」

上条はそう言いながら何とか体勢を整えた。

銀時

「待たせたな、上条」

銀時は上条にそう言った後、上空に浮く龍を睨み付けた。

龍

「グルルウウウ……」

威嚇する龍を見た銀時は上条に振り向かずに行った。

銀時

「上条、ためエはさっさとインデックスを追いにいけ……」

上条

「なっ！？あぶねー」

銀時

「大丈夫だ、心配するな……」上条

「……………わかった。」

上条はそう言っていると龍を睨んだ。龍は周りから三日月を出し始めていた。

銀時

「いけエエエエエエエエエエ！！上条！！」

銀時がそう言っていると上条は全力で目の前の道を走った。

龍

「逃げられると思っているのかアアアア！！」

龍は上条目掛けて三日月を放った。

バリンー！

しかし三日月は真っ二つに割れ、そして真っ二つに割れた三日月のそばにはすでに銀時が立っていた。

銀時

「てめエの相手は俺だ！」

その頃、インデックスは雨にうたれる銀時と二度目の再会をはたしていた。

インデックス

「……………銀時」

インデックスがそう言うと空を眺めていた銀時がインデックスの方に振り向いた。銀時の白い羽織には返り血があちこちついていて、しかしインデックスはそれ以上に驚いたことがあった。

銀時

「……………」

それは銀時の表情が昔の自分に似ていたことだった。

バリン！！バリン！！バリン！！

そうした一方、銀時は龍が放つ三日月をことごとく叩き潰していた。

龍

「ぐっ……ふん、貴様らがどう足掻いてももう手遅れ……」

龍はそう言い銀時に三日月を放つ、銀時はその言葉に反応するも龍が放った三日月を叩き潰しす。

銀時

「てめエ、インデックスに何しやがった！」

龍

「……なーに、ただあの娘が気になっている事を見してやってるだけだ、洗脳してな！」

銀時

「じゃあ、あいつの意識がねえのは……」

龍

「そつだ、あの娘がこの森に近づいた時、我は娘の心を読んだ、そして娘の体に残った残留思念を洗脳とともに頭に流し込んだのだ！」

銀時

「残留思念……」

銀時がそう言うと龍は笑いながら言った。

龍

「貴様の思念をだ！坂田銀時……いや、白夜叉……！！！」

その頃、上条は足の痛みを耐えながらインデックスを探していた。

上条

「ちっ……はぁ……はぁ……おーい……！……どこだー！！インデックス  
！……！」

上条は走りながらそう言うと50メートルいった所に、見覚えのある白い服に着た女の子が歩いてきた。

上条

「見つけ……！？」

上条は安心の言葉を言おうとした時、インデックスの歩く先を見て言葉を止めた。なぜならそこには道が無く、崖になっていたからだ。

上条がインデックスを見つけた頃、インデックスは未だに驚きを隠



せなかった。

いつも優しくて下品で、でも頼りがいのある銀時の表情とは違い、今の銀時の表情は悲しみ以外何もないという表情だった。

インデックスがそう思い見ていると銀時が喋りだした。

銀時

「てめエは誰だ？」

そう言われたインデックスは以前、上条が記憶を無くし、再会した時に言われた記憶が脳裏に蘇った。インデックスはそれを思いだしながらも手を握りあの時の気持ちを我慢しながら銀時の問いに答えた。

インデックス

「…私は銀時の仲間だよ」

銀時

「仲間……………」

銀時はインデックスの言葉を聞きそう呟いた。

インデックス

「そっだよ、私はあなたのなかー」

ジャキッ

インデックスがそう言おうとした時、首筋にあたる感触にインデックスは固まった。

それは刀をインデックスの首筋に当てる銀時だった。

インデックス

「……………」

銀時

「俺は……………もう……………」

銀時はインデックスの耳元に顔を近づいて、最後の言葉を言った。

銀時

「仲間なんて、いらねえ……」

その頃、銀時は龍の言葉に驚いていた。

龍

「ハハハハア！しかし皮肉な物だな、まさか助けに来たものの中に頭

銀時

「なッ！？どういうことだ…」

龍

「言葉の通りだ。あの娘は貴様の過去を体験するのだ！そしてあの娘が恐怖で心が支配された時、過去の貴様があの娘の精神を殺すのだ！！」

銀時

「……………」

龍

「ハハハハハハハハア！！、どうだ！！貴様の過去があの娘を滅ぼす気分は！！ハハハハハハハハア！！」

龍が大声で笑う中…

銀時

「哀れだな…………てめエは…」

龍

「なに！！！！！」

銀時

「てめエが思っているほど、あいつの魂は弱くはねえ」

龍

「なにを！」

銀時

「あいつの魂は、てめエなんかに負けたりはしねえ……」

銀時がそう言う一方、インデックスは未だに刀を首筋にあてられていた。

インデックス

「……………」

インデックスは未だに無言で刀を首筋にあてられていた。首筋には刀が少し当たっているのか、赤色の血が少し流れていた。

銀時

「もし、てめエがこれでもまだ仲間だと言っなら…」

銀時がそう言うと刀に力を入れた。

インデックス

「ホントにいらないの？」

銀時はその言葉に手を止めた。

インデックス

「銀時はホントに仲間なんていらなと思っててるの？」

インデックスは銀時に振り返ってそう言った。

銀時

「俺は……もう……仲間なんていらー」

インデックス

「嘘……」

インデックスにそう言われ、銀時は驚き、手から刀を落とした。

インデックス

「…私ね、この前、銀時に励ましてもらった時にわかったの、…銀時がどれだけ仲間の事を大切に思ってるかって事……銀時がどれだけ仲間に優しいかって事……だから…」

インデックスはそう言うと小さい体で銀時を抱き締めた。

インデックス

「自分に嘘をつかないで……」

インデックスはそう言いながら強く銀時を抱き締める。銀時はインデックスの言葉を聞いて悲しみから救われたような顔をした。するとさっきまでの風景がだんだん消えていき、インデックスの意識はそこで途絶えた。

そしてインデックスの洗脳が解けたことに龍はいち早く気づいた。

龍

「なっ！？そんなバカな！！」

龍が驚き、隙を作ったのを銀時は見落とさなかった。銀時はいきよ  
いよく跳躍すると木の枝に足を乗せ、枝をバネにするように龍に向  
かった。

龍は、銀時に気づくも既に遅かった。銀時は木刀を大きく振り上げ  
た。

銀時

「うおおおおおおお！！！！」

銀時は声とともに木刀を振り落とした。

木刀は龍の頭に直撃し、純白の龍は真っ二つに斬り倒され、地面に  
倒れ落ちた。





強き魂（後書き）

次回もお楽しみください！

## 感謝

打ち止め

「はぁー……………」

一方通行

「あのガキ、何落ち込んでんだ？」

銀時

「知らねエーよ、腹でも壊したんじゃねエーか？」

一方通行

「ああアアア！…まどろっこしい！…！」

銀時

「おい！！ほつとけて！！！」

一方通行

「おい！！なにー！」

打ち止め

「一方通行なんて嫌い…ってミサカはミサカはいつてみる」

一方通行

「なッ！？……………」

銀時

「……だから、止めとけっていったんだよ……」

#### 第四十三幻想 感謝

銀時は龍を叩き斬った後、地面に着地した。銀時は叩き斬った龍を見た。龍は真つ二つになりながらも意識はまだ少し残っていた。

龍

「ま、……まさか人間ごときに我が……」

銀時はそんな事を言う龍を見つめていた。

龍

「……ふっ……まあいい、貴様らは……ここで死んでいればよかったと後悔するだろう……」

銀時

「…………」

龍

「…………ち……ら……ば……」

龍はそう言って砂のように消えていった。それを見た銀時は無言のまま上条の後を追いかけた。

一方、インデックスは…

インデックス

「……………」

なぜか固まった状態だった。その理由は…

ヒューウ…

自分が崖に落ちるか否かの状態だったからだ。そしてそんなインデックスを支えているのは上条だった。

インデックス

「とっま……………」

インデックスがそう言う中、上条は必死にインデックスを落とさないよう、インデックスの手を握っていた。しかしインデックスの手を握った時の体勢が悪く上条は力を入れられずにいた。

上条

「く……………ッ……」

上条は足の痛みもあり段々と崖に体が引きずりこまれていた。

そして、とうとう上条の体が崖に落ちようとした時。

上条

「クッソッ……………ッ……!!」

ガシッ！！

上条は何か襟首を掴まれた。上条はとっさに振り向いた。

そこには銀時が上条の襟首を掴んでいた。

銀時

「まったく、手間かけさせんじゃねーよ」

上条

「銀さん！！」

インデックス

「銀時！！」

銀時

「上条！！手を離すなよ！！」

銀時はそう言うとか一杯、手に力を入れると。

銀時

「うおおおおおおお！！！！！」

上条とインデックスを後ろに放り投げた。

上条

「ぐえ！？」

インデックス

「きゃ！？」

投げ飛ばされた上条たちはなんとか地面に着地した。

銀時

「大丈夫か？オメーら？」

上条

「大丈夫かじゃねーよ！！死ぬ所だったんだよ！！」

インデックス

「とうま！助けてもらったんだからいいー」

上条

「いいわけねえだろ！！！！」

上条がインデックスに怒鳴った時、上条は地面に寝ころぶように倒れた。



インデックス  
「とうま!？」

インデックスが驚き近づくなか、銀時は上条を背負った。

銀時

「心配いらねーよ、ちょっと気絶しただけだ、ほら、行くぞ！」

銀時はそう言ってもと来た道を歩き始めた。インデックスは急いでそのあとを追った。

その後、銀時たちは一切喋らず、インデックスは上条を背負う銀時を見つめていた。

そして銀時たちは歩き続け、もうすぐ出口が見える所まで差し掛かった時、それまで喋らなかつた銀時がインデックスに話しかけた。

銀時

「あつ、そうだ、インデックス！」

インデックス

「ふえ！？ナ、ナニ…」

銀時

「上条に感謝しとけよ」

インデックス

「えっ？」

インデックスはそう言われ、背負われた上条を見た。

銀時

「このバカ、お前を捜すためにずっと走りまわってたんだ」

インデックス

「とうま……………」

インデックスはそう言つと銀時が背負う上条に抱きついた。銀時は危うくこけそうになったがなんとかとどまった。

インデックス

「ありがとう……………とうま…」

銀時はそう声を聞き、優しく微笑んだ。

銀時

「……………おい、インデックス、そろそろ……………」

銀時はそう言って後ろを見た時……

インデックス

「スー……………スー……………」

インデックスは上条を抱いたまま寝ていた。

銀時

「てめえーらアアアア！！なに寝てんだアア！！銀さんだってな  
疲れてんだよ！！なに後は頼んだ、みたいに、寝てやがんだアアア  
！！！！！！」

その後、銀時の声を聞き付け新八たちは銀時の元に到着した時、銀  
時は汗だくで上条とインデックスを背負っていた。



## 感謝（後書き）

ちょっととしまいちって感じで書きましたが、どうでしたか？感想待っています。

## 気になる事

銀時

「今日は銀さんが前書きしきるからよろしく！あれ？どこやったけ  
な…………… ああ、あったあった、作者からまた手紙きたから読む  
ぞー、…………… 武州の話が終わったらオリジナルキャラを出したので、  
そのオリジナルキャラの名前を募集します…………… 何この手紙、俺たち  
だけじゃあ不満ってか？…………… 作者のヤロー…………… ふざ  
けんじゃねエエエエエエエエエエ！……………！！！！」

## 第四十四幻想 気になる事

銀時たちは旅館に帰り上条たちを寝かせた。そして時間はたち、銀  
時たちは夕食を食べていた。インデックスも目を覚まし夕食に参加  
していた。

「夕食」

インデックス

「ねえ？銀時？」

銀時

「ああ？」

インデックス

「どうして、とうまより怪我してるの？」

そう言われた銀時の顔には青アザがいくつも見られた。

銀時

「うるせーよ！黙って食ってるクソガキ！」

インデックス

「な、なんで怒ってんの!？」

そう言いながら銀時はつい数時間前の事を思い出していた。

〓 数時間前 〓

新八たちが銀時たちを見つけた時だった。

新八

「たしかこの辺から………あっ!!……いきました!!……上条さんとインデックスさんも一緒ですよ!!…」

神楽

「ほんとアルか!!新八!!…」

御坂

「まったく……あのバカ……」



三人はそう言うと汗だくで二人を背負う銀時の元に向かった。

新八

「銀さん!!」

神楽

「銀ちゃん!!」

そう言って近づいてくる新八たちに銀時が気がついて声を上げた。

銀時

「おおー！新八、神楽、ちょっとー」

と言って銀時が声を上げた時。

インデックス

「あ……………ダメだよ……………そんなとこ触っちゃあ……………」

その言葉が出た瞬間、その場にいる全員は足を止めた。

銀時

「なっ!? 何言ってるんだア!! このクソガ……………」

銀時はインデックスを見てそう言うと目の前から殺気を感じ振り返った。

そこには新八、神楽、御坂の三人が銀時の手がある部分を見ていた。実際近くから見ると銀時の手はインデックスのお腹の部分にあるのだが、新八たちから見ると銀時の手は胸にあるふうに見えたらしく新八たちは人を殺せるような殺気を放っていた。

銀時

「ちよつと待てエエエエエエエエ!! こいつが疲れて寝ちまったから俺が……………」

神楽

「つまりこの言うことアルか？眠ったインデックスを親切にここま  
で背負って来て疲れていると……」

銀時

「そうそう……」

銀時はそう言いながら大量の汗をかいていた。

新八・神楽・御坂

「嘘ついてんじゃねエエエエエエエエエエ！クソ天パアアアアアア  
アアアアアア！！」

銀時

「あうはうわうわううううう………ッ」

その後、インデックスのおかげで誤解は何とか解けた。

「現在」

銀時はそんな事を思い出しながら新八たちを見た。

新八たちはそんなことを忘れて楽しそうに食事を食べていた。

「深夜」

新八たちが寝ている時、銀時は旅館を出て近くにある石段に座り夜空を見上げていた。

銀時

「……………」

銀時が何も言わず夜空を見上げてみると後ろから足音が聞こえた。  
銀時が振り返って見るとそこにはインデックスが立っていた。

銀時

「おい、おい、ガキは寝る時間だぜ」

インデックス

「ちよっと銀時にようがあつたの……」

インデックスはそう言って銀時の横に座った。

インデックス

「あの一」

銀時

「悪かったな……」

インデックス

「えっ……」

インデックスは銀時にそう言われ言葉をつまらした。

銀時

「見たんだろ、俺の過去……」

インデックス

「……うん……」

インデックスはそう頷きながら気になっていた事を銀時に聞いた。

インデックス

「……私は一度見たものは絶対忘れないから覚えてるの、…ねえ、銀時が白い羽織来て、雨の中で一人、空を見上げた後銀時はどうしたの？」

銀時はそれを聞いて唖然とした。しかし今インデックスの前で表情を変えるとインデックスが心配すると思い銀時は表情を変えないようにして答えた。

銀時

「……あの後、俺は刀を捨ててババアに部屋を借りて万事屋家業だよ」

インデックス

「そう……」

インデックスはそれを聞いて黙った。すると銀時はインデックスの体を自分の肩にのせた。

インデックス

「……………銀時？」

銀時

「…すまねーな、嫌なもん見しちゃって…」

インデックス

「……………ううん……………そんな事ないよ、それに恩返しも出来たし……………」

インデックスはそう言うのと立ち上がり旅館に戻っていった。

銀時は恩返しなんかしてもらったか、と思いながらインデックスの後ろ姿を見ていた。

気になる事（後書き）

次回、銀さんはある人物と会います。



**墓参り（前書き）**

グダグダですいません…

## 墓参り

銀時

「やっとあのバカどもが復活したからまた三人で前書きやるからヨロシー」

一方通行

「クじゃねエエエエエエ！！！！」

打ち止め

「そうだ！そうだ！ってミサカはミサカは縛られながら騒いでみる」

銀時

「うるせーよ！！クソガキ！！ンじゃあ〜第四十五幻想、スタート！！」

## 第四十五幻想 墓参り

光が窓からさし、上条は目を覚ました。

上条

「……………」

上条がそう言っていると上条の部屋のふすまが開いた。

御坂

「目が覚めた？」

そうやって御坂は寝ている上条の横に座った。

上条

「みさー」

御坂

「バカ!！」

上条が喋ろうとしたが、御坂の声に驚き固まってしまった。

上条

「なっ……いきなりなんだ……」

上条はそう言おうとした時、上条は御坂を見て言つのを止めてしまった。

御坂

「バカ………いつも、いつも……」

それはバカと言いながら泣く御坂の顔を見たからだった。

上条

「……………」

上条はそんな御坂を見ながら黙ってしまった、その時…

インデックス

「とうま！体は大丈夫なの！」

そう言って入ってくるインデックスに二人は驚いた。御坂は涙を手

で拭き取り立ち上がろうとした時、御坂は足をぐらつかせて倒れそうになった。

御坂

「あっ!？」

上条はそんな御坂を両手で肩を掴み倒れる御坂を止めた。

上条

「大丈夫か?.....」

御坂

「うん.....」

そうして上条たちが二人で見つめ合っていると...

インデックス

「とっまアあああああああ!..!」

上条

「ぎゃああああああああああ!!」

御坂

「ち、ちよつと!!このバカまだ怪我してー」

上条たちの声は旅館内に響き渡った。そしてその声に神楽は目を覚まし、ふすまを開け、廊下を覗いた。

神楽

「なんだヨ、うるっさいな」

するとそこに新八が通りかかった。

新八

「あ、神楽ちゃん、おはよう」

神楽

「ふあ、おはよう、ところで銀ちゃんはどこアルか？」

新八

「あ、銀さんは何か女将さんが言うには朝早く出ていったらしいんだけど…」

そう言い新八たちは銀時を心配していた。

その頃、銀時はある一軒家の前に来ていた。そして家の庭に立ち尽くしている一人の青年に声をかけた。

銀時

「奇遇じゃねえか、総一郎君？」

総悟

「旦那……………」

そして二人は家から離れた所にある一つの墓に手を合わせて立っていた。そこには沖田ミツバと書かれていた。

総悟

「それにしても奇遇ですねエ旦那…」

銀時

「ああ、ちよっくらバカどもを連れて二泊三日しててよオ」

銀時はそう言っつて服の中から激カラせんべいと書かれたお菓子を墓に供えた。

総悟

「……………ありがとうございます…………旦那……………」

総悟はそう言っつともう一度墓に手を合わせた。銀時も総悟の後に続き手を合わせた。

そして、六時間が経ち銀時たちは今、電車の中に乗って、かぶき町



に帰る途中だった。

「電車内」

神楽

「なんでお前がいるアルか!!」

総悟

「うるせー奴でさあ」

新八

「ちょっと、二人とも!!やめてくださいよ!!」

そう言いながら、騒ぐ三人を見て銀時ため息を着いた。そして銀時は上条たちのほうに振り返った。

376

上条

「くう〜……くう〜……」

インデックス

「すう〜……すう〜……」

御坂

「ふう〜……ふう〜……」

そう寝息をたてながら寝ていた。上条は席の真ん中に座って寝ており、インデックスと御坂は上条の肩に頭をのせて寝ていた。

銀時は寝ている三人の内、インデックスを見た、すやすやと寝るインデックスの顔は初め電車に乗った時に比べていい顔をしていた。

銀時はそれを見た後、ふつと笑った。床で寝ている定春は顔を床につけながらぐっすりと寝ていた。

そして銀時たちは無事にかぶき町へと帰っていった。

## 墓参り（後書き）

ちよつと、この話は飽きたのではないかと思い、早く終わらせました。次回はオリジナルキャラ（名前と性別は明日の夜の10時まで募集しています）と月詠を出したいと思っています。次回は明日の10時くらいに更新します。

## 新幻想（前書き）

時間が大分ずれてしまいほんとにすいませんでした。ちょっと無理ありオリジナルキャラを入れたのでちょっとグダグダです

## 新幻想

銀時

「えー、オリジナルキャラを募集した結果、一通きたらしいのでしようかー」

一方通行

「紹介とか抜かしてンじゃねーぞ……」

銀時

「げっ！？お前、どやって繩をー」

打ち止め

「作者に頼んで解いてもらったんだよってミサカはミサカはいつてみるー！」

銀時

「なっ…作者アア！！てめえ、裏切りやがったなアアア！！」

一方通行

「……さつきから無視してンじゃねエよオオオオオオー！！」

銀時

「ぎゃあああああああー！！」

銀時たちが武州から帰ってきてから三日がたった。今、万事屋には銀時以外誰も居なかった。銀時はソファーに寝ころび、ジャンプを読んでいる

銀時

「やっぱりおもしれエな、早く発売しねエかな、ジャンプ…」

そう銀時がぼやいていると…

ピンポーン!!

玄関からチャイムがなり、銀時は神楽たちがいないことを思いだし、めんどくさそうに玄関へとむかった。

銀時

「はーい、どちら…」

銀時はそう言って玄関のドアを開けた。そしてドアを開けた先には吉原桃源郷の百華の頭でもある月詠が立っていた。銀時は月詠を見たたん固まってしまった。

銀時

「……………」

月詠

「久し振りじゃな、ぎんとー」

ガラガラガラガラ…ッ

銀時は月詠が喋っているのを無視して玄関のドアを閉めた。

銀時

「……………ジャンプ読み過ぎて、幻覚が見えて来やがった、一回寝て頭冷やさねェとダメだな」

銀時はそう言って部屋の奥に行こうとした時。

ドドドドドドドドドドス！！

玄関のドアからクナイが飛びドアを貫き床に刺さった。銀時は何とかそれを回避しドアから入ってくる月詠を見た。月詠は銀時を冷血な瞳でにらみ、手にはクナイがあり、今にも投げれる体勢だった。

銀時

「待て！待てー！冗談だつてー！！冗談！！だか、ぎゃあああああ

「！！！」

そうして銀時の悲鳴は万事屋に響き渡った。

その頃、上条は何故か攘夷志士に追いかけていた。

男A

「待てエエエ！！このガキイイイ！！」

上条

「クッソー！！……はぁ……はぁ……不幸だアああああああ  
！！」

そう言う上条が何故追いかけているのかというと、それは10分前にさかのぼる。



「10分前」

上条はかぶき町を一人で歩いていた。

上条

「ふあゝ、平和だなあゝ」

そう言いながら歩いていると、上条は前から歩いてくる三人の攘夷志士の中の一人に肩をぶつめた。

上条

「イタツ!？」

上条がそう言い後ろを振り向いた時。

男A

「あ…アニキ…」

男B

「なんだ、何か良いものでも見つけたのか？」

男C

「いや……良いものというより悪いものが……」

そう言つて男Cが男Aの頭に指をさした。男Aは指をさされた頭を触つた時、頭は丸坊主になっていた。そして、その丸坊主を隠していたカツラは上条の足元に落ちていた。

上条は苦笑いで笑つと、攘夷志士の三人もにっこり笑つた。

そしてその結果、上条は攘夷志士三人に追われるはめになった。

〓現在〓

上条は三人から逃げ続けていたが、道を間違え、行き止まりの所についてしまった。

そして後ろには、怒り狂つた攘夷志士たちが立っていた。

上条

「は、はなせばわかるって…」

男A

「お前に話してもワシが路上で丸坊主になったことは変えられねんだよ…」

男Aがそう言うとの後の二人は頭を上下に振り、頷いき三人は鞘から刀を抜き出した。

そして三人が上条目がけて突進してきた。上条は刀に怯えたが、それに動じず上条も突進しようとした。

その時…

バタツ！！！！

上条を斬ろうとしていた攘夷志士三人は突然、倒れた。

上条

「なっ……………どうなって…」

そう言っつて上条が驚いていると…

「大丈夫？あなた？」

突然、女の声が倒れる攘夷志士の後ろの方から聞こえた。上条はすぐさまその声が出た方向を見た。

そこには、一人の少女が立っていた。服装は白いマントで覆われており見えず、見た目では年は上条に近く、髪の毛は三つ編みをふたつのお団子にして、その先を解いてウェーブにしたという変わったヘアースタイルをしていた。

そして、特に印象的なのは髪の毛と目の色が黄緑だということだった。上条はそんな少女に警戒しながら聞いた。

上条

「てめえ……………いったい…」

上条がそう言つと少女はにっこりと笑つて言った。

緑子

「藤葉緑子…これで満足？」

こうして上条は新たな幻想の中心となる緑子と出会つた。

そうして銀時たちも知らず知らずの内にこの幻想に取り込まれて行くこととなる。

## 新幻想（後書き）

名前と性別を考えてくれた方、どうもありがとうございました。ちよつと髪の毛の色とか服装とか勝手に考えてしまったことはちよつと謝ります。もしこれでよければ次回も是非見てください。

危険な匂い(前書き)

最近、話が長くてすみません！

## 危険な匂い

打ち止め

「やつほーってミサカはミサカは笑顔でいつてみる！」

一方通行

「逃げてンじゃねぞコラアアアアア！」

銀時

「たんま！！たんま！！銀さんが悪かった、だから許してエエエエエエエエエ！！」

一方通行

「許してもらえと思ってンのか、死ぬエエエエエエ」

銀時

「ぎゃあああああああ！！」

打ち止め

「うるさいなあってミサカはミサカは後ろの二人にため息をついてみる……」

## 第四十七幻想 危険な匂い

上条が緑子とあっている頃、銀時はソファに座っていた。



銀時

「…で、何、何しに来たの？」

そう言う銀時の服には所々、クナイが突き刺さった穴の後が残っていた。

月詠

「…ぬしに依頼を頼みに来たのじゃが…」

銀時

「依頼？珍しいじゃねエか、お前が俺たちに頼むなんて？」

銀時がそう言うのと月詠は何故か深刻そうな顔をした。銀時はそれを見て月詠に問うた。

銀時

「…お前がそんな顔をするってことは、それほどヤバイってことか？」

銀時がそう言うのと月詠は頷き懐から三枚の写真を見せた。

銀時

「これは…」

月詠

「今回、ぬしに頼みたいのは、この三人の娘を捜して欲しいということじゃ」

銀時はそう言う月詠を見た後、渡された写真を見た。三枚の写真には上条ぐらいの年の娘たちが写っていた。

一枚目は白いマントを来て黄緑色の髪をした少女、二人は忍者みたいな服装をし青色の髪をした少女、そして最後に真っ赤な羽織を着た赤色の髪をした少女の三人だった。

銀時はそれを見た後、月詠を見て言った。

銀時

「依頼内容はわかった。…だが、お前がそうまで仲間に頼らねエ、理由はなんだ？」

銀時がそう言うと月詠はさらに深刻な顔した後、銀時に答えた。

月詠

「この娘たちは、ある実験場から逃亡した娘たちじゃ」

銀時

「実験場？なんでこんな今時のガキが実験場なんかにいたんだ？」

月詠

「……………この実験場ではある人体実験が行われていた……」

銀時

「人体実験ねエ……………また胸くそ悪い言葉が出てきたな…」  
月詠

「…そして、その人体実験で唯一成功したのがこの娘たちじゃ」

月詠がそう言うと銀時はもう一度、写真に目をむけた後、月詠に聞  
いた

銀時

「……………人体実験って言うってことは何がされてたかしてんだろ？」

月詠

「…この実験場ではいわゆる力の制御を課題とした実験が行われて  
いた」

銀時

「力の制御？」

月詠

「そうじゃ、そしてこの実験で三つの力が課題となった……………それ  
は火、水、風の自然の力じゃ」

銀時

「…つまり、力の制御ってことはその自然の力を操れるって言うこ  
とか？」

月詠

「……………」

銀時

「…つても、納得がいかなエな、確かにそんなおつかねエ、力を持っ  
てたとしても、お前がそんな事で仲間に頼らねなんて…」

月詠

「……………」

銀時

「何があつたんだ、話せ……」

銀時にそう言われ月詠は言いたくない顔をしたが、銀時の顔を見て観念したのか月詠は話し始めた。

月詠

「……………ここ最近、吉原で百華の者が次々と死体で発見されたんじゃない………そしてその死体の体には火傷の後が所々に見られていてな……」

銀時はそう言いながら悔やむ月詠を見た後、ソファーから立ち上がった。そして銀時は玄関の方に足を進めた。

月詠

「銀時……………」

月詠は玄関に向かって行く銀時に声をかけた。

銀時

「……………ここでぼやいてて仕方ねエ……」

銀時はそう言って月詠に振り返った。

銀時

「とっくと行くぞ……」

銀時はそう言った後、玄関のドアを開けた。

月詠

「……ありがとう……銀時……」

月詠はそう言ってソファから立ち、銀時の後を追った。

## 危険な匂い（後書き）

ちよつと話が長いから最近、銀時たちの言葉が変になります。次回からはちよつと文字数を減らしていきたいと思っています。

## 風と水（前書き）

グダグダが続き過ぎで、本当にすいません

## 風と水

打ち止め

「あれ、どうしたのかなってミサカはミサカは息を切らしている一方通行に聞いてみたり」

一方通行

「はあ……はあ……あのヤロー……はあ……逃げやがった……」

打ち止め

「えー、ってミサカはミサカはダメダメな最強の能力者に不満をもらしてみたり」

一方通行

「うるせん……はあ……はあ……だよ……」

打ち止め

「でも、このまま銀時を逃がすのはちよと不満かもってミサカはミサカはいつてみる、って事で、作者……！」

銀時

「ぎゃあああああああああああああ……」



一方通行

「……………おい…今、何か……………」

打ち止め

「作者に頼んで銀時をお仕置きしてもらったってミサカはミサカは指でピースってやってみたり」

一方通行

「……………」

#### 第四十八幻想 風と水

銀時が月詠と話している頃、上条は緑子に名前を言われていた。

上条

「藤葉……………緑子……………」

上条はそう言つと緑子は上条の方へ向かってきた。

緑子

「そつだよ」

緑子はそう言い足を進め、上条の前まで来た時、足を止めた。そして緑子は上条を観察するようを見た。

上条

「な、なんだよ……」

緑子

「ふ〜ん……以外とかつこいいじゃん」

上条

「なっ!？」

上条はそう言われ顔を真っ赤にした。

緑子

「で、あなたの名前は？」

上条

「えっ？」

緑子

「だから、あなたの名前は何て言つの？」

緑子にそう言われ戸惑いつつも上条は自分の名前を言った。

上条

「か、上条当麻……」

緑子

「上条当麻ね……じゃあ上条でいいよね？」

緑子にそう言われ上条は呼び捨てかよつと心の中で呟いていた。

緑子

「ねえ、上条？」

すると突然声をかけられ上条は緑子を見た。

緑子

「私、ちょっとある所を探るんだけど、ここら辺はあまり知らないから探すの手伝ってくれないかな？」

上条はそう言われ、嫌な顔をした。

上条

「なんで俺がー」

緑子

「せっかく助けてあげたのに？……」

上条はそう言われ、仕方なく手伝うことにした。

上条

「……………わかったよ……………」

上条がそう言つと緑子はまるで子供のように喜んだ。

緑子

「ありがとう、上条！」

そう言つて喜ぶ緑子を見て上条はふつと笑つた。

上条

「で、何探してんだ？」

上条がそう聞くと緑子は喜びながら答えた。

緑子

「えっとね、よるー」

バシャァー！！

上条に聞かれて緑子が言おうとした時、頭上から津波のような水が上条たちにふりかかった。しかし、水はまるで壁があるかのように上条たちの頭上で止まった。

上条

「なっ!?!?……」

上条が驚く中、緑子はすぐそばにある家の屋根の上を見上げた。

緑子

「…見つかったか……」

そう言って緑子が見上げる先には忍者のような服を着て、青色の髪をした少女が立っていた。

咲希

「見つけたわよ……緑子……」

## 風と水（後書き）

一応、緑子の言葉使いを書いて見ましたがどうでしたか。次回は戦いで話を進めたいと思っているのでよろしくお願いします。

最強の右手（前書き）

長くてすいません



## 最強の右手

打ち止め

「はあー、スッキリした〜ってミサカはミサカはいつてみる」

一方通行

「……………」

銀時

「誰がスッキリって…」

打ち止め

「なっ、ってミサカはミサカは一方通行の後ろに隠れてみる」

一方通行

「オマエ……………生きてたのか？」

銀時

「ああ、何とかな…」

一方通行

「お……………おい、何か目がヤバイぞ……………」

打ち止め

「さ、作者！！助けて！！ってミサカはミサカは助けを求めてみる！！！」

一方通行

「ああ？……なんだこの紙……おい、ガキ」

打ち止め

「何ってミサカはミサカはいつてみる」

一方通行

「オマエ死てだ」

打ち止め

「な、何なの……いった……もうフォローは無理です……by作者……つてミサカはミサカは青ざめてみたりつてあれ！？一方通行は！？」

銀時

「……………はあ……………」

打ち止め

「目が光ってるってミサカはミサカはー」

銀時

「うがアあああああああー！！」

打ち止め

「うにゃあああああああー！！」

上条は女の声がする方に視線を向けた。

そこに立っていた、少女は屋根から飛び降りた。

上条

「なっ！？あぶ……ね……」

上条はそれに驚き声をあげた、しかしある光景を見て上条は呆然と  
してしまった。

なぜ呆然となったかというと、それは少女の足が地面に当たる前に  
水がクッションのように少女の足下に集まり、足への衝撃を回避し  
たからである。

上条

「なっ……どうなって……」

上条がそう言っていると地面に降りた少女が喋りだした。

咲希

「見つけたわよ、緑子……」

上条はその言葉を聞いて緑子を見た。

上条

「おい…あいつお前の知り合いか？」

緑子

「……………まあね」

緑子はそう言ってさっき降りてきた少女を睨み付けた

咲希

「男なんかと一緒にいるなんて随分余裕だわね…」

咲希はそう言いながら緑子と上条を睨み付けた。

411

緑子

「あら、悔しいの、咲希？」

緑子も負けじと咲希に向かって言い放つ。

咲希

「……………まあ、こんな言い合いをしに来たわけではありませんわ、…  
…緑子…なぜ私たちから逃げたの？」

咲希がそう言うと緑子の顔は怒りで埋め尽くされた。

緑子

「なぜって本当に言ってるの!!」

咲希

「ええ、そのつもりですわよ……」

咲希がそう言った時……

ヒュ〜ウ〜

緑子の頭上から風が吹き始めた。

上条はそれを見た時、以前戦った一方通行の事を思い出した。

咲希はそんな緑子を見た後、ため息をついた。

咲希

「はあ〜……………私は穏便にすませようと思ったのにー」

緑子

「何が穏便よ、最初から無理あり連れて行くつもりだったんでしょ  
!!」

緑子がそう言うと咲希は小さく笑った。すると咲希の周りから突然、水が溢れだした。

咲希

「ええ、そうですわよ!!」

咲希はそう言うと水を緑子と上条に向かって放った。

緑子

「上条は下がって!!」

緑子はそう言うと頭上に集めていた風を向かってくる水に向かって放った。

そして風と水がぶつかりあい、水は風の風圧に負け周りに飛び散った。しかしその飛び散った水はそのまま緑子に向かって飛んできた。緑子は舌打ちすると緑子と上条の周りに風を集中させ、向かってくる水を防いだ。

すると咲希は緑子に向かって怒り出した。

咲希

「緑子！…どついつつもりなの！！あなたの力はそんなもんじゃないでしょ！！」

咲希の言葉を聞いた上条は緑子を見た。緑子はなぜか悲しい顔をしていた。

そしてそんな緑子を見ていた咲希はさっきまでとは違つどす黒い声で言い放った。

咲希

「あなたがそのつもりならもう容赦はしないわ」

咲希がそう言った時…

緑子

「いぼあ！？」

突然、緑子は口から水を吐き出した。

上条

「なっ…おい！！」

上条はそう言いながら緑子に近づいた。その時、突然、咲希が笑い出した。

咲希

「ふふ、緑子、あなたってほんとにバカね、早く私を殺しておけばよかったのに…」

そう言って笑う咲希はまるで悪魔見たいな表情をしていた。



すると、その時…

咲希

「!?!?…なっ…どういふ事…」

咲希はそう言って自分の手を見た。

咲希

「緑子の体内の水が操れない…」

咲希はそう言った後、緑子を見た。すると緑子は荒い息をしながら地面に手をついているがさっきまでのように口から水を吐いていなかった。

咲希は何故かわからなかったが今の緑子の様子を見て今しかない。咲希は緑子に向かって大きな水を放った。

その時、緑子の前にさっきまで後ろにいた男が緑子の前に立った。そして迫ってくる水に向かって右手を突き出した。

バキン！！

咲希は驚いた。自分が放った水がガラスのように割れていくことと、ただ右手を突き出しただけの男に、咲希は何が何やら解らず男に向かって水を何発も放ち続けた。

しかし水はその男によって何回も潰されていった。そして、咲希は荒い息をしながら叫んだ。

咲希

「あ、アンタ、一体何なのよ!!」

そう言う咲希に男は右手を前に伸ばして答えた。

上条

「お前の幻想を殺すもんだよ!!!」

上条がそう言うのと咲希は何か外れたように頭上に巨大な水を作り出した。

咲希

「ふざけんじゃないわよおお!!!」

咲希はそう言うて上条に巨大な水を放った。しかし上条は微動だにしない。

するとさっきまで地面に手をつけていた緑子が声を上げた。

緑子

「上条……早く逃げて……」

しかし上条は言うことを聞かずに迫りくる水を睨み付けている。

緑子がさらに声を上げようとした時。

上条

「大丈夫さ……」

上条はそう言いながら右腕を振り上げた。

上条

「俺がお前を守ってやるよ……」

上条はそう言って迫ってきた水を右手で殴った。

バキバキバキバキバキバキバキバキバキッ、バキン！！！！！！

巨大な水は増大な音とともにヒビが入り、粉々に砕けちった。

## 最強の右手（後書き）

長く書きすぎて文章が変になってたりしたらすいません。一応、次回から銀時と緑子の言い合いなどを書くのでどうかよろしくお願ひします。

## 思わぬ到着（前書き）

この頃、長文ばっかで文章が変になってきているかもしれない…

## 思わぬ到着

銀時

「ふうー……」

一方通行

「オ、オイ……あのガキは……」

銀時

「ああ？あのガキならあそこ」

一方通行

「うん？なっ！？……」

打ち止め

「頭が爆発しそう、パーンってってミサカはミサカは逆さづりにやれながら泣いてみる」

一方通行

「あ……」

銀時

「よし、じゃ、銀魂第五十幻想、スタート……」

## 第五十幻想 思わぬ到着



上条は巨大な水を右手に宿る幻想殺して殺した後、水を放った少女を見た。

しかしすでにそこには少女はいなかった。

上条

「クッソ……………逃げやがったか……………」

上条はそう言った後、未だ荒い息をしている緑子に振り返った。

上条

「大丈夫か？」

緑子

「…うん……………」

上条

「……………はあ……………」

上条はそう言いながら荒い息を出す緑子にため息をつき、緑子の体を持ち上げ、緑子を背負った。緑子はいきなりの事に驚いた。

緑子

「ち、ちよっと……………いきなり!？」

上条

「お前、今、立つのもしんどそうじゃねえか？俺が背負ってやるからじっとしてろ」

上条にそう言われ緑子は慌てて降りようとするが体に力が入らず緑子は上条の背中の上でまた眠ってしまった。

〓 万事屋 〓

銀時はあれから色々な所で聞き込みをしたが何も収穫は無く、月詠と一緒に万事屋に帰ってきた。そして銀時は玄関のドアを開けた。

銀時

「お？誰か帰ってきてるみてーだな」

銀時はそう言うと靴を脱ぎ、室内へと入った。

銀時

「おーい！銀さんが帰ってー」

そして銀時がそう言った時…

ドコッ！

銀時の寝室の方から音がした。それを聞いた銀時は月詠にそこを動くなと言い木刀を右手に持ち、ゆっくりと寝室のふすまに近づいた。

そして、銀時はふすまの取っ手に手をかけ一気にふすまを開けた。

上条

「あつ、銀さん！」

そこには上条が毛布を何かにかけている所だった。

銀時

「なんだよ、上条じゃ……………」

銀時は上条に対してそう言おうとした時、ふと銀時は上条のそばにひかれている布団を見た。そこには、寝息をたてた少女がぐっすりと眠っていた。

上条はその視線に気づき慌てて、銀時に喋りかけた。

上条

「いや、実は今日、侍たちに襲われて、その時にー」

上条はそう言って必死に銀時に言うが、銀時は…

銀時

「……………上条…」

上条

「は、はい……………」

上条は銀時に名前を呼ばれて、瞬時に固まってしまった。それから数秒、沈黙が漂った。すると銀時の目が赤く光…

銀時

「てめえ、何、居候の分際で女連れ込んでんだアアアアアアアアアアア  
！！！！！」

銀時はそう言って上条に殴りかかった。そして銀時が上条を殴りまくっている中、月詠は銀時に声をかけていた。

銀時

「第一、ガールフレンドが二人もいるくせにふざけんじゃねーぞ、  
コラー！！！！！」

月詠

「銀時」

銀時

「今日の晩飯ぬきにしてやろうか、あん！！！！！」

月詠

「銀時」

銀時

「なんだ、うるせーな！！！！」

そしてやっと銀時は声をかけてくる月詠に反応し月詠を見た。月詠は手に写真を持ち、布団に寝ている少女に指をさしていた。

銀時は上条を殴るのをやめ、写真と少女を見比べた。

そして銀時は目をこすり、もう一度、写真と少女を見比べた。それでも納得がいかず今度は少女の顔に近づき、ホントに写真と同じ少女かどうか確かめようとした。

すると、その時……

パチッ

さっきまで眠っていた少女は目を覚まし、目の前にあった銀時の顔を見た。

緑子

「何じよつとしてんのよおおおおおお！……！」

そう言う緑子は変な事をされると思ったのか、銀時の顔面に硬く握った拳を入れた。

銀時は何も叫ばず、鼻血を出しながら、後ろに倒れた。

そうして銀時が倒れてから3時間たった

「夕方」



今、万事屋には神楽、新八、御坂、インデックス、後、定春が帰って来ていた。

神楽、新八、月詠は顔面を殴られ鼻血を出した銀時を心配そうに見ていた。

御坂とインデックスはと言うと上条に対し冷血な表情を向けていた。

インデックス

「とうまは何でいつも女の子に手を出すんだろっね、一回、赤ちゃんからやり直さないといけないかも」

御坂

「たしかにそうね、一回、死んでからの方がいいかもよ」

そう言う二人に対し、上条は冷や汗をかいていた。

するとさっきの出来事で目を覚ました緑子が手を上げた。

緑子

「あの〜…」

緑子がそう言うのと鼻を押さえていた銀時が緑子に振り向いた。

銀時

「ああ？どうした？」

緑子

「…私、探している所があるので、行きたいのー」

銀時

「おい、おい、人様の顔、殴つといて、ごめんの一言もねーのかよ」

緑子

「あ、あれはあなたが、いやらしそうな顔で私を見るから、悪いのよー！」

銀時

「見てねーよ！何、早とちりしてんだ、このガキ！！」

銀時と緑子は火花を散らしながら言い合っていた。そこに新八が入り何とか銀時と緑子を静めた。

するとそれを見ていた上条が緑子に聞いた。

上条

「なあ、そついやー、お前って何探してんだよ？」

上条はそう言って緑子を見た。すると緑子は顔を少し赤くした。それを見たインデックスと御坂は眉間のシワをさっきよりも強くして、上条を睨んだ。

上条はその睨みを感じたのか、体から寒気感じた。

上条がそんな事を感じていると、緑子は問いに答えた。

緑子

「……実は、金を渡せばなんでも依頼を請けてくれる何でも屋って  
いう所を探しているの……」

緑子がそう言つと上条たちは頭で緑子が言った事を思い浮かべてい  
た。

そして上条は思い浮かべてもわからなかったのか、緑子に聞いた。

上条

「うーん……ああー！！わかんねえ！！なあ、名前とかわからねえ  
のかよ？」

緑子

「えっ、名前なら知ってるけど？」

緑子はけろつとした顔でそう言った。上条たちはその言葉を聞くと  
がっくりと頭を下げながら早く言えよつと心の中で叫んだ。

そして上条は顔を上げ緑子を見た。

上条

「で、名前はなんていうんだよ？」

上条はもつとぐつでもいいような顔をして緑子に聞いた。

緑子

「えーつとー……万事屋っていう所なんだけど……」

緑子はそう言つて上条を見た。すると、上条を含む全員がぼつ然としていた。緑子は何か変なことを言ったのかとオドオドしていた。そして上条は頭に手を乗せて緑子に言った。

上条

「あ、あのさー……………」

緑子

「な、何……………何か変なこと言った……………？」

上条

「……………お前が探してる万事屋って……………「ここだぞ」……………」

上条がそう言つと緑子はまばたきをして、今言われたことをもう一度頭でリピードした。



## 思わぬ到着（後書き）

最近、文章がおかしい気がするので、もしよろしければアドバイスを感想と一緒に送ってください！！お願いします！！

## 厳しい言葉（前書き）

少し文章を変えてみました。まだまだといった所です。でも一応、前回よりは読みやすいと思うので、読んでくれたらうれしいです。後、今回はいきなり第五十一から始まります

## 厳しい言葉

### 第五十一幻想 厳しい言葉

夕方から夜に変わり、少女の声がやっと静まりかえった万事屋。

死んだ魚の目をした白髪頭の侍、坂田銀時は青色のソファアームに座っていた。

「で、いったい俺に何の用なんだ？」

銀時は向かいに座る緑子に尋ねる。しかし緑子はというと不満な声をもらし銀時を見ていた。

「うーん……ほんとこの人が万事屋のオーナー？」

緑子はそう言って上条に尋ねた。

「…オイ、いい加減にしろよクソガキ。それが人に頼む態度か、あん？」



青筋を作りながら銀時は緑子にメンチをきるが緑子はどうと一

「はあく、私はてつきりさつきまでいた女の人だと思ったのに」

吉原の見廻りで万事屋をあとにした月詠の事を思い出しながら銀時を無視して、ため息をついていた。

銀時は更に青筋を増やし、後ろに立っている新八に振り返った。

「ぱつつあん、あの子殴つていい？」

銀時は指をならしながら新八に尋ねる。

「ダメですよ銀さん、依頼人なんですから」

新八がそう言つて銀時を静めるようとするがは銀時は新八に愚痴をこぼし、しまいには緑子を無視して勝手に話し込んでしまった。

そして緑子は呆然としていると…

「なあ、お前つていつたい何を依頼したかつたんだよ？」

上条は銀時を見て話が進まないと思ったのか緑子に喋りかけた。

「……………実は、私をかくまってほしいの」

上条の問いに緑子は少し深刻な顔をして答えた。

上条はそんな緑子の言葉を聞いて今日、緑子を襲った水を操る少女の事を思い出していた。

「……………かくまってほしいって、今日お前に襲ってきたー」

上条がそう言って緑子に聞こうとした時…

「緑子って誰かに追われてるの？」

上条の言葉を遮ってインデックスが緑子に喋りかけた。緑子は少し驚いたが、またさっきと同じ深刻な顔をして答えた。

「うん……………そうだよ…」

それを聞いたインデックスは深刻な顔をして答える緑子に対し、何

故か昔の自分を思い浮かべた。

するとさっきまで後ろで話を聞いていた御坂が緑子に尋ねた。

「ねえ、それじゃあ警察とかにかくまってもらった方がいいんじゃない？」

そう言われた緑子は申し訳ないように御坂に答えた。

「ごめんなさい。……私、諸事情で警察とか行けないの……」

御坂はそれを聞き何かまずいことを言ったのかと心の中で反省した。

そして御坂が自分に反省していると、インデックスと神楽が銀時に頼み出した。

「ねえ、泊めてあげようよー、銀時」

「そうアル！助けを求める女の子を見捨てる何て侍の風上にもおかないネ！」

二人はそう言い銀時に訴えると銀時はため息を出した。

「はあ〜……これだからガキは…、オイ！よく聞け暴飲暴食シスターズ。こいつを入れるってことおめーらの食事が減るってことに繋がってんだよ、おめーら、それに耐えられるのか？」

銀時はそう言っただけでインデックスと神楽の顔を見た。すると二人はその事を忘れていたのか真っ白に固まってしまっていた。

銀時はそんな二人を見た後、緑子に振り向き依頼を断ろうとした時、上条は銀時に頭を下げた。

「インデックスは俺が説得するから泊めてやってくれよ……」

そんな上条を見た御坂も銀時に言いかかった。

「そうよ、一人ぐらい泊めたっていいじゃない！」

二人にそう言っただけで銀時に頼んだ。すると銀時は普段とは違う真剣な顔をして上条たちを見ながら言った。

「おめーら、いい加減にしろよ！！万事屋だったってなア、ボラントイアじゃねーんだよ。仕事ってこともわからねエのか、おめーらは？」

銀時がその言った瞬間、周りの空気が沈黙へと変わった。

そして上条たちを睨む銀時に対し上条と御坂は怒られたように下を向いた。新八と神楽は少し驚いた顔で銀時を見た。そして何故かインデックスだけはまわりと違う顔で銀時を見ていた。

そうして室内に沈黙が流れていると…

ポトツ！

テーブルの上に札束が入った袋が置く音が鳴った。

銀時はその札束の入った袋を見た後、その袋を置いた緑子を見た。

「これで依頼は請けてくれるよね？」

緑子はそう言って銀時を見た。銀時は緑子を見た後、ため息をつきソファから立ち上がった。

新八は銀時に声をかけた。

「銀さん……………」

新八はそう言って銀時の反応を見るが、銀時は何も言わず玄関へと歩いて行った。すると銀時は玄関のドアの前で立ち止まり、口をひらいた。

「……………金は貰ったんだ……………請けるしかねえだろ」

銀時は新人たちに振り返らずそう言つと玄関のドアを開けて何処かに行つてしまった。

## 厳しい言葉（後書き）

読んでくれたかた、ほんとにありがとうございました。何かあれば感想で送ってくれるとうれしいです。



**動き出す炎（前書き）**

今回はすごく短いです。

## 動き出す炎

銀時

「えー、感想やアドバイスなど、色々来たんですが、一回全部消して0から始めることにしました………と作者から手紙が来たんで読ませてもらった。それじゃあ、第五十二幻想、スタート！」

## 第五十二幻想 動き出す炎

光がまるで当たらない真っ暗な部屋。

そこに水を操ることができると咲希は立っていた。

「……………ただいま戻りました。」

体を震わせながら何も見えない部屋でそう言う咲希。すると…

ポオツ！！

真つ暗な空間に突然、赤い炎が灯った。そして炎の中から野球のボールサイズの火の玉が現れ、咲希の目の前に近寄ってきた。

咲希はその火の玉を見て体を震わせていると背後から声が聞こえた。

「お帰り、咲希…」

咲希はその声が聞こえた瞬間。全身から大量の汗を出し始めた。

「は……はい、蓮鬼お姉さま……」

咲希は背後にいる真つ赤な羽織を着た蓮鬼にそう言った。

そして蓮鬼はそんな相づちをしながら体を震わせる咲希に対しにっこりと笑った。

「ふふ、どうしたの咲希？そんなに私のことが恐い？」

蓮鬼はそう言うと、咲希の目の前にある火の玉を子猫のように操り遊び始めた。

すると火の玉を手のひらにのませ蓮鬼は咲希の耳元に顔を近づけ囁いた。

「ねえ？緑子はどっしたの？」

そう言つて微笑む蓮鬼に対し咲希はその言葉により一瞬にして顔を真っ青に染めた。

「み、緑子とはあ、あつたのですが、邪魔がー」

咲希は慌てて蓮鬼に弁解しようとした時。

ポオツ！！

咲希の右耳が赤き炎に包まれた。

「いやアあああああああああああああ！！！！！！！」

咲希はあまりの激痛に悲鳴を上げた。そして咲希は自分の真上に大量の水を集め自分に放った。

バシヤッ！！

咲希は真上から放った水のおかげで右耳の炎は鎮火した。そして咲



希は全身びしょ濡れになりながら床に倒れ、涙を出しながら蓮鬼を見た。

「はぁ…はぁ…す、すいません…蓮鬼…はぁ…お姉さま…」

荒い息をしながら謝る咲希。蓮鬼は冷血な目で咲希を睨み付けた。

「もういいわ…」

蓮鬼はそう言いながら床に倒れる咲希に近づき咲希の顎をつかみ上げた。

「それで？邪魔した奴ってどんな奴なの？」

蓮鬼はそう言って咲希の顔を見ながら微笑んだ。

**動き出す炎（後書き）**

次回は銀時を出したいと思っています。

## 心情（前書き）

今回、すごくグダグダです。

## 心情

打ち止め

「なんだか最近ミサカたちの出番がないねってミサカはミサカは本を読んでる一方通行に言ってみる」

一方通行

「ああ…そうだな…」

打ち止め

「む…ってミサカはミサカはちょっと怒ってみたり」

一方通行

「あー、うるせエぞクソガキ、それ以上ーごがっ。俺の言語能力を取り上げないでくださいってっただろっ！」

打ち止め

「ミサカはミサカはそんな罵詈雑言をするために代理演算しているわけじゃないもーんってミサカはミサカは一方通行にお仕置きしてみたり」

一方通行

「このガキ……………ぶっ殺す…！」

第五十三幻想 心情

綺麗な星が見える広場の大きい木の下。

銀時は木に背を預けて空を眺めていた。

「……………」

星がいくつもある空を見ながら一言も喋らない銀時。  
するど…

「何してるの、銀時？」

突然、横から声が聞こえ銀時は驚きその声がした方向を見た。

すると、そこには真っ白な修道服を着たインデックスが立っていた。

「い、いきなり出てくんじゃぬーよ……！」

銀時はそう言ってインデックスを見た。

「何そんなに驚いてるの？」

「な、何言ってるんだ、別に驚ろいたわけじゃぬーよ。た、ただ少しビクッってなったただけだ」

「それって驚いたと変わらないかも」

驚いたことを隠そうとする銀時にインデックスはにっこりと笑い銀時の横に座った。

そして銀時は横に座るインデックスに声をかけた。

「…なんで俺の所に来たんだ？」

「一人じゃ寂しそうかもって思って」

銀時がそう聞くとインデックスはそう言って空を見上げた。銀時は  
そんなインデックスを見て自分も同じように空を見上げた。

そして時間が少しずつ経っていった。

すると、インデックスが口を開いた。



「ねえ、銀時って緑子と昔の自分を重ねあわせてない？」

そう言われた銀時は驚いたようにインデックスを見た。

「……………なんでそう思うんだ？」

銀時がそう言ってインデックスに聞くとインデックスは表情を少し暗くした。

「だってあの時、銀時の顔が昔の銀時の顔に似てたもん……」

インデックスはそう言って武州で見た銀時の事を思い出していた。

銀時はそう言うインデックスを見た後、まるで遠くを見るかのように空を見上げた。

「……………確かに俺はあいつをてめえと重ね合わせたのかもな……」

銀時はそう言って昔の事を思い出した。

そして銀時はインデックスに昔の事を語りだす。

銀時たちが初めて攘夷志士になったあの時の事を。

## 心情（後書き）

次回は銀時、桂、高杉の過去について書きたいと思います。

## 始まりの時（前書き）

打ち止めと一方通行の話は少し休む事にしました。

## 始まりの時

### 第五十四幻想 始まりの時

ここは攘夷志士が集まるお寺。そしてお寺の門の前には銀時、桂、高杉が立っていた。

そこに髭をはやした青年が門から出てきた。

「何だ、てめーら？」

青年はそう言って銀時たちの前に立った。すると桂がその青年の前に出た。

「す、すいま、せ……ん……我々……は……あなた……」

桂は前に出たのはいいものの緊張してしっかりと喋れないでいた。それを見た高杉はため息をつく。桂をひかせて反対に出た。

「すまない、我々はあなた方に頼みがあつて来たものだ」

高杉がそう言つたと青年は頼み？と言つて高杉の真剣な目を見た。

「頼みつて言つのは何だ？」

青年は高杉にそう問つと高杉は頭を下げ青年に頼みを言つた。

「我々をどうかあなた方の仲間にしてください！」

高杉がそう言つて頭を下げるのを見た桂は同じように頭を下げた。しかし銀時だけは何もせずただじつと青年を見ていた。

すると青年は突然、笑いだした。

「ブワハハハハ！何言つてんだ、てめーらそんななりで侍気取りか？」

青年はそう言つて高杉たちを見てさらに笑いだした。高杉と桂はそれに反発して言い返した。

「俺たちは本気だ！」

「そつだ！我々は遊びでここに来たわけではない！」

高杉と桂はそう言つて青年を訴えるが青年は笑いながらそんな訴えにも耳をかさず…

「無理、無理、無理。ガキはさつさ母ちゃんところに帰りな」

そう言つて高杉たちをけなした後、門を開けた。その時…

「誰がガキだつて？」

青年はその声と首筋に触れるものを感じてその場で固まってしまった。高杉たちも同じように啞然としながら固まってしまった。なぜかと言つとさっきまで高杉の横にいた銀時が青年の首筋に刀を向けて立っていたからだ。

青年は首筋に刀を向けているのが銀時だということに気づくと銀時を見た。

「お前………いつたい………」

青年はそう言つて銀時に聞くと銀時は口を開いて答えた。



「……俺は……ただの侍だ……」

銀時がそう言って刀を青年の首からはなした。すると…

「やるじゃねーか、いい根性だ」

目が狐目で顎に髭をはやした男性が銀時たちの前にたった。

「頭!？」

青年はそう言って頭と言う男を見た。そして銀時たちも頭と呼ばれる男を見た。

「あんたは……」

銀時はそう言って刀を構えながらその男を睨み付けた。男はそんな銀時を見て、顔に似た笑みを浮かべてた。

「俺は頭の山下滝だ。てめえは何て言う名だ？」

山下はそう言って銀時に尋ねた。さっきまで睨み付けていた銀時はそんな山下の笑みに調子がくるい、頭をかきながら言った。

「坂田銀時だ……」

こうして銀時がそう言った後、高杉、桂も同じように自分の名を言った。山下はそんな銀時たちを見て頷くと銀時たちを同志として迎え入れてくれた。

その後、天人との戦争が始まった。

## 始まりの時（後書き）

今回の山下は銀魂第二巻の銀時が桂と話していた時に出た円陣をくむ中から選びました。

後悔(前書き)

ちよっと長いです。

## 後悔

### 第五十五幻想 後悔

銀時は自分の過去をインデックスに話した。インデックスは黙って銀時の話を聞いた後、銀時に尋ねた。

「……銀時を迎え入れてくれた人はどうなったの？」

インデックスはそう聞いた時、後悔した。それは銀時の表情が悲しみと後悔におおわれたからだだった。

銀時はそんな表情をしながらインデックスに言った。

「あの人は……俺の身代わりになって死んだ」

インデックスはそれを聞いた瞬間、体温が下がり胸に痛みを感じた。

〓 攘夷戦争 〓

「はああ！」

攘夷志士たちが天人と交戦中の中、銀時は白い羽織を赤く染めながら天人を斬り倒していた。

そして銀時が疲れて油断したその時…





すると銀時が斬り倒さる前に一人の男が銀時の前に立ち、身代わりとなった。

銀時はすぐさま天人を斬り倒し、身代わりになった男を見た。

その時、銀時は目を疑った。それは自分たちを心よく受け入れてくれた山下だった。

「頭……！」

銀時はそう言って山下の傷を手当てしようとして鎧を脱がした。しかし切り傷は酷く、もう助からないと銀時は悟った。

「……………つおお……………」

すると山下は最後の気力で銀時の腕を握った。

「ぎ……………銀時……………大丈夫……………か……………」

「……………な……………なんで……………なんで俺何かを……………助けたんだよ！」

銀時は下を向いて涙を流した。

「……………オイオイ、……………何泣いてんだよ……………銀時……………ガキじゃあるめーし……………」

「…………………………」

「銀時……………」

山下はそう言うと銀時の目を見た。銀時はその目を見るのと同時に山下の手が冷たくなるのを感じた。

そしてまるで遺言のような言葉を銀時に言った。

「死…………ぬ…………な…………」

山下はそう言い残すと銀時の腕を握っていた手を地面に落とした。

するとそれを見ていた天人たちが笑いだした。

「ギャハハハハ！何が死ぬんだよ！笑わしてくれるぜ！」  
「仕方ねえさ、なんだって、虫けらなんだからな！」

天人は好き放題言う中、銀時はすっと立ち上がり…

「…」

銀時は叫びながら天人に向かって走り出した。

〓 現在 〓

銀時はそんな事を思いだしていると…

「……………」  
「じめんね」

インデックスは泣きながら銀時にそう言った。

「オイオイ、何お前が泣いてんだよ」

銀時はそう言うがインデックスは泣き止まない。するとインデックスはさつき以上に瞳から大粒の涙をながした。

「わたし……ぐずっ……銀時の過去とか……見て……知った気になって……うっ……」

インデックスはそう言って泣き続けていた。銀時はインデックスを見た後、空を見上げた。

すると銀時はインデックスに問いかけた。

「なあ、なんで俺があいつを家に泊めさせねーようにしようとしたかわかるか？」

「……………」  
「……俺があいつをてめえと重ねちまってもしかしたら俺と同じようになるかもしれねーと思ってな……」

銀時はそう言うと立ち上がった。

「銀時？……………」

インデックスはそう言って立ち上がった銀時を見た。

すると銀時は空を見ながら喋りだした。

「ーっても、俺は昔の未練に惑わされてるのかもな……」

インデックスはそう言う銀時を見た。

「あいつは俺とは違う……」

銀時がそう言うインデックスは立ち上がった。

「心配しなくてもいいよ。もしそんなことがあってもきつと、とうまが何とかしてくれるもん」

銀時はそう言うインデックスの瞳を見た。その瞳は絶対という確信があるような瞳だった。

銀時はそれを見た後、インデックスの頭に手を置いた。

「ありがとつな。……じゃあ帰るか」

銀時がそう言うインデックスはいつもの銀時に戻ったとわかると笑顔で頷いた。そして銀時たちは星空のした万事屋へと帰っていつ



た。

## 後悔（後書き）

頭で話は出来ているんですが文で書くとなると大変です。次回は万事屋に不幸が…

## 逃亡1（前書き）

今回は土御門と青髪を出しました。

## 逃亡1

### 第五十六幻想 逃亡1

インデックスと一緒に万事屋に帰ってきた銀時はある光景を見て固まっていた。

それはまるで嵐に襲われたのかといたいようなぐらい部屋が荒らされていた。そして床にはあちこちにでかい犬の足跡が残っていた。

インデックスはその光景を見て、口を開けて呆然と見ていた。すると横から殺気を感じ、インデックスは汗をかきながら横に向いた。

そして横に向いた先には銀時が口をニヤリとさせて木刀を抜いていた。

「はは……やっってくれるじゃねーか……あいつら……」

銀時がそう言うとインデックスは焦りながら何かの間違いだよつと銀時を説得するが銀時の耳には入らず……

「あのクソガキどもオオオオオオオオオオ！！血祭りにしてやらアアアアアアアアアアアア！！」

銀時はそう言って部屋を飛び出した。インデックスはあの怒りようを見てまずいと思い銀時の後を追った。

「恒道館道場」

新八たちは今、恒道館道場に逃げてきていた。

「はあ、やべえよな…」

上条はそう言って天井を見ていた。すると部屋の奥から土御門と青髪が出てきた。

「心配ないにゃー。いざとなったらオレたちが足止めするにゃー。」

「まかしときや、カミヤん。」

土御門と青髪は上条にそう言って微笑む。すると新八が上条たちに言った。

「できればの話ですがね……………」

そう言われた上条たちは、えっ？と新八を見た時…

「あゝ何か凄い速度でこっちに向かってくるのがあるんですけど…」

緑子が上条たちにそう言った。上条たちは何がと言うと突然、定春が吠えだした。

「やばいアル！銀ちゃんが来るネ！」

神楽は定春が吠えるのを見て上条たちにそう言った。上条たち急いで立ち上がった。

「カミヤん！早く逃げるにやー！」

「すまねえ！土御門、青髪！」

土御門は上条にそう言つと上条は礼を言つて急いで逃げた。そして土御門たちは上条を見送つた後。堂々とした姿勢で道場の門に歩いて行った。



銀時は物凄い速さで恒道館道場にたどり着いた。インデックスは後ろから息を切らしながら銀時の後ろについてきていた。

そして銀時は門を通りぬけ中に入るとそこには土御門と青髪が庭の掃除をしていた。さっきまでの姿勢とは違いまるで今まで掃除してたと言う姿勢で銀時を見た。

「にゃー。どうしたんだにゃー？」

土御門はそう言って銀時に言った。

「何かボクたちによう」

そして青髪が冗談のつもりで銀時に言おうとした時…

「ぐびゃあああああ！！！？」

青髪は銀時にドロップキックを入れられ、地面を転がりながらバタツと倒れて動かなくなった。

土御門は口を開けて青髪を見ていると突然、肩を捕まれた。

「おい、ここにいるんだろ？」

「にゃ……何が……」

土御門はそう言っではぐらかそうとした時、銀時は土御門の耳元で何かを言った。そして土御門の顔は汗だくになった。

その後、土御門は上条を裏切り、銀時に上条たちが次に行く所を教ええた。

「……また面倒くさい所に行きやがったな……」

銀時はそう言って門に振り返り、土御門に背中を見せた時……

「行くにやー！絶対ここで止めるぜい……！」  
「もうヤケクソやわあー……！」

さっきまで倒れていた青髪と裏切ったふりをした土御門は背中を向ける銀時に襲いかかった。

しかし…

「相手が悪かったな、ガキども……」

銀時は駿足で土御門たちの後ろに立ちそう言った。

土御門と青髪はゆっくりと銀時に振り返りニッコリと笑った。

「にゃあああああああああああ!!?!?」  
「ぎゃあああああああああああ!!?!?」

そして恒道館道場に二つの悲鳴が響きわたった。

## 逃亡1（後書き）

いま이었다ったら、ごめんなさい！何かおかしな所があったら感想  
をお願いします。

## 逃亡2

### 第五十七幻想 逃亡2

恒道館道場から逃げてきた上条たちは今ある一軒家にいる。そしてそこには銀時の戦友、桂小太郎と桂のペット、エリザベスがいた。

「こんな夜遅くにいったいどうしたというのだ？」

桂がそう言って上条たちを見た。すると神楽が桂に向かって…

「ツラ、お前に今から指令をだすネ！」

「リーダー……俺の質問は無視なのか」

桂は神楽にそう言うが、神楽はお構い無しに…

「今から来る敵を倒すアル。成功した暁にはラーメン奢るネ」

「リーダー……話聞いている……後、好物はそばなんでラーメンじゃなくそばでー」





声とともに玄関のドアが吹き飛び、桂に直撃した。

そして玄関のドアを吹き飛ばした者が土足で中に入ってきた。

「ちっ、逃げやがったか……」

それは土御門と青髪を血祭りにして新八たちを追いかけた銀時

だった。そしてその後ろには膝に手をつけてグッタリしているイン  
デックスがいた。

そして銀時は次に行くかと言って外に出ようとするど…

「武士ともあるう者がノックもせず家に土足で入り込むとは銀時、  
貴様もおちたな」

背中に乗る玄関のドアを持ち上げ桂が銀時を睨み付けた。

「うるさいよ、今はオメーに付き合ってる暇はねーんだよ」

銀時はそう言って歩こうとした時。

「すまないが貴様をここから先にいかすわけにはいかんだ」

桂は銀時の首に刀を向けてそう言った。

「ツラ……俺と殺ろうってーのか？」

「ツラじゃない桂だ。……リーダー命令なのでな、それもやむえん  
……」

銀時と桂はそう言って二人の間に静寂がながれた、そると…

「カツラあああ！！今日こそ年貢の納め時だぜイ！！」

真選組の沖田総悟が隊を連れて銀時たちの前に現れた。

「なっ……………何故ここが……………」

桂はそう言って銀時から離れた時……

「旦那、情報提供ありがとうございました」

「おお、ーじゃ後は任せたぞー」

銀時は総悟の所に歩きながらそう話合っていた。そして桂が呆然とするなか銀時は桂に振り向きニヤツと笑った。  
総悟は桂が驚いた顔しているのに気もくれず…

「カツラあああ！！」

と叫びながら桂に向かって行った。桂は、クソッと言ってエリザベスと一緒に逃げた。

そして銀時は桂と真選組が見えなくなったのを確認すると新八たちが次に行きそうな所を思い浮かべ、銀時は外に出ていった。

「ちょっと待ってほしいかも……」



そしてインデックスはそう言いながらも銀時を追いかけた。

## 逃亡2（後書き）

ちよつと自分ではこの小説の悪い所とかがわからないので感想を待  
ってまーす

真相（前）（前書き）

グダグダですいません

## 真相（前）

### 第五十八幻想 真相（前）

桂に足止めを頼んだ上条たちは未だに逃げていた。

「はあ、はあ、いつたいつまで逃げたらいいんだよ、はあ……」

上条は息をきらせながら新八たちに嘆くと……

「はあ、銀さんを……はあ、はあ……まいたらですよ。」

新八は上条に振り向きそう言って前を見た、その時、見覚えのある金髪と青髪が立っていた。

それはさっき身代わりになってくれた土御門と青髪だった。

「お、お前ら!?!」

上条はそう言って土御門と青髪に話かけようとした時……

バツ！！

土御門たちは両腕を広げた。それはまるで上条たちを通さないような行為に見えた。

「お前ら……」

上条はそう言って立ち止まった時。

「よくやったな、金に青」

土御門と青髪の後ろから一人の男がそう言いながらこっちにむかっ  
てきた。

そして上条たちはその人物を見て固まった。そこには坂田銀時が額  
に青筋を浮かべて立っていた。

「ぎ……銀さん……」

「散々、逃げ回ってくれたじゃねーか。新八くん」

「あ……いや、これには事情が……」

銀時にせめられる新八は誰か助けてと後ろを振り向くと…

ダダダダダダッ

すでに上条たちは新八を無視して逃げていた。すると今度は上条たち側の方にインデックスが立っていた。

「インデックス!？」

上条がそう言って驚く中、インデックスは目に涙を浮かべ…

「とうま……!!もう逃げないでよ……!!」

そう言って大泣きしました。上条は慌てインデックスに近寄り泣き止まそうと努力した。残された神楽、緑子、御坂、定春はただ呆然と見ているしかなかった。

そして上条たちは銀時たちに捕まり土御門と青髪を残し全員で万事屋に帰った。

「万事屋」

万事屋に帰ってきた銀時たちは座るためのソファを直し座っていた。そして室内に静寂が流れた。すると銀時が上条たちに言った。

「オイ、オメーら、罰として晩飯抜きな」



そう言われた上条たちはデカイ声で、えええええつと言った。すると横にいたインデックスが銀時に目に涙を浮かべながら尋ねた。

「ね……ねえ、それって私も抜き……」

「うなわけねーだろ。それより喜べ、明日は沢山食べれるぞ」

「ええー!!! 本当、銀時!!!」

「ああ、本当だ。だからあんまはしゃぐな」

銀時がそう言うつとインデックスは大はしゃぎした。

「やったー!!!」

「やったーじゃねーよ!!!」

そしてインデックスが喜びの言葉を言うと上条がツツコミをいれた。そして上条は銀時に言った。

「俺たちは別に銀さんに腹立ててやったわけじゃなくて」

銀時は上条がそう言うのを待っていたように上条に聞いた。だした。

「ほお、だったら何でこうなったのか話してもらおうじゃねーか」

そう言われた上条は銀時に真相を話始めた。

「数時間前」

銀時が出ていきその後インデックスが銀時の後を追った。そして上条たちは何も話せず空気が重くなっていった。

新八はそれに耐えきれなくなり上条たちに喋りだした。

「そ………掃除しましょ！掃除！」

新八がわけのわからない事を言い出したのに対し上条たちは一瞬間まってしまった。

「アンタ、いきなり何言ってるのよ」

御坂がそう言っていると神楽が御坂に言った。

「だめネ、新八は時々わけのわからないことを言うアル、だから気に入らたらそんネ」

「えっ…そうなの。」

「そうアル、前はいきなりしりとりとかしよって言い出したネ」

御坂はその話を聞くと新八を軽蔑した眼差しで見た。

「何ですか、その軽蔑した目は!!!?」

新八はそう言っただけで御坂と言っているとう上条が立ち上がった。

「いや、掃除でもやるか」

上条は新八の意見に賛成し御坂たちは不満をもっていたが結局全員でやることになった。

しかし…

この時、あんな事が起きるとは誰も予想していなかった。

真相（前）（後書き）

何かおかしな所があるなら感想と一緒にアドバイスをお願いします。

真相（後）（前書き）

ちよつと長いです。後、次回予告と少し聞きたいことがあるので後書きを見てほしいです。

## 真相（後）

### 第五十九幻想 真相（後）

新八の案により上条たちは万事屋を掃除する事になった。

新八はソファアの周り、神楽は風呂場と廁、御坂は銀時の部屋、上条と緑子はキッチンの周り、を掃除することになった。

新八はいつもやっているのか手慣れた手で掃除していた。

上条と緑子はというと、緑子は洗剤で食器を洗い、上条は何かの棒で溝を掃除していた。

「それって何なの？」

緑子は上条に聞いた。

「ああ、これは…まあ……………お手軽な掃除グッズだな」

上条はそう言っつて緑子に手に持っていた棒を見せた。それは割り箸に何かの布を巻き、何個かの輪ゴムで止めた物だった。

「すっごーい！！上条って天才？」

緑子はそう言っつてその棒を見ていた。上条は苦笑いをしながら

(なんか俺が発明したとか思っつてんじゃねーか…)

と思っつていた。そして上条は緑子に食器をかたづけするように言っつた。

しかし、これが悲劇の始まりだった。



ガシヤァン！！！！！！

突然、皿が割れる音が聞こえ上条はその音がした方向に振り向いた。そこには皿があちこちに散らばっており、その近くでは緑子が倒れていた。

「お、おい……………大丈夫か？」

上条はおそろるおそろる聞いて見ると緑子は起き上がり割れたさらを拾おうとした。上条は拾うのを手伝おうと動いた時。

ゴン!!!?

「がっ!!!?!」

上条の頭に廁を掃除するはずのブラシが当たり上条は声を出しながら倒れた。緑子は倒れた上条に驚きさつきまで手に持っていた皿の破片を落とした。

倒れていた上条は何かを察知したのか目を開けると…

上から皿の破片が顔目掛けて落ちてきた。

「うおっ!!!?!」

上条はそれを床を転がってよけた。そして上条は壁に体を衝突したが何とか危険を回避した。緑子は上条を見てごめんなさいと言って上条に駆け寄ろうとした時、緑子は足元にあった皿の破片を蹴ってしまった。

そして蹴られた破片は上条目掛けて飛んできた。

「いつ！？うおっ」

上条は素早く立ち上がり飛んくる破片を回避した。そして飛んできた破片は壁にグサツと刺さった。

「いっ！ごめんなさい！…ちょっとドジって」

「お前……ドジって……ドジのレベル越えてるだろ……」

上条は壁に刺さった破片を見ながら冷や汗をかきそう言った。

ちるじ…

「ヘルス！ヘルスミーー！！」

神楽の声が部屋中に響き渡った。

上条は、なんだ？と言ってその声がる部屋にむかった。するとそこには…

「トシトシトシギブトシッ…」

神樂が泣きながらゴキブリから逃げていた。しかし実際はゴキブリが定春に追いかけてたただ逃げているだけだった。

上条はそれを呆れて見ていると…

「ぎゃああああああああ！…！」

今度は御坂の音が響き渡った。

上条はその声を聞き急いで銀時の部屋に向かった。すると新八が倒れていた。

そして上条が新八に駆け寄ろうとした時。

バチバチバチバチバチバチ！！

銀時の部屋から電撃が放たれていた。上条は先にこっちなど考え、幻想殺しを使い何とか室内に入り込んだ。

すると御坂は顔を真っ赤になりながら頭に電気をはしらせていた。そして御坂の足元には何かの本が落ちていた。

上条は床に落ちている本はいったい何の本なんだ？と考えたが、今はそんなことを考えるなど言い聞かせい御坂に向かっていた。

そしてやっと騒動はおさまった。しかしあまりにも室内は酷く全員は固まってしまった。

「現在」

上条はそう言っつて銀時に真相を話した。するとインデックスが上条に尋ねた。

「ねえ、とうま？なんで逃げたの、銀時なら簡単に許してくれたよ」「いや、それが、銀さんに言っつても多分許してもらえないって…あの人が」

上条はそう言っつてある人物を見た。それは一番初めに掃除をしようと言い出した新八だった。そして周りの目が新八に集中した。

新八はなんでと叫びまくっつてっていると、やがて銀時がゆっくりと口を開いた。



「新八…」

そう言う銀時の声は優しい声だった。

「ぎ…銀さん………」

「しょうがねえよ、なっちまったもんわな。ま、結果はどうあれよ  
かったと俺は思う」

「いや、何がですか？ってか、このセリフって僕がやられる時のセ  
リフですよね」

新八はそう言うて逃げようとした時…

ガッツ！！

新八は神楽と定春に左右の腕を掴まれ動けなくされた。

「いやアアアアアアー！！！！？逃がしてエエエエエエエエ！！！！」

新八はそう言うて振りほどこうとするが馬鹿力の神楽と馬鹿デカイ  
定春からは逃げられなかった。そうしているうちに銀時が段々と近  
づいてきて…

「ただな、新八」

銀時は微笑んだまましばし間をとり…

「ーやっばお前のせいだろうがあアアアアアアアアアアアアアアアア  
！！」

銀時は豹変して怒声を上げて新八に襲いかかった。

「ぎゃあああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

新八は銀時にボコボコにされまくった。そしてそれを見ていた上条  
たちはただ手を添えることしか出来なかった。

真相（後）（後書き）

次回は銀さんと緑子の言い争いです。後聞きたいこと何ですが、緑子の商店街のおばちゃんぐらいにケチと言つのはどういふふうに書けばいいのか、わからないのでちょっと教えてもらいたいです。

## 食へすぎ(前書き)

今、思うと60って結構書いたんだなとちょっと驚いています。

## 食べすぎ

### 第六十幻想 食いすぎ

昨日の出来事から一日がたち銀時たちは今、ファミレスに来ている。

「あ…あの〜…」

緑子は銀時に声をかけた。そしてその銀時と言つと…

バクバクバクバクツ！！

テーブルに並べられた沢山の料理を神楽、インデックスとともに物凄く早さで食べていた。御坂と上条はそんな銀時たちを唾然として見ていた。

「あ？どおしだ？」

銀時は口に食べ物を入れながら緑子を見た。

「こんなに食べて大丈夫なの？」

緑子はそう言っていてまだ食べ続ける神楽たちを見た。

「心配いらねーよ、お前の金があるからな」

銀時はそう言っていて心配する緑子に対しニヤツと笑って依頼金が入った袋を見せた。

緑子は軽く青筋をたてたが銀時はお構い無しに店員に料理を注文しようとした時、上条が銀時に待ったをかけた。

「ちょっと！！銀さん」

「ああ？どうした、上条」

銀時はそう言って不機嫌な目で上条を見た。

「いや……そろそろこれぐらいにしかかねーと、やばいんじゃない

かつて……」

「やばいって何?」

上条の心配に対し銀時がそう言つたと上条は銀時にこそこそつと言つた。

「……インデックスとかがアホほど食いまくつて……とか……」

「お前も心配性だなあ」

銀時はそう言つて上条を無視して店員に注文を頼もうとした時、御坂と緑子が無かを見て唾然としているのに気づいた。銀時は、うん? って言つて御坂たちの視線の先を見た。



「ふう、もう食べられないかも……」  
「ひっひっふー、ひっひっふー、妊娠したアル……」

そこには神楽とインデックスが食いすぎてイスにもたれかかっていた。そしてテーブルの上には定春ぐらいの大きさを山積みになった皿が二人分どっさりであった。

銀時はそれを見てどっと汗をかいた。

「ぎ、銀さん……」

「……………だ……大丈夫だってこれぐらいで依頼金がなくなるわけ  
ねーよ」

上条に銀時はそう言って緑子の依頼金の金額を確かめた、その時……

「あゝ……………」

ファミレスの店員が銀時の元に来た。

「今しがた店内の食料が尽きたので申し訳ありませんがお会計を……」  
「お、おう……………」

銀時は頬に汗をかきながら店員からお支払の金額が書かれた紙をもらった。

そして紙に書かれた金額を見た。

「…………二十五万……三千五百円……」

銀時はその額を見て、緑子からもらった依頼金を見た。

五万足りなかった。

銀時はそれを見た後、土下座をしながら緑子頼んだ。

「た、たのむ、金貸してくれエエエエ!!」

緑子はそう言って頼んでくる銀時に対しお金を貸してあげようかと思っただが、さっきの事を思い出し顔をそっぽ向け断った。

「いやよ!!あなたが勝手に自滅したんでしょ!!」

「そんなケチなこといわねーで頼む!!」

銀時はそんな緑子にしつこく頼むと緑子は大きな声で断った。

「いい~~~~~やつ!!」

緑子はそう言って席を立ち店を出て行ってしまった。

「…………じゃ、割り勘でー」

銀時はガツクリとしてそう言いながら上条たちを振り返ると…

山積み皿だけを残り、上条たちは消えていた。

銀時はそれを見た後、爽やかな笑みを浮かべると、店員に向き直り…

「すみません、ツケといてください。」

銀時は店員にそう言った。すると店内の奥から包丁を持ったコックたちが銀時を取り囲むように集まった。

「ぎゃああああああああああああああ……!?!?」

そしてファミレスから銀時の叫び声が響き渡った。

## 食べすぎ（後書き）

緑子の言葉使いがちよっとわからないので教えてもらいたいです。後、この次なんです。が銀魂の人たちともうちよっとドタバタするか、早くバトル系に行くかで悩んでいます。良ければどちらがいいか感想と一緒に送ってほしいです。

## へドロ再び(前書き)

少しダメになってきたかもかも…後、後書きも良ければ見てくださ  
い。



## ヘドロ再び

### 第六十一幻想 ヘドロ再び

銀時を見捨てた上条たちは今、万事屋に帰ろうとしていた。

「うゝ……お腹くるしいかも……」

「バカみたいに食べるからだろ」

上条はお腹を手でおさえながら唸るインデックスの背中を叩きながらそう言った。そしてそうしている間に万事屋についた。

そして上条たちはソファーに座ってまるで自分の家のようにくつろいでいた。

すると、さっきまで唸っていたインデックスが何かを思い出し上条たちに喋りかけた。

「ねえ、ねえ、これからヘドロさんに会いに行かない?」

インデックスがそう言ってヘドロという名を出した時、顔を青くする人物がいた。

「アンタ、大丈夫？」

御坂はそう言って顔を青くした人物に声をかけた。

「だ、大丈夫アル…」

そう言って苦笑いをする人物は以前、インデックスのお陰で大変な目にあつた神楽だった。

そして神楽と御坂がそう言って話している間にインデックスと上条はすでに話を終えていた。そして上条がソファアールから立ち上がるのを見て、御坂が上条に尋ねた。

「ちょっと、アンタたちどこ行くの？」

「さっきインデックスが言ってたヘドロっていう人の所だよ」

上条は御坂にそう言って玄関へと向かった。そして御坂が何か言いたげな様子で上条を見ているとインデックスが御坂と一緒に行く？と御坂に尋ねた。

御坂は顔を赤くしながら仕方ないから行ってあげると言ってインデ

ツクスと一緒に玄関に向かい上条たち三人はヘドロに会いに外へ出て行った。

そして万事屋に残った緑子は神楽に尋ねた。

「ねえ、ヘドロっていったいどんな人なの？」

神楽はそれを聞いて顔を下に向けながら緑子に言った。

「とっても怖い鬼アル……………」

緑子はそれを聞いて頭をかしげた。

そしてその頃、上条たちはへドロが住まうへドロの森と言つ店の前に立っていた。

「へドロの森」

普通の家がならぶ住宅地の中、大きな木が家と合体している家がへドロが住まう家だ

「.....」  
「.....」

そして上条と御坂は口を開け呆然としながらへドロの家を見ていた。

そして上条はすぐそばではしゃいでいるインデックスに尋ねた。

「……なあ、インデックス…」

「何、とうま？」

「ここってホントにヘドロさんっていう人の家なのか？」

上条はヘドロの森に指をさしながらそう言った。

すると家の奥から誰か出てきた。上条は直ぐ様、指を下ろした。

そして上条と御坂は奥からの出てきた人物に驚愕した。

「あ、インデックスさんじゃないですか？」

その人物はインデックスが上条に言っていたヘドロだった。そしてヘドロは上条たちが固まっている中インデックスに喋りかけた。

「遊びに来たんだよ！」

インデックスはそう言ってヘドロに挨拶をした。

そして上条たちにヘドロを紹介した。

「とうま、紹介するね。私の友達のヘドロさんだよ」

「どうも初めまして、ヘドロの森を営んでいる屁努組です」

上条と御坂は、ヘドロの顔の恐さにたじろぎながらも自分の名前を言った。

「……………どーも、…上条当麻です…」

「……………御坂美琴です…」

するとヘドロは何故か嬉しそうな笑顔で上条たちに喋りかけた。

「上条さんに御坂さんですね。今日はどういったご用でしたんですか？」

ヘドロがそう言って上条たちに聞くとインデックスが横から入ってきた。

「一緒にヘドロの家に遊びにきたの!」

インデックスはヘドロにそう言うとヘドロは凄く嬉しそうな顔をして上条たちを見た。上条は顔をひきつりながらどうするっと御坂に相談しようと思つた時…

御坂は忍び足で逃げ出そうとしていた。

上条はそんな御坂の肩を掴んだ。

「おい、何エスケープしようとしてんだよ」

「え、……ちよつと私、さっき食べすぎてお腹が」

「嘘ついてんじゃないよ。お前さっきそんなに食べてなかったろ」

上条はそう言つて涙を流す御坂の腕を引っ張り一緒にヘドロの家に入った。

「室内」

上条たちはヘドロの家に入って今は床に座っていた。

ヘドロはまるで日本昔話みたい包丁を研いでいた。

上条はそれを見て、横で座っている御坂に喋りかけた。

「…おい、何か日本昔話みたいに包丁研いでるんだけど」

「あゝ、聞きたくない聞きたくない！」

「いや、でも」

「ああー、うるさい！！お願いだから喋りかけないで！！」  
「おい！？何、自分だけバニックってんだよ！？俺だってな、本当だったら二階から飛び降りたいくらいバニックになってんだよ！！」

そう言つて上条は御坂に涙ぐみながらそう言つた。

すると…

「上条さん」

突然、ヘドロが上条に喋りかけてきた。

「はい！！」

上条は体をビクツとさせながらヘドロに、はいと答えた。

そして上条はヘドロの顔を見た。ヘドロは包丁を持ちながらゆっく  
りと上条に振り返つた。

「ダメじゃないですか。レディは優しくしないと、暴言はいけない」



へドロは赤い目をギロリと光らせながら上条にそう言った。

上条は顔を青くさせながら、はいつと答えた。

すると横で座っていた御坂が上条に対しゲラゲラと笑った。

「あーっはっはっはっは！！」

すると…

「御坂さん」

へドロが御坂に声をかけた。

「っはーっはー、何？」

御坂は笑いをこらえながらへドロを見た。すると御坂の顔が一瞬にして真っ青になった。

「少し……静かにしましょうか……」

へドロは包丁をキラリと光らせると赤い目で御坂を見ながら言った。

「……………はい……」

御坂は体をガクガクと体を震わしてそう言った。

そしてやっとへドロの家から外に出た時にはインデックスを除く上条、御坂は疲れきった表情を浮かべていた。

そして上条たちはもう二度とへドロには会わないと決意した。



## へドロ再び（後書き）

何かアドバイスがあれば感想に書いてもらえると思います。後、何かリクエストがあればこちらもよろしく願います。

## 水の出現（前書き）

一応、ここからバトル編で行きたいと思います。

## 水の出現

### 第六十二幻想 水の出現

「……………あいつら……………」

銀時は眉間にシワを作りそう言いながら一人の女性と一緒に道ばたを歩いていた。

「まったく、ぬしは何をやっとるのじゃ」

そう言う女性は昨日、銀時と一緒に情報収集に行った月詠だった。そして何故、銀時と一緒に歩いているかという点、それは一時間前にさかのぼる。

「一時間前」

月詠は銀時たちを捜していた。

「まったく…やはり銀時に頼んだのが失敗じゃったか」

月詠は青筋を立ててそう言った。そして月詠が左手にあるファミレスに通りがかった時…

「おい！！銀髪！！はよせえや！！！！」

ファミレスからヤクザのおっさんが言ったような声が聞こえた。

しかし月詠はそんなことよりも、ファミレスから聞こえてきた銀髪と言つ言葉に反応した。

「……………ふっっ」

月詠は目を赤く光らせながら大きく息をはき、手に無数のクナイを掴んだ。

「銀時イイイイイイイイイイイイ!!!!!!」



月詠は怒りながらそう言っつて無数のクナイをファミレスの自動ドアに向けて放った。

バリン！！バリン！！バリン！！バリン！！！！

自動ドアは激しく割れる音とともにあちこちに散らばった。

そして月詠は割れた自動ドアのガラスを踏みつけながらファミレスの中に入った。

すむと…

「月詠オオオ！！ヘルプウウウウ！ヘルプミィィィィィィィィィィ  
イ！！！」

銀時は手足を天井に吊るした縄で吊るされながら宙に浮いていた。  
そして銀時の真下には一本の包丁が銀時目掛けて立てられていた。

月詠はそれを見て怒りを忘れて呆然とした。

その後、月詠は足らなかった金を出して銀時を解放した。

「現在」

そして今、銀時たちはもうすぐ万事屋に着こうとしていた。

すると銀時は月詠を見ないで月詠に喋りかけた。

「おい……………気づいてるか？」

「当たり前じゃ、わっちを誰だと思っておる」

月詠は銀時の問いにそう答えた。そして銀時と月詠は二人でこそそそと喋ると次の瞬間、二人は動いた。

銀時は左、月詠は右と交差する所を二人はわかれた。

そしてそれから二十分がたち道を左に曲がった銀時は人気がない路地で歩くのをやめた。

「やっぱりテメーの狙いは俺か……」

銀時はそう言いながら確信があったような笑みをみせ後ろに振り向いた。

そしてそこにはフードを頭に被った咲希が銀時をにらみながら立っていた。

## 白夜又再び（前書き）

この頃、段々と文章が変になってきているような気がします。

## 白夜又再び

### 第六十三幻想 白夜又再び

人気がない路地で今、銀時は目の前にいる咲希と向かい合っていた。

銀時は何も喋らない咲希に木刀を抜きながら喋りかけた。

「オイ、他人と喋る時は顔を見せて喋れって母ちゃんから習わなかったのか？」

「……………」

しかし咲希は銀時の言葉に耳を傾けなかった。

するとさっきまで黙っていた咲希が口を開いた。

「……………緑子は何処……………」

「ああ？何、聞こえないんだけど？」

銀時はそう言う咲希にもう一度、何を言ったのか尋ねた。すると……

「緑子は何処なのオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

咲希はまるで虎が吠えたような声を出した。そして咲希が声を出したと同時に咲希の周りから大量の水が溢れるように出てきた。

「……………」

銀時はそれを見て月詠が言っていたことを思い出した。

そして銀時がそんなことを考えていると咲希は銀時目掛けて銃のよっくにさつき出した水を豆粒サイズにして銀時に放った。

「くっ！！」

銀時は銃弾のように飛んでくる水を見て、まずいと感じ、横に走った。

ドゴッ……



しかし銃弾と変わり果てた水は銀時のわき腹を一直線に通り返けた。

「ぐっ!？」

銀時は痛みに声を出しわき腹を手で押さえた。

そして銀時は前に立つ咲希を見た。すると銀時は次の瞬間、目を疑った。

それは咲希が顔半分を大きな火傷で染めていたからだった。

「お前……」

銀時はそう言って咲希に声をかけようとした時。咲希が目から涙を流しながら叫んだ。

「緑子は何処なの！！！！……お願いだから教えてよ！！！！！！！！」  
「……………」

銀時は叫ぶ咲希ただ黙ったまま咲希を見た。咲希は叫んだ後、まるで暴走したように水を銀時に連続で放った。

すると銀時はただじっと立ったまま回避をしようとしなかった。

ドコッ！…バシヤッ！…！！

そして咲希が放った水は見事に直撃し、銀時がいた場所は水が地面をえぐった事で煙でおおわれた。

「はあ、はあ、はあ……」

咲希は荒い息をしながら銀時がいた場所を見た、すると煙の中から白い羽織がかすかに見え咲希は目を見開いた。

そして段々と煙が消えてくる中、白い羽織をきた男が立っているのに咲希は声を出しながら驚いた。

「な……………なんで……」

そして咲希がそう言っている間に煙がはれ、その男は木刀ではなく刀を手に持ち真っ赤な瞳で咲希を睨み付けた。

まるで、鬼神のように。

そして咲希はその瞳に蓮鬼とはまた違った恐怖を覚えた

「な……なんなのよ……あんた……」

咲希の体を震わせながらその男にそう言った。そして男は咲希の問いに答えた。

「坂田銀時……これで満足か？」

その男、銀時は咲希に向かってそう言った。

そして銀時の姿は白夜又そのものだった。

白夜又再び（後書き）

感想があればよろしくお願いします。

過去の鏡（前書き）

何か連続で書いてみたんですけど……どうだろう……

## 過去の鎧

### 第六十四幻想 過去の鎧

銀時は咲希にそう言った後、自分の姿を見た。

(……………アイツのいった通りだな)

銀時は頭でそう言いながら昨日の事を思い出していた。

「昨日」

銀時が恒道館道場に行き、襲ってきた青髪と土御門をボロボロにした時。

「オイ、起きろ、金」

銀時は気絶した土御門の顔を何発か叩き土御門を起こした。



「にゃ!?!? すいませんでした!?!? どうか」

土御門は銀時に起こされもつ一度殴られると思い土下座した。

「許すも許さねエもお前の答えしだいだな」

銀時は土御門にそう言った。土御門は顔を上げて、にゃつと言った。

「体が変？」

土御門は銀時にそう言われ頭をかしげた。

「ああ、どーもあの杖ヤローにあっってから体が気持ちわるくてよー  
…」

銀時はそう言っつて肩を手でトントンと叩いた。土御門はそう言っつ銀時を見て何故か深刻そうな顔をした。

「…もしかしたら魔術の後遺症かもしれないぜい」  
「魔術の後遺症？」

土御門は銀時にそう言っつと銀時は、は？っとした感じで土御門を見た。すると土御門は何かを考えたのか銀時に質問した。

「なあ、体以外に何か変わったらことは無かったぜい？」  
「別に他にはねーぞ」  
「……………じゃあ最近、昔の事を思い出すっつてことは？」

銀時はそう言われ黙ってしまった。土御門はそんな銀時の顔を見て何かを確信した。

「現在」

そして今、銀時がそんな事を思い出していると、咲希は上空に大量の水を集めていた。

「す…姿が変わったからってそれが何なのよオオオ!!!」

咲希はそう言って上空に集めた水を雨のように高速で銀時に向かって放った。

しかし銀時は何もせずただ迫ってくる水をじっと睨み付けていた。

そして土御門に言われた事を思い出していた。

「まず、体が変わっているのは間違いなく魔術の後遺症だにやっ。だが、その後遺症は今の状態を見るとアンタに定着したんだろう」

「定着？つまり何、もしかして一緒とれないってこと」

「にゃー。心配しなくてもカミヤんに頼めば大丈夫ぜい。…ただそれよりそれが定着したってことは、アンタ…多分、魔術が使えると思っぜい」

「かめはめ波アアア!!!」

「いや、そんなのじゃないにゃ!!!」

銀時は今、危機がせまりかかって来ているにもかかわらずそんなことを思い出して小さく笑った。そして…

.....

放たれた水はシャワーのように銀時に直撃した。

咲希はやったかと思いつながら自分が放った水を見ていた。

すると…

「邪魔だ…」

銀時の声が普通なら喋れないはずの場所から発せられた。

そして次の瞬間。

ザァン！！

水はまるで何かに弾かれたように周りに飛び散った。

そして、その弾いた中心には、あれだけの水が放たれたにもかかわらず、全く濡れていない銀時の姿があった。

「なんで！！なんで無傷なのよ！！」

咲希はそれに驚き銀時にそう言った。

すると銀時は頭をかいて答えた。

「しらねーよ。何か金が言つにはこの姿は俺を守る為の魔術の鎧なんだよ」

「ま…魔術の…鎧…」

咲希は銀時にそう言われわけがわからなくなっていた。

そして銀時はそんな咲希を気にせず刀を咲希に向けながら言った。

「っじゃあ、次は俺の番だ…」

過去の鏡（後書き）

次回、白夜叉モードの銀さんが戦います。



神速の夜叉（前書き）

銀時と魔術って言うのは…少しやり過ぎた気がするようなしないような感じですよ。…もしやり過ぎだと思ったらちよっと言ってほしいかも…

## 神速の夜叉

### 第六十五幻想 神速の夜叉

咲希は銀時に全く攻撃が通じないという事に驚いた。そして銀時が、次は俺の番だつと言ったのを聞き咲希はかまえた。

すると次の瞬間…

シュ…

咲希の視界から銀時が消えた。咲希は周りを見渡して銀時が何処に行っただのかと思っただその時。

ドコッ！！

咲希は何か腹を叩かれそのいきよいで後方に倒れた。

咲希は、一体何が起こったかと思いつつ痛みをこらえて立ち上がった。

するとさっきまで居なかった銀時が目の前に立っていた。その時、咲希は自分が何に叩かれたのかを理解した。

それは銀時が持つ刀によるものだった。しかし銀時の刀の持ち方は普通とは違い刃を裏にした状態の持ち方をしていた。

咲希はそれを見て自分は情けをかけられた事に怒りを感じ銀時を鋭い目で睨み付けた。

「っ……… ippitai…何のつもり…」

そして咲希は銀時に向かってそう言った。

「……………」

しかし銀時はそう言う咲希の言葉を聞かずただ真っ直ぐと咲希を睨み付けていた。

そして咲希は銀時のその態度に上条と戦った以上の怒りを見せた。

「貴様アアア！！、いい加減にしろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

咲希は銀時にそう叫びながら上空に大量の水を集めた。そして集まった水は段々と形を変え、形が整った時、上空に集まった水は鬼の顔となっていた。

その大きさは江戸を水没させるに十分なぐらいの大きさだった。

それから咲希はその鬼の形をした水を今、目の前に立っている銀時目掛けて叫びながら放った。



咲希はその言葉を笑うのを止めた。そして銀時に、馬鹿じゃないの  
つと言おうとした時。

銀時の体が真っ白な光で覆われた。

「てめーが無駄って言った事がホントに無駄かどうか」

そして銀時そう言いながら体を跳躍する体勢にし…

「しかとその目ん玉に焼きつけな!!」

銀時はそう言って体を白く光らせながら跳躍した。それはまるで白  
い龍が天に昇るかのようだった。

そして銀時は届く筈がない鬼の目の前に来たと同時に鞘に納めてい  
た刀を神速で引き抜き…

「うおおおおおおおおおおお！！！」

銀時は叫びながら鬼を真つ二つに斬った。

そして水で出来た鬼は銀時に斬られた事により、細かな水に変わり雨のように地上に降り注がれた。





最後の言葉（前書き）

タイトルとあってないかも…

## 最後の言葉

### 第六十六幻想 最後の言葉

水の鬼が斬られた事により雨が地上に降り注がれた今、銀時は体を白く光らせながら地上に着地し、大きな息をはいた。

すると、銀時を守っていた魔術の鎧が白く光、一瞬にして消え銀時は普段の服装に戻った。

そして銀時は雨が降る中、地面に座りこみ、空を見上げる咲希に近づいた。

すると空を見上げていた咲希が銀時に喋りかけた。

「……………まさかあれが斬られるなんて……………思いもしなかったわ……………」

銀時そう言う咲希をじっと見ていた。

すると咲希は銀時の顔を見て尋ねた。

「ねえ？……なんで私に情けをかけたの？……私はあなたを殺すつもりだったのよ」

銀時はそれを聞くと咲希から空に視線をかえ、小さく笑い、咲希に喋りかけた。

「俺は別にお前に情けなんてかけたつもりはねーよ。」

「……………」

咲希はそう言う銀時の言葉を聞いて、黙って次の言葉をまいった。

「俺アただ……」

そして銀時がそう言って間をとった時……

雨が止み、太陽が地上を照らした。すると銀時は微笑みながら咲希の顔を見て言った。

「俺の武士道<sup>ルール</sup>をつらぬいただけだ。」

咲希はそれを聞いて心の中で覆い被さっていた何かが取れた気がした。

そして咲希は地面から立ち上がり、心の中で銀時が言ったルールと言葉を言い、咲希は銀時を見た。

そして自分の懐から何かを出して銀時に渡した。

「あん？何、これ？」

銀時は手に咲希から渡された透明な五角形のアクセサリーをのせて  
そう言った。

すると咲希は銀時に背を向けてある言葉を言って歩き出した。

「蓮鬼に……………気をつけて……」

銀時は、蓮鬼？っと言って頭をかしげながら去って行く咲希を見つ  
めた。

そして咲希が銀時から去ってから時間がたち。咲希はあまり人目に  
つかない道を歩いていた。

「…自分のルール…か…」

そして咲希がそう言って微笑んだ時。

グサッ！

咲希は後ろから何かに貫かれた。

咲希は口から血を出しながら、自分を貫いた物を見た。

それはオレンジ色をした刀だった。



そしてその刀は咲希が見たと同時に引き抜かれた。咲希は地面に倒れた。

すると咲希の耳に聞きなれた二人の声が聞こえてきた。

「……あわれね、咲希……」

「ホントにそうですね、蓮鬼お姉さま。」

咲希は意識が遠のく中、その声を聞いた後、何故か銀時の姿が頭に浮かんだ。

そして咲希は一筋の涙を流し、意識を途絶した。

## 不幸な男達（前書き）

段々、文章を書く感覚がおかしくなってきたような……

## 不幸な男達

### 第六十七幻想 不幸な男達

咲希との戦い終えた銀時は今、万事屋に帰ってきた。

「おい、帰ったぞ〜」

そして銀時そう言って玄関のドアを開けた時…

「へくちユツ!!!」

上条のくしゃみが奥から聞こえてきた。

銀時は、あん？と奥に進むと…

神楽と緑子はソファーに座って、上条、インデックス、御坂の三人は毛布を体に巻き、誰かが出したヒーターに座りながらあたっていった。

「オイオイ、なんでオメーら、そんなにびしょびしょなわけ？」

そして銀時が上条たちにそう言うのと御坂が軽く青筋を作って銀時を睨み付けた。

「いきなり空に変なのが出て、それがまた、いきなり雨に変わって傘持ってなかった私たちがびしょ濡れになった、これでいい？」

御坂は銀時にそう言ってヒーターに視線を戻した。

すると御坂にそう言われた銀時は顔をひきつらせ汗をかいた。

「そ…そりゃ………について……なかったな……」

そして銀時は、うつたえながらそう言った。

するとヒーターにあたっていたインデックスが銀時に尋ねた。

「ねえ、何で銀時はそんなに濡れてないの？」

銀時はインデックスにそう言われ体を、ビクッとさせた。

「確かに…そう言われてみればそうだよな…」

すると、さっきまでそんなに気にしていなかった上条も、確かにっ  
といいながらインデックスと同じように銀時を見だした。

そして数秒もたたない内に部屋にいた全員の視線が銀時に集まった。

銀時は汗を滝のようにかき…

「……………さっって…風呂にでも入いるとするか…」

銀時はそう言って風呂場へ歩いていった。上条たちはそんな銀時を見  
て逃げたなっとな心の中でいった。

そして御坂は銀時が見えなくなると体を震わせながら言った。

「…まあ、出てきたらきつちりとはなぐへクチュツ!？」

上条はくしゃみをする御坂を見て大丈夫か?と思った。

そして、上条はうん?つと言った。

(そう言えば何か忘れてるよーな……………)

上条は、何だっけな〜と頭をかいて考えた。するとインデックスは頭をかいている上条に尋ねた。

「どっしたの?とつま」

「いや……………何か大事な事を忘れてるよーな気がして…」

上条はインデックスにそう言っただけ、頭をかいて考えた。するとインデックスは上条にそうだねつと言い上条と同じように考えだした。

そして上条たちが頭をひねらせて考えていると御坂が上条に喋りかけた。

「ちょっと、そろそろ退いてくれないかしら？」

「え？何で？」

「アンタたち二人がヒーター占領してるからよ！！まったく、風呂出たばっかなのに風邪とかひいたらどーすんのよ」

上条はそう言って機嫌の悪い御坂にハイハイっと言って退こうとした。

すると上条は御坂が言った言葉にとても重大な言葉が入っていたよ  
うな気がして御坂に尋ねた。

「な……なあ、御坂」

「何？」

「今……何に出たばっかって言った？」

御坂は上条に何に出たばっかつと言われ顔を赤くした。

「な、何言ってるのよ！？バカ！！アンタ普通そんな事ー」

御坂はそう言って次の言葉を言おうとした時

ガシッ

「頼む御坂！何て言ったか言ってくれ！」



上条が御坂の肩を持ちそう言って近寄ってきた。

御坂はいきなりの事に顔を真っ赤にさせた。そして上条の顔を見てうろたえながら上条の顔を見ないようにして言った。

「…………お…………お風呂に出たばかり…………って…………言ったのよ…………」

すると上条はそれを聞いたとたんすぐさま御坂の肩から手を放し、風呂場に向かおうとした

ちんぷ…



上条はそれを聞いて顔に手をつき、遅かったか…っと言って後ろに振り返った。

すると…

インデックスが歯を出して、噛みつく体勢で上条を睨んでいた。

「あ…あのく、インデックスさん？何でいつにまして噛みつける体勢で睨んでー」

「うがアあッ！…」

「ぎゃあああああああああああああああああああ！…」

そして万事屋から上条と銀時の断末魔の叫びが放たれた。

「にぎやか過ぎない？」  
「いつものことアル」

緑子と神楽は、真っ赤になったまま気絶した御坂を介抱しながらそ  
う言った。

## 不幸な男達（後書き）

この頃、自分でも変じゃないかかって部分が見つけられなくなっています（長すぎて…）。なので、よかった何か変な所があったら教えてください。

## 手がかり(前書き)

月詠のしゃべり方がおかしかった教えてください。

## 手がかり

### 第六十八幻想 手がかり

万事屋の玄関前。そこに二人の男女の姿があった。

「……………すまん」

隣にいる男にそう言う女は数分前、銀時と風呂場で鉢合わせした月詠だった。

「ごめんですんだらポリスはいらねーだよ」

月詠の言葉に対し青筋をたてて言う男は、何とか月詠の無数のクナイから生き延びた銀時だった。

そして銀時は反省している月詠を見てため息をついた。

「はあ……………まあ気にすんなや、俺も見苦しいもの見せちまったしあいつにしようや」

「……あまり蒸し返してほしくないんじゃないが……」

月詠はそう言って頬を赤くした。

そして銀時と月詠の話し合う姿を神楽たちは窓から見ていた。

「あの天パ、ツッキーに何したアルか」

「いや、銀さん何もやってねーっと思うんだけど……」

上条はそう言う神楽に対してそう言った。

すると神楽の隣で見ていた緑子が口を開いた。

「それにしても何かいい感じね」

「何がいい感じ何だ？」

上条はそう言って頭をかしげた。緑子はそう言う上条を見て啞然とすると横から御坂が口をはさんできた。

「ああー、ダメダメ、このバカに言ってもわからないから」  
「なっ!?!?」



「確かにそうかも。」

上条は御坂とインデックスにそう言われ、少し落ち込んだ。

すると…

シリリリン！

部屋の奥から電話がなる音が聞こえた。上条はそれを聞いて落ち込みながら電話がなる部屋の奥に歩いていった。

そしてこうしている内に銀時たちの話は進んでいた。

「蓮鬼？」

「ああ、多分その写真に写ってる、やつこさんの名前だろうな」

銀時は三枚の写真の中から赤い髪の少女が写った写真をさした。そして月詠は銀時に貴重な手がかりを貰ったにたいし礼を言おうとした。

「……銀時…恩にきー」

「そいつは全部片付いてからにしようや」

すると銀時は月詠にそう言って微笑んだ。

月詠は少し納得が行かないような顔をしたが銀時の言っている事に一理あると思い納得した。

そして月詠は銀時に、また来るっと言って階段に向かっておうとした。

すると、玄関のドアが開き、上条が出てきた。

「あっ、ちょっと、アンタに電話！…！」

そして上条は月詠にそう言った。月詠と銀時は、は？っと言って上条を見た。

「万事屋室内」

月詠は上条に言われて家の中に入り受話器をとった。そして月詠は声を出した。

「もしもし、わっちじゃ？」

すると受話器から聞いたことがある声があった。

「あっ、ツッキー？私、日輪だけど」

その声、吉原一の花魁と言われた日輪だった。

「……………日輪…ツッキーは止めてほしいのじゃが」  
「フフッ、冗談が聞かないはね。月詠は」  
「……………でっ、いったい何のようじゃ」

月詠そう言って日輪と受話器で何やら話し合った。

銀時たちはそれをソファーに座りながら見ていた。

すると月詠は大きな声を上げだ。

「なっ……ちょっと待ちなんし!？」

しかし向こうから切られたらしくガツクリとしながら受話器を戻した。

「ツツキー、どうしたアルか？」

神楽はガツクリとする月詠にそう聞くが月詠は何も言わず銀時の前まできた。

「……銀時……」

「あん？何？」

銀時は鼻をほじりながら月詠を見た。

月詠は何やら、恥ずかしそうに顔をふせながら銀時に頼んだ。

「……………今日だけ、わっちを泊めてくれなんし……………」

銀時たちは月詠の言葉に、はっと言って固まった。

## 手がかかり（後書き）

次回、月詠が泊めてくれといった理由が明らかになったと言つ話です。

**最悪な料理（前書き）**

オリジナルのつもりで書きました。（料理名）



## 最悪な料理

### 第六十九幻想 最悪な料理

銀時は月詠の爆弾発言に驚いた。そして月詠に尋ねた。

すると月詠は今日、銀時が逃がした咲希がまた来るかも知れないからと言って銀時から顔をそらした。

そして月詠は日輪の電話内容を思い出していた。

＝日輪との電話＝

「実はね、ちょっと晴太が月詠の寝室にローションをこぼしちゃて

「……………帰ったら死刑じゃな」

「それでね……………」 「何じゃ、早く言いなんし」

「……………今日は銀さんの所に泊まってくれない」

「……………は？」

「だから銀さんの所に泊まってくれない？」

「なぜー」

「だってまだローションのヌルヌルがとれないんだもの、だからお願いね」

「なっ……ちよっと待ちなんし!？」

「現在」

そして現在にいたったわけで今、月詠はソファに座って上条が作った料理を食べていた。

「おかわり!！」

月詠は大盛りのご飯を三回おかわりをする神楽とインデックスと、それを見て普通に料理を食べている銀時たちに驚いた。

すると御坂が月詠に尋ねた。

「どうしたの？」

「…いつもこうなのか？」

「うん、まあ最初は私もひいたのよ」

御坂は笑いながらそう言った。月詠は、そうか…っと言って皿にの

っていた料理に箸をのばした。

すると月詠は皿にのっていた料理を見て固まった。

銀時はそんな月詠を見て、月詠に尋ねた。

「オイ、何固まってんだ？」

「な……何でもない」

銀時はそう言って目をそらした月詠を見て、さっきまで月詠が見ていた料理に銀時は顔を向けた。

するとそこには何やらわからない形をした唐揚げが皿にのっていた。そして銀時はその中で一つだけ何かの形に似た唐揚げを見つけた。

銀時はそれを見て月詠と顔を合わせた。そして二人は同じ事を考え銀時はソファアで料理を食べる上条に尋ねた。

「オイ、上条」

「はい？」

「これ何の唐揚げ？」

「え〜っと何だっけなあ〜」

上条はそう言って調理場から唐揚げとなった物が入っていた袋を持ってきた。

「えーっと、ガマサキって言う最初から粉がついた食材」

そして上条は袋に書かれた名前を言ってまた食事に戻った。銀時と月詠はそれを聞いて顔を青くした。

「ぎぎ……銀時、ぬしはたべー」

「まだ食ってねーよ」

銀時は月詠にそう言って神楽とインデックスを見た。そして、多分食べてるよ、アイツらっと思った。

すると、御坂と緑子が唐揚げに箸をつけた。銀時はそれを見て止めようとした。

「あ、バカ！食うな！」

しかし…

パクッ

御坂と緑子は唐揚げを食べてしまった。そして御坂は、何よつと言つてモグモグとしながら銀時に言った。

銀時と月詠は可哀想な顔で御坂たちを見た。

そして御坂は上条に聞かなければよかつた事を聞いた。

「ねえ、これ美味しいけど何の唐揚げ？」

「えーっとガマサキって言う食材」

「へ〜……………もう一回言ってくれろ？」

「いや、だからガマサキってい……………」

顔を青くさせる御坂に尋ねられた上条は御坂に大きな声でそう言った。するとそう言った上条と食べながら聞いていた神楽たちは何かに気づいた。

そして、間違ってますようにと皿にのっていた唐揚げを見た。

そこには御坂たちが食べた事によって一つだけ残ったガマサキ（蛙の形）の唐揚げが皿にのってあった。



**最悪な料理（後書き）**

次回は月詠の寝る所の話です。



銀時と月詠（前書き）

文章がダメになってきているような…。

## 銀時と月詠

### 第七十幻想 銀時と月詠

周りが暗くなった深夜。月詠は布団に入りながら天井を見ていた。そして月詠は隣を見た。

「ガーゴ、ガーゴ」

そこにはイビキをかきながら寝ている銀時がいた。

そして月詠は今の状況を見て数時間前の事を思い出した。

「数時間前」

ガマサキを食った五人が戻って来た。

「……………大丈夫なのか？」

月詠は上条たちにそう尋ねた。上条は月詠にそう聞かれ顔をひきつらせながら言った。

「だ……………大丈夫……………」

「いや、大丈夫じゃないだろう」

月詠は上条にそう言って、上条の後ろにいる御坂たちを見た。すると後ろで顔を青くしていたインデックスと神楽が寝室に向かって歩き出した。銀時はそんな二人に尋ねた。

「あん？オメーら、もう寝るのか？」

「……………うん……………」

「ちよつと……………気分悪いから寝てくるネ」

インデックスと神楽はまるで弱ったような顔をしながらそう言って寝室へと入っていった。

そして神楽たちの次に御坂たちも寝室に足を進め、そして寝室の襖に手をかけた時。

御坂は上条に振り返り、明日覚悟しときなさいよつとでも言うような目で上条を睨んで寝室に入ってしまった。緑子も同じような目で上条を睨んで寝室に入ってしまった。

月詠は顔を青くする上条を見て、明日終わったなっと思った。

そして銀時は大きく口を開けてアクビをすると頭をかいて、寝るか  
つと言った。

上条は、はあくっと言ってソファーに寝ころんだ。

そして、わっちも寝るかっと言ってソファーから立ち上がった時…

「うん?.....」

月詠は大事なことに気がつき銀時の寝室へと向かった。

「銀時」

月詠はそう言って銀時の寝室に行くと銀時は布団に入った状態で、  
あん？っと言って月詠を見た。

「何？」

「わたちの寢床はどこじゃ？」

月詠は銀時にそう言って尋ねると銀時はもつすでに眠いのか適当に  
部屋の隅に指をさして寝ようとした。

月詠は頭からブチッと音を出した。

そして数分後…

「スイマセンでした」

銀時は額から血を流し土下座をしながら月詠に謝っていた。

そして月詠は銀時にもう一度聞いた。

「で、わっちの寢床はどこじゃ？」

しかし銀時は汗を流すだけで何も言わなかった。月詠は銀時の態度を見て、クナイを取り出した。

銀時はそれを見て、待て待て待て！！言うから、タンマ！！って言うって手を上げた。

月詠はむうっとした顔で言った。

「……………早く言いななし」

すると銀時は布団から立ち上がり布団を端にやってから、押し入れから布団を取り出して反対側の端に置いた。

そして銀時は月詠を見て言った。

「……………」

そして今にいたった。

〓 現在 〓

月詠はその事を思い出して、はあくつとため息をした。

そして神楽たちが行く時に何故、気づかなかったのかと、後悔した。

しかし月詠は後悔以外に違った思いがあった事に月詠は気づいていた。

すると月詠は静かに布団から起き、寝ている銀時の隣に座った。

そして銀時の顔を見て月詠は胸が熱きなるのを感じた。

そして月詠は自分の顔を銀時の顔に近づけ、後少して唇に当たろうとした。

すると、その時…

ムニユ

突然、月詠は銀時に胸を触られた。月詠はそれに対し真っ赤になり固まってしまった。



ちるじ…

「メロンパンは俺の……ガー……ゴー……」

銀時はそう言いながら口をムニャムニャとさせた。

月詠はそう言う銀時を見て自分が、まさかっと思った事を恥じた。

そして、月詠は……

「何やらしてんじやアアアアア！！」

っと言って銀時をボコボコにした。

そして、銀時と月詠の夜は終わった。

銀時と月詠（後書き）

今回のほうでしたか？ちょっとダメだったかな？と思ったんですけど、よければ感想待ってまーす。

## 日常（前書き）

以前出していた一方通行と打ち止めの前書きを出した方がいいのか  
出さない方がいいのかで迷っています。

## 日常

### 第七十一幻想 日常

小鳥が元気よく鳴く朝、新八は万事屋に来ていた。

「お早うございます」

そして新八は玄関のドアを開けながらそう言って室内に入って行く  
と上条たちがちょうど朝食を食べている所だった。

「珍しいですね、こんなに早く起きてるなんて」

新八は上条にそう言ってテーブル並ぶ料理を見た。

すると上条たちが苦笑いをし出した。新八は、どうしたんですか？  
つと上条に聞くと上条は苦笑いをしながらソファアの端に座る二人  
を指さした。

新八は、うん？って言って視線を上条がさした方に向けると、そこ

には…

「……………」  
「……………」

あちこちに切り傷や青アザをつけた銀時とチラチラと銀時に申し訳ないように見る月詠がいた。

新八はそれを見て、少し戸惑ったが銀時に尋ねた。

「……………銀さん…どうしたんですか？」

すると銀時は眉をピクピクさせながら月詠を見て、口を開いた。

「別にどーもしねーよ。朝三時にボコボコにされた以外わな」  
「……………すまん……………」

月詠は銀時にそう言われてただ頭を下げるしかなかった。

新八はその二人の光景を見て上条たちにもっと詳しく聞くと、朝三時に突然、銀時の悲鳴が聞こえてきて銀時の寝室に駆けつけると、月詠がクナイやら何やらで銀時をボコボコにしていたらしく、上条たちはそれが頭に残って寝るに寝れなかったらしい。

そしてその結果、今日の朝食が早くなつたと言うことを聞き、新八はそれを聞いて上条と同じように苦笑いをしながら銀時と月詠を見た。

そして、数時間後…

月詠は一旦、吉原に帰り（実際は銀時から逃げた）万事屋メンバーの御坂は上条を連れて何処かに行き、インデックスと神楽は何か見たいテレビ番組があるらしく万事屋に残り、銀時、新八、緑子の三人は今スーパーマーケットに来ていた。



「スーパーマーケット」

スーパーマーケットに来た銀時たちはまず食品売場に来ていた。

「うーん……………銀さん、これどっちがいいと思います?」

新八はうなりながらある食品を見比べて銀時にそう言いながら銀時を見た。

すると銀時は…

「うーん……………」

そううなりながらイチゴ牛乳かコーヒ―牛乳かで迷っていた。

新八はそれを見て、自分できめようと視線を食品に戻した。

そしてその頃、御坂たちはと言つと…

＝コンビニ＝

御坂と上条は今、コンビニの中にいた。

上条は売られているカップラーメンなどを見て、うまさうさと言っていた。そして御坂は…

パラッパラッ

本が並ぶ立ち読み場でそこに売ってあった女の子系の漫画を立ち読みしていた。

そして最後にインデックスたちはと言つと…

＝万事屋＝

インデックスと神楽はせんべいをポリポリと食べながら、『〇せん』の再放送を見ていた。

そしてインデックスはそれを見て何やら解析していた。

「つまり、生徒を守るために髪止めを取って強くなるんだね」

すると神楽がインデックスに、見て見てっと言って呼び掛けた。

そしてインデックスは神楽に振り向くと神楽は髪に付けていた物を外し、髪を下ろしていた。

「どつネ！スゴクネ？」

「凄いかも！」

神楽はインデックスにそう言われ嬉しそうな顔をした。

するとインデックスが神楽に言った。

「後は名前だね！」

「名前？」

「うん！えーっと……………グラクミ、カグクミ……………うーん…ねえ、神楽、何がいい？」

インデックスは神楽にそう言って色々と考えるが中々いいあだ名が見つからず神楽に尋ねた。

神楽は…

「何もいい名がないアル……………」

っと言って肩を落としていた。

そしてもどに戻って銀時たちはどうと…

「スーパーマーケット」

銀時と新八はある光景を見て呆然としていた、それは………

「ちょっとぐらい安くしてくれてもいいやん!」  
「何言つてやがんだ!このアマ!」

何故か関西弁になっている緑子が店の人と言い争いをしていたからだった。

そしてそれを見ていた新八が口を開いた。

「銀さん……」

「ああ?」

「あれ何ですか?……」

「関西弁の女が食品にケチつけて値切ろうとしてる光景だろ」

「……いや、それはそうなんですけど……」

新八は銀時にそう言って、今にも殴りそうな雰囲気値切ろうとする緑子を見た。

そして銀時も同じように緑子を見て、鼻をほじりながら言った。

「それにしても、ケチに横暴にあのしつこさって最悪の三種の神器がそろってんじゃないか」

…ケチ…

「…」

「…」

銀時の顔面に太い大根が直撃し、後ろに回転しながらバタツと倒れた。

新八はガタガタっ顔を青くしながらと大根が飛んできた方向を見ると、緑子がフンっと言いながら冷たい目線で睨んでいた。

すると店の人は自分もあれの二の舞にっと思ったらしく緑子にタダで食品を渡した。

緑子は、いいのー？っとわざとらしく言っでありがたく食材を頂戴した。



## 日常（後書き）

今回は久々の鍋パーティー……っでいけたらいいなあっと思っ  
ています。

鍋争い1(前書き)

グダグダかも…

## 鍋争い1

打ち止め

「ヤッホーってミサカはミサカは久しぶりの登場に喜んでみる！」

一方通行

「……っても今回だけなんだけどな」

打ち止め

「え！？ってミサカはミサカは嘘だよなって一方通行に言ってみる  
！！」

一方通行

「……まア、読者から出してって感想が来たら復活すんじゃないの」

打ち止め

「ホント？ってミサカはミサカは何回も一方通行に再確認してみたり」

一方通行

「ああ、多分な」

打ち止め

「ヤッター！って一方通行に抱きつきながらミサカはミサカは言うてみる！」

一方通行

「ああアア！！暑苦しい！ーっかオマエ何か言うことあったンじやねエの？」

打ち止め

「あ！！ってミサカはミサカは慌ててみたり」

一方通行

「はア……、あん？何だこれ？」

打ち止め

「何々ってミサカはミサカは興味を示してみる」

一方通行

「えー……『前書きが長すぎなので今回、二人に伝えて欲しかったことは後書きに書きます by 作者』……」

打ち止め

「……………」

第七十二幻想 鍋争い1

日が沈み今はちょうど夕食どき。スーパーマーケットから帰ってきた銀時たちは鍋の準備をしていた。

すると上条と御坂が万事屋に帰ってきた。

そして数時間後、銀時たちは鍋の準備が終わり、七人で鍋を囲うように座っていた。

「いや、それにしても久しぶりですね。こんな食事」  
「そうアルな」

すると新八が笑いながらそう言った。神楽がそう相づちをした。

そして新八たちの会話が終わると誰も喋らなくなり室内は静寂が漂った。理由は全員が箸を持ったまま鍋を見つめているからだった。

すると上条は銀時たちに尋ねた。

「あの〜……………何で誰も喋らないんですか？」

「あん？そんなの知らねーよ。まあ俺は鍋の火加減とか見なきゃいけないーからだけどな」

「いや、鍋は僕が見ときますんで銀さんは安心してー」

「何言ってるアル、こういう時は新八しかいないネ」

「いや、こういう時ってどついう時だよ」

銀時たちは上条にそう言われ、誰か黙ってないで何か言えよ！っと言い合っていた。

すると銀時がインデックスに言った。

「オイ、何さっきから黙ってたんだ？」

するとインデックスは…

「…よそ見してお肉が食べられないように見てるんだよ」

つと言った。

銀時たちはそれを聞いてインデックスを見た。すると銀時が下を向きながらインデックスに言った。

「ちょっともうホントさア……、そんなさア、そんなしょうもない事俺達するワケないだろ。ホントさア…哀しくなるような事いわないでくれない？」

インデックスはそう言う銀時を見て、ううっ、っとなった。すると今度は神楽が額に手をのせて喋り出した。

「確かに鍋なんて滅多に食えないネ。でもみんなで楽しく食べようって時にそれはないネ」

インデックスは神楽に言われ、少し落ち込んだ様子でペコツとした。  
から謝った。

「みんなに無責任な事言つてごめ…」

そしてインデックスの言葉がそこに差し掛かった時…

ドフッ！……！



銀時たちは物凄い速さで鍋に箸を突っ込んだ。

そして数分後…

「あーあ、貴重な肉が四散してしまいましたよ」

「せっかくタダで貰ったのに」

「え？これタダなの？」

新八、緑子、御坂はそう言いながら飛び散った肉を拾って捨てていった。

「まったくためーらが強く引っぱるからだよ、はしやぎ過ぎなんだよ。鍋、如きで」

そして銀時はそう言って、はあくつとため息をついた。

すると横からインデックスが涙目で銀時たちに言った。

「みんなして騙す何て酷いかも！」

しかし銀時たちは全く反省の色を見せずインデックスは今にも泣く

寸前だった。すると銀時は懐から白い色をしたアメを取り出しインデックスに渡した。

「……………これ何？」

インデックスは銀時に渡されたアメを見てそう言った。銀時は、カールピスの味がするアメと言ってインデックスに機嫌を直せったと言った。

するとそれを見ていた上条が言わなければいいのにといつことを言った。

「やっぱりインデックスにはご飯だな…」

インデックスはそれを聞くと、さっき口に入れたアメを一瞬にして噛み砕き、上糸に鋭い歯を見せながら飛び込んだ。そして…

「ぎゃあああああああああああああッ！…！」

上条は悲鳴を響き渡った。

そしてインデックスは、とうまのバカッと言ってさっきの座っていた場所に戻っていった。

## 鍋争い1（後書き）

えーっと、実は少し迷っていることがあるのでアンケートをとりたいんですが。今の鍋争いが終わってから、バトル編か日常編かのどちらにしようかなって、思っています。よかったら感想にどちらがいいのかを書いてください。お願いします。

## 鍋争い2(前書き)

やっと書けました。でも凄くグダグタかも……

## 鍋争い2

### 第七十三幻想 鍋争い2

上条が倒れた事により人数は七人から六人となり、インデックスは少し機嫌を悪くしながら箸をいじっていた。

そしてその一方では新八がインデックスを含め銀時たちを観察しながら頭を悩ませていた。

（「まずいな、やはりこうなったか。インデックスさんたちが入った今の万事屋で鍋をやるなんてアナコンダのオりに松島トモ子をほり上げるようなものだ…」）

新八は心の中でそう言うのと辺りに四散した肉を見た。

（「…今のままでは残りの肉も間違いなく四散する……………やはり肉を人より食すことより先ずは人数が増えた事でパワーアップした野獣達から肉を保護するべきだ」）

新八は心の中でそう考えて、まずは銀時と神楽を見た。



（銀さんと神楽ちゃんは馬鹿のくせにプライドだけは一級品だからそこを刺激すればいいとして…）

新八はそういうふうには銀時たちは大丈夫と確信し、次に一番の問題となっている御坂、緑子、インデックスに視線を移した。

（問題はあの三人だ、まず御坂さんは以外に負けず嫌いな所があるから大丈夫だろう。次に緑子さんは銀さんたちに比べて頭がいいから多分、乗ってきてくれる。インデックスさんは、神楽ちゃんと同じぐらい馬鹿だから絶対に大丈夫だ。）

そして新八は心の中で確信すると、賭けに出た。

新八は自分の箸を、カラッと落とす。

銀時たちはその音を聞くと、うん？っといって箸を落とした新八を見た。

すると新八は、フーッと息をつきながら喋り出した。

「僕もういいっすわ、こんな鍋ぐらいで取り合いして食べたくないですもん、こんな情けない。」

そして新八が次の言葉を言おうとした時…

「あつそ、じゃあ俺らで食つわ」

銀時が新八に冷たい視線でそう言った。

新八は銀時にそう言われて、口をあんぐりつと開けた。

(なっ…なにイイイイ！…！そっ……そんな……馬鹿な……これじゃあ、僕は鍋に手をつけない……チクシヨ！…！テ  
メーラ全員足ノ小指ヲ骨折シローマの休日ウウウ！…！…！)

そして新八が頭抱えながら心の中で叫んだ後、バタツつと倒れた。

御坂とインデックスは新八が倒れたのを見て頭をかしげ。緑子、銀時、神楽の三人はひそかに笑みを浮かべていた。

そしてその中で銀時は…

(これ以後はこいつらだけだ……だが新八がいなくなった以上ちよろいな。)

心の中でそう考えながら鍋を見た。すると緑子が御坂にあることを尋ねた。

「ねえ、ちょっと」

「何？」

「実は、ちょっと気になる事があるんだけど」

御坂は緑子に気になる事があるっと言われ頭をかしげた。

そして緑子は御坂に言った。

「今日、上条と何してたの？」

御坂はそれを言われた瞬間、えっ！？っと言いながら頬を少し赤く染めた。

「な、何が？」

「いや、だから上条と今日何してたの？ってきてんの」

緑子は御坂の言葉に対しそう言いながらニヤッと笑い、そして動揺している御坂に言った。

「もしかして、二人でいちゃついていた……とか？」

御坂はそれを言われた瞬間、顔を真っ赤にさした。

すると、それを横で聞いていたインデックスが御坂に慌てながら尋ねた。

「も……もしかして……とうまと……」

「な、何でそうなるのよ……！」

御坂はそんなインデックスに顔を赤くさせながら言い合っていた。

そして緑子は

「ちょっと、食事中にケンカしないでよ」

つと言いながら箸を鍋につけようとした。すると……

ズボッ！

そこにはご飯があった。緑子は、なっ！？っと言って鍋を探すと…

「アレ？火が弱くなってね？」

銀時が鍋を自分の目の前に置き、ガタガタつと音をさせながらそう言っていた。

（残念だったな、てめえらの考えはお見通しなんだよ。）

そして銀時は心の中でそう言つと神楽に向かって近くに置いてあったティッシュの箱を神楽の顔面に投げ、ニヤリと笑い箸を鍋につけようとした。

するじ…



へブシッ！！

鍋の中にくしゃみと一緒に飛んだ鼻水と唾が入った。

銀時は、何故！？っと思いつつ、くしゃみが飛んできた方向を見た。

するとそこには鼻水をたらしながら鼻をぐちゅぐちゅっとならして  
いるインデックスがいた。

そしてインデックスが、ごめんかもっと言っつて謝り、食べないのっ  
と言った。

銀時たちは顔を硬直させたまま拒否した。インデックスは、いいの  
！っと言っつて嬉しそうに鍋を一人占めにした。

そして銀時たちは嬉しそうに食べるインデックスを見て、ガツクリ  
とさせながら、ため息をついた。

鍋争い2(後書き)

次回からバトル編です。

## 災いの日1（前書き）

最初の出だしで迷いましたが、やっと書けました。

## 災いの日 1

小鳥の声が聞こえる朝、緑子は目を覚まし、寝室を出て玄関のドアを開けた。

するとまるで緑子を待っていたかのように、気持ちいい風が吹いてきた。

緑子はその風を微笑みながら感じ、空を見上げた。

すぐそこに邪悪な幻想が近づいているとも知らずに…

## 第七十四幻想 災いの日1

かぶき町から少し離れた場所にある町、そこに銀時たちは訪れていた。

そして何故、銀時たちがここに訪れてたのかというと、それは朝の一件があったからだった。

〓朝〓

朝の七時、銀時たちが目を覚まし朝食を食べ終え丁度、新八が来た頃。

ピーンーポーン！

と、朝早く万事屋にチャイムの音が鳴った。そして銀時にうながされた新八が、ハイハイっと言って玄関のドアを開けると、そこには一人の男が立っていた。

「あのくどちら様ですか？」

「あ、はい…私はこういう者でして、今日はここに依頼をしにきた者なのですが…」

そして新八がそう尋ねると男は何かの名刺を新八に渡し、依頼をしにきたつと言ってきた。新八は、はあ…っと言って渡された名刺を見ると、そこには鷲塚警備会社社長、鷲塚 二郎と書かれてあった。

そしてそれから数分後。



新八は鷲塚をソファ―に座らせ、銀時に名刺を見せた。

「私はそこに書かれてある警備会社の社長を勤めている鷲塚 二郎といひます。」

そして鷲塚はごく丁寧に銀時に自分の名前を言った。すると銀時は鷲塚にある事を尋ねた。

「鷲塚警備会社……あまり聞かない名ですね？」

「ええ、かぶき町の少し離れた町から来た者ですから」

「ああ、なるほど……」

そして銀時は鷲塚の話聞いてそう言い、本題である依頼の話へと入っていった。

「で、今日はどういった依頼で？」

「……はい……実は私の家に何か得体の知れない物が住み着いていまして……」

「……………へ、へへ」

そして鷲塚は依頼の内容を話し始めると銀時は何故か顔を少しひきつらせた。

「どうか退治してもらえないか」とこうして依頼してきました。」

そして鷲塚はそう言いながら銀時に頭をさげた。すると銀時は…

「……………新八、俺、腹痛いからー」

「ダメですよ、銀さん。」

新八にそう言っつて新八たちだけにやらそうとした。しかし新八は銀時がそう言っつ前に止められた。

すると鷲塚が…

「あ、す…すいません。出来れば此処にいる全員できてほしいのですが」

つと、言い出した。新八はそれを聞いて、え？っと言い、それは上

条たちにとつても同じことだった。そして上条たちが警塚に理由を聞こうとした時…

ポトツ！



さっきとは違って変わって新八たちにそう言い、新八たちの言葉を無視して鷺塚の依頼を引き受けた。

「昼」

そして鷺塚に昼に来てくれつと言われ今に至り、銀時たちは一時間をかけて鷺塚の警備会社にたどり着いていた。警備会社と言うわけだから多分大きい会社だと思っていた上条は実際に見て、少し苦笑いをした。何故かというと鷺塚警備会社の大きさは二階建ての万事屋とそんなに変わらないからだった。

「あゝ、依頼で来ました万事屋ですけどオ」

そして上条がそう思っている間に、銀時はそう言って鷺塚の会社の

ドアを叩いた。

しかしどれだけ叩いても応答がなかった。

「あれ、いねーのか？」

そして銀時はそう言ってドアに手をかけた時…

ガラガラッ

ドアはいとも簡単に開いた。そして銀時は、あん？鍵開いてんじゃないか？って中に入ろうとした時…

「なっ！？」

銀時は中に入るのをやめ何故か驚いた顔をして声を出した。

「銀さん？」

そして新八はそんな銀時にそう言い、銀時の視線の先を見た。

ゆるゆ、そっぴは...

大量の真っ赤な血が辺り一面に飛び散っていた。



## 災いの日1（後書き）

次回は銀時たちが少し戦います。後、ちよつと書き方を変えて見ましたがどうでしたか？何か変な所があれば教えてください。

## 災いの日2（前書き）

銀時たちが少し闘いますと言いましたが、銀時しかできませんでした。それから今回、会話が少ないです。

## 災いの日2

### 第七十五幻想 災いの日2

鷲塚警備会社に訪れ、辺り一面に飛び散って血を見て上条たちが驚きインデックスが、きゃ！？と声を上げる中、新八は頬に汗をたらしながら銀時に声をかけた。

「…………ぎ…………銀さん…これ…」

しかし銀時は新八の言葉を聞いていないのか、飛び散った血痕のそばにしゃがみこみ指でその血痕を触った。

するとその血痕は何故か奇妙な生暖かさがあり、まだそう時間が経

っていなかった。

そして銀時はそれを確かめた後、この奥の室内を見つめると、その場から立ち上がり新八たちに振り返らずに言った。

「新八、神楽……オメーらは先に万事屋に帰ってろ」

「なっ……ちよつと銀さん、何言ってるー」

そしてそれを聞いた新八たちは銀時の言葉に戸惑い、新八がそう言っ  
つて銀時の真意を確かめようとした時。

銀時は頬に一筋の汗をかき何か胸騒ぎがするとも言いたそうな表情で部屋の奥を見ていた。

そして新八はそんな銀時の表情を見ると急いで上条たちに、行くところと言って、戸惑っている上条たちを走らせた。

するとインデックスは上条たちが走って行く中、一人、立ち止まり銀時に心配そうな顔をしながら声をかけた。

「銀時……………」

すると銀時は、そんなインデックスに振り返り…

「心配してんじゃねーよ。…あとで、必ず行くからよ」

つと言った。

そしてインデックスはそう言う銀時を見て、……………絶対だよ！つと言いつつ言い残しながら上条たちのもとへと走って行った。銀時はそう言うて走り去って行くインデックスを見て、まったく…つと言って小さくため息をついた。

そして銀時は木刀を抜き取り、警戒しながら奥へと進んで行った。

すると周りを警戒しながら奥へと進んでいた銀時がリビングと思われる場所にたどり着いた時……

「なっ！？……………」

銀時は目を見開きながら驚きの声を上げて、その場で立ち止まった。

そして銀時の目に写ったのは……

大量の返り血で染まりつくされた壁とリビングの中央に積もられた  
死人の山だった。

そして銀時はその光景を見て何も言えなくなっている…

·-·ミテ



二階から何か床に落ちた音が聞こえた。

銀時はその音を聞くと、急いでリビングから出て二階の階段を駆け上がった。

そして銀時はリビングの真上にあたる部屋に滑り込むように入ると…

そこには今朝、万事屋に依頼を頼みに来た鷲塚がフードつきのマン

ト着た女に胸部を刀で刺されていた。

そしてその刀はオレンジ色をしており、銀時はその刀を見て紅桜の時と同じような感じを覚えた。

するとそのマントの女は刺していたオレンジ色の刀を抜き取り、銀時に向けた。銀時はそれに対し木刀を握りしめマントの者を睨み付けた。

そして次の瞬間…

ガキイーン!!ギイギイギイギイツ!!

銀時とマントの女は刀通しで斬りあい、刀を削りあわせるようにして離れて距離をとった。

するん…

パサッ

マントの女の顔を隠していたフードが綺麗に斬れ、床に落ちた。

そして銀時はそのマントの女の顔を見て驚愕した。

何故なら以前、月詠が一番に気にしていた人物であり、咲希に気を付けてっと言われていた…

赤色の髪をした蓮鬼そのものだったからだ。

## 災いの日2（後書き）

次回は、本当に上条たちも闘います。

### 災いの日3 (前書き)

どうにも話がまとまらなくて出すのが遅れました。後、少し文字の  
使い方におかしい部分があるかも…

### 災いの日3

#### 第七十六幻想 災いの日3

部屋中の辺り一面に血が付着し血の独特な匂いがする中、

「……………」

銀時は蓮鬼に瓜二つの少女を見て内心驚きながらそれを顔に見せな  
いようにして睨みつけていた。

「どづしたの、まさかこんな少女が…っとか思ってる？」

しかしマントの少女は銀時の睨みにたじろぐ様子もなく乱れた髪を  
整えていた。そして銀時に対しそう言って間を取り、目を細めなが  
ら…



「坂田銀時」

つと言った。

銀時はそれを聞いて目を見開いた。

「!?、……………テメー……………いつてー何者だ！」

そして銀時は少女に警戒しながらそう言った。すると少女は、フフツツと笑いながら手に持っている刀を顔に近づけ、

「私の名前は朱雀」

つと言いながら刀を舌でなめた。そして刀を銀時に向けた。

「貴方を殺すように送り込まれた者だよ」

「……………」

銀時は木刀を握りしめ朱雀を睨んだ。

そして朱雀は、後…っと言ってから間をとり、銀時を嘲笑うように言った。

「今ね、蓮鬼お姉さまが緑子に会いに行ったよ」

銀時は目を見開き、なっ！！っと言った。そしてそれがどういいう意味かということに気づいた銀時は朱雀を無視して階段へ向かおうとした…

「ダメだよ。」

しかし朱雀はそう言って銀時に斬りかかった。銀時は、クッソ！っ  
と言って木刀で防いだ、すると朱雀は…

「ねえ？この前、咲希の前で見せたあれ見せてよ」

っと言って銀時に連続で斬りかかる、銀時はそれを紙一重で交わし  
ながら朱雀と距離をとった。

「今はテーマと遊んでる暇はねーんだ！そこをどきやがれ！」

そして銀時は朱雀にそう言いながら朱雀に攻撃しようとした。

すると…

「ふうん……でも早く見せた方がいいよ」

朱雀の言葉に反応するように刀が赤く光だした。

そしてその頃、上条たちは万事屋に向かって走っていた。

「はあ、はあ、インデックス、大丈夫か？」

そして上条は一番最後の列にいるインデックスに声をかけるとインデックスは、大丈夫だよ！と汗をかきながらそう言った。

すると御坂が呟いた。

「ねえ、ちょっとおかしくない？」

「え？何が？」

上条はそう言う御坂に対しそう尋ねると、御坂は周りを見ながら言  
った。

「ここに来た時も思ったんだけど、私たち未だに一人、見てない  
じゃない？」

「!？」

そして御坂が言った言葉を聞いていた新八たちは、確かにっと言  
いながら周りを見た。

すると新八の後ろを走っていた緑子が一番前を走っている神楽に叫  
んだ。

「危ない!!!」

そして神楽はそう言う緑子に振り返った時…

ドオン！！

オレンジ色の大きな球が神楽に向かって飛んできた。神楽はそれを傘で防いだが、あまりの力に神楽は反動で後方へ飛ばされ周りに並ぶ住宅に突っ込んだ。

「神楽ちゃん！！」

そして新八がそう叫ぶ中、最後の列にいたインデックスの後ろに…

フードつきのマントを着た女が現れて手につけたオレンジ色をした鉄のグローブをインデックスに向かって放った。

ガシッ！！

すると鉄のグローブをつけた拳が素手で掴まれた。

そしてその素手の持ち主は…

「大丈夫か、インデックス」

上条当麻だった。

そして上条は片方の左手でマントの女を殴ろうとしたがマントの女はそれを避け上条から離れた。

その時…



バチバチツドオン！！！！

マントの女に向かって電撃が放たれた。マントの女はそれを紙一重で交わしたがフードに少しかすった。そしてマントの女がその電撃が来た方向を見るとそこには…

頭に電撃を走らせていた御坂がいた。そして御坂が次に打つ素振りを  
見せた時、

ビュッ！！

神楽を突き飛ばしたオレンジ色の球が御坂に放たれた。そして御坂  
が気づくのに遅れて振り返った時。

「うおおおおー！」

新八が木刀で球を叩き御坂から方向を変えた。そしてそれと同時に…

ヴチヴァチ、バチ、バチ、ドオン！！

電撃に似た玉が放たれた。マントを着た女はそれをあたる寸前で高く飛び回避した。そして地面に着地し玉が飛んできた方向を見ると…

「私を殺ろうなんて百年早いネ」

そこにはかすり傷をした神楽が傘を向けながら立っていた。

災いの日3 (後書き)

次回は銀時と朱雀の戦いです。

敗れる夜叉(前書き)

土日とか言っておいて月曜日になってしまっ  
てホントにすいません。

敗れる夜叉

第七十七幻想 敗れる夜叉

上条たちがマントの女の奇襲にあっていた頃…

ゴォー……！！

朱雀と交戦していた銀時は二階の壁を貫通して地面へと落下していた。

「ぐっ！……」

そして地面に直撃した衝撃で起き上がれない銀時に、

上空からオレンジ色の刀が銀時目掛けて放たれた。

銀時はそれに対し転がるように避け、痛む体を無理やり起き上がらせた。

そして、刀が地面に突き刺さった後に遅れて二階から飛び降り地面に着地した朱雀は、

「あれ、気のせいかな？あなたってこんなに弱かったっけ？」

と、は銀時を嘲笑うように言った。

銀時はそれに対し、肩で息をしながら口を開き、

「はぁ……はぁ……はぁ……気のせいか、オイ……はぁ……」



っと言つて、朱雀の隣に刺さっている刀を睨み付け、

「てめー、それ……………ホントに刀ですか？」

っと言つた。

朱雀はその言葉に対し笑みを浮かべながら刀の柄を持つ。

すると、オレンジ色の刀が赤く光り出し、刀が刺さった部分から湯気がたつた。そして朱雀はそれを確認すると、刀を抜き取り銀時に向かって走り出した。

銀時は朱雀の接近に対し、後ろに下がり距離をとろうとしたが、体の痛みにより一瞬動作が鈍った。

そして銀時が前を見た時、

「フフッ…」

朱雀は銀時の目の前におり、すでに刀を振り上げ銀時の頭目掛け縦に斬りかかろうとしていた。

銀時はそれを真横に飛びながら避けると、左脚を地面に残し体を回転させながら残った右脚で朱雀を蹴飛ばした。

「きゃっ!」

そしてそんな声を出す朱雀にまたがるようにして銀時は木刀を振り上げ、木刀を振り下ろそうとした。

すると、その時…

「ぐわああああああああアアアア!」

銀時は叫びながら木刀を放した。そして朱雀その隙に銀時を蹴飛ばし立ち上がった。

「ぐっ……………な……………何……………しや……………がっ……………た……………」

そして銀時は顔を苦痛で歪めながら立ち上がると…

「昔から言っつでしょ、女に手をだしたら火傷するっつてね」

朱雀が銀時の隣でそう囁いていた。そして…

ブジュ！！！！！！

鮮血が飛び散った。

## 敗れる夜叉（後書き）

今回の話はどうでしたか？何かおかしい所があったら教えてください。後、次回は上条たちの話です。

## 足止め（前書き）

久々なので文が変になっているかもしれない気がします。後、今回闘うシーンがかけませんでした。…



## 足止め

### 第七十八幻想 足止め

マントの女たちによる突然の攻撃を受けた上条たちは今、神楽と御坂の攻撃を避け距離をとったマントの女に警戒していた。

すると、緑子が口を開いた。

「……………紅、……………焰、……………どうしてあんた達が…」

上条はその言葉に振り返りながら、驚いた顔で緑子を見た。

そして緑子にそう言われた、紅と焰は顔を隠していたフードを取り外し上条たちに顔を見せた。紅と焰はまるで双子のように似て、髪は赤く、瞳は赤で染まっていた。

そしてそんな二人は、

「お久しぶりです。緑子様」

「今日も綺麗ですね」

つと言った。

緑子はそれに対し何故か頬に一筋の汗を垂らしながら紅たちに、

「お世辞は結構よ、……………それより朱雀がないの？」

紅と焰は緑子にそう言われると、紅が簡潔に喋り出した。

「はい、ただいま朱雀様は蓮鬼様の命により出払っています。」

「命?…」

緑子はその言葉に不審な表情を見せ、紅は、

「はい、坂田銀時の殺害という命をつけ…」

つと言った。

上条たちはその言葉に、なっ！？と驚きの声を上げ、そしてそんな中、紅はさらに言葉を続けた。

「しかし、その命は…」

「…既に達成されました。」

上条たちはその言葉に目を見開き、信じられないっという気持ちが頭の中で混雑した。

神楽たちは、

「嘘アル！！銀ちゃんがお前らなんかに殺られるわけないネ！！」

「そうだ！！銀さんが負けるわけない！！」

つと紅たちに言い叫ぶが、紅たちは

「あなた方がいくら叫ぼうが事実です」

つと冷静に答える。

そしてそんな中…

ダッ！！

インデックスは上条たちに背を向けながら走りだした。

「!?、インデックス!!」

上条は銀時のいる方角に走って行くインデックスに呼び掛けるがインデックスは止まらなかった。そしてインデックスに呼び掛ける上条に御坂が叫んだ。

「こいつらは私なんとかするからアンタは早く追いかけてなさい！」

「……………わかった。」

上条は納得がいかない顔をしたが御坂にそう言い残し、インデックスの後を追った。

そして上条が走り去って行く中、神楽は、

「新八、お前は緑子連れて逃げるアル」

「……………でも……………緑子さん、こっちへ!!!」

新八は少し戸惑ったが緑子に呼び掛け、紅たちを避けるように目の前の道を走った。

「逃がしませんよ」

しかし、紅と焰はそれを易々見逃すわけもなく、新八たちに攻撃を仕掛けようとした。

すると…

ヴァチ、バチツ、ドオオオオン!!!!

二つの電撃が重なり合いながら紅たちに向かって放たれ、紅と焰はそれに気づき後方へ飛びその電撃を避けた。

そしてその後、新八と緑子がいた場所を見るとそこに既に新八たちはいなかった。

紅と焰は、くっ…っ…と苦い顔しながら、電撃が放たれ方向に顔を向けると、

そこには…



「  
アンタ達の相手は  
」  
「  
私たちネ!!!  
」

手と傘を紅たちに向ける御坂と神楽が立っていた。

足止め(後書き)

次回は蓮鬼が少し登場します。

## 出現（前書き）

本当に申し訳ありません。色々と用事が重なりどうにも書く時間がありませんでした。ホントにすいません。

出現

第七十九幻想 出現

インデックスは荒い息使いをしながら一人一人いない道を走っていた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

そして銀時の安否を確かめるため走り続けるインデックスは、

( 銀時…………… )

心の中でそう言い続けていた。

すると…

目の前に人影が見えた。

インデックスは、銀時だ！！っと思いつつその人影に向かって走り、

「銀時！！！！」

その人影に向かって叫び続ける。

すると、段々と近づく内に人影が二つある事に気づいた。

一つはその場で立つ影で、もう一つはその場で立つ影の足元で横たわっている影だ。

そしてその二つの影の姿が認識できるまでの距離にきた時、

インデックスの思惑は砕け散った。

何故なら…

立っていた影は銀時ではなく、数分前に襲ってきたマントの女に瓜  
二つの女であり…

真っ赤な血を地面に漂わせ倒れている坂田銀時がいたからだった。

そして、その頃…

「はあ、はあ、はあ、はあ…」



神楽たちにより紅たちから何とか逃げきった新八と緑子は町の入り口にあたる場所に向かって走っていた。

「大丈夫ですか、緑子さん？」

「うん……」

そして新八の心配の声にそう頷く緑子は、ふと、新八に尋ねた。

「ねえ、心配じゃないの？」

「何がですか？」

「アイツの事……」

新八は緑子の言葉に対し、口をふさぎ、緑子は新八の次の言葉を待った。

そして数秒後…

新八はさっきまで閉ざしていた口を緩め笑みを浮かべ、口を開いた。

「……………銀さんなら大丈夫ですよ」

「……………なんで、そう言い切れるの？」

緑子は新八の言葉に対し疑問を感じ、もう一度尋ねる。

新八はそれに対し…

「あの人はいつもちやらんぼらんで糖尿病寸前のダメ人間だけど…  
……………」

そう言いながら間をとり、緑子に振り返らず、目の前の道を真っ直

ぐと走りながら…

「一旦護ると決めたものは何が何でも護り通す人なんです！だから死んだりなんかしないんです！！」

緑子に言いきった。

それは普段から一緒にいないとわからなく、尊敬しているからこそ言える事なのだろう。

しかし、緑子はそう言いきった新八に対し、まるで自分に言い聞かせている用な気持ちを感じた。

そして緑子がそう感じている中、

「見えてきた！…あと少しですよー！」

新八の声が耳に入ってきた。

緑子は気持ちを切り替え、目の前を見ると、そこには最初にこの町に入ってきた時の入口部分があった。

そして、確認してからあと五十メートルとまでの所に来た時…

ゾクッ……

緑子の体が一瞬にして冷えきった。それはまるで危険信号を出しているかのようだった。

そして、次の瞬間…

ボオオワアア!!!!!!!!!!!!!!!!!!

入口の周囲が一瞬にして巨大な炎に包まれた。

そして炎のすぐ近くで緑子に助けてもらい、尻餅をつきながらその炎を見ている新八は緑子にこれが何なのかを尋ねようとした時

緑子の様子に気がついた。

緑子は震えており、まるで逃げたい気持ちを我慢しているようだった。

そして緑子の視線の先を見ると、そこには……

「ご機嫌いかが？………緑子」

赤き髪をした少女……



蓮鬼が巨大な炎の中心に立っていた。

## 出現（後書き）

どうでした？自分では新八の喋る内容がいまいちです。

## 超電磁砲の力（前書き）

今回は長めで、途中、今一な文があるかと思えます。



(一体何なのコイツら?……発火能力に似た用な能力使うし、両方とも大能力クラス……流石にきつい……)

御坂は赤く光る武器を持つ紅と焰にそう感じながらも紅に電撃を放ち続けるが、紅はまるで先を読んでいるかの用に軽く避ける。

(……やっぱり、コイツらを倒すには超電磁砲しか……でも、あれは危険すぎる……せめてあの武器だけでも……)

御坂はポケットに入ったコインを確かめながそう考えていると、

ドサッ!!

後方から神楽が御坂の隣に倒れてきた、そして傘からは焦げた後が所々見られた。

「ちょっと、大丈夫!？」

御坂は神楽にそう言いながら肩に手をかけ、体を起こると、

「もう諦めたらどうですか？」

「あなた方に勝機はありません」

紅と焔はそう言いながら御坂たちを挟み撃ちにしていた。

神楽は、何かつてな事言ってるアルか！！と紅と焰の挑発に乗り、  
今にも動こうとしようとした時…

ガシッ！！

御坂が神楽の手首を掴み、そして小声で神楽に喋りかけてきた。

「（ちょっと落ち着きなさい！）」

「（離すネ！！一発殴らないと気がすまないアル！！）」 「（作戦があるの、聞いて……）」

そして今にも御坂の手を振りほどいて動こうとする神楽に御坂は真剣な表情で言い。

「(……………わかったアル……)」

神樂はその表情と言葉に頭が冷えたのか、素直に頷いた。

「(いい……………私が合図したらアンタはあっちのグローブの奴に向かって攻撃して)」

「(何言ってるアルか!?!あっちはどうするネ!!)」

神樂は御坂の作戦に驚き、そう言いかけると、御坂は、大丈夫……と余裕な表情を見せた。神樂はその余裕そうな御坂の表情を見て、わかったアルと言った。

すると……

「話しは終わりましたか?」

御坂たちが話終わるのを待っていたのか、紅は御坂たちにそう言い、最後に焰が、



「それでは、さようなら」

つと言い、紅と焔が攻撃体勢に入ろうとした時…

「今よ!!」

御坂は叫んだ。

そしてその合図と同時に神楽は地面を蹴っ飛ばし、紅に素早く近づき傘を振り落とした。

紅は苦い表情で赤く光った鉄のグローブで受けとめたが、焰の鉄球とは違い、紅のグローブは受けきる部分が限られていた。

もし、連続で叩き込まれたら！？と焰は思ったのか御坂を無視して自分に背を向ける神楽に鉄球を放とうとした時、

ピンー！！

何かが弾かれた音がした。

焔はその音の方向を見ると…

そこには焔に何かを当てようとしている御坂がいた。  
焔はそれに気づき直ぐ様鉄球を放とうとしたが…



そう、それは一瞬だった。

御坂の指先から閃光を噴いた瞬間、物凄い電撃が焰の鉄球に直撃し、焰ごと吹っ飛ばした。

焰は住宅の壁に直撃し埋もれる形となり、鉄球はまるで何かに貫けられたように中間の辺りまで穴があいていた。そして壁に埋もれる焰に、御坂は…

「…」  
「今のは、金属の砲弾を音速の数倍とか超高速で撃ち出す技でね…」

今の出来事を理解させようとするかのように焰に喋りかける。

「私はこれを…」

そして焔の意識が遠のく中、最後に聞いた言葉は…

「超<sup>レールガン</sup>電磁砲って呼んでるの」

つとつとつ言葉だった。

## 超電磁砲の力（後書き）

どうでしたか？何か、おかしかったら教えてください。



## 一時の結末（前書き）

遅くなつてすいません。どうにもリニューアルとかが気になり、この書いた小説が消えるのかなと思つて出さずに出せませんでした。

## 一時の結末

### 第八十一幻想 一時の結末

静寂な町の中、後方から破壊音が鳴り響いた。

しかしインデックスはそんな事を気にする余裕もなかった。

ただ、目の前に見える光景しか考えられなかった。

地面に漂う真っ赤な血。  
そこに倒れる白髪の男。

それでもインデックスはやっとの思いで口が動かした。

「銀時……………」

それは、あまりに小さく、震えた声だった。

そして、そんなインデックスに対し、

「あれ？」

朱雀は平然とした顔でインデックスに気づき、インデックスを凝視

し何やら考えていた。

そして、朱雀は何かを思い出したのか、手をポンっとさせながらインデックスに向かって口を開いた。

「ねー、あなたって禁書目録ちゃんだよね？」

インデックスはその瞬間、目を見開き、えっ……っ……と口に出しながら驚いた。

インデックスつとなら町中で聞いたつと言っただけですむが、禁書目録つと言っ名はインデックスの正式名称。

インデックスが知る限りここでは上条当麻しか知らないはず。

インデックスはそう考えながら朱雀を見る。

しかし朱雀は、

「ごめんね、知り合い殺しちゃって！」

驚きを隠せないインデックスに、無邪気な笑みを見せながらそう言  
い、

でも……と言葉を続けるよ…

「死んだらまた会えるからね…」

朱雀はインデックスの目の前に一瞬で近づき、耳元でそう囁いていた。

そして、そのまま刀を持った腕をインデックスの背後に回し、

そのまま刀をインデックスの背中に目掛けて振り落とした。

しかし、その時…

ゴォン！！

刀はインデックスの背中から外れ、インデックスの横腹にあたるギリギリの部分に振り落とされインデックスの服が少し切れた程度だった。

朱雀は、怪訝な表情を見せながらインデックスから離れ距離をとりつつ刀に目を向けた。

何故なら…



さっきまで熱を持っていた刀がまるで熱を取られたように冷めていたからだ。

そして何が起こったか今一わからないインデックスは後ろに振り向くと、

そこには、右手を左手で押さえるを上条当麻がいた。

「とっま……」

インデックスは上条にそう言うが、上条は朱雀しか目に入っていないかった。そしてインデックスは上条の右手から血が出ている事で、何が起こったのか理解した。

上条は朱雀の刀がインデックスに刺さる前に刀の横側を右手で殴ったのだ。

インデックスはその事に責任を感じながら、もう一度上条の右手を見る。

するとその時…

「フフッ……」

後方から笑い声が聞こえてきた。上条はインデックスを後ろに下がらせその声ができる方向を見ると……

朱雀が刀の見つめながら、フフッ……と笑っていた。

そして朱雀は笑いをやめ、口を開いた。

「禁書目録に続いて幻想殺し……私ってついでなのかな？」

「!?!?」

上条は朱雀の口から禁書目録と幻想殺しが出た事に驚き、朱雀はそんな驚いた表情を見せる上条に笑みをこぼしつつ、刀を柄を強く握った。

すると刀は赤く光だし、オレンジ色の刀が異様な輝きを見せた。

「でも、あなたの幻想殺しって…」

そして朱雀はそう言いながら地面を蹴っ飛ばし、上条に向かってきた。対処方法を知らない上条は、くっ！っ！っ！と言いながらも向かってくる朱雀に拳を振るうが、

「当たらないと宝の持ち腐れだね？」

朱雀は上条の拳を軽くかわし上条を素通りした。

そしてその時、上条は朱雀の狙いが自分では無い事に気づき、上条は後ろに振り返り、叫んだ。

「インデックス！！！！！！！」

しかしそれは既に遅く、上条が振り返った時には朱雀は刀をインデックスに振り落とす直前だった。

そして刀がインデックスの頭部に触れようとした時…

ビューッ！！

高速の物体が朱雀の刀を弾いた。

朱雀は突然の事に驚き、直ぐ様その場から離れ、インデックスを守ったその物体は朱雀の刀に触れた事により一瞬にして真っ黒に焼け落ち、原形が分からなくなっていた。

しかし、インデックスは朱雀の刀を弾いた物体に確かに見覚えがあった。インデックスはその物体が飛んできた方向に目を向け、上条も同じくインデックスが見る方向に目を向けていた。

そしてインデックスたちの視線の先には…

真っ赤な血を流し、白髪を揺らしながら立ち上がっている、

坂田銀時がいた。

「銀時！！」

そしてインデックスは涙を目に浮かべながらそう叫んだ時…



ド  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
オ  
ン  
ン  
!  
!  
!  
!  
!  
!

強烈な爆発音が鳴り響いた。

そして大量の煙が空に上り上条やインデックスが驚く中、朱雀だけが、

「あれ、もう終わったんだ？」

まるで予期してたかようそう言い、近くの屋根に飛び乗った。

そして上条、インデックス、……最後に銀時を見つめ……

「それじゃあねー!!」

手を振りながら煙がたった場所へと屋根から屋根へ飛び移りながら去っていった。

それは嵐が立ち去ったかのようなだった。

そして上条は、くっ！っ！とやりきれない表情を見せ、拳を握り締めた時、

バタッ！！

銀時は力尽きるように地面に倒れた。

上条とインデックスは銀時に駆け寄り、声を掛けるが、返答がなく…

「銀時！！銀時！！銀時！！！！！！」

インデックスの叫び声が響くばかりだった。

一時の結末（後書き）

どうでしたか？何故か今一な部分が沢山見られる気がしてなりません。よかったら何か今一な所があれば教えてください。

## 研究材料（前書き）

今回はすごく短いです。後、この頃、文章に違和感が感じる気がしてなりません。よかったら誰かアドバイスをお願いします。

## 研究材料

### 第八十二幻想 研究材料

薄暗い研究所…

色々な薬品が並ぶ中…

一つの影がもう一つの影に近づいてきた。

そして近づいてくる影はもう一つの影のすぐ側で止まった。

その二つの影は天井にある電球の明かりにより人影へと、認識できるようになり、その中の一人は赤い髪をした炎を操る蓮鬼であることが確認できた。

「プランAは無事完了したけど、プランBはどう？」

蓮鬼はもう一人の影にそう話しかけると、もう一人の影は、

「ええ…順調に進んでるわよ」

楽しみに蓮鬼に言葉を返した。蓮鬼はそれに対し笑みをこぼしながら、

「で、私を呼んだのは一体どういったご用件？」

蓮鬼はそう尋ねた。

もう一人の影は机にあるパソコンを開いて見せた。

蓮鬼はそれを目を細めながら見ると、もう一度尋ねた。

「連れてきたらいいの？」

「ええ…」

もう一人の影は蓮鬼にそう言うと、蓮鬼はフッフ…っと笑いながら

去っていった。

もう一人の影は蓮鬼が去っていったのを確認すると、パソコンに目を向けた。

そしてそこにはこう記されていた。



幻想殺し、上条当麻…

十万三千冊保持者、禁書目録…

自在反射…

坂田銀時  
：

避難警報（前書き）

書くのに時間がかかりすぎた……

避難警報

第八十三幻想 避難警報

辺り一面が真っ暗の世界の中…

銀時は一人、その場に立っていた。

そして、ここは何処だ？と辺りを見渡していると…

「銀時……………」

とても懐かしい声が聞こえてきた…

それは銀時にとって、救いを与えてくれた人の声…

銀時はその声に対し声をかけようと足を進めた時。

銀時はそこで、ぱっと目を覚ました。

そして目を覚ました銀時が初めに目に入ったのは、見慣れた天井、見慣れた部屋、見慣れた布団だった。

銀時はそれを見た後、ここが万事屋だと認識すると起き上がろうと体を動かした。

すると、

「銀時？」

隣から聞き慣れた声が聞こえてきた。銀時はその声に対し隣へ振り向くと、

そこには心配した眼差しで銀時を見るインデックスが座っていた。

「インデックス……か？」

銀時は寝ぼけた頭を戻すかのようにインデックスに問うと、インデックスは、うん……と小さく頷き、暗い表情のまま口を開いた。

「銀時は二日間ずっと眠ってたんだよ」

銀時は、そうか……と未だに実感がないような表情でインデックスの言葉を聞き、その後、部屋に静寂が漂った。そんな中、銀時は



インデックスがここにいる事に対してふと思った事を呟いた。

「お前が無事ってことは、新八たちは無事なんだな……」

すると、

「ッ！？」

銀時がその言葉を発した瞬間、インデックスの小さい肩がビクッ！  
！と動いた。銀時はそれを見逃さず、怪訝な表情でインデックス  
を見る。

そして時間が刻々と経っていく中、インデックスは顔を伏せたま  
ま、

「銀時……………あのね……………」

重々しく口を開き、そして…

「……………緑子が拐われた」

インデックスの言葉により静寂が漂っていた部屋が切迫感で包まれた。それは銀時にとって信じがたい事であり、表情が一変する程の事だった。

そして、さらにインデックスの言葉は続き、

「それで……………緑子を守るうっつとして新八が……………」

涙がポトポトつと布団に落としながらインデックスが次の言葉を言おうとした時、

ヴァン！！ヴァン！！ヴァン！！ヴァン！！ヴァン！！ヴァン！！  
ヴァン！！ヴァン！！ヴァン！！

外からけたたましい警報が鳴り響き、それに続き、

『只今、江戸全区域に避難命令が出されています。まだ家に残っている人は速やかにターミナルの地下に移動してください。』

耳に響き渡るぐらいの音が聞こえてきた。

「どつなつてんだ…こりゃ…」

銀時はそれに対し目を驚いた表情でそう呟いた。

すると…

ガラガラガラガラ！！

玄関からドアが開く音が聞こえてきた。

銀時は驚愕した気持ちを押し殺し、警戒した目付きで足音がする方

向に視線を向け、そして足音が目の前の襖の前で止まり襖が開いた時、

銀時は動こうとして体を止めた。

何故なら、そこにいたのは…

百華を率い、死神太夫っと言われていた月詠だったからだ。

避難警報（後書き）

今回ののは、凄くいまいちだと思っています。……後、次回は銀時たち  
ちに危機が…です。

意志（前書き）

久しぶりのため文がダメになっています。ほんとうにすいません。

## 意志

### 第八十四幻想 意志

警報が鳴り響き、耳障りで仕方がない中、

銀時は土足で入ってきた月詠に眉をひそめながら見ていた。

そしてそれは月詠も同じく、布団からいつ何時起き上がることができる体勢をしている銀時を見ていた。

体に何重にも巻いてある包帯、いつもと変わらない表情をしているが、やはりどこことなく違う表情をする銀時の顔。

月詠は銀時の状態を確かめると、苦い顔をしながら顔を伏せ、それ



から室内に静寂が数秒続いた。

銀時はそんな月詠に声をかけようと、唇を動かした時、月詠は静かに重い口を開いた。

「いつもじつじや……………」

その最初の一言に銀時は目を細め、月詠を見つめるが銀時は黙ったまま、

「わっちは只ぬし達を見ている事しかできん」



銀時は月詠の部下を見てそんな事を思っていると、月詠とその部下が小声で何かを話始めた。

「月詠様、仲間から炎蝶がかぶき町に入って来たと言われ、連絡がありません。……急がないと……」

月詠は部下からその知らせを聞いて、眉間をよせた。そして部下にわかった……と言って部下を元いた場所に向かわせ、部下が見えなくなつた。

その時、

「銀時？」

インデックスの不安な声が聞こえてきた。月詠はその声に直ぐ様振

り返ると、

銀時は布団から立ち上がり、畳の上に置いてある服を肩に担いでいた。

月詠はその銀時の行動に対し、銀時が何を考えているのかが読めた。

827

しかし既に銀時はインデックスに声をかけず月詠の横を通り抜け部屋を出ようと足を進めていた。

月詠は、

「銀時!!」

叫ぶように銀時を呼び止めた。

そして足を止めた銀時に神妙な表情をする月詠は、

「何処に行くつもりじゃ…？」

わかりきっている事を問いかけた。しかし銀時は何も返答しなかった。

月詠はそんな銀時に叫ぶように、

「ぬしを巻き込んだのはわっちじゃ！！責任はわっちにある！！だからわっちが何とかする……………ぬしは…」  
銀時の背に向かって言い叫び、本当に言わなければいけない所を言おうとした時、

「前に言ったはずだ……」

銀時は月詠に背をむけながら言い、月詠はその言葉により今、言おうつとしていた言葉を喉の奥に押し込ませてしまった。そして銀時は呆然とする月詠に言った。

「お前に逃げろなんてもう言わせねーってな……」

月詠はその言葉に対し目を見開きながら固まってしまった。

何故なら、その言葉は月詠が師匠、地雷垂に捕まった時、銀時が月詠に自分らしく生きていく事について言ってくれた言葉だったからだ。

そして月詠に向かってそう言った銀時は、後ろに振り返ることをせず止まっていた足を進めた。

そして月詠は全く動けないまま銀時の背中を見ていた。

その時、

「銀時も、とうまと一緒なんだね……」

後ろからインデックスがそう呟いた。

月詠は、どういうことじゃ？……………つとでも言いたいような表情を見せ、インデックスはそんな月詠に微笑み、

「とうまもね……………どれだけ怪我していても他人のために、一人で  
行っちゃうの……………今の銀時みたいに……………」

まるで、懐かしいように思いながらインデックスは言った。

そして、インデックスはそれから間をとったように、でも……………つ  
とつけるとう詠に向かって

「銀時やとうまだけにまかせてられないよね？」

純粹かつ、真剣な瞳で月詠の顔を見た。

月詠はその瞳はまるでインデックスの意思が写ったようだと思い、  
そんなインデックスに心の中の何かが動かされたような気がした。



そして月詠はそこまで思いながら、インデックスの真剣な表情を見て口元を緩ませ、

「そうじゃな……………」

インデックスに微笑みながら言った。

銀時はそんな月詠とインデックスのやりとりを密かに見て、ふっ…  
つと安心したように小さく笑った。

しかし、その時…

ドオオオン！！！！！！

外から激しい衝突音が鳴り響いた。

銀時はその音に直ぐ様反応し外に出て二階から下を見下ろし時、初めに目に写ったのは…

月詠の部下達があちこちで倒れている光景だった。

そして地面から不可思議な湯気がたっているのを見て、銀時が、まさか……っと言った時、

「どれだけ人数が多くても、勝てないっつと、わかっているのに」

向かいの電柱の上から声が聞こえてきた。

銀時は体に力をいれながら警戒した表情で電柱の上を見ると、

そこには、

オレンジ色の穴が空いた鉄球を持ち、マントを羽織る、赤髪の焔が立っていた。

そして、焔は視線の先にいる銀時に、

「坂田銀時……及ぶに禁書目録……あなた方を、連行します。」

オレンジ色の鉄球を構えながらそう言った。

## 意志（後書き）

次回は出せたら、新しいとある魔術の禁書目録キャラクターを出したいっと思います。（今、予定しているのはうすいキャラクターです。）

**魔神になるはずだった男（前書き）**

今回のキャラは、とある魔術の禁書目録SS2に出てきたキャラです。分からない人には本当にすいません。

魔神になるはずだった男

第八十五幻想

魔神になるはずだった男

警報がいまだに鳴り続け、辺りに静寂に包まれてしまった、

そんなかぶき町に、一人…

小さな男の子が何かから逃げていた。



「はあ、はあ、はあ、はあっ!?!」

男の子は必死に逃げる。

誰も居ない道を。

しかし、何処に行っても人一人いない。

(あの時…僕がちゃんとお母ちゃんの言うことをきいてたら…)

男の子はそんな中、泣きながら後悔していた。

それは警報が鳴り出す少し前、

「コラ！！手伝いも終わってないのに家に出ちゃだめでしょ！！」  
「へっへー！！」

母親の言葉を聞かず、男の子は外に出て、友達がいつも集まる遊び場へ向かった事が原因だった。

その遊び場は、いつも子供たちが集まっっていて賑やかな場所なのに、

この日は、誰もいない。

「あれ？誰もいないや？」

男の子は一人、その場に来ると誰もいない事に溜め息をついた。

そして、帰ろうかな…と足元にあった石を蹴った、

その時。

ヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァン

けたたましい警報が鳴り響いた。

男の子は、何？と驚いた顔で辺りを見渡した時、

「ぐわあー!!.....っ.....」

後方から男性の悲鳴が聞こえてきた。

男の子は、ビクッ！！と体を震わせながら、ゆっくりとその悲鳴が聞こえてきた方向に振り返ると、そこで男の子の目に写ったものは、

胸部にポツカリと穴が開いた、倒れた男性とその直ぐ側に立つ赤い髪をした少女だった。

男性は全く動く気配がなく、少女のほうも動く気配がなかった。

しかし、男の子は気づいた。

それは少女の全身が微かに光っている事と少女の口をから垂れている液が同じように光っている事に。

すると少女の口元から垂れる光る液が倒れている男性の頭に落ちた瞬間、

ジュウウ!!

男性の頭がまるで鉄が溶けたように溶け出した。

「うっ…っ!?!」

男の子は吐き気に襲われた。

それはあまりに衝撃的な光景だった。しかし、男の子は何とか吐くのを抑え、少女を確認する前に逃げた。

そして、その結果が今だった。

あの後、大通りに出ると、既に人は居らず、家に戻ったが、母親の姿はなかった。

男の子はそんな事を思い出しながら走った。

しかし、子供の体力には限界がある。

男の子は今まで死に物狂いで走っていたが、ついに限界がきた。  
男の子は足を止めた。

そして、荒い息使いで顔を伏せた時、

ドオオワ！！

赤い閃光が男の子の隣を貫いた。

男の子は目を見開き、歯をガチガチと鳴らしながら、後ろに振り返った。

そして、そこに広がっていた光景に目を疑った。

何故なら、そこにいたのは…

全く同じ顔をした少女が大勢いたからだ。

そして、少女たちの一人が口を大きく開けて、口からは湯気が出していた。

しかし男の子にはそんな事を気にする余裕はなく、もう立つことさえ出来なかった。



そしてその少女は口を閉じたと思うと、また口をあんどぐり開けた。

すると、口の中が激しく光だし、

赤い閃光が発射された。

男の子は、笑うしかできなかつた。涙を流しながら、母親の顔を浮かべながら、

そして、閃光が男の子の顔に後、十メートルに差し掛かった。

その時、

「大丈夫か？」

男の声でした。

男の子は、え？つと驚いた表情でその声の方向を見ると、

そこには、

一人の男が立っていた。

男の子はその男の大丈夫か？つと言つ言葉に、はい…つと答えると同時に頭にある言葉が浮かんだ。

誰？。

しかし、男は男の子にその言葉を言わせなかった。

「あそこの隅に隠れている」

男は男の子にそつ指を示すと直ぐ様、目の前に立つ少女たちを見た。

男の子はその光景に唾を呑み込みながらそそくさと言われた場所へ走っていった。

男はそれを確認すると、少女たちに向かって歩き出します。

少女たちはそれに反応すると先程とは違い前列の十人が口から赤い閃光を放った。

ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！  
ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！ドオオワ！！

閃光は見事に男に命中し、凄まじい轟音が鳴り響いた。  
もうもうと立ち込める砂煙。

少女たちは男を殺したとみなし、足を進めたその時。

「この世で最も恐ろしい攻撃は、『説明のできない力』だ」

砂煙の中から声が聞こえた。

砂煙が徐々に収まっていく中、男は少しも変化しておらず、一本たりとも髪が乱れた様子がなかった。

そしてそんな無傷な男は、

「この世で最も恐ろしいのは、理解のできない所から、説明のできない力が働いて、解らないまま戦わせられる。」

静かな口調で話し続け、そんな男に気にも止めず第二砲を放とうとする少女たちに向かって目を細めながら言った。

「それがどれだけ厄介なものか、身をもって知るだろう。」

その瞬間、少女たちは自分の身に何が起こったのか全く理解のできない攻撃を受けた。

少女たちは知らなかった。

その男の正体を。

その男は、魔神になるはずだった男、オツレルス。  
魔術サイド全体に追われる身であり、『北欧王座』という『説明の  
できない力』を扱う者だとは。

魔神になるはずだった男（後書き）

次回は銀時と焔の対決です。



## 侮辱（前書き）

久々の更新なので、おかしかったらアドバイスお願いします。

## 侮辱

### 第八十六幻想 侮辱

「坂田銀時…及びに禁書目録…あなた方を連行します」

突然の焰の出現と発せられた言葉に銀時は眉間を寄せた。

禁書目録という言葉が出てきた事に対しても、殺されかけた自分が何故今になって連行されないといけないのか、という事についても。

銀時は様々な疑問に解くため焰に尋ねる。

「テムエに連行される覚えはこれっぽっちもねーんだがなー？」

焰は微かに息を吐き、

「はい、私たちもあなた方を連行するつもりはありません」

銀時やインデックスなど興味が無いといった感じで目を細め、銀時はその微かな表情を見落とさなかった。しかし、表情とは裏腹に焰は言った。

「しかし、蓮鬼様はあなた方の能力にご執心なようです」  
「？」

銀時は眉をひそめ、焰はそんな銀時の表情に呆れつつ、

「特に……」

銀時にギラリとした瞳で睨み付けながら口を開いた。

「上条当麻の幻想殺し（イメージブレイカー）や………あなたが持  
リフレクアクセルト  
つ自在反射などですが……」

焰はつまらなそうに息を吐く。

しかし、銀時は聞き覚えのない言葉に硬直していた。

リフレク……アクセルト………、銀時はそう呟いて咲希との戦いの時  
に出したあの姿を思い出す。

確かに能力といえは能力だが、それは魔術による後遺症が体に定着しただけであって名前など無いと思っていた。

愕然とする銀時に、焰は言葉の補足をするように、

「実際には『リフレクアクセルト』という能力は別名、自在反射という名前らしいのですが」

髪の毛を整えながらそう付け加え、腕を振り上げながら、

「お喋りはこれくらいにして、あなた方には黙ってついてきてもらいたいです」

銀時に向かって鉄球を投げつけた。

「チツ!!」

銀時は素早く後ろに振り返り、背後から銀時と焰の会話を聞いていたインデックスの体を強引に片腕で持ち上げ、向かってくる鉄球を回避した。

「こつちだ!!」

そして月詠に向かって叫びながら月詠とともに室内の窓を蹴飛ばし地面に飛び降り万事屋から離れた。

「やはりそう簡単にはきてくれませんか」

鉄球を拾いに来た焰は銀時が逃げた痕跡が残る窓を見てつまらなそ

うな表情を見せた。

そして焔から逃げた銀時たちは万事屋から離れた人通りが全くない道を銀時、インデックス、月詠といった順番で走っていた。

そこで月詠は気づいた。

銀時の走りに疲れがある事に、だがそれは微かにわかるような事だった。

何故なら銀時自身が気づかせないように隠しているからだ。

月詠は齒噛みしながら銀時を背中を見続けた。

その時だった。

銀時は上空から殺気を感じた。銀時はそれを確認する前に後ろに跳びながら回避する

ドオオン！！

得体の知れない殺気は銀時がいた場所に衝突し、衝撃により砂煙が漂った。

すると、

「逃がしません」

砂煙の中から女の声が聞こえてきた。

そして砂煙がはれていくとそこにいたのは鉄のグローブを着けた焔に瓜二つの少女、紅だった。

銀時は表情を曇らせ、小さく舌打ちをしたその時、銀時は新たな殺気に気づいた。それは月詠も同じく後ろからの殺気にクナイを取り出し構える。

殺気はすぐ近くに並ぶ住宅の横路から出てきた。

そこにいたのは焔だった。

「くっ……………」

月詠はインデックスを守るようにクナイを強く握る。しかし銀時と月詠は怖じけはしなかった。インデックスは銀時と月詠の背中を見

ながらゴクリと唾を飲み込んだ。

するとそんな銀時たちの表情に紅は口を開いた。

「何故あなた方といいあの眼鏡の少年といい、こつもあなた方は悪あがきが好きなのでしょうか？」

銀時は眼鏡の少年と言った言葉に眉間を寄せ、紅に叫んだ。

「テメエ、新八に何しやがった！！」

すると焰が口を開いた。

「私たちは何もしていません」

「あの眼鏡の少年は蓮鬼様に粛清されただけです」

紅は銀時を見ながらあの時、新八と緑子に何があったのかを話出した。

「蓮鬼……………」

突然の蓮鬼の出現に焦りが見える緑子はそう呟いた。

「フフツ……………」

それに対して蓮鬼はまるでその反応が楽しそうに口元を緩ませた。

そしてその場に緊迫感が漂った時、新八が後ろにいる緑子に言った。

「緑子さん、後ろに離れていてください。」

新八は緑子に振り返らず蓮鬼に向かって走り、

「うおおおおおおお！！！」

木刀を振り下ろす。

しかし蓮鬼はそれを簡単避けた。

「くっ！！！」

新八は蓮鬼に連続で木刀を振り下ろすが蓮鬼はまるで遊んでいるかのように避け続けた。

すると蓮鬼はつまらなそうに息を吐き、

「あなたもしかして、あの中で一番弱いんじゃないの?」

木刀を振るうのを止め荒い息をする新八にそう言うと、新八は

「それでも」



大きく空気を吸いながら、

「僕は侍だ！！一旦護ると決めたものは死んでも護るんだああ！！」

叫びながら蓮鬼に木刀を振り下ろした。

しかし、それが蓮鬼に当たる事はなかった。

「その心意気は立派だけど……」

蓮鬼は一瞬で新八から少し離れた所まで移動し髪を整え、

「それが命取りよ……」

冷酷な瞳を新八に送った。

新八は振り返る事ができなかった。何故なら目の前に火が灯された爆弾と思わしき物が地面に転がっていたからだ。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

爆弾は新八の直ぐ側で爆発した。

緑子は目を見開き、い……いや……、と髪の毛を掴みながら肩

を震わせる事しか出来なかった。

紅はそう話し終わると目の前にいる銀時に視線を向けた。顔を伏せ表情が見えない銀時を。

そして呆れたように紅と今まで黙っていた焔は、

「あの少年も素直に蓮鬼様に緑子様を引き渡せばよかったのに」  
「哀れを通りこしてヘドが出ます」

銀時たちに向かってそう言った。

その時、

紅と焔は上空から何かを感知し素早くそこから離れた。

ドゴオオドゴオオオオオ!!!

すると上空から落ちてきた物が紅たちがいた場所で爆発し、同時に月詠と銀時の目の前に何かが上空から飛び降りてきた。

そしてそこにいたのは…

長髪をした男、桂小太郎とペンギンみたいな姿をしたエリザベスだった。

桂ははまだ顔を伏せる銀時の足元に布が被せられた刀を投げ、

「お前に渡してくれっと頼まれた」

紅を睨み付けた。エリザベスに至っては不気味な瞳で焔を睨み付けていた。

桂は眉間を寄せ、

「銀時、俺も参加させてもらうぞ。我ら侍を侮辱したこやつらを許してはおけぬ」

刀を鞘から抜こうとした。

しかし、銀時から思いもよらない言葉が出てきた。

「ツラ……………テメエは手を出すな」

これには桂はもちろん、月紅や焔、月詠までもが目を見開いた。

桂は銀時に振り返り叫んだ。

「何を言っている！！銀……………と……………」

しかし、桂はある光景に目を疑った。それは月詠やエリザベスも同じだった。

頭に巻かれた白い紐。

全ての色を寄せ付けない白い羽織。

鬼神のごとき赤い瞳。

そう、そこにいたのは、

伝説の武神、白夜又だった。

そして白夜又は布から取り出した刀だろう、とぐるを巻いた白い龍が鎧となっている刀を鞘から抜き、

「鎖に繋がれて言われるがままに動いてるテメエらなんぞが…」

殺気を放ちながら言った。

「アイシを語るんじゃねー……」



侮辱（後書き）

次回は銀時と紅、焰との戦いです。

銀色の翼（前書き）

銀時の言葉にいまいちがあるかも…

## 銀色の翼

### 第八十七幻想 銀色の翼

インデックスは驚愕した表情で立ち尽くしていた。

周り声や辺りに漂う緊迫感などに頭に入らず、ただ一点の目に写る物しか見れなかった。

坂田銀時だ。

しかし、普段の銀時とは雰囲気や姿がまるで違う。

(何……この魔術……)

インデックスの頭には十万三千冊の魔道書が記録とされ保管されているが、今の銀時から溢れでる光を使った魔術は十万三千冊の魔道書の知識を使っても解らなかった。だと言って超能力かというところは違つと確信できた。

何故なら銀時から溢れでる光には微かに魔力を感じたからだ。

(なら………一体………)

インデックスがそう疑問を感じたその時。

ドオン！！

焰が動いた。

月詠の隙を見て地面を強く蹴り、銀時の真上に高く跳び上がりながら目にも止まらぬ速さで銀時目掛けて大きな鉄球を投げつける。

「銀時！！」

月詠は振り返りながら鉄球にクナイを投げようとするが、気づくのが遅すぎた。

既に鉄球は落下による加速によって速度を増し、銀時に直撃するまで、後数センチとなっていたからだ。

そして、

ドゥーゴッ！！

不気味な音が辺りに響き渡った。それは生々しい音だ。

しかし、

その音が聞こえてきたのは上空からだった。

月詠は視線を空に移す。  
そこで月詠は衝撃的な光景を見る。

「がはッ!？」

地面に向けられたはずの鉄球が全く反対の上空に存在し、焰の体に衝突していた。

月詠はその光景に啞然としていてと次の瞬間、

白い羽織が空を舞う。

銀時は焰の脇腹に刃を逆さにした状態の刀を叩き入れた。

ミシッ…

ドオオオオオオオオオオ!!

焰は叫ぶ間もなく鉄球とともに垂直に地面に激突した。

衝突により砂煙が舞うが微かに焔の姿が見える。

しかし焔の表情は先程とは一変していた。

「アッ……クッ……ッ」  
激痛が顔を歪まし、腹を抑えながらのたうち回っていた。

インデックス、月詠、桂、エリザベスは啞然とした。

そこでインデックスは銀時の存在を思い出し、上空を見上げる。

しかし銀時の姿は無かった。

インデックスは視線をあちこちに向けるが何処にも見当たらない。

するとその時、

シュッ…

インデックスは数メートルから人の気配を感じ、視線を向けると、

そこには…

白い羽織を揺らわす銀時が立っていた。

一方、銀時から離れた所にいた紅は目を見開き表情から恐れがうかがえる程だった。

ギロリとした真つ赤な瞳。尋常ならぬ威圧感。  
銀時から溢れでる異様な白い光。

どうすれば……、紅は喉をゴクリとさせ銀時に視線を向けたその時、  
紅の視線がある少女に止まる。

白い修道服を着たインデックスだ。

その瞬間紅は小さく口元を歪め、地面に倒れている焔に振り向き、



「焔、立ちなさい」

冷酷な瞳で焔に送る。

それに対し焔は痛みを堪えるようにゆるりと立ち上がった。

紅と焔の目が合う。

そして数秒と経たない内に焔の表情に異変が起こった。

それは、紅と同じように口元を歪ませたのだ。  
銀時は目を紅と焔を睨み付ける。

しかし紅と焔は全く怯えることも無く動いた。

紅と焔は銀時に向かって最速で走りグッと武器を握る。

銀時も同じようにギュッ、っと両手に力を入れる。

しかしここで銀時の表情が一変した。

焔が数メートルという所で方向を変えたのだ。

そして焔の視線の先にいたのは、

インデックスだ。

「ッ!？」

銀時は目を大きく見開けながら歯噛みした。  
あまりの突然の事に月詠たちも間に合わない。

そうしている間に焔は鉄球を投げる体勢にあった。

紅はそれを確認すると口元を歪める。

ここで銀時がインデックスに向かって走ったその時、銀時に隙ができる。もしインデックスを無視して紅と対峙すればインデックスはただではすまない。

『勝った』。紅と焔がそう思いながらそれぞれの武器をインデックスと銀時にぶつけようとした。

その時、

銀時から何かが外れた。

「うおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおー!!!」

銀時が刀を握りしめながら空に向かって叫んだ瞬間、銀時から溢れ  
でていた白い光が銀色へと変化した。

刹那……

「がはッ!?!」  
「ッ……………!?!」

紅と焔の体が二十メートル先まで吹き飛んだ。

ドシヤ!!

紅と焔は地面に激しく倒れる。

焔はあまりの痛みに声がでないのか、うずくまった状態だった。

紅は痛みに耐えながら顔を歪め顔を上げる。

しかし紅は次の瞬間『恐怖』という言葉が頭を支配した。

ヴウウウ、ヴウウウ、ヴウウウ、ヴウウウ、ヴウウウ、  
ヴウウウ、ヴウウウ、ヴウウウ、ヴウウ

そこに君臨していた銀色の翼とその翼を出現させた坂田銀時に、

インデックスは翼を形作る銀色の光を漂よわす銀時の直ぐ側にいた。

しかしインデックスは銀時よりも、銀時から溢れでる銀色の力に目を疑った。何故なら、

銀時から溢れ出る魔力が聖人でも扱えない力という次元を越えていたからだ。

するとそこで銀色の翼を放つ銀時がインデックスに口を開いた。

「下がってる、インデックス……」

インデックスはその瞬間、体全体が震え、体が危険だと告げた。

インデックスは直ぐ様少し離れた所にいた月詠たちに駆け寄り、

「ここから離れて!!」

叫ぶいきよいでそう言いながら月詠たちを十メートル先まで誘導した。

銀時はそれを確認するまでもなく目の前にいる紅と焰を睨み付けた。

そして、

「てめえらが何処で何を殺ろうがどうぞ好きにやりやい……………」

赤き瞳で殺気以上の殺気を放ちながら、

「だがてめえらは……………俺のモンを踏み荒らしやがったな」

刀を力強く握り、





銀時は翼から放出された銀色の光は刀身に全て集め、紅たちに向かって縦に振り落とした。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオウ！！！！！！

銀色の光は地面をえぐりながら紅と焔に向かって突き進み、

紅と焔は叫ぶ事もなく銀色の光にのみ込まれた。



銀色の翼（後書き）

次回は出せたら上条を出したいと思います。

## 交差（前書き）

今回はタイトルとあっていないかもしれませんが、後、何かおかしい  
と思ったら教えてください。

## 交差

### 第八十八幻想 交差

巨大な銀色の翼が消え、辺りに大量の砂煙が舞う中、  
銀髪の侍は立っていた。

白い羽織を揺らせ、赤い瞳をした白夜叉ではなく普段の服装で見慣れた姿の坂田銀時だ。

そして銀時の視線の先には、

ポツコリっと大きくえぐられた地面が目の前に広がっていた。

すると、

「銀時!!」

後ろから白い修道服姿のインデックスが走ってきた。  
それに続いて月詠や桂、エリザベスも走りはしないものこちらに  
歩いてくる。

そして一足早く銀時の元にたどり着いたインデックスはえぐられた  
地面に見て、

「死んじゃったの……」

暗い表情をしながら小さく呟く。

しかし銀時は黙ったままだ。

そしてその場に静寂が漂った。

その時、

ゴソッ…

えぐられた地面の中から音が聞こえてきた。

インデックスは、？、っと目をこすりながらじゅっと穴の中を見  
ると、

そこには、

土に埋もれながらも起き上がろうとしている紅と焔がいた。

インデックスは、えっ！と驚いた表情で視線を銀時に向ける。

しかし銀時はその場から振り返り紅たちから離れるように足を進め  
ようとしていた。

「な、何故ですか……」



すると何とか起き上がるうとする紅が呟いた。

それに対し、銀時は足を止める。

「私たちは貴方の仲間を傷つけ殺そうとしたんですよ……それなのに………何故………」

倒れた状態の焰とそう言う紅はまるで信じられないというような目をしながら銀時に尋ねた。

それに対し、銀時は背を向けながら口を開く。

「喧嘩ってのは何かを護るためにやるもんだ………俺アただそれに従っただけだ」

その言葉に紅と焰は目を見開く。そして、何に従ったんですか……つと紅がさらに尋ねると、

銀時は風に前髪を揺らしながら言った。

「俺の武士道だ」

その言葉を聞いた瞬間、紅と焰は脳裏にある日のことを思い出した。

それは咲希を殺した朱雀との話の事だ。

『はあ………咲希も馬鹿と思わない？自分のルールとか言っちゃって』

『はい、確かにそうですね。朱雀様』  
『本当に哀れですね』

紅と焰は朱雀とそう話しながら咲希をあざ笑っていた。

しかし、今はどうだ。

あざ笑うことができない。馬鹿にすることができない。

何故なら、銀時のその言葉に特別な感情が芽生えたからだ。

そして紅と焔は銀時の背中をみながら思った。

咲希様も私たちと同じように坂田銀時にひかれたんだ、と。

クスッ…

すると紅と焰は自然と笑っていた。

銀時とインデックス、月詠、桂、エリザベスは紅たちに視線を向ける。

それは、初めて素直に気持ちを表現できた瞬間だったのだろうか、無邪気な子供のように笑っていた。

そして紅たちは笑いながら頬を緩め何かを銀時に言おうとした。

しかし、紅たちにそんな時間は許されなかった。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ、

紅と焔は気づいてしまった。

自身の体内から奇妙な音が聞こえてくることに、そしてそれが何なのかに。

紅は目を見開きながら、焦った表情で叫んだ。

「焔!!」

焰はその言葉にいち早く何かを理解し、最後の力を振り絞って一番近くにいるインデックスに向かって鉄球を放った。

銀時は驚きながらも素早くインデックスに近づき、左腕をインデックスの腰に回しながら持ち上げ、跳躍して鉄球を避けた。

その時、

銀時は見た。

紅と焔の涙ぐみながら笑う最後の笑顔を、

ドオオオオオオオオオオオウン！！！！

一方、上条当麻は一人いない道を走っていた。

その表情からは焦りが見える。

そして上条の視線の先には巨大な工場が建っている。

上条は齒噛みをしながら力強く走った。

( 緑子!! 御坂!! ..... )

とある少女を助けるために。 とある少女を止めるために。

モクモクと黒い煙が漂う中、銀時たちは煙がたつ穴を見ている。

そこには先ほどまでいた紅と焰の姿はなく、インデックスは焰が鉄球を放ってきた事を思い出しながら愕然としていた。

「.....ふざけんじゃーねよ」



すると銀時がインデックスの側で小さく呟いた。

紅と焰は笑っていた。

それはまるで子供のような無邪気な笑顔だった。

もしかしたらこれから先、まだまだ笑える事があつたかもしれない。

それなのに何故あんな最後を迎えないといけない…

銀時の体が小刻みに震える。刀がガタガタと音を鳴らす。

月詠や桂、エリザベスはそんな銀時の背中を見つめる。

そして銀時は瞳を赤く染まった時、銀時は感情のままに言葉を吐いた。

「……………炎蝶だろオが何蝶だろオが構いやしねエ……………土に  
帰してやらァ」

## 交差（後書き）

次回から上条編みたいな感じで、書きたいと思います。

潜入と愕然（前書き）

今回は短いです。

## 潜入と愕然

### 第八十九幻想

#### 潜入と愕然

静寂が漂う街並みの中、

かぶき町の外れにある空き地に建てられたマンション三階建てにあたる大ききの工場に、

上条は荒い息を吐きながら立っていた。

工場の周りには数台の真選組のパトカーが止まっている。

しかし、上条の視線はそこには向かなかった。

ビリィ……………バチィ……………

大勢の赤髪の少女たちが地面に倒れ、地面から電気がいまだにほとばしっていた。

上条は直感した。

こんな事ができるのは上条が知る中で一人しかいない、と。

するとその時、

ゴソッ…

一台のパトカーから音が聞こえてきた。

上条はそのパトカーに近づきパトカーの周りに視線を向けると、パトカーの影にしゃがみ込みながら隠れる真選組隊士がいた。

上条はその隊士に近づき、見つかった事に驚く隊士の胸ぐらを掴み声をあげる。

「おい！！御坂はどこに言った！！」

「あ……あの工場の中……だよ……」

隊士は上条の気迫に押されビクッ、っと肩を動かしながら工場を指さす。

上条はクッソッ！！っと言いながら隊士を突き飛ばし工場に足を向けた。

すると突き飛ばされ、地面に倒れた隊士が上条に叫んだ。

「おい！！危ないぞ！！」

何故なら電気はまだ地面でバチバチと放電していたからだ。

しかし、上条は隊士の言葉に耳を傾けようとしな

聞く必要がないからだ。

上条は左膝を地面につけながら右腕を振り上げ、地面に拳を叩きつけた。

キュウイン!!



その頃、パソコンの光だけが室内を明るくするとある一室に御坂美琴はいた。

御坂の目の前にはパソコンの画面があり手にはマウスが握られている。

しかし御坂はそれを動かそうとしない。

いや、動かさないでいた。

御坂の顔は愕然としていた。あまりの衝撃に声を出せないでいる。

それでも御坂は小さな声で呟く。

「何で…」

目の前に記されているものに訴えかけるように、

画面に記されているものに、

『超電磁砲量産計画を利用した妹達複製計画』  
システムズ

そして御坂は全ての感情を吐くように叫ぶ。

「何だよ……!」

潜入と愕然（後書き）

次回は真選組の三人を出したいと思います。

涙（前書き）

文章に何かおかしな所があったら教えてください。

## 涙

### 第九十幻想 涙

炎蝶の基地である工場の二階にあたる通路に真選組、近藤、土方、  
沖田の三人は歩いていった。

近藤と土方の手には刀があり、沖田はバズーカを片手で担いでいる。

しかしそれらは普段土方たちが使っている武器ではない。

ここに来る前に真選組の上である松平片栗粉に渡された物だ。  
土方と近藤の刀は薄い水色をしており、沖田のバズーカは外見は変  
わらないが中身はほぼ同じ色をしている。

土方は手に馴染まないの武器を見て息を吐く。

「…まったく、あのシジイ…こんなちんけな物渡しやがって…」

「まあ、まあ、そう言つなトシ」

近藤は苦笑いをしながら土方をなだめ、近藤に賛同するように沖田が、

「そうですね土方さん、普通の物だとドロドロに溶けちまうんです  
ぜ」

突入のさいに大勢の赤髪の少女から放たれた閃光を思い出しながら  
そう言った。

その時、

ジュウウツッ!!

頭上に赤い閃光が通り抜けた。

土方、近藤、沖田の三人はその閃光を眺め、ゆっくりと後ろに振り返ると、

そこには、

十人の赤髪の少女が立っていた。



.....

「うおおおおおおお！……！」

土方と近藤は全速力で逃げた。

しかし、三十メートルという所で近藤はある事に気づく。

「あれ？総悟は？」

「知らねえよ！！総悟ならそこに……！」

土方はそう言いながら、視線を隣に向けるが、

沖田の姿はなかった。

土方と近藤はその瞬間、まさか！？っと思いつつ同時に後ろに振り向くと、

案の定、土方と近藤の勘が的中した。

沖田がバズーカを少女たちに向かって構え、発射する体勢に入っていた。

そして、

「あばよ」

土方と近藤が止めに入る前に、沖田はニヤリと口元を歪めながら躊躇なく引き金を引いた。

ドオオオオン！！

一方、上条は天井についた電気を頼りに太陽の光が全くあたららない地下通路を歩いていた。

御坂の後を追う中、電撃による焦げた痕跡を見つけその跡を辿って行った先に地下への入り口を見つけ上条は後先考えずに入ったのだ。

しかし一向に出口が見つからない。

ここにはいないのか？、上条がそう思い始めた時、

視線の先に部屋の入り口らしきものが見えた。

そこからは光がもれている。

上条は慎重に足を進めた。

音をたてないように、静かに、

そして入り口の直ぐ側にまできた上条はゆっくりとした動きで部屋を覗くと、

そこには見覚えのある少女が立っていた。

御坂美琴だ。

御坂は机に乗せられたパソコンの前に立ち、両手を机について全く動こうとしない。

しかし上条はそんな御坂の様子に意識がいかなかった。それは御坂が無事だと分かった事で安心し肩の力が抜けたからだ。

「御坂」

上条は御坂に近づきながら声をかける。

しかし上条が見たものは、

そんな安心という言葉を粉碎させるようなものだった。

御坂は上条の存在に気づき愕然とした。

そして止めようと努力した。

しかし止める事はできなかった。

そう…

瞳から頬に流れる大粒の涙だけは…





涙（後書き）

次回…

悲しみの連鎖

## 悲しみの連鎖（前書き）

なんとか頑張つて書いてみました。

## 悲しみの連鎖

### 第九十一幻想

#### 悲しみの連鎖

上条は動けずにいた。

それは体に怪我をして動けずにいるのではなく、目の前の衝撃に体が思うように動けないのだ。

しかし上条は足を動かした。 真実を知るために、

そして御坂の直ぐ側に立ち止まり御坂の目の前に置いてあるパソコンに視線を向けた。

しかしその瞬間、

「なっ!?!?.....」

上条は目を見開き愕然とした。そして、

何故学園都市の、しかも御坂妹たちの情報が…と上条がそう思った。  
その時、

ザッ…

遠くから足音が聞こえてきた。それも一つではない、もはや何人いるのかさえ分からなかった。

「クッソー!!」

上条は舌打ちをすると、何も喋らない御坂の手を握り、部屋を出て奥の道へと走った。

その頃、

ドオンー!!

真選組の土方、近藤、沖田ら三人は地下らしき所に地上から落ちてきたという形で到着していた。

何故地上から落ちてきたのかというと、数分前に遡る。

数分前、二階での沖田が発射した弾と少女たちから放たれた閃光が激突し爆発し、爆発による爆風に飛ばされた土方たちは二階から地下に繋がる穴らしき所に落ち、その結果、

今の現状となったのだ。

「全く…それで、どこなんだ、ここ？」

土方はそんな事を思いだしながらイライラした状態で辺りを見渡した。

しかし、辺りには何一つなかった。ただあるのは一つの出入口だけだった。

すると、

「クッソ！！」

声と同時に入り口付近からツンツン頭をした少年と、茶髪をした少女が走り去っていったのが見えた。

そして数分後、

上条と御坂は今、何かの製造工機械の影に隠れていた。

普通なら後から追ってくるかと思う状況なのだが、上条は違った。

「御坂！」



上条は普段とまるで違う御坂の肩を揺さぶる。

しかし御坂からは返事がなく、ただ体が震えているばかりだった。

上条は誰かに気づかれるの事など気にせず声を上げた。

「御坂!!」

すると、御坂はその声に反応した。

御坂の口が開く。

しかしそれは返事と呼べる物ではなかった。

「私の……私の……せい……で……」

まるで壊れた玩具のように喋りだした。そう、いつならばパニック状態のようだった。

そして御坂は大粒の涙を流しながら頭を抑える。

しかし御坂の頭の中に蘇るあの時の光景は一向に消えない、

紅が焔を抱えながら立ち去った後、



もう御坂の精神は粉々になる寸前だった。

もはや人並みの思考を持ってない域へと達してにいた。

何かを口から吐きそうにもなった。

涙がかれそうになった。

直接的にはないにせよ、自分がその親子の未来を潰したと思った。

そして自分は生きていていいのかと思った。

しかしそんな御坂を、

上条は静かに抱き寄せる。

乱暴にでもなく、そっと…

御坂は涙を流しながら目を見開き硬直し、それはまるで壊れた玩具が止まったようだった。

上条はそんな御坂に口を開く。

「御坂……」

「……」  
「確かにあいつらや今の奴らが御坂妹のデータを利用して作られたのは事実だ……」

自分の幻想を御坂に伝えるように、

「だけど……だからっていつてお前がそれを後悔しちまうと御坂妹たちもその後悔に入っちまうんじゃないか？」

「……」

「例えお前があいつらに少なからず関わっていても、だからってお前が自分を責める事はねえんだ」

御坂が思う幻想を殺していく……

そして辺りに静寂が漂った中、

上条は御坂から静かに離れ背を向け立ち上がり、

「御坂、お前はここにいろ」

上条は拳を力強く握る。

それはどんな幻想にも立ち向かう覚悟でもある。

「緑子を連れ戻して、インデックスや銀さん、みんなで楽しかった生活を取り戻してくるから」

そして上条はその覚悟を知らしめるように口を開く。

笑みを浮かべながら、

己の幻想を知らしめるように……

「この連鎖し続ける幻想をぶち殺してな」





悲しみの連鎖（後書き）

次回、ついに対決です。

## それぞれの決戦（前書き）

次回、この続きか番外編かで迷っているのですが、どちらがいいと思いますか？

## それぞれの決戦

### 第九十二幻想

#### それぞれの決戦

地下深くにある全く何も無い、まるで実験場のような場所に朱雀はいた。

片手にはオレンジ色の刀が握られている。

朱雀は辺りを見渡すことなく、ただ静かに立っていた。

すると、朱雀は口元を笑みに変えた。

「ここは、昔、朱雀様や緑子、咲希が自分の力を高めるために練習していた場所なの」

そしてたった一つしかない出入口に振り返り、

「だからそうそう壊れないんだけど、そんな心配っているかな？」

刀を赤く光らせた。

するど、

「腐れ外道がベラベラと喋ってんじゃねエ……」

出入口から男の声が発せられた。

男は白い羽織を揺らがせ、足を進める。

白き髪をなびかせながら、

「そんな余裕がいつまでも続くと思うな」

上条は走っていた。

御坂と別れた後、真選組三人にばったりと会い、御坂の事を頼んだ  
上条は通路の奥へと走っている。

そうして走ること数分、上条は足を止めた。

上条の視線の先には入り口らしき、自動ドアがある。

ここだけはまるで神聖な場所のような感じがした。

しかし、上条は足を進める。

大切な時間を取り戻すために…

朱雀は白き羽織を着た男の言葉に口元を緩めた。

「そんな余裕がいつまでも続くと思うな……………か、…：負けた犬がそんな事言っても全然迫力がないな」

朱雀はからかうように男に視線を向ける。

「でも、覚えておいてあげる」

そして朱雀は楽しそうに言った。

「坂田銀時……………いや……………白夜叉さん」

上条当麻は足を止め、拳を力強く握っていた。

視線の先には、

赤き髪を揺らす蓮鬼が立っている。

しかし、上条の視線は蓮鬼を見てはいなかった。

上条が見ていたのは…



あちこち焦げた痕がある服を着、手錠をかけられた緑子だ。

顔には薄い青あざが見える。

上条は以前、同じような光景を見たことがある。

ローマ正教に騙され、一人のシスターが大人数で殴り続けられ横たわっている姿を、

上条は歯を食いしばった。そして蓮鬼に怒りをぶつける。

「テメエ……………緑子に何しやがった！！！」

しかし、蓮鬼は素っ気ない表情のまま、

「別に、ちょっとお仕置きしただけよ」

楽しそうに口元を緩める。

上条は拳をさらに強く握った。

しかし蓮鬼はそんな上条の動作に笑みを浮かべ、

「その右手、話には聞いたけど……どつするの、上条当麻……それとも幻想殺しかしら？」

上条にそう尋ねてくる。

上条は、堅く握った右手を蓮鬼に突きだし口を開く。

「そんなの、決まってんじゃねえか………」

上条の答えは既に決まっているのだから……

「テメエが撒いた幻想を跡形も残さずぶち殺す!!」



それぞれの決戦（後書き）

打ち止め

「ヤッホー　ってミサカはミサカは久々の登場に喜んでみる」

五和

「あ、あ、あまくさしきじゅうせいきょう天草式十字凄教いつわの五和です。」

打ち止め

「何故か、気まぐれで始まった企画なのとミサカはミサカは簡潔にのべてみる」

五和

「あ……………あの……………なんで私がここに呼ばれたの……………ですか？」

打ち止め

「さあ？本文じゃあ出ないからじゃないのってミサカはミサカはハ  
ンカチで涙を吹いてみたり」

五和

「……………」

打ち止め

「あれ？大丈夫ってミサカはミサカは口を開けてもぬけの殻になり  
そうな五和に呼び掛けてみる」



## 交戦1（前書き）

第九十二幻想の後書きから以前の打ち止めと一方通行の会話ばなしを書きました。

とはいえ、今回からは一方通行ではなくて五和を出して見たのですが、よかったら見てください。

交戦 1

第九十三幻想 交戦 1

日の光が当たらず、辺りに緊迫感と薄暗い雰囲気漂わす地下で、

ガキーン!!

死闘が行われていた。

「!!」

銀時と朱雀は同時に地面を蹴飛ばし激突する。

ガキーン！！

オレンジ色の刀と白い光を帯びた刀は音をたてながら押し合う。

どちらも力は互角。

銀時は刀を滑らすようにオレンジ色の刀から離し、そのまま朱雀を狙う。

しかし朱雀も瞬発的な察知能力を生かし己の刀で防ぐ。

銀時は目を細め、後方へと退く。

銀時と朱雀との間に静寂が漂う。

すると朱雀が笑みを浮かべ、

「なるほど……そういつことが……」

銀時の姿を確かめ、腰に手をつける。



「自在反射って以外に使い勝手が悪いのね？」

朱雀は銀時の自在反射を正確に確かめていた。咲希に続いて焔、紅に絶対的な力を見せつけた自在反射を、

「私の力は少し違っていてね」

朱雀はそう言いながらオレンジ色の刀を地面に向ける。

しかし、そこで不可思議な事が起こった。

ジュウウ…

地面との間が二十センチもあるにも関わらず、地面が溶け出したのだ。

「刀から熱を放出させる事ができるの」

「……………」  
「まあ、前に経験したからわかってたんだろうけど…」

朱雀は銀時の体を見つめ、以前のを思い出したかとも言いたげそくに目を細める。

「貴方には全く効いていない……いや、反射されてるっていうのが正しいかな。でも、そこから導かれる事もある。」

「……………」

「貴方の反射範囲が決まっているということと、反射は一つしか対応しない……………」

朱雀は銀時の力を完全に解析したのだ。

しかし銀時は眉一つ動かそうとはしない。

それよりも朱雀は気づいてはいなかった。

銀時の殺気が徐々に高まっていること……

神聖なる場所のような地下の大きな広場で、

上条と蓮鬼は正面から激突していた。

上条は右手を握りしめ、蓮鬼に向かって走り出す。

距離は三十メートルもない。

すると、赤い羽織を着た蓮鬼は袖から何かを出した。

中に炎が灯された透明な箱だ。

しかし上条はただ真っ直ぐに足を動かす。

蓮鬼はそんな上条に向かって透明な箱を投げつけた。

（何だ………あれ………）

上条は不審に思い一瞬動作を鈍らせた。

しかし、その時…

ポオワアアアアア！！！！！！

透明な箱の中に灯されていた炎が透明な箱を素早く溶かし大きくなりながら姿を鳥のように変え、上条を襲った。

「ッ！！」

上条は素早く右手を鳥と化した炎から守るように突き出した。

キュイン！！

炎は幻想殺しにより跡形もなく消え去った。

しかし蓮鬼は、上条に安堵させる時間を与えなかった。

透明な箱、計十個が、

上条の頭上に降り注がれた。

交戦1（後書き）

打ち止め

「落ち着いた？ってミサカはミサカは看護婦という仕事に挑戦してみたり」

五和

「あ、はい……。それで私たちは何をしたら……」

打ち止め

「ああ、それはってミサカはミサカは一回着けている人を見たいがために用意してみたり」

五和

「何をですか？」

打ち止め

「よくぞ聞いてくれましたって、ミサカはミサカはジャジャンとマジカルパワード、カナミンのコスチュームを披露してみる」

五和

「ブゴウ！？な、な、な……」

打ち止め

「さあ、さあ、ってミサカはミサカは……」

五和

「絶対に嫌です！……！」



交戦2（前書き）

ダメ文かも……………しれません。

## 交戦 2

### 第九十四幻想 交戦 2

今、上条の視線の先に広がるのは、透明な箱から溢れ出た十体の灼熱の鳥。

そして炎の円を描くように落下しながら上条に迫っていた。

「ッ!?!」

上条は避けるという選択肢を考えたが直ぐにとり止め、己の武器に意識を注ぐ。

「おおおおおおおおおッ!」

バギイン!!バギギギギイイイ!!

上条は次々と襲いかかる炎の鳥に縦、横、真上と右手を動かしながら次々と炎の鳥をかつ消した。

バギーン!!

そして最後の炎の鳥をかつ消した上条は大きく息を吐き、蓮鬼を睨む。

二人の間に静寂が漂う。

すると蓮鬼はそんな上条を見て、口元を緩ませた。

「フフッ……………」

「…何笑ってやがる」

上条は眉間を寄せながら蓮鬼にそう尋ねると蓮鬼は懐に手を入れ、何かを取り出した。

「これ何だかわかる？」

その手には見るからに固そうな黒い鉄の球体がついていた。

上条は身構えながら拳に力を入れた。

蓮鬼はそんな上条に口元を緩ませ、

「そんな所にいていいの？」

上条にそう言いながら、後ろに顔を向けた。

そして、視線の先には一人の少女が倒れている。

藤葉緑子だ。

「ッ！！やめろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

その瞬間、上条の意識が飛んだ。

上条は地面を蹴飛ばし、蓮鬼へと走り出す。

もし、あの黒い球体がああ鳥を出す物だとしたら……、上条は全力で足を動かした。

しかし、蓮鬼は次の瞬間。

表情を笑みに変えた。

顔を上条に向け、手にのる黒い球体を放り投げた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

一方、とある地下練習場では、

ガギイイイン！！ガギイイン！ガギイン！ガギイン！ガギイン！！！！！！

銀時と朱雀の激しい攻防が広げられていた。

刀が当たるとたびに響きわたる音は徐々に激しくなり、それにつれて二人の動きが速くなる。

そして同時に、相手から退くように飛び離れた銀時と朱雀の頬には一筋の血が流れた。

「決着、つきそうにないね？」

すると、朱雀は銀時に向かって口元を緩ませた。

「……………」

「でも……………」

銀時は無言で柄を握り直し、今にでも飛び出しそうだった。しかし朱雀がそう言った次の瞬間、

ガシッ！！

銀時に何者かがしがみついた。

銀時は目を見開き、振りほどこうと視線を後ろに向けた。

だがその瞬間、銀時は啞然とする。

銀時の背後にいるその者は赤髪をなびかせる少女、数時間前に銀時の目の前で涙を見せた少女。

そう、それは焰と紅に瓜二つの少女だった。

銀時は啞然としながら何かを言おうと口を開こうとした。

しかし、

ガシッ！！ガシッ！！ガシッ！！ガシッ！！ガシッ！！

銀時が何かを言おうとする前に焰と紅に瓜二つの少女が次々と銀時にしがみついた。

赤髪の少女にしがみつかれる銀時は反射を働かせようとしたが、

焰と紅の顔が重なってしまう。

銀時は齒噛みをした、その時。



カチツ…………カチツ…………カチツ…………カチツ…………

ドオオン！！ドオオン！！トオオン！！トオオン！！トオオン！！トオオン！！  
トオオン！！トオオン！！トオオン！！トオオン！！

地下練習場で複数の爆発が起きた。



交戦2（後書き）

打ち止め・五和「銀魂幻想！」

五和「あの……………何ですか？」

打ち止め「いやあ、私違う所でこう言う風にやってるからってミサカはミサカは真似てみましたって言うてみたり」

五和「……………でも、いきなりは……………」

打ち止め「あなたの好意を抱いている人も言ってたよってミサカはミサカは微笑んでみたり」

五和「い、いいですよね！！うん、絶対いい！！」

打ち止め「……………（オリジナルと一緒にやってたって言わない方がいいかもってミサカはミサカは小さくのべてみたり）……………」

五和「？」

## 新年番外編

銀時・インデックス・上条「銀魂幻想！新年番外編！」

銀時「いや、それにしても新年だな」

インデックス「ねえ、ねえ！とうま！」

上条「どうした、インデックス？」

インデックス「新年になったら料理とか食べれるんだよね？」

上条「あ、ああ」

インデックス「楽しみだなあ、かまぼことか黒豆とか、それからそれから」

上条「ストップ！インデックスさん、いくら食べていいっていつても限度が」

インデックス「かまぼこ かまぼこ」

銀時「大変だなあ、上条」

神楽「銀ちゃん!」

銀時「ゲツ!? 神楽:」

神楽「何こんな所であぶらかいてるネ! 早く料理食べて食べて食べてまくるネ!」

銀時「何言つてんだが、そんな沢山の料理が坂田家に並べられると、つてちよつと待て!!!? 銀さんをなぶり殺しにしても何も解決しな、ちよつと待つてエエエエ!!!? 神楽ちゅわアア」

神楽「銀ちゃんのバカアアアアアアアアアアアア!!!」

銀時「ブギアアアアアアアアアア!!!」

上条「.....」

インデックス「どうしたの、とうま?」

上条「いや.....、あれ? 何だ、これ?」

インデックス「手紙だね、とうま。えー..... 作者の変わりに読者

に明けましておめでとございますって言うておいて、だって」

上条「…それぐらい自分でできないのかよ……」

インデックス「まあ、まあ、とつま

上条「はあ、まあいいか。じゃあ……」

インデックス「新年、明けまして」

上条「おめでとございます…」

インデックス「今年もよろしくかも」

## 決着1（前書き）

今回は長いです。……………何か間違っていたら教えてください。

## 決着 1

### 第九十五幻想 決着 1

地下を響き渡らせた爆発音が止み、静寂が漂った地下練習場。

無数の煙が立ち上り、人を確認するのが難しい程の煙が空気中に広がる中、

赤髪の少女、朱雀は立っていた。

「すごいね」

朱雀は爆発の中心である場所に視線を向け笑みを浮かべながらそう呟く。

その言葉は視線の先に微かに動く人物に向かって放たれたものだ。

すると、段々と煙が晴れてきた。そして煙の中から現れたのは、



白い羽織を着た白夜叉から普段の姿へと戻った、坂田銀時だ。

しかし、銀時の服にはあちこちに焦げた後が見え、銀時自身からも疲れが見れる。

「ハア……………ハア……………」

「自在反射のお陰って所かな」

朱雀は所々焦げた服と肩で息をするそんな銀時を見てそう呟いた。

銀時はあの時、跡形も残らず死んでいてもおかしくはなかった。

だが、鎧であるとされる自在反射が瞬間的に反射を使い、銀時を爆発から守ったのだ。

銀時自身もそれはどことなくわかっていた。

だが、

「解けちゃったね……自在反射」

今の銀時にとってはどうでもよかった。

余裕な表情を見せ銀時を挑発する朱雀に銀時は鋭い視線を向ける。

「てめエ……………」

「何？もしかして怒ってるの？」

だが、朱雀はそんな銀時の視線に対して嘲笑うように口を開き続ける。

朱雀はまるで子供のような表情で笑いながら言う。

「ただ人形が壊れただけだよ」

「生きる価値もないただの人形」

ガキイイイン！！

銀時は一瞬で朱雀の目の前に現れ、刀を振り下ろす。  
今まで疲労が見えていた姿はどこにもない。  
ただ、あるのは殺気を体から放出させる姿だけだ。

「へエ……………まだいけるんだ……………」

朱雀は咄嗟の出来事に力を出すことを忘れ、オレンジ色の刀で銀時の刀を受け止めた。

そして、今の銀時には鎧がないことを確かめ力を使おうとした。

だが、

「カ……………ッ!？」

銀時は片足を地面に置いたままもう一つの足で朱雀の脇腹を蹴り飛ばした。

朱雀はよろめきながら表情に苦痛な顔を浮かべ銀時から離れようとする。

しかし、銀時は直ぐ様朱雀に向かって走り出し、無数の斬撃を繰り出す。

それはどこからくるのか予測が難しい動きだった。

(さっ……………さっきまでとは比べ物にならない)

朱雀は何とか斬撃を防ぐことしか考えられなかった。

だが、そんな朱雀には一つだけ疑問が浮かんだ。

何故、速さが徐々に上がっていく？

ドゴツ！！

「ッ！？」

次の瞬間。朱雀の懐に銀時からの蹴りが入った。

懐に手を置き、荒い息を吐き、苦痛の表情しかできない朱雀。

そんな朱雀に銀時は口を開く。

「人形だア……………生きる価値がねえだア……………てめエがあいつらを語るんじゃないねエ！！」

怒号の後に静寂が漂った。

「人形って言うって何が悪いの？」

すると、朱雀がそう言いながら大きく息を吐いた。

そして朱雀の声はさっきまでとは一変し震えたような声へと変わる。

「私たちは本当は生きてはいけない物なの……………蓮鬼様のDNAと未知のサンプルを使って作られた物……………いえ、化け物なの……………。その中で私は、蓮鬼様に選ばれた唯一の存在！！だから他の奴はクズよ！！自分で考えることもできない、自分できめることもできない！！そんなクズを人形と呼んで何が悪いのよ！！！」

蓮鬼に選ばれたことが全てだ。

朱雀はまるでそう言うかのように銀時に言い放った。

だが、

「……………紅と焔は本当にてめェがいうクズだったのか？」

銀時は、柄を握りしめながら口を開く。

「自分で考えることができない？……………違う。あいつらだって自分で考えて、笑ったり泣いたりすることだってできる。自分でできることができない？……………違う。あいつらは命令なんてなくても自分の魂できめて行動することだってできる」

あの時、紅と焔が最後に銀時に見せた顔。

銀時は、声に力を入れる。

「あいつらは自分で考え、自分笑って、自分の意志でインデックスを助けた。腐った魂を大事に守ってる、てめーなんかよりよっぽど  
すげエよ」

だから銀時は思う。

そんなあいつらを人形なんて言わせねエ。

そんなあいつらをグズなんて言わせねエ。

そして銀時は朱雀に告げる。

「てめーはあいつらの足元にも及ばねエ。てめーは怖かっただけだ  
!あいつらがてめーを追い越して選ばれることが、てめーが一人に  
なることが!!」

刹那：

「黙れエエエエエエエエエエエエエエエエ!!!!!!!!!!」



朱雀は銀時に飛びかかり刀を振り上げた。

朱雀の刀は怒りによりオレンジ色から赤色へと変色し、それほどに銀時の言葉は朱雀を追い詰めたのだ。

そして…

朱雀の刀は銀時の包帯が巻かれた位置に向かって振り下ろされる。

しかし…

ガキイイツ！！

次の瞬間、奇妙な音が銀時から発せられた。

「……………な……………」

朱雀の顔は、驚愕に染まった。

先ほどまで赤色に染まっていた刀は、オレンジ色へと戻り一切の熱が消え冷えかえっていた。

そして、確かに銀時の胸元刀は当たっているにも関わらず、切れているのは服だけだった。

朱雀は何故、と驚愕した表情で銀時の胸元に視線を向けると、服の切れ目からあるものが落ちた。

それは、銀時が咲希に渡された、透明なアクセサリだ。

だが、そのアクセサリは半分に切られており、今朱雀の一撃を受け止めたことにより全体にヒビが入っている。

朱雀は目を疑った。

何故ならそのアクセサリーはかつて自分が殺した咲希が、蓮鬼や、そのクローンの暴走を恐れた研究者に持たせた物だからだ。

しかし、それはつい最近わかった事であり、そのため咲希を殺したのだが…

あの時、どれだけ咲希の体を確かめても発見出来なかった物が何故、この男に？

朱雀の頭はその事で埋め尽くされた。

だが、次の瞬間…

バギーン！！



朱雀は銀時から背を向け、走り出した。

しかし、出口は銀時の後ろにしかない。

だが、朱雀にとってそれすら考えられなくなるほど、恐怖が朱雀を支配していた。

そんな中、銀時は落ちたアクセサリーを拾い上げる。

そして、この場に来る数分前の事を思い出す。

銀時が仲間に背を向け、敵の本拠地に向かおうとした時…

『銀時!』

インデックスが駆け寄ってきた。

そして、

『……………これ』

『これが銀時を守ってくれたんだよ』

掌にのせられた半分になったアクセサリー…

『もう片方はとうまが持って行っちゃったけど』

『でも、きつと銀時を守ってくれるよ。だから……………とうまと縁子と一緒に、帰ってきてね』

そして、あの時のインデックスの言葉…

銀時は静かに呟く。

「ああ、……はなっからそのつもりだ」

ドッ！！

次の瞬間。銀時の体は白く光、白い羽織がその場を照らし出す。

そして、銀時は今も逃げようと必死な朱雀を睨み付け、

「あいつらはクズでも人形でもねエ……しっかりとした魂を持った

人間だ」

刀を上には振り上げる。

すると、銀時の体は銀色の光に変わり、大きな翼が君臨する。

だが、その光は以前の銀色の光とはまた違い、言うならば白に近い銀色をしていた。

「てめーがあいつらを語るんなら…」

そして銀時は、刀を振り下ろしながら叫ぶ。



「その腐った魂を治してからにしやがねエエエエ!!」

その瞬間。

地下練習場は白に近い銀色の光に包まれた。



決着1（後書き）

五和・打ち止め「銀魂幻想！」

五和「ひつく……………」

打ち止め「……………あの……………五和」

ドオン！！

打ち止め「うひゃ！？」

五和「ひつく……………何で、私を……………この前の……………新年番外編で出して……………くれなかったんですか……………ひつく……………」

打ち止め「さ…さあ？ってミサカはミサカは」

ドオン！！

打ち止め「ッ！…！？」

五和「べっつにー……………落ち込んだじゃいませんよー……………」

打ち止め「(ゴクッ)……………」

そお……………

五和「どこ行くんですか？」

打ち止め「!!?!?!え、な、な……………何がってミサカはミサカは微笑  
んで……………みた……………り」

五和「もう一度聞くけど……………。どこ行くんですか？」

打ち止め「あ、あ、あ、アメリカ」

ぶちっ。

打ち止め「助けてええってミサ！…うにゃあああああああああ  
ああ！！！！！！！！！！」

守りたい(前書き)

やっと書けました……でも、やっぱりダメ文かも……

## 守りたい

### 第九十六幻想 守りたい

蓮鬼は立っていた。

爆風が吹き荒れるなか、赤い髪を揺らしながらただ静かに……。だが、蓮鬼の視線はある者を捉えていた。

上条当麻だ。

上条は爆発した場所から、かなり離れた位置に横たわっている。

しかし、爆発に巻き込まれ、飛ばされた形跡がどこにも見当たらない。

あの時、上条は爆発の直撃をくらっていたはずだった。それなのに、爆発による形跡が服から全く感じられない。

それは謎と呼んでもおかしくはなかった。

だが、蓮鬼はそうは、呼びはしない。何故なら分かっていたからだ。

蓮鬼はゆっくりと後ろに振り返り、呟く。

「緑子」

爆風により、風が微かにその場に吹く中……。

蓮鬼の視線の先には、不安定で今にも倒れそうな緑子が立っていた。

「上条に……手を、出すな……」

緑子は蓮鬼を睨み付ける。

「へえ〜……やっぱり咲希が言っていたのは本当だったのね」



だが、蓮鬼はそんな緑子を嘲笑うように緑子を挑発してくる。

二人の間に風が吹き抜けた。

風はまるで二人の戦いを待ちわびるかのようだった。

すると、静寂な中、蓮鬼は緑子に口を開く。

それが、始め、と言つかのように…。

「いいわ……相手になってあげる」

「ッ!!」

緑子は蓮鬼に向かって走り出した。

蓮鬼は素早く懐から透明な箱を二つ取り出し、緑子に投げつける。

だが、緑子は一向に止まろうとしない。

箱から溢れ出すようにして出てきた鳥は緑子に狙いを定め、突進してくる。

しかし、次の瞬間。

炎の鳥の直ぐ目の前にいた緑子が消えた。

それは一瞬だった。

しかし、蓮鬼は驚きはしなかった。

分かっていたのだ。緑子がどこにいるのか。

蓮鬼は頭上に視線を向けた。

そして、その視線の先には…。

風を操り、一瞬にして天井近くまで跳躍した緑子が宙を浮いていた。

「フッ！」

緑子は短く、だが力強く息を吐いた。さらにそれが何かに対する掛け声だったかのように緑子の髪は風によって荒々しく揺れた。

すると、その直後。

ポオ！ポオ！！

先ほどまで、緑子を見失い、辺りを飛び回っていた炎の鳥が何かに押し潰されるかのように地面に叩きつけられ、一瞬にして消え去った。

蓮鬼は視線を消えた炎の鳥に向けた後、視線を頭上ではなく、後ろに向けた。

宙から、倒れている上条を守るように前に着々した緑子を…。

静寂が再び、その場に漂う。

だが、蓮鬼は、まるで残念かのように息を吐く。

「ガツカリね……………」

「何がよ……………」

緑子は眉間を寄せ、蓮鬼を睨む。

「あなたは昔から全然変わらないのね」

しかし、蓮鬼はそんな緑子の睨みなど眼中になかった。  
蓮鬼はそう言いながら、懐から三つの箱を出した。

だが、その箱は、先ほどまでの透明な箱と同じくらいの大きさだったが、回りが赤色をしている。

緑子は一段と警戒した。

そして、いつでも蓮鬼に攻撃できるよう風を意識した。

だが、

「人を殺さないように手加減する甘い考えもね」



箱は眩しく光を放ち、そこから三つの赤き閃光が飛び出した。

それも信じられないような音を出しながら。

あれは……絶対に当たっちゃダメ……、緑子は今まさにこちらに向かってくる閃光を見て、素早く、風を最大限に集め、盾のように目の前に留まらせた。

そして、

キシヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ア………!!

風と三つの閃光が激しく激突し、聞いたことのない音が響き渡る。

しかし、両方の力はどちらも互角であり、風を操る緑子は手を抜けない状態となっていた。

だが、ここで負けるわけにはいかない。

緑子は歯を食い縛り、風に意識を集中させた。

だが、その時。



「ッ!？」

突如、緑子の視界はうなるように歪んみ、さらに体の力が徐々に抜けていく感覚がした。

緑子は自分の身に何が起こったのか分からなかった。

すると、そんな緑子の耳に蓮鬼の声が入ってきた。

「きついでしょ……、緑子」

それはまるで、緑子を嘲笑うかのような声だった。

「今、あなたが受け止めている閃光のうち、二つは特別製でね……、一つは、離れた所から相手の体力を吸収する物なの。そしてもう一つはその光を始めに見た相手の視力を奪う呪いの物なのよ」「の……呪い？」

緑子は、はっきりと見えない目で視覚を確かめるように、自分の手を見る。

「だから時期にあなたの目は見えなくなるわ。………永遠に」

「ッ……!！」

「後、………最後の一つは私の最大限の炎を引き出した物だから」

蓮鬼がそう言い終えた直後。先ほどまでバラバラだった閃光が一つに重なりあい、さらに威力を増し風を貫こうとし始めた。

それに比べ、緑子の風は徐々に力が弱くなっていく一方だ。

(ダメ!!)

緑子は、心の中で、叫ぶように風に語りかけた。

(お願い……………耐えて……………)

ここで倒れたら、確実に上条当麻は殺される。

死なせたくない…

緑子は歯を噛み締め、倒れそうになる体を足で踏みとどめる。

だが、既に緑子の目は、深い暗闇へと近づいていく。

それでも諦めたくない。

自分何かのために、たった一人で来てくれた彼を……。

緑子は、大きく息を吐く。

力が、流れるように抜けていく中で、緑子は、

(もう、……私の目の前で、…誰も、傷ついてほしくない!!)(

「うあああああああああああああ!!!!!!!!!!」

その瞬間。

風は、力を増幅させ、目の前の閃光を押し出した。

まるで、風が緑子の思いに答えたようだった。

そして閃光は膨大な風に押し寄せられ、蓮鬼に、向かっていく。

だが、

「残念ね、緑子」

グラッ……

(な……)

蓮鬼の口が動いた瞬間。

緑子の体は突如、力が入らない状態に陥った。

ついに体が限界に到達してしまったのだ。

(……………ッ)

緑子は全く体を動かす所か、立つことさえ出来ず、後ろに何の構えもなく倒れていく。

動いて…

緑子は心の中でそう呟く。

しかし、既に緑子のコントロールを失った風は、閃光によってかっ消されていく。

私はどうなってもいいから……動いて……

緑子は、体に入力を入れようとするが、全く力が入らない。

そうしている間にも、閃光が緑子を狙いこちらに迫ってくる。

緑子は、ついに、もうどうすることも出来ない事を悟った。

緑子の頬に、一筋の涙が流れ落ちる。

じめん……………、みんな……………

緑子はそっと眠るように目を閉じた。

そして、抗うことのできない、確定した幻想を待った。

しかし、

バギイン！！！！

確定された幻想は、緑子に訪れることはなかった。

幻想は大きな破壊音とともに、緑子の目の前で、粉々に砕け散ったのだ。

緑子は、直ぐ側で聞こえてきた音に、ゆっくりと、もう何も見えな  
い目をあける。

今、倒れているのかさえわからない状態であるのにもかわらず。

だが、緑子の耳は、確かに聞き取った。



「ありがとう、緑子。……後は俺に任せとけ」

温かな、少年の言葉を…

守りたい（後書き）

打ち止め・神楽「銀魂幻想!!」

神楽「打ち止め!」

打ち止め「……何?ってミサカはミサカは、未だ疲れた顔で言ってみたり」

神楽「大丈夫アルか?目の下に、すごいクマがアルね」

打ち止め「聞いてくれる!ってミサカはミサカは、大変な苦勞を思い出しながら飛びついてみたり!!」

神楽「わ、わっ!?やめるネ打ち止め!!重いアル、後、首決まってるアル!!!死ぬううう!!!ヘルス!!!ヘルスミイイイイイイイ!!!」

## 決着2（前書き）

長いです。……………、上条の言葉が微妙かも……………

それからよかったら後書きを見てください。

## 決着 2

### 第九十七幻想 決着 2

「か……上条？」

緑子は口を開いた。

もうほとんど力が入らない状態にもかかわらず。

それでも言葉を出した。

確かめたかったからだ。

すると、緑子の耳に嘲笑うような声が聞こえてきた。

「遅かったわね。……命は助けられても、緑子の目はもう二度と見えないことはないわ」

緑子は、胸に何か刺さった感じがした。

同時に、自分を支えている手にわずかに力が入った。

後悔してなくていい、緑子はそう言葉に出したかった。

しかし、先ほどのようにうまく口が開かない。

そうしているうちに、まるで責めるように蓮鬼の言葉が自分を支えている彼に向かう。

「あなたの右手は能力しか消すことができない。たとえ医者に頼んでも、医者なんかには呪いを消すことなんてできないわ」

それ以上言うな、緑子はそう思った。  
彼が責められる必要はないと思った。

だが、その時。

彼の笑い声が聞こえてきた。

緑子の思考が止まった。

そしてそれは、蓮鬼にしても同じだった。

「何が…、おかしいの？」

蓮鬼は不気味に笑う少年に視線を向け、後ろに一步、二歩と下がる。

だが、そんな目で見られている少年はゆっくりと蓮鬼に視線を戻し、

「お前……」

右手を緑子の顔に近づけ、

「幻想殺しの事、勘違いしてんじゃねえか？」

そつと、右手を緑子のまぶたにのせた。

直後。

バギン！！という音が響き渡る。

緑子は、何が起こったのかわからなかった。

だが、次の瞬間。

徐々に、真つ暗な世界が解き放たれていく。

そして、その先には…。

ツンツン頭をした少年、上条当麻の顔があった。

蓮鬼は絶句した。

確かに先ほどまで、目が見えないような表情をしていたはずなのに…。

今、緑子からそんな表情が見受けられない。

「どっぴいっ……………なぜ……………」

蓮鬼の顔は驚きに染まる。

すると、上条はそんな蓮鬼に説明するように口を開いた。

「確かに、俺の右手はお前が言う能力を消すことができる」

「だけど、と上条は続け。

「俺の右手は、能力だけじゃねえ。呪いだろっが、何だろっが、それが理解できない異能のものなら善悪とはず打ち消しちまっんだよ」

右手を見せつけるように顔の前に持っていった。

場に静寂かつ緊迫な空気が漂う。

すると、上条は緑子をそつと地面に横たわらせ、前へと、一歩足を進めた。

緑子は、上条に視線を向け、何かを伝えようとしたが

「緑子、お前はここで待ってる」

上条はそれを遮り、緑子に背を向けながら言った。

まるで約束をするかのように…。

「絶対に、お前を助けてやるから」

上条は、一歩、また一歩と足を進め。

そして、蓮鬼との距離が四メートルという所で足を止めた。

上条と蓮鬼は睨み合う。



「……………」  
「今度は、奇跡はないわよ」

上条は拳を握りしめ、力を込める。

蓮鬼は足と手を意識し、いつでも動ける体勢を維持する。

そして、

「「!!」」

二人は動いた。

蓮鬼は上条から後ろに離れ、懐から三つの透明な箱を取り出し、上条に投げつける。

しかし、上条はただ真っ直ぐ蓮鬼に向かって走り出す。

だが、透明な箱から出た炎の鳥は上条の行く手を遮る。

炎の鳥との距離は一メートル。

それでも、上条は走ることをやめようとはしない。

上条は右手を横に振り上げ、まるで切り裂くように右手を振り下ろした。

バギン！！という音が、たて続けに続いた。

だが、蓮鬼にとってこれが狙いだった。

上条の視線を一瞬でも、遮ればよかったのだから。

蓮鬼は懐から透明な箱とは違う、黒い鉄の球体を掴んだ。

そして、後は上条に向かって投げるだけ…、蓮鬼の口元が笑みへと変わった。

しかし、その時。

ドゴッ…！

黒い鉄の球体を掴んでいた手にアスファルトの瓦礫が当り、痛みが走った。

そして、その痛みに黒い鉄の球体を手から離れ、地面に落ちる。

「!？」

ドオオオオオオオン!!

黒い鉄の球体は蓮鬼の直ぐ側で爆発し、煙が立ち上った。

しかし、その煙の中から、黒い人影が飛び出す。

蓮鬼だ。

一瞬の判断であの位置から離れたのだ。

しかし、無傷とはいかなかった。

「クッ…!!」

蓮鬼は齒噛みした。

あの時、腕に走った痛みは上条がとっさに投げた瓦礫によるものと理解したのもあるが。

自分の手が読まれていたことに怒りを覚えた。

だが、そんな事を考えている蓮鬼の頬に、

「うおおおおおー!!」

重い拳がめり込む。

「が……ッ!!」

一瞬の間をつかれた。

余りの無防備な状態だったため、衝撃が直に脳に伝わる。

だが、上条は拳を止めはしない。

がら空きになった懐に拳が入った。

「ガハ……ッ!!」

体内から何かが出てきそうになった。

(何故………)

蓮鬼は殴られた部分を手で押さえ、思った。

(負ける、負けるのか……………)

こんな、たった右手に力があるだけの奴に。

(ふざ……………けるん…じゃ…ないわよ)

蓮鬼は足元に落ちた、透明な箱と上条の後方に倒れている緑子に視線を向け、

(地獄を知らない、こんなやつに!!)

「いい気になるなああああ!!」

蓮鬼は叫び声を上げた。

そして、それに答えるかのように足元に落ちていた透明な箱が溶け、上条とすれ違うように炎の鳥が上条を無視し、緑子に向かっていった。

上条は後ろに振り返り直ぐに走りだそうとしたが、既に手遅れだった。

緑子との距離が離れすぎていた。

上条の思考がそこで止まろうとした。

しかし、場は一変する。

ドウンー！

炎の鳥が一瞬にして吹き飛ばされ壁に叩きつけられ消えていったのだ。

「…………え…？」

緑子は突然のことに目を疑った。

そして、どうして、と疑問に思ったその時。

「随分と待たせちまったな、緑子」

背後から男の声が聞こえてきた。

緑子は、ゆっくりと後ろに振り返る。

そこには、白い羽織に白い髪、そして赤い瞳をした男が立っていた。

緑子は小さいながらも、その男の名を口に出した。



「銀時……」

蓮鬼は表情が驚きに染まった。

「自在反射……まさか……朱雀が、負け……た……」

己のクローンの中で、一番優秀で己とそう力は変わらないはずの朱雀が負けた…。

蓮鬼は、緑子に話しかける銀時を見て、そんな事は絶対にならないと定しようとした。

だが、どれだけ不定しようともそれは変わることはない。

「どうして……こんな……」

蓮鬼は壊れたようにそう呟いた。

目の前に上条がいるにも関わらず言い続けた。  
まるで己の幻想を捨てたかのように…。

だが上条は、そんな蓮鬼に言った。いや、言えずにいれなかった。

「どうしてだあ？ふざけんじゃねえ」

蓮鬼の表情が一瞬止まった。

「お前がどんな事を思ってこんな事をしたのかは俺にはわからねえ。もしかしたら、俺なんかがわかるはずがねえのかもしれない」

だけど、と上条は続け、

「それでも、何でテメエは緑子のように生きて行こうと思わなかった！！」

蓮鬼にそう尋ねるように言い放った。

「テメエのその力を、人を傷つけるために使わねえで、もっと他に違う、人を助けることに使えたんじゃねえのか！！」

「……………」

蓮鬼の肩が震え出す。

だが、上条は全く動じはしない。

上条は最後に告げる。

「テメエは、早く気づくべきだったんじゃないか。回りの無関係な人を巻き込む前に。こんな、自分だけしか良いようにならねえ、そんなくだらねえ幻想がうまくいかねえってことに!!!」

その瞬間。

蓮鬼の表情はひびが入ったように崩れた。

「あ……………あ……………アアアアアアアアアア!!!」

蓮鬼は絶叫あげ、ただ真っ直ぐに、上条に向かって襲いかかった。

上条の言葉にたえられないとも言っているかのように、

「全部、投げ出してんじゃないかねえ……」

上条は蓮鬼を睨み付け、拳を硬く握りしめた。

自分のせいだと、自分を責めた、御坂。

守ると言っ、勝てる見込みのない敵に向かっていった、新八。

目が見えなくなっても守りたいと思って、上条を守った、緑子。

そんな彼らの一つ一つの思いを目の前の蓮鬼に示すように、上条は右手を振り上げ、

「もう一度、テメエ自身の幻想と、一から向き合いやがれ！！！！！！」

ゴォン！！と上条の拳は向かってくる蓮鬼の顔面にめり込んだ。

そして、蓮鬼の体はいきよいよく飛び、アスファルトの上に転がった。



## 決着2（後書き）

打ち止め・五和「銀魂幻想!!」

打ち止め「ヤッホー!!」ってミサカはミサカは笑顔で言ってみたり」

五和「元気ですね。何かいいことでもあつたんですか?」

打ち止め「内緒!!」ってミサカはミサカは笑顔を続行してみたり。  
あ、そうだ。五和!!ビッグニュース!!ビッグニュース!!って  
ミサカはミサカは思い出した事を言ってみたり」

五和「ビッグ…ニュース?って…」

打ち止め「実は、ってミサカはミサカはもったいぶってみたり」

五和「…もったいぶらないで…:…教えてほしいんですけど」

打ち止め「フッフッ、ってミサカはミサカはテレビで見た不気味  
な笑い声を実行してこの次を言ってみる」

## 次回予告

上条「崩れ行く逃げ道の中、俺たちは窮地にたたされる。その時、現れた人物は？」

上条「次回、救いを手に。幻想と魔術が交差するとき物語が始まる」

五和「……か……かみ……」  
打ち止め「それじゃあってミサカはミサカは手を振ってみたり」

救いを手に（前書き）

長すぎて、文が变かも……



## 救いを手に

### 第九十八幻想 救いを手に

嵐が去ったかのように静寂が漂う中、上条は息を吐いた。  
すぐ側では、所々にコンクリートの瓦礫が散乱している中に蓮鬼が横たわっている。

御坂妹のデータについて尋ねたかったが、今の蓮鬼には意識がない。  
それに、あの状態だった蓮鬼に聞けたかどうか…。

（それにしても、なんで学園都市のデータがこっちに……）

経路がわからない。

もしかしたら、緑子なら知っているかもしれないが、この件に御坂が関わっていることを、あまり知られたくない。

（事が済んでから、一人で探すしかねえか……）

頭がきながら上条は息を吐いた。

「上条」

不意に背後から銀時の声が聞こえてきた。  
振り返ると、疲れきったのか、寝てしまった緑子を背負う銀時がこ  
ちらに向かってきている。

(…けど、まだ解決していないことはあるけど…)

上条はそんな銀時たちを見て口元を緩めた。  
今は、掴みとった幻想を噛み締めるように…。

キシィ…

だが、上条の表情がピタリと固まった。  
微かな音が聞こえた。  
それも、普段聞かないような音を。

辺りを見渡すが、音が発せられた形跡は見当たらない。  
気のせいだったか？と上条は首を傾げたが、またしても。

キシィ…

微かな音が聞こえてきた。  
上条は、もう一度辺りを見渡し一度、深く考えた。

(今、周りは見渡したから残るは上か下だろ……。……………下は今見たから、後は上……………)

と、ゆっくりと天井を見上げた瞬間。

上条は、ギョツと硬直した。

一方、銀時もまた上条と同じようにギョツと硬直していた。天井を見上げる上条につられて銀時も天井を見上げたからである。

そして、そんな二人の視線の先にあるものは、何かというと……。

キシキシッと、微かな音を出しながら少しずつにひび割れを拡大させていく天井だった。

「上条くん？上条くん？あの幻覚を消してほしいんだけど」  
「現実は無理」

……………

銀時と上条は、全身から脂汗が出たと実感した。

ザッ

その直後だった。

倒れた蓮鬼から少し離れた場所から足音が放たれた。

それも一つではなく、複数の音が…。

バツ！と上条と銀時はそちらへ勢い良く振り向く。

そして視線を向けた瞬間。

上条は目を見開いた。

そこには、赤に染まった髪を揺さぶらせ、真っ赤な瞳をした蓮鬼とほぼ瓜二つの、十人の少女たち立っていた。

最悪だ…、上条は齒噛みした。

今まさに崩れようとしている天井に、それに追い討ちをかけるように蓮鬼と瓜二つの少女。

絶望的な状況だった。

…だが、やるしかない。

たとえば、大勢で攻められようと縁子を守って見せる。

上条は拳を握り締めた。

いつ何時でも動けるように、足に力を込めた。  
その時だった。

「!?!」

一本の手が、上条を止めた。

坂田銀時だ。

いつの間にか上条の前に立ち、右手を横に突きだしている。

「大丈夫だ」

銀時は上条にそう言った。

まるで全てがわかっていているかのように。

そうしている内に少女たちが銀時たちに歩み寄ってくる。  
だが。

ピタッ。

少女たちは足を止めた。

目の前には気絶した蓮鬼が横たわっている。

すると、一番前を歩いていた少女が片膝をつくと、気絶した蓮鬼を両手で優しく持ち上げた。

どうやら緑子が狙いではないようだ。

上条は少女の顔を不思議そうに見つめた。

一方、少女は目標を果たしたのか、上条たちに何もすることなく背を見せ、何も言わずに来た道を帰って行く。  
だが、その時。

「おい」

銀時は、少女たちを呼び止めた。

少女たちは足を止めるが、振り返りはしない。

それでも銀時は、そんな少女たちに。

笑って言う。

「これからは、自分のルールで生きていきな」

その瞬間。

少女たちは、面食らったような顔をしながら銀時に振り返った。まるで、頑張れよ、というかのように口元を緩ませる銀時。

沈黙が少女と銀時との間に流れた。

すると、少女は。

うっすらと微笑んだ。

それは、まるで銀時に、ありがとう、と言っているかのようだった。

上条と銀時が、少女たちと向かい合っていたとほぼ同時刻。

コツ、コツ、コツ、コツ…。

男は地上から地下へと繋がる階段を降りていた。

危険や恐怖など、微塵も感じないという表情を浮かべ…。

他に出口があるのか、少女たちと別れた今。



上条当麻と坂田銀時は全速力で走っていた。

理由は簡単。

それは…。

頭上の天井から次々と瓦礫という雨が降り注いでくるからだ。

「うおおおおおおおおおおお！？」

「な、何なんですか。この不幸っぷりわあああ！！！」

銀時と上条の叫びが奥へと響き渡る。

しかし、叫んでいても瓦礫の雨は止んではくれない。

しかも、こんな中でも緑子は爆睡している。

緑子に軽く、本当に軽く怒りを覚える銀時だが、今はそれ所ではない。

瓦礫の雨の中を必死に走る銀時と上条は、頭上から落ちてくる瓦礫を避けながら走り続けた。瓦礫の雨のせいで、どこが道だかわからない中を。

だが、

ゴオオ！！

地震にあつたかのような感覚と、大きな何かが崩れる音が響き渡つた直後。

大人の頭ぐらゐの大きさの瓦礫が銀時たちに襲いかかる。

「！？」

「なっ！？」

銀時と上条は瞬時に避けようとするが、避ける先の頭上からも同じ

ぐらゐの大きな瓦礫が今まさに落ちてこようとしている。

「ちっ!！」

舌打ちをした銀時は、背負っていた緑子を上条に投げつけた。

そして、突然の事に緑子を受け止めながら尻餅をついた上条を気にせず、銀時は瞬時に刀を抜き、

「でいやあああああ!！」

白い光を纏った刀を頭上目掛けて振り上げた。

フシュッ

その瞬間。瓦礫は粉々に砕け散った。

だが、そんな銀時を嘲笑うように瓦礫は銀時に襲いかかってくる。

銀時は刀の柄を握り締め、瓦礫に向かって刀を振ろうとしたが、

ガキッン！！

一瞬の出来事だった。

何の亀裂も見えなかった刀が、ガラスのように砕け散った。

銀時は何が起こったかわからない。

だが、確実に言えるのは、まるで何かに解放された気がしたことだ。

上条は、刀を失った銀時の姿が一瞬にして普段の服装に戻った事に、驚きを隠せなかった。

しかし、上条は銀時に叫ぶ。

「銀さん！！」

銀時と瓦礫との間は、既に数センチだった。

どうやっても間に合わなかった。  
だが、

「手間がかかるとは、この事だ」

刹那。

男の声が放たれたと同時に、後数センチという所にあつた瓦礫は一瞬にして銀時と上条の視界から消えた。

何が起こつたのかわからない。

驚きを隠せない上条と銀時。

だが、二人は目の前から歩みよってくる人の気配に気づく。

異様な気配を感じる。

それは、こんな状況だからかもしれない。

上条と銀時は、視線を注意深く向けた。

異様な気配を漂わせる男は歩む。  
降ってくる瓦礫の中を、気にせず歩む。

魔神になるはずだった男、オッレルス。

『説明のできないもの』へと進化させた、『北欧王座』を振るう男だ。

異様だ、と銀時は思った。  
同時に、何かを感じた。

上条もまたオッレルスに、警戒な眼差しを向けつつ何かを感じてい

た。

すると、オツレルスはそんな上条と銀時に、

「はじめまして、と言う所か……。幻想殺しに自在反射」

「!？」

「……………テーマは、いつたい……」

銀時は小さな動きも見逃さないような目でオツレルスを睨んだ。

「何と言えればいいかな……………」

頭をかき考え込むオツレルス。

そして、視線を上条に向けたオツレルスは、

「魔術師、と言えはわかるだろう」

上条の表情は驚愕に染まった。

銀時は、あまり驚きはしなかったが、その代わり警戒を強めた。

一方、上条は疑問に思った。

何故、魔術師がこちらにいるんだ？



その時。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

さっき程とは比べ物にならないくらいの地響きが上条たちを襲った。

上条と銀時が焦り出す一方、オッレルスは静かに天井を見つめると、

「後ろにある穴を通れば地上に出れる」

上条と銀時に、背後に開いた穴を指をさした。

指先の方角を見ると、まるで大きな何かが突破したような穴が空いた壁が見える。

アンタは……、とその穴を確認した上条が尋ねると、

「俺は平気だ。……それに、この先に用事がある」

オッレルスは上条たちが走ってきた道に視線を向けた。

上条は、その言葉に疑問を抱いたが直ぐ側で眠っている緑子に顔を見て、考えるのを止め、

「わかった。…アンタも早く、その用事ってのを終わらしたら脱出しろよ」

上条は緑子を抱えて、オツレルスの隣を横切り穴へと走っていった。

オツレルスは上条の後ろ姿を見送ると、視線を未だ警戒を解かない銀時に戻す。

「……………」  
「……………」

銀時とオツレルスは、何も喋らない。  
ただ、睨み合うだけだった。

だが、段々と大きくなる地響きに銀時は舌打ちし、オツレルスの隣を横切ろうとした。

「自在反射」

しかし、銀時はオツレルスが発したその言葉に足を止める。オツレルスは一歩一歩、歩きながら唇を動かす。

「君がその力を振るうと言つのなら、一つ助言をしておく」  
「……まるで、こいつの事を知ってるみてエだな……」

ああ、と答えるオツレルス。

「君の力は、そんなちっぽけな物ではない」  
「……………」

銀時は眉を寄せた。

自慢するわけではないが、銀時自身、この力に脅威を感じていた。  
『反射』と己の背中から形作られた『銀色の翼』。

だが、この男はその力をちっぽけと言った。  
つまり、その先に何かとてつもない力があるということになる。

どういうことだ？と疑問を抱く銀時。

すると、そんな銀時を見たオツレルスは、

「まあ、仕方がないかもしれないな」

そう言いながら前へと足を動かす。

そして、銀時の隣を通るその時、オツレルスは言った。

「幻想殺しと同様、本来の性能に戻っていないのだから」

その瞬間、銀時の脳裏に上条当麻が浮かんだ。

「オ、オイ!!」

驚いた表情で銀時は振り返るが、オツレルスは既に崩れ行く瓦礫の雨の中を進んでいく。

そして、オツレルスが銀時に振り返ることはなかった。

壁に空いた大きな穴を通りその先にあつた鉄の階段を登り終えた上条は今、工場の入口付近に出ていた。

だが、地下以上に危険が増し、鉄骨が次々と地面に落ちてきている。

上条は未だ上がつてこない銀時を気にしたが、まずは今の状況から緑子を外に出すこと優先させ走り出す。

出口からはそう遠くはない。

外からは、上条の姿が見えたのか、声が聞こえてくる。  
このまま……！！上条は地面を蹴飛ばし、速度を上げた。  
その時、

「避ける、上条……！！」

銀時の叫び声が響き渡る。

上条はその言葉を聞いた瞬間。全身の血がひいた気がした。  
理解したからだ。  
銀時の言葉を。

上条はバツと勢い良く頭上を見上げる。

そして、上条は歯噛みした。  
視線の先にあるのは…。

迫り来る直径十メートルの鉄骨。

銀時は地面を蹴飛ばした。

だが、銀時と緑子を背負った上条との距離はあまりにも遠すぎた。

だからといって諦めるのか？  
だからといって見捨てるの？

銀時は、奥歯を噛み締めた。  
大切なものを無くしてたまるか。

銀時は全身全霊の力で走り出した。

その時、救いの手が舞い降りる。

「銀さああああん……!」

その声は放たれた。

そして、続くように銀時目掛けて何かが飛んでくる。

銀時はそれを左手で掴む。



長い木の棒。

それは、木刀だった。

「!」

銀時は木刀を強く固く握り締める。

白い羽織が鉄骨の雨の中で揺れた。

「.....」

ズゴオオオオッ!!!

夕焼けが崩れ散った工場を照らすなか、上条当麻と坂田銀時は地面に腰を下ろし息を吐いていた。

上条の隣では緑子が眠っている。

工場の中には、まるで横殴りされたようにくの字に折れ曲がった鉄骨が横たわっていた。

銀時はその鉄骨を茫然と眺めていると、その時。そんな銀時の背後に一つの影が近づいてきた。



銀時をとりあえず無視した。とうとうか上条自身、巻き込まれなくなかった。

上条は立ち上がりその場から離れると、コノヤロー！！という声が聞こえて気がしたが、聞こえない聞こえないと自分に言い聞かせ、上条は一人の少女に向かって歩いていく。

一人、立ち尽くしている御坂美琴に。

「御坂」

「……………」

御坂の側まで来た上条はそんな彼女に声を掛けるが、一向に口を開こうとはしない。

「……………」

上条はそんな御坂の頭に右手を乗せる。

そして、小さな声で何かを御坂に伝えると御坂の頭から手を離し、

上条は御坂から離れていった。

御坂から離れた上条が夕焼けを見てみると、

「とうまあああー!!」

まるでその時を待っていたかのように、白い修道服姿のインデックスが走ってきた。

「インデックス？」

「とうま、大丈夫!!怪我とかない!!」

インデックスは目に涙を浮かべ、まるで数分前の神楽のように話しかけてくる。

「ああ」

上条はそんなインデックスに微笑んだ。

インデックスの心配を無くさせるように。

良かったあ…………、と体の力が抜けたのか地面に座り込むインデックス。

上条は、そんなインデックスの表情を見て、終わったんだよね…………、と辺りを見渡した。

賑やかに騒いでいる銀時、神楽、新八。

そんな銀時たちを見ている神楽の後に来た月詠。

銀時たちと同じ位賑やかな土方、沖田、近藤。

そして、まるでお姫様のように眠る緑子。

そんな目の前の光景に、まだ気がかりな事はあるが上条は小さく笑った。

そうして遂にこの長かった幻想は夕焼けとともに幕を閉じた。

の、だが…。

「これで、おもいっつきりとうまの頭を噛み付けるだもん」

………はい？

おもいっつきり？………  
噛み付ける？………

「あのー………インデックスさん？今………なんと、おもいっつきり、とか何とか………聞き間違いじゃ……。え、マジ、本当にマジなの？そっか………つてか何でええ！！！！？上条さん頑張ったんですよ！？ボロボロになりながらも頑張ったんですよ！？それなのツギやああああ！！ふ、不幸だああああああああ！！！！」

そうして、夕焼けの中。

少年の叫びとともに幕は、閉じたのであった。



救いを手に（後書き）

次回予告

上条「終わりはまた始まりを生み、始まりは次への道を生む」

上条「次回、始まりを胸に。幻想と魔術が交差する時、物語が始まる」

上条・五和「銀魂幻想！！」

上条「久しぶりだな、五和」

五和「は、はい！ひ、久しぶりです、はい！！」

上条「あれ？打ち止めは？たしかここにいたんじゃない……」

五和「それが、どこかにいなくなってしまうって……」

上条「そっか……。あれ？何だ、これ？」

五和「どうしたんですか？」

上条「いや、紙が落ちてたから、えー何なに、『出番が回ってきたから当分は、後書きに出ないってミサカはミサカは置き手紙を置い

てみたり 『 っ て、 出 番 っ て ど ん じ ゅ っ シ ー ！ ？ お い、 五 和 ー ！ ？ ど ん じ  
た ん だ ！ ？ 』

五 和 「 あ う ー …………… 」

始まりを胸に（前書き）

更新遅れてすみません。

色々と忙しくて更新する時間がなくて……

## 始まりを胸に

### 第九十九幻想

始まりを胸に

空が暗くなり、月明かりが地上を照らす中。

一人の少女、御坂美琴は立っていた。

今、御坂がいるのは江戸にある『大江戸病院』の屋上。

本当なら皆で万事屋に帰っていたはずだったが、あの後、突如銀時が倒れこの病院に運ばれたのだ。

医師からの診断の結果は『無茶すぎ』となんとも適当な物だったが、どうやら適当というわけでもなく結局、銀時は入院することとなり、ついでにずっと眠っている緑子も銀時と同じように入院することとなった。

しかし、それでも銀時や緑子が心配だった上条たちは病院に泊まることにし、月詠や真選組たちは、銀時によろしく、と言って自分たちの居場所に帰っていった。

そしてそれから時間は経ち深夜となる。

「……………」

御坂は夜空を見上げる。

風はそんな御坂の髪を揺らさせた。

すると、その時。

ザッ……

背後から足音が聞こえてきた。  
だが御坂は驚きはしない。彼女は、その足音にゆっくりと振り返る。

月明かりの中に身を照らす。

上条当麻に……。

月明かりが地上を照らす。  
そんな、誰一人いない通りに、

「……………」

オツレルスは歩いていた。  
すると、

「待つて」

背後から男の声が聞こえてきた。  
だが、オツレルスは振り返る動作はしない。

「必要悪の教会か？」

オツレルスのその言葉に男は苦笑する。

そして、男はオツレルスが立つ月明かりに姿を見せる。  
アロハシャツにサングラスをかけた金髪の男、

「さすが、かつて魔神にもっとも近いと言われた男だぜよ」

土御門元春。

オツレルスは土御門の言葉に小さく苦笑する。

「よしてくれ。俺はそんな立派な男じゃない」

「まあ、お前がそう言うのなら別にどうとは言わない。だが、それよりも一つ質問する」

土御門は目を細め、鋭くした口調で尋ねる。

「キサマはどっからこの世界に来た？」

静寂がその場を支配する。

そして、オッレルスは唇を動かす。

「その答えは、じきにわかるだろう」

「？」

その言葉に、怪訝な表情を見せる土御門。

しかし、オッレルスはそんな土御門を気にせず夜空を見上げ、口元を笑みに変え、

「それより、まさか伝説と言われた魔術が実在するとは思わなかった」



発した言葉に反応する土御門に振り返ることもなく背を向けながら歩き出す。

「ま、待て！」

土御門はオッレルスを追おうと足を動かそうとする。  
だが、

「無駄だ」

まるで暗示のように、土御門は足を動かすことができなかった。

そして、オッレルスは、

「必要悪の教会」

土御門にこう言葉を残す。

「禁書目録に気をつけておけ」

一方、上条は御坂にあの後の出来事を話していた。  
というのも、あの後、御坂に全部話すと約束していたのだが…。

御坂は静かに上条の話を聞いていた。

蓮鬼の事や、クローンたちの事、そして銀時の最後に言った言葉の  
事も…。

だが上条は、魔術師と名乗った男の事は伏せた。彼女が魔術サイド  
の事を知る必要はないと思ったからだ。

そうして、上条が話終わると、

「そう……」

御坂は、一言だけ残し、また口を閉ざした。

「……」  
「……」

静寂が屋上を支配する。

上条は御坂を見たまま、何か言おうとした。  
だが、

「私、馬鹿よね……」

御坂は顔を伏せたまま口を開く。

「あの子達のことも考えず、あんな事思っちゃうなんて……」

未だ自分を責めているのかも知れない。

「あの時の私、…どうかしてた……」

上条はそう言う御坂の背中をただじっと見ていた。

すると、御坂は顔を伏せたまま上条に振り返る。

そして、そのまま歩き出し。

上条の胸に頭を押し付けた。

「私、ここで立ち止まるつもりはないから」

彼女は上条に意志を告げる。

「もう後悔なんてしないから」

二度と、その意志をなくさないように、

「御坂……」

上条は御坂の肩に手を置く。

……………震えていた。

いくら上条に救いの言葉をかけられても。

どれだけ受け入れようと努力しても。

それを直ぐに受け入れられないのだ。

だが、それでも彼女は受け入れようと努力する。

「だから、今だけは」

次の明日へ、

「側にいて」

歩くために…。

「プランAは無事成功ね」

パソコンや機械等が数多く配置された中、女は立っている。女の直ぐに側にはノートパソコンが開いた状態で置いてあり、画面にはこう表示されていた。

『各地における、偽妹達クローンの配置』

「まあ、あれは勝手に脱走しちゃったけど、これで次のプランBに行けるかしら」

女は口元を緩め、背後にゆっくりと振り返る。

「さあ、働いて貰いわよ」

様々な機械の中心で、眠り続けている、

「打ち止め（ラストオーダー）」

少女を見据え…。



始まりを胸に（後書き）

次回予告

銀時「第百幻想前に、番外編に行くぞー」

銀時「次回、番外編。禁書目録談」

上条・五和「銀魂幻想！！」

五和「あの一、上条さん？」

上条「どうした、五和？」

五和「いえ、次回の番外編にちょっと聞きたくて……」

上条「ああ、禁書目録談ってやつか？」

五和「はい……」

上条「うーん、言っているのかなあ……」

五和「何か、まずいんですか？」

上条「いや、実はこの番外編ってもう去年から五割ぐらい出来てたやつで」

五和「それって、緑子さん出番なしってことじゃないですか!？」

上条「あー……………多分」

五和「いや、多分って」

上条「まあ、作者が何とかするだろ……………」

五和「うう……………」

上条「どうした、五和？」

五和「いえ……………」

五和「（上条さんは出番がない悲しみを知らないんですッ!-!）」

## 番外編（前書き）

えーっと、まことにもうしわけありません。

以前に言っていた番外編がどうも出来が悪かったので新しい番外編を書き、更新することになりました。

でも、面白いと思うのでぜひ見てください。

## 番外編

### 番外編

深夜、一時。

蓮鬼との死闘により眠り続けていた藤葉緑子は目を覚まし、

「……………あのー、何やってるの?……………二人とも」

現在、もぐもぐと病院食を作るための食材を食べまくる、インディックスと神楽にそう尋ねていた。

ことの発展は、今から数分前。

女性だからという理由でか、銀時とは別室の個室に入れられる事に

なつた緑子はゆっくりと瞼を開け、目を覚ました。

「う……………」

「目が覚めたアルか？」

そして、目を覚まし初めに視界に写ったのは、チャイナ姿の神楽と修道服姿のインデックスだった。

二人は、緑子の顔を覗き、

「よかつたー。やっと目を覚まして」

「本当アル。せつかく銀ちゃんが助けてくれたんだから目を覚ましてくれないと困るネ」

「む、銀時だけじゃないんだよ、とうまも頑張ったんだよ！」

何故か突然言い争いを始めた二人。

あのー、ここ病室だから静かにしてほしいんだけど…、と緑子は苦笑いをした。だが、そんな緑子の思いも届かず神楽とインデックスは言い争いを続ける。  
だが、その時。

ぐうー。

その音が神楽とインデックスの言い争いを止めた。  
そして、その音の出所はというと……。

神楽ではない。

インデックスでもない。

そう、音の出所は……。

「……………」

頬を軽く赤らめる緑子だ。

「「緑子……………」」

神楽とインデックスの視線を感じる。

緑子は顔を横に向け、二人の顔を見ないようにした。

すると、そんな緑子に、

「ねー、ねー、おなかすいたんだよー」

「私モアル」

聞こえるように話始める、神楽とインデックス。  
緑子は二人の会話に耳を向ける。

「何か食べにいこうよー」

「そうアルな、ちょっと食べに行くアルか、二人で」  
「そうだね、食べに行こう、二人で」

とどこどこ、と病室から出ていこうとする神楽とインデックス。

ぐうー

.....

「ごめんなさい！意地張りしました！だから一緒に連れてって！..」

緑子の声が病室内に響き渡った。

そして、現在となる。

はあー、と緑子は息を吐く。  
あの時の二人の会話からして何かあてがあると思っていた。  
だが、実際は全くそんなあてなどなく。

内緒で病院食の食材を食べることだった。

「はぁー、アンタたちをあてにした私がバカだった……」

緑子は大きく息を吐く。

そして…。

パクっ、と病院食の内のパンを頬張るのだった。

「なんだヨ、グダグダ言いながら食べてるじゃないアルか」

「言ってることと、やってることが違うんだよ、緑子」

二人は、言ってることとやってることが違う緑子にそう言う、が、

「それにしてもうまいアルヨ、このパン！」

「確かにおいしゅいんだよ、このパン！癖になるかも」

こちらも食べるスピードは止まるどころかヒートアップする始末だ。



だが、それも直ぐに終わりがくる。

「ちょっと、あんたら…」

そう…。

「何してんの?」

とある看護婦が現れた事により…。

深夜一時。

「「「きゃあああああああああああ！」「」「」  
「待ちなさいいいい！！」」

緑子、神楽、インデックスは今もうダッシュで逃走していた。  
普通なら、うるさい所かこんな夜中に病院内を走り回るなど言語道  
断なのだが、今この病院には銀時たちと病院関係者しかない。

そして、自分たちがボコボコにされても誰にも気づかれない。

「ごめんなさい！！悪気はなかったんです！！」  
「無駄アル！！逃げるしかないネ！！」  
「助けて、とうま！！銀時！！！」

三人は叫びながらもうダッシュで後ろの看護婦なのかと言いたいよ  
うな形相の看護婦から逃げる。

しかし、段々と看護婦との間が短くなってくる。

このままでは捕まる。

三人はそう思いながら目の前を見た、時だった。

助かる希望が今、この瞬間に生まれた。

そう、視線の先にいる。

志村新八のおかげで。

「あれ？三人ともどうし」

「グッドタイミング（よ）（アル）（なんだよ）！！新八！！」  
「」

緑子は風を操り新八を浮かせ、神楽は新八の胴体を掴みそして、インデックスはニッコリと笑い、

「行くアル！！新ハイハイ！！」

新八の体は看護婦に向かってロケットのごとく飛んでいった。

そして、三人は再び逃亡した。

後ろから新八の悲鳴が聞こえた気がしたが、とりあえず無視して。

深夜一時十分。

新八という囃をつかったお陰で看護婦から逃げ切れた三人は今、荒い息でとある病室に隠れていた。

そう、その病室とは、

「何やっての、お前ら？」

坂田銀時がいる病室だ。

どうやら銀時もやっと目を覚ましたらしい。

「な、はあ、な何が、って、はあ」

「いや、何がって、何かしただろ、お前ら？」

「な、はあ、何も、はあ、してないんだよ、はあ」

「そうか、だったら何で息荒れてんだ？」

「ちょっと、はあ、病院内を、はあ、探検した、はあ、だけアル」

「そうか、だったら何で鍵閉める？三十字以内で簡潔に述べる」

銀時は死んだ魚のような目で緑子、神楽、インデックスの目を見る。

「「「……………」」」

目が泳いでいる。

はぁー、と銀時は息を吐き、ゆっくりとした動作で…。

ピー、とナースコールのボタンを押した。

深夜一時十五分。

「待ちなさいイイイイイイイイ！！」

緑子、神楽、インデックスの三人は、全速力で逃亡していた。

これというのも、銀時がナースコールで看護婦を呼んだのが原因だ。

「あの銀髪、後で覚えてろよー!!」

「銀ちゃんのバカー!!」

「銀時のバカー!!」

三人は叫びながら、階段を全速力で駆け上がる。

そして、三人は屋上のドアまで追い詰められ、屋上には逃げ道がないとわかっていたが、屋上のドアを開けた。

すると、そこには。

「い、インデックス!？」

いつも不幸だーと叫ぶ少年、上条当麻が立っていた。  
だが、立っていただけならよかった。

今、上条の胸には茶髪の少女が頭を預けていた。

そう、御坂美琴だ。

御坂はインデックスたちに気づき、バツと上条から離れる。

緑子と神楽が呆れたように上条に視線を向け、インデックスは…。

「とつま」

「な、何だよインデッ」

「短髪と何してたのか、教えてほしいかも」

「あ、いや、これはその」

たじろぐ上条。

そして、じりじりと迫りくるインデックス。

だが、その時。

ドオン…!という音とともにそこに…。

「はあ、やっと、はあ、見つけた、はあ、はあ…」

看護婦が現れる。

くつと苦い表情を見せる緑子と神楽。

一方、インデックスはもうそんなことは、どうでもいいらしく、上条にギラッと歯を見せ、そして。

「とうまアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ついにインデックスは上条に飛び付こうとした。  
狙いは上条の頭蓋骨。

ふ、不幸だアアア！と上条は叫ぶ。

だが、その時。

「むぎよ！？」

突如、インデックスの体がガクツと崩れ、倒れ出した。

「い、インデックス！？」

上条はインデックスに駆け寄りインデックスの話しかけると、

「お、……………」

「お？」

「おなか……………いたい……………」

インデックスはそう言ってガクツと気を失った。

そして、インデックスが気を失ったと同時に、



「「ッ!？」」

緑子と神楽もガクツと倒れ、気絶した。

上条と御坂は目を点にし、看護婦は深く息を吐いた。

その後、緑子と神楽、そしてインデックスは三日間入院した。

看護婦から聞いた話、インデックスたちが食べたあのパンはどうか  
ら数日前、入院していた天人が持ち込んだ賞味期限がきれたパンだ  
つたらしい。

さすがにインデックスの胃袋も、宇宙産の賞味期限ぎれの食材には  
勝てなかったようだ。

そして、上条と銀時はうなされながら眠る緑子、神楽、インデック  
スに呆れように息を吐いたのであった。

## 番外編（後書き）

### 次回予告

上条「一人の少女を助けるため、一方通行は幻想の地へ足を踏み込む。そして、そこである少女が彼の前に現れる」

上条「次回、同調支配。幻想と魔術が交差するとき物語が始まる」

上条・五和「銀魂幻想!!」

上条・五和「まことにもうしわけございませんでした!!」

上条「いや、まさか突然だもんな」

五和「はい、でも以前から作ってたのにどうしてやめたんですかね」

上条「上条さんが聞きたい、ってうん？」

同調支配「それじゃ次回もよろしくってレンキはレンキは述べてみます」

上条・五和「誰？」



同調支配（前書き）

感想良ければよろしくお願いします

## 同調支配

### 第百幻想 同調支配

あの大規模な事件から二日が経ち、かぶき町は平和を取り戻しつつあった。

そして、そんな最中。  
とある路地に、

「おい、テメエ知らねえ顔だなあ」

「変な服なんて着やがって、調子のってんのかあ」

二人組の男が立っていた。

男たちは、腰に刀を帯刀している。

だが、外見から見て幕府につかえている風には見えない。

そう、彼らは攘夷志士だ。

幕府を倒そうとする攘夷志士という名を使い、好き放題しようとする。

攘夷志士とは呼ぶにふさわしくない男たちだった。

そして、今日もまた攘夷志士を語り、彼らは好き放題しようとしていた。

だが、

「……………るせエ」

「あん？」

そんな彼らの思惑は、彼らの目の前にいる杖をついた白をイメージさせる少年、

「うるせエンだよ。三下がア」

一方通行により、この日を持って終わりを告げる。

ドオン！ドオン！と銃撃の音がその場いったいに響き渡った。

「……………チッ」

一方通行は、銃をポケットに閉まった杖をつきながら歩き出す。  
攘夷志士をなのっていた二人の男は足を撃たれうずくまっているが  
気になどしない。

一方通行の目的はただ一つ。

打ち止めを取り戻すこと。

一方通行がこの世界に来たのは昨夜。

この世界にこれたのはある一人の医者の方があったからだ。

冥土歸し。

一方通行や打ち止め、様々な怪我人を絶対に見捨てない、カエル顔  
の医者だ。

そして、その医者に一方通行は聞いた。  
打ち止めが突然、何者かに拐われたと。

一方通行は医者胸ぐらを掴み上げ、怒りをぶつけた。

だが、話を聞いていく内にそれはどれだけ医者を含めても仕方がないことだった。

一瞬だったそうだ。

空間が割け、細い腕をした女に腕を捕まれ打ち止めは空間の中に消えていったらしい。

一方通行は医者胸ぐらから手を離し、医者に手掛かりは、と聞いた。

すると、医者はその言葉を待っていたかの一方通行をとある室内に連れていった。

そこは、様々な機械が並ぶ部屋だった。

そして、部屋の中には空港の金属探知機のゲートのような物が立っていた。

医者は一方通行に二つの物を渡した。

一つは一回しか使えない、帰ってくる時に使うゲートを作る四角い箱型の機械。

そして、もう一つは首筋のチョーカーにつけることができる、小さな通信機だった。

どうやら今から行く所はミサカネットワークがうまくつながらない可能性があるかも知れないらしく、そのための通信器具らしい。



一方通行はそれらを掴み、医者に一言残し、ゲートへと向かった。

絶対に取り返してくる、と言って。

一方通行はそんな事を思い出しながら歩く。

周りから何やら視線を感じるが気にせず歩く。

だが、左手に建つ店に通りがかった時。

「あん？」

一方通行はあることに気づく。

その窓ガラスに己と、そしてその後ろに…。

マントを被った少年か少女かわからない子供が立っていたことに。

どうやら、先程まで見られていたのはこれが原因らしい。

一方通行はぐるりと背後に振り返り、その子供に視線を向け、

「何だア、オマエ？」

マントの子供にそう尋ねた。

本当なら、今はそんな尋ねている時間など一方通行にはないはずだった。

だが、尋ねてしまう。

まるで、打ち止めと初めて会ったあの時に似ているからか…。

しかし、そんなことがあるわけがないと一方通行は思う。

そう、そんな事は決してないと、

「あなたが一方通行であっと思っていますか？ってレンキはレンキは尋ねてみます」

かつ、と一方通行の表情が一変した。  
声は明らかに少女の声だった。  
それだけならよかった。

だが、その声での話し方は一方通行が知る中で一人しかいない。

打ち止めしか…。

「オマエ、何で俺を知ってたんだア？」

一方通行は眉をひそめながら己の名を言ったその子供にそう尋ねる。

すると、マントを被っていた子供は片手で顔を隠すマントを取り、マントに隠れていた真っ赤な長髪をマントの外に出し、

「初めましてってレンキはレンキは頭をさげてみます」

そして少女は、

「私の名前は同調支配シンクロルザーってレンキはレンキはあなたの問いに答えてみます」

そう言いながら、にっこりと笑った。

## 同調支配（後書き）

### 次回予告

上条「同調支配と交差した一方通行は、打ち止めを見つける希望を手にする。だがそんな彼の目の前に新たな壁が」

上条「次回、能力調整。幻想と魔術が交差するとき物語が始まる」

上条・五和「銀魂幻想!!」

上条「あー、同調支配ってオリジナルキャラクターだったのか。なあ、五和」

五和「……………」

上条「……………あのー、五和さん」

五和「……………（何で作者は私を出してくれないんですか、私になにか悪いことしましたか）」

上条「……五和さん」

## 能力調整（前書き）

何とか土日已连续で更新出来ました。

## 能力調整

### 第百一幻想

### 能力調整

一方通行は杖をつきながら歩いている。  
そして今、彼の左手には、

「どうしたんですかってレンキはレンキはあなたに尋ねてみます」  
とある少女、同調支配の小さな手が握られ、少女が何回も一方通行にそう尋ねるが彼は答えはしない。

一方通行はただただ歩く。

そして、彼らは誰もいない通りにたどり着く。

一方通行はそこで手を離し、ギロツと視線を同調支配に向け、唇を動かす。

「テメエ、誰に俺の名前を聞いた？」

すると、同調支配はその問いに顔を曇らせる。



だが、一方通行はそんな事など気にはしない。

ガチャ、とポケットから銃を取りだし、同調支配に向け、一方通行はもう一度唇を動かす。

「さっさと答える。誰に俺の名前を聞いた？」

ひゅー、と風が一方通行と同調支配の間を通り抜けた。

静寂が二人を中心に漂った。

その時。

「よお、クソガキ」

その声とともに複数の足音が一方通行の後方から聞こえてきた。一方通行は銃口を下ろし、後ろに振り返る。

そこには、腰に刀を帯刀した男たちが三十人にぐらい立っていた。

そして、その中の髭をはやした男が口を開く。

「俺らのツレが世話になったそうだな」

どうやら、数分前に一方通行が倒した男たちの仲間らしい。

一方通行は深く息を吐く。

そして、銃口をリーダーらしい男に向け、

「三下が。うじゃうじゃとわいてんじゃねエぞ」

一方通行は引き金を引こうとした。

しかし、次の瞬間。

ガチャガチャ、という音とともに一方通行に銃口が向けられた。

三十ほどの銃口が…。

「……チツ」

一方通行は舌打ちをし、銃口を目の前の男から離れた。

だが、男たちは一方通行を許すつもりも見逃すつもりもないらしい。複数の銃口は、確実に一方通行の頭に定まりつつあった。

しかし、男たちは誤った誤解をしていた。

一方通行は何も諦めるつもりも見逃すつもりもない。

銃をポケットに閉まい、一方通行は細い指先を首筋にある電極のスイッチにゆっくりと近づける。

そして、リーダーらしき男の、

「死ねええー!!」

声とともにスイッチは入れられた。

「はん、クソがア」

一方通行はつまらなそうにそう言い捨てた。

彼の目の前には沢山の男たちが地面に疼くまっている。

別に一方通行は彼らに触れたわけでも何かを放ったわけでもない。

ただ己に向かう銃弾を全て反射しただけなのだ。

これが彼の能力、あらゆるベクトルを操る超能力者。  
一方通行。

一方通行は見下すように男たちを横目で見た後、後ろに振り返る。彼にはまだ一番にしなければならなかったことがあった。

同調支配と名乗る少女が知っている事を全て、吐かせることだ。

一方通行は同調支配を上から見下ろし、唇を動かそうとした。

だが、その時。

ドゴオン！という衝撃音が一方通行の後方から響き渡る。

一方通行は唇を止め、後ろに振り返る。

「あん？」

地面が割れていた。

そして、先程までいた男たちがその場一帯に吹き飛ばされ地面に横たわっていた。

一方通行はその光景に、目を細め、目の前にたつ砂煙を睨み付ける。すると。

砂煙から、

「やっと見つけたぞ、同調支配」

ドスの聞いた声が聞こえてきた。

そして、砂煙がだんだん収まってきた。

一方通行は目を凝らして砂煙の中にいる者を睨み付ける。しかし、次の瞬間。

「!?!」

一方通行は目を疑った。

何故なら、砂煙から出てきたの者は…。

大きな岩のような皮膚をし…。

額に三つの角が生えた…。

一方通行が初めて目にする者、天人だったからだ。

「さあ、こつちにこい。同調支配」

天人は同調支配を睨み付けながら唇を動かす。

しかし、同調支配は天人の言葉に耳を貸さない。

一方通行に張り付くように後ろに隠れる。

一方通行はそんな少女を見て、チッ…、と舌打ちをした。  
どうにも重なってしまふ。

打ち止めに…。

一方通行は小さく息を吐き、目の前に天人を睨み付けた。  
そして、一方通行は唇を動かさそうとした。

だが、

「やっと『打ち止め』とかいう材料が捕獲できたんだ。さっさとこい」

その言葉に、一方通行の行動は一変した。

ドゴッ！と、一方通行の手に集まった何かしらの力が天人に直撃した。

そして、その一撃の威力は当たれば人など生きてはいないはずだった。

そう……、人なら。

「ほお、何かしたか？人間」

無傷だった。

一方通行は目を疑った。

だが、やる事に変わりはない。

一方通行はベクトルを操りその場から直ぐ様天人の背後に回る。

そして、

(だったら直接、中からぶっ壊すッ！！)

一方通行は片手を天人の体につけ血液や生体電気を逆流させる。

はずだった。

ドゴッ！！と一方通行の体が天人の片方の肘による衝撃で吹き飛ばされ、

(どおなってやがる！？なんでこんな三下の攻撃を反射できね)

さらに吹き飛ばされた一方通行の懐に天人の蹴りが入る。



「がッ!？」

当たったわけではない。

だが、一方通行の懐に痛みだけが走る。

そうして、また一方通行は吹き飛ばされた。

「私は玄武族。そんなちっぽけな攻撃が聞くわけがないだろ」  
「……………ッ」

地面に転がる一方通行は地に手をつけ立ち上がろうとする。  
だが、その時。

「レベル三」

その言葉が、一方通行の動きを止めた。  
一方通行は、その言葉を出したその声の主に視線を向ける。  
と、その先にいたのは、

「今のあなたのレベルですとレンキはレンキは答えてみます」

同調支配だった。

「レベル三……………?」

一方通行は手に力を入れて起き上がろうとする。  
しかし、体が思うように動かない。

一方通行はそこで冥土帰しからもらった物を思い出す。

ミサカネットワークの通信を補う通信機。

チツ！！、と一方通行は舌打ちをする。

一方通行の推測だが、レベルが下がった原因はおそらくそミサカネットワークにあるのだろう。

一方通行は首筋のチョーカーを気にしつつ、目の前の天人を睨む。

確かに、今のままでは到底勝てる見込みもない。

策も何もない。

だが。

しかし。

それでも。

(ここで倒れる訳にはいかねェンだよオ!!)

一方通行は立ち上がるう力を振り絞る。

打ち止めを助けるために…。

そして、打ち止めを元の居場所に返すために。

一方通行はその事だけを考えながら立ち上がった。  
その時。

「同調支配！貴様、何をするつもりだ!!」

目の前の天人が声を上げた。  
そして、一方通行の直ぐ目の前に…。

「あなたに死なれては、私を逃がしてくれた彼女に会わせる顔がありませんとレンキはレンキは答えてみます」

同調支配が立つ。

同調支配は呟く。

「現時刻、ミサカネットワークによる干渉を開始します。……  
干渉……成功……」

瞳を閉じ、祈るように。

『シンクロネットワークを起動します』

ピピピ……、と一方通行の頭の中に声が聞こえてきた。

(ミサカネットワークにシンクロネットワークがアクセスされました。)

その声は、一方通行が知る声。

(一時的なシンクロを始めます。三十パーセント……六十パーセント……)

『打ち止め』の声だ。

「クッソー!!」

天人は焦っていた。

同調支配にどんな力があるのかなど知らない。

別に興味もない。

だが今、同調支配の目の前に立つ男。  
あの男から何かを感じる。

そう。

早く止めないと、取り返しのつかないことに…。

「!!!」

天人は直ぐ様行動に出た。

天人は一方通行の頭上高くに飛び上がり、

「死ねええええええ!!!」

叫びとともに一方通行に一直線に拳を前に出しながら突っ込み。

だが。

もう既に……、

『……………九十パーセント……………』

遅かった。

『百パーセント。レベル三からレベル五へ移行成功』

ボキイツ！！と。

骨がへし折れる音が響き渡った。  
そして、その音の発生所は、

「ぐがあアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

天人の右腕だ。

「よオ、三下」

まるで人形のように立ち尽くす同調支配の横を通り過ぎ、一方通行は一步一步、天人に近づく。

「オマエ、誰に手エ出してるかわかってんのか、あん？」

一方通行の周りに風が吹き荒れる。  
そして頭に流れる声。

『能力、レベル五。モード、ベクトル』

同調支配の声だ。

一方通行は風を掴む。  
ベクトルを制御し、天人の目の前に一瞬に近づき、

「ここから先は、一方通行だ」



ドバァー！と、  
いう衝撃波がその場に響き渡った。

能力調整（後書き）

次回予告

上条「交わるはずがなかった。だが交わってしまった。」

上条「次回、来る者達。幻想と魔術が交差する時、物語が始まる」

上条・五和「銀魂幻想!!」

上条「五和」

五和「はい？どうしたんです」

上条「五和にビックニュースを持ってきたんだよ」

五和「ビック……ニュース……？」

上条「ほい、五和」

五和「？何なんですか、この手紙……、……え!？」

上条「よかつたな、五和」

五和「え、え！？か、上条さん！？これって本当にほん」

上条「ああ、本当に本当だってよ」

五和「……………」

上条「あれ？五和？」

五和「……………」

ボタン！！

上条「オイ！？五和！五和！！」

同調支配「五和が見た手紙の内容は次回に、ってレンキはレンキは手を振ってそれじゃあって言ってみます」

来る者達(前書き)

文章がダメかも…

## 来る者達

### 第二百幻想 来る者達

蓮鬼が起こした事件が無事解決してから、数日後。

とある刀鍛冶屋にて、

「まことに申し訳ありませんでした!!」  
「うっ!!」

銀時の顔面が床に直撃した。

今、銀時の頭には正座しながら謝る新八と神楽の手が乗っかっている。

そして、銀時は顔面から鼻血をだらだらと流す姿にやや青ざめた人物がいた。

その人物とは、

「いや、別に私は気にしてないんだが、それよりもむしる銀さんの方が気になる」

刀鍛冶を営む刀匠、村田鉄子。

以前、紅桜の一件で銀時に兄を止めてくれと頼み、さらに今回銀時のために刀を一つ打ちあげ、桂に渡すように頼んだ女刀匠だ。

だが、普通なら返してもらわうはずの刀は…。

「鉄子さん、銀さんなんかには気を使わなくていいですよ。とくに、無くした事を隠すために『刀が粉々に砕けた』なんて、平気で嘘をつくような人には」

「そうネ。こんな万年金欠のクリクリパーマの事なんて気にしても損するだけアル」

新八と神楽は冷たい視線を銀時に向け、そんな二人の視線に対し銀時は、

「だから、本当だっていつてんだろ。後、金欠の原因の一つはテーマの胃袋のせいだろーが!!」

「じゃあ、その証拠を見せてください」

「そうネ。私が原因だという証拠を見せるヨロシ」

「ああ、いいゼエ。ちょうど、その件については上条に頼んだからな。後、神楽。お前の証拠は坂田家の朝食でまるわかりだ」

にらみ合う三人。

室内に険悪な空気が漂い始めた。

すると、何とかこの場に漂う空気を払拭させよう鉄子が、

「あ、そう言えば銀さん」「ん?」

「実は新しく、住み込みで一人雇ったんだ」

一方、銀時たちが刀鍛冶屋に訪れている頃。

「あー、やっぱりダメかー」

上条当麻は一人、嘆いていた。

今、上条がいるのは数日前、死闘を繰り広げた場所だった場所。そんな見る影もない瓦礫で覆い尽くされた場所に上条は一人、立っていた。

ここに来た理由は二つ。

御坂妹たちのデータを発見した地下への入り口を見つけるため。そして、銀時の碎け散った刀を探すためだ。

だが、銀時の件は…。

つい行き先を銀時に知られてしまい、刀を探すように頼まれ（脅迫され）たので仕方なくなのだった。

「はぁー、不幸だー」

そんなわけで上条は余分に増えた分、余計に地下への入り口を見つけないならなかった。

しかし、ここに来てから一時間。

未だに見つかる事ができない。

「はぁー、やっぱり見つかるわけないよな」

上条は座れそうな瓦礫に腰を下ろし空を見上げ、一旦休憩をしてからもう一度探そう、と上条は思いながら空に動く雲を眺めた。

その時だった。

ビュウツ、と音とともに上条の視線の先に薄紫の円が描かれ…。



「なッ!？」

そして、その円の中に線や小さな文字が入り…。

数秒で魔方陣のような物が空に描かれた直後。

その魔方陣の中央から女の子が…。

「きゃあああああ!！」

「!?!」

ドオン!!--と上条に直撃した。

「い……………っ……………」

砂煙が舞つ中、上条は頭を抑え上半身を起き上がらせた。視線を空に向けると、既に薄紫の魔方陣は消えている。

一体何だったんだ、と上条は首を傾げた。  
直後。

「……お……ゃ……ん……」

「え？」

「おにーちゃん……!」

上条の腹部にボディプレスがきまった。

「ぐぼっ!?!」

「会いたかった……!」

ボディプレスの衝撃に咳き込みながら腹部の辺りに視線を向ける。  
すると、そこにはいたのはショートヘアーの女の子だった。

女の子？

おにーちゃん？

……

「いや、ちょっと、えっっている待て!？」

瞬間、上条はそのショートヘアの少女を己の体から無理やり離れた。

そして、きよんとする少女に上条は尋ねる。

「お前、誰だ!？」

少女と上条の間に静寂が漂う。

そして、上条は少女の返答を待った。

すると。

そう尋ねる上条に少女は、

「たった数ヶ月で忘れたの、おにーちゃん？」

「……………はあ？」

「何、その反応。この前、海の家で会ったっていうのに」

そう言いながらむくれる少女。

しかし、上条はそんな少女の事よりも今、少女がいた言葉に耳を疑った。

(海の家で会った?それってまさか、…………御使墮し…………の事じゃ…………)

…)

少女は返答しない上条に小さく息を吐き、

「もう…」

そして上条に、「これならわかるだろう」といっしょに

「乙姫。龍神乙姫だよ、おにーちゃん」

乙姫は笑いながらそう言った。

一方、その頃。

銀時たちの目の前に一人の少女が立っている。

肩まである髪に、二重まぶたが特徴的な少女は、銀時たちに律儀に

頭を下げ、

「昨日から鉄子さんにお世話になっている五和です」

五和は銀時たちに自己紹介をした。

魔術と能力を持たない人間。

この二つの出会いが銀時たちの世界を…

物語を変えていくこととなる。



来る者達（後書き）

次回予告

上条「一人の少女が現れたことに、万事屋の中で悲劇が……」

上条「次回、勝負？魔術と幻想が交差する時、物語が始まる」

上条・乙姫「銀魂幻想!!」

乙姫「おにーちゃん!!」

上条「え？」

ドン……!!

上条「むがッ!?!」

乙姫「おにーちゃん。久しぶり!ってあれ?おにーちゃん?」

上条「……………不幸……………だ……」

ガクッ（頭を地面に強打して気絶）

乙姫「おにーちゃん!?!おにーちゃん、おにーいいちゃんああんん  
」!」



**勝負？（前書き）**

タイトルが合っていないです……。  
後、銀時の喋り方が変かも…。

勝負？

第百三幻想 勝負？

二つの出会いがあつてから一時間が経ち…。  
現在、万事屋にて、

「で、何で天草式のいつわがいるの？」

インデックスはニッコリと笑いながら、そう五和に尋ねている。  
今、五和は二つのソファアの内の一つに腰を下ろし、冷や汗を掻いている。

何故かと言うと…、

「…そ…そのことについては、上条さんが帰ってきてか」

「何でアイツが関係あるのよ」

「あ、いえ…それは…」

「上条当麻が何か関わってるの？」  
「…え……………あー…」

五和の目の前には、インデックス、御坂、緑子の三人が座っているからだ。

さらに、三人ともニツコリと笑いながら五和を見ている。

本当に、ニツコリと笑いながら……………。

「…銀さん」

そして、そんな中。

酢昆布を買いに行くと言い、出ていった神楽を除く、銀時と新八の内、新八が銀時に話しかけた。

「どうした、新八」

「いや、あの……………ここって万事屋ですよね？」

「当たり前だ、バカ」

「……………そうですね……………、あはははは」

「…………………………」

「ははは……………」

話題を無くし、口を閉ざす銀時と新八。

.....

「僕、ちよつとお登勢さんの所に用事が会ったのを思い出したので  
行ってきますッ！！」

突如、新八はダッシュで玄関へと向かおうとする。

しかし、新八の腕は、ガシツ、と銀時の手により捕まれ、

「ぎ、銀さん……、離し」

「黙れ、お前も道連れだ」

銀時と新八の視線が交差した直後。

「にゃー、カミヤんいるかにゃー」

「差し入れもろつてきたでー」

土御門元春、青髪ピアスの二人が万事屋に訪れた。

五分後。

「.....」  
「.....」

「……………」  
「……………」

四人は玄関前で突っ立っていた。

そして、その中で一人。

青髪ピアスは、

「それにしても、カミちゃん……………」

ガクガクと肩を震わせ、眉間にシワを寄せ、

「銀パツシスターに常盤台、あげくのはてに美女二人って……………いい度胸やなあ……………」

不気味に笑みをこぼす。

すると、土御門がそんな彼に、

「まあ、カミちゃんの場合、ここにいる連中だけじゃないけどにや……………」

「……………カミちゃん、殺ってもいい？ーってかもう殺る？」

火に油を注ぐな！！と新八が叫びそうになった。

その、時だった。

「ただいまー……」

玄関が開く音と同時に上条の声が聞こえてきた瞬間。

「とうまー!!」

「アンター!!」

「上条さんー!!」

「上条ー!!」

インデックス、御坂、五和、緑子の四人が一斉に玄関へと走ってきた。

だが、その直後。

「……」

四人の表情が固まった。

そして、それは銀時たちも同じだった。

何故なら、

「ねえ、おにーちゃん。この人たちっておにーちゃんの友達？」

上条の隣に中学生くらいの少女が立ち、あげくのはてにおにーちゃんなどと呼ばれていたからだ。

……おにーちゃん？

……また、女の子？

……………ブチッ！！

瞬間。

バチバチッ！！と青白い火花と、ビュビュッ！！と小さく集まる風の音が鳴り、

刹那。

「カミやあああああんッ！……」  
「とっまああああああ！！」

「アンタあああああああー!!」  
「上条うううううううううううううう!!」「」

土御門、青髪ピアス、インデックス、御坂、そして銀時、緑子、新八の計七人が上条に怒りを露にして向かい、

「な、な!? ツギやあああああああああああー!!」

上条当麻の断末魔のような悲鳴が響き渡った。

十分後。

「へー、上条の従妹なんだー」  
「アイツに従妹何て居たんだ…」  
「久しぶり、おとひめ」  
「久しぶり、海の家いらいだね」

緑子と御坂は上条当麻の従妹と聞き少し驚き、インデックスは海の



家で一回会っている分、仲良く乙姫と話していた。  
銀時たちも上条の従妹と聞き、驚いた表情をしていた。

そして、その隅っこで、

「か、上条さん、……だ……大丈夫ですか？」  
「……ふ、不幸だああ……」

五和の心配の元、上条はお決まりのようにそう呟くのだった。

勝負？（後書き）

次回予告

上条「万事屋に集まった、来るはずのなかった者たち。そして、五和と乙姫が語る驚きの言葉に銀時たちは」

上条「次回、謎の陣。幻想と魔術が交差するとき、物語が始まる」

上条・乙姫「銀魂幻想」

乙姫「おにーちゃん!」

上条「……………」

乙姫「どうしよう!」

……………

乙姫「もしかしたら、もう一度、衝撃を与えれば!！」

ダッ!!(倒れている上条から距離をとる音)

乙姫「おにーちゃん……起きろ!ウルトラハイパーフライングボデーアタック!！」

ドゴッ!!

上条「ッ!?!?もがっば!?!?’」

乙姫「おにーちゃん!よかった……目が覚めて」

上条「……………す」

乙姫「え?」

上条「テメエ、その勘狂った頭蓋ごと土に還してやる!っ!……!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8577g/>

---

銀魂幻想

2010年10月10日15時53分発行